

---

# リリカルなのか？無を有する剣

たかB

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカルなのか？無を有する剣

### 【Nコード】

N7035V

### 【作者名】

たかB

### 【あらすじ】

なのはとユーノがレイジングハートでジュエルシード封印。リリカルなのは。でも、もし、この二人の前に一人の少年がジュエルシードを封印していたら…。少年は魔力はないけどとも中途半端な魔剣を所持していた。特別な才能がないことが魔剣所持の条件。つまり、少年は特別な力は持たないただの少年。ただし、彼の境遇は決して普通ではなかった。そしてこれからも…

## 序章 ハラゲロキャラ説明を兼ねているから序章が長いんだよね (前書き)

間違って短編に乗せてました。これからゆっくり更新していきます。  
作者はビギナー。冷やかし、中傷、苦情はお断り。

## 序章 ハラゲロキヤラ説明を兼ねているから序章が長いんだよね

みなさん、こんばんわ。俺の名前は月野ツルギです。

一応、小学生三年か四年生だ。なんであやふやなのかというと、拉致られたから。

幼稚園の頃に。

身内に。

母方の祖母に。

特訓という名の拷問を受けたから。時間の流れに鈍感になった。教育という名の洗脳を受けたから。精神が早熟した。諦めの意味を知った。

修行という名の虐待を受けた俺はこれといった特別な力は何一つ手に入れることがなかった。ついたといえ、瞬発力とスタミナ。反復横飛びには自信あるぜ。それ以外？…ないぜ。ちなみに反復横飛び端から端までの距離は一般人の平均ぴったりだぜ。

あ、忘れるところだった。あと、危機察知能力。要するに「…嫌な予感がする」というのが直感的に感じ取ることだ。それを避けきれたことは一度足りてない！…忘れていたかった。

拷問のあった最後の晩に俺は「お前本当に才能ないから、従兄弟のサカサの手伝いしてこい」と祖母に言われた。それから一年間、サカサの世話（家事手伝い）をすることを条件に解放された。あの拷問から解放されるのなら俺はなんだってできる。

従兄弟のサカサは二十歳になったばかりの研究員で後に世界に五人しかいないとても偉い科学者だと判明した。茶髪のロン毛で後ろから見ると女にも見えることもある程体は細い、背も高く、イケメンで、文武両道、いつも白衣と色の濃いサングラスをつけている。常に周りにきれいなお姉さんを連れていたプレイボーイ。だが、同じ日本人の月村というお姉さんに近寄らなかつたな。何故だろう？ 凄い美人なのに。本人いわく「なんかやばい」らしい。サカサに連

れられて世界中を旅しながら様々な研究施設を巡った。

その間にホテルでテロリストが襲ってくる。ジャングルで猛獣に襲われる。ハンターに間違って撃たれる。その娘にも撃たれる。中でも一番ひどいのは

ある遺跡調査中で

サカサ「トラップ発動！ツルギが咳き込むことによりこの遺跡に入っている人は生き埋めにされる！」

ツルギ「俺のせい？！ゴホッ、条件がおかしくない！」

何とか死人は出ませんでした。調査員から白い目で見られた。母さん、実家に帰りたくな…いですっ！（実家のほうがやべえもん）世界は外も内も俺に厳しいと思い知らされた。…生きていけるかな俺。

しかし、その人も三日前に面白そうな反応を示した町があるからお前行って調査してこい。と、言われた時、猛獣のいるジャングルなのか、何もない（水もない）砂漠なのか、白銀（白熊と氷の世界でサバイバル）の世界、南極なのか。と、思案していた。

注意：クマがいるのは北です。

びくついている俺が聞いたのは日本だった。しかも実家からは離れた海鳴市というところらしい。以下、夕方の便で日本に帰国して空港から海鳴市までに行くまでの出来事です。

サカサ「住む家、家財、その他もろもろ準備しているから、一人でのんびりやっついていいぞ。金は気にするな。腐っているやつをやる。いざとなったら月村を頼れ」

ツルギ「…そこ腐っている金って。どんな金だよ」

「腐れ外道から鬼畜な真似してぶんどった金だから。まず土木用ハンマーで相手の行動を…（省略）…ん、ツルギ。どうした？」

「（ガクガクブルブル）お前、人間が考えられる拷問という拷問をしたのか。情状酌量の余地なしで死刑は確定だろ。人を殺してなくても殺されるぞ。いくら相手が人の不幸を主食に悲鳴をおかずにしている身内のような奴だからって、ん？（嫌な予感がする）」

キン。

まるでグラスを弾いたかのような音が響くとあたりが急に暗くなった。次の瞬間。

ズドオオオオオオン！

俺とサカサの横を三角錐のようなものが通り過ぎ、五メートル前にあつた電柱にあたり、爆破炎上した。

「あ、花火。日本に帰ってきた感じだな、ツルギ」

「ンなわけあるかつ！どう見てバズーカーランチャーの砲撃だろう！こんな日本、テロリストが普通に出てくる空港なんて俺は嫌だ！こんな近くで人を殺すために放たれる花火　なんか大嫌いだ！」

俺がわめいているとサカサは足元に置いていたケースから一メートル以上はする黒光りの大剣と手のひらサイズで琥珀色に染まつた水晶玉。その水晶には三本の弓矢がまるで魚のように動いていた。

「はっはっはっ。よし、早速この試作機でも使つか。なんかこの間見つけた変な石に妙なエネルギー反応があつたからそのまま動力

炉代わりにした。凄いぞ、みんなの憧れ。空を飛ぶことが出来んだぞ。…首が（ボソツ）」

「今、物騒なこと言わなかったか？」

「言ったよ」

「否定しろよ、この野郎っ。て、なんで俺に馬鹿でかい剣を渡すんだ。よく警備の目をごまかせ」手回した部下がいるからな」た、おいっ「冗談だ。札束で目と口を閉じさせた。最後は銃で」もつと駄目だろ！」

チユドオオオオオン！

今度は反対側の道路から爆音が鳴り響いてあたり一面が炎に染まる。

「たく、またあの国からの技術提供申請か？ようし、くれてやるうじゃないか。俺の技術の結晶を。ミネルヴァ起動「リヨウカイ、テキノセンメツヲサイユウセ」違うぞミネルヴァ非殺傷モード。」「？リヨウカイ」非殺傷レベルでないとあとで尋問（食事）が出来ないじゃないか」

ジャリイイン。

鎖がしなったような音が響いた次の瞬間、サカサの左腕は丸みを帯びた白いガントレットで被われる。左手の甲には三つのビー玉（赤、青、黒の三色）のような物がはまっており、なおかつ機械的な白のボーガンがついていた。

「しばらく絶食（注：人の悲鳴や苦痛に満ちた顔も見ることを食事。見ていないことを絶食と月野の一族は使います。ドSな一族です）してたと思ったら、お前こうなることわかっていただろ。はあ、もう、その機械的なボウガンもどっから出したんだよ。なんで喋るんだよ。というかそれとこれが狙いで来たんじゃない」

渡された剣は見た目と違いかなり軽い。それでありながらもすごく硬そうに見える。明らかにこれもオーパーツもしくは最先端技術を使っているのが分かる。

何でボウガンが喋ることにそんなに落ち着いている？決まっている、それ以上に驚きと脅威を月野の家。そして、サカサの手伝いをしていて嫌でも落ち着くからさ。西洋の屋敷にあるガーゴイルつて石像を知ってるか？関西弁で喋ってくるんだ。とてもシニールだったぞ。

「まあな、壊れかけていた機械がオーパーツだったから俺なりに回収修理したら、なんか昨日の夜から喋るようになった。新しい相棒だ「ミネルヴァデス。ヨロシクデス」。まあ、カタコトだけだな。その大剣はミネルヴァよりもさらに深い層で見つけた、尚且つ百パーセントオーパーツ。ミネルヴァの話じゃお前ならできるんじゃないかと言われてな。というか、発見したのが恐竜の時代よりもさらに深い層だからミネルヴァよりもレアで不思議なのは確実だな。ミネルヴァ、ツルギのサポートと索敵。あと結界内の敵勢力の把握」

「リョウカイ」

白いガントレットから淡い光の球があたりに飛び散る。白い光の球は空港内の炎や瓦礫の間をすり抜けていく。そして、いつの間にか俺の足元には幾何学的な模様の円陣が描かれる。周りは瓦礫に囲まれているせいか、ここからだとな誰がどこにいて、何がどこかわか



らない。

「それより空港なのに俺たち以外に人がいないのは、その結界とやらのおかげか？」

「ああ、緊急的な避難や物資の補給用に作り上げた。任意の人や物以外は入れない空間。いわゆる避難空間なんだが、どうやらやつこさんは暗殺用に仕立て上げたらしい。結界内で起こったことは生物のダメージや生き死に以外はすべて元に戻るからな。たく、リオストーンを見つければ次第仕掛けてくるとは思ったが存外早かったな」

やれやれ。と言わんばかりにため息をつく

「ツルギ。ナマエヲ。ソノコニ。サカサ、テキタイセイリヨク、ジウウゴ」

「名前？無いのか、この剣。てか、俺でいいの」

「ほかに信用できる奴がいなんだよ。俺は月野の人間だが武術はてんで出来ない。できるのは医療とか毒ガスとか重火器とかハツキングとかなら使えるけど……。お前ならギリギリ肉弾戦でも勝てる。他の月野の人間に渡したら国が一つ滅ぶ」

十分だと思うぞ？うちの家系でパソコン使えるのは俺とおまえぐらいだし。てか、俺になら勝てるって、どういうことだ！そのままの意味ですか（泣）。どうせ、根性オンリーですよ。畜生、たしかにお前の腕なら死人でも生き返らせそうだけだよ。神様は才能を当てる人を間違っている。しかも与えすぎだ。チートだ。

「ミネルヴァ、会話からするとお前の仲間だろこの剣。お前がこ

の剣を知っているんじゃないのかよ」

「ワタシハ、サカサニ、アウマデノ、キオクガ、ナイ、デス。セ  
イカクニハ、シュウリ、サレルマデ、デスガ。ソレニ、ワタシハ、  
サカサカラ、モラッタ、ナマエヲ、キニイッテイル、デス」

「そうか、それじゃあこいつの名前は避来矢 ヒライシ なんて  
どうだろう」

避来矢。

昔、ある都で大暴れしていた巨大な人食いムカデを倒した恩賞と  
して、武將が川に住む龍の神様から頂いた鎧。その鎧は持ち主の体  
に傷をつけることなく度重なる戦をくぐり抜けたという伝説と言わ  
れた甲冑の名前だ。その名の通り、放たれた矢が何故か甲冑には当  
たらない。まるで矢が避けていくようなことからあらゆる災難を躲  
してくれる素晴らしい防具の名前だ。これは剣だけと甲冑と同じよ  
うに守る武具になってほしい。

「…ヒライシ。イイナ、デス。アリガトウ、ツルギ」

ミネルヴァはいい子だね。サカサから今のうちに取り離れたほう  
がいいかもしれない。この性格破綻者から。こいつの性格が感染し  
ないように祈っておこう。むっ、右後方から殺意が

「+、\*%#！」

炎の中からスーツ姿の男が銃を（トカレフだったか？）を発砲し  
てきた。

バンッ。

ふっ、甘い。お前の気配は少し前から読めていたのだよ。その場にしゃがんで弾道を回避する。サカサは捕獲対象であるから滅多なことにはならない。というか、麻酔銃で眠らそうにもあたりどころでは死に至る。となれば邪魔な俺だけを殺せば、サカサの相手が楽になる。しかし、俺からしたら弾道なんて、発射される角度を見ればわかる。テロリストに襲われるなんてことを何度も経験すれば、……何度も経験したらわかるんだよ、ちくしょおおおお！

チュイン（近くの瓦礫に当たり跳弾する弾丸）

バキイツ（跳弾した球が俺の真上にあつた看板の一部を砕いた音）

グチャ（壊れた看板が落ちて俺をつぶした音）

そうです。俺は嫌な予感にしてもこんな感じに一度避けきっても二次的な被害をこうむるのです。

ガクリ…。

ツルギが潰れたのでここからはサカサ視点に移ります。

「L<JO+、！\*！」

「ああ、うぜえな。こんなに明かりをこうこうと灯しやがってエコって言葉知ってんのか、お前ら」

せつかく面白動画を間近で見て陽気だったのに一気にクールダウンだよ。

「…ヒライシ、キドウジュンビカンリョウ。ケツカイ、ユウコウ、ハンイ、メノマエノ、オトコノ、ハンケイ、イチキロ。ヒライシ、スタンバイ、カンリョウ。ツルギ、ガ、ナヲヨブダケデ、ジドウコウシン、スル、デス」

ツルギは見た感じ気を失っているが重体ではないな、むしろ軽傷に近い。調べたら命や脳に異常があるかもしれないがまあ、何とかなるだろう。それより、こんなにも興味のないマネをするとはこいつら使えないバカなんだな。

「\*、\*、\*。…サカサ博士、我々とともに」

「うるせえ。ミネルヴァ、連白の矢。遠い奴から片づける」

左手に付いたボウガンをつルギに銃を撃ったバカに向ける。

「リョウカイ、レンパク、ハッシャ」

シュ。

布がわずかにこすれるような音が鳴る。ボウガンからは矢の形をした光が男に向かって発射される。

「っ！」

「メイチュウ、レンケツ、サクテキ、サイカイ」

男は腕を盾にするかのように自分の顔と胸を抑えるが、何事もなかったかのように光の矢は男の体をすり抜けていった。ただし、その光は薄紫色になり、背中から軌道を残している。男はそれを知らない。

「く、くはは。あなたのような頭脳を持つ人でも失敗はするのですね。博士」

「…二、サン」

半径一キロメートルの結界内を紫の光が瓦礫や炎の中をすり抜ける。結界内にいる人間の数だけミネルヴァはカウントを重ねる。そのことに気づかない男を見てサカサはため息をついていた。

しかし、バカだね。こいつ。まあ、ツルギが特別面白いバカだから仕方ないか。あいつみたい【才能がまるつきりないバカ】じゃないからここまでつまらないんだな。

「どうやら、それはただの子供のおもちゃですね。ですが、あなたの発明には驚かされます。常に百年、二百年先を見通しているかのように作り上げる兵器は最高のものですよ。まあ、あくまで兵器だけですけどね」

「ロク、ナナ」

そして、よく喋るなこいつ。ミネルヴァがカウントしていることに気づいていないんだからな。まあ、あっちこっちで悲鳴が上がっているから聞こえないのか。ということは何人か一般人を巻き込んだな。まったく。

「ああ、妙な気を起こさないでくださいねそちらのおもちゃを下げてくだ」

「おーけー、わかっているからもう喋るなうぜえ」(ミネルヴァ、カウント終了とともに赤犬発射)

「ジュウ、ジュウイチ」(カウント八、ドウシマス力?)

頭でものを考えるだけで意思疎通ができる念話というものをしながらミネルヴァに指示を出す。男は俺の態度に腹を立てているらしくミネルヴァのカウントに気づく気配すらない。まあ、ここまでバカだということはその向こう側にいるやつもバカなんだろう。

(あいつが気づくまでやってる。まあ、もうそろそろ終わりだろ)

(リョウカイ、ア)

「どうした？」

「ジュウゴ、ジュウロク」

「ああ…」

ミネルヴァが何やら異常に気が付いたらしい。そしてその反応に俺は声を出してしまった。やべ、念話に慣れてないからつい声に出しちゃった。

相手側も不審がつているようだ。ここはもう少し時間を稼ぐか。

「はやく、拘束しないのか。まあ、警戒しているのはわかるが今の俺はお前のいう玩具しかつけてないぞ」

「…いいえ、あなたは嘘をついている。あなたがこのまま済ますはずがない」

まあ、その通り。ということはこいつ、この間取り逃がしたテロリストの残党か。たしかあそこの国は…。

「ニジュウ、ニジュウイチ」(イノチニベツジョウハナイデス、ガ、イッパンジンガ、マキコマレテイマス、デス。ハツポウイシ、ナナ。イカク、サン。サツイハ、ゼロデス)

やっぱり一般人がいたか。まあ、こんな派手なことをしながら威嚇のほう確率高いとはけっこう気のいいバカもいるもんだな。こんな大規模なことをすれば皆殺しは確定なのに。

「人質がいます。ついてきてくれますね？」

「はあ？ 断る」

「…やれ」

何で見ず知らずの役立たずの人の為にお前についていくの？ バカか。俺はそんな人間じゃないっての。そんなバカは月野の人間ではツルギしかいませんよ。皆、親しい人間以外に対しては、特に敵に対しては鬼畜ですよ。

ドオン。

「ニジュウサン、カウント、シュウリョウ。アカイヌ、ハツシャ、ケツカラ、クラウ」

カウントと銃声が鳴り終わると同時にガントレットにあった赤いビー玉から色が失せてガントレットと同じ白になる。

ワアアアアアア、キャアアアアア！

（イチメイ、フシヨウ、セイタイ、ハンオウ、イジヨウナシ。ツギ、サツイ、ハチ、イカク、ニ）

（ほう。珍しいな。今、銃を撃った奴はミディウムな。残りはレア、そいつを食うか）

大きなものが地面に落ちたかのような音がすると、結界内の悲鳴がさらに大きくなった。

「どうやら、もう一人殺さないといけないようですね」

ズドオオオオオン！！ズガアアアアアッ！

「ジュウヨン、ジュウサン」

先ほどよりも大きな轟音が結界内に鳴り響き、悲鳴が悲鳴を呼ぶという連鎖が起こる。

ギアアアアアア、ヒギユアアアアア：

「ジュウニ、ジュウイチ」

「おやおや大変だ。どうやら二人死んでしまった」



あざ笑つかのように男が汚い顔で笑う。まるで罫にかかったウサギを見るような目で。あ、やっぱりバカだ。人を殺すのにあんな爆音が出るものは使わないだろう。そう思うたんびに。俺は少し興奮していた。

「いいや、死者はゼロだ」

ヒイイイイイイ、バ、バケモンダアアアア。

「キュウ、ハチ」

「気でも狂いましたか？博士。っ！」

俺は笑っているんだろう。自分でもわかる。気が狂う？ああ、お前らのいう通り狂っているぜ、お前らからの観念からいえばな。

ドゴオオオオオオソッボゴオオオオオソッ！！

「な、何だっ、どうしてこんなに爆音が近くで。な、何ださっきからのカウントは」

「ゴ、ヨン、サン」

ミネルヴァのカウントがゼロに近づくほど爆音と爆炎と悲鳴は俺たちのほうに近づいてくる。そして男もようやくミネルヴァの声が聞こえたようだ。

「なんであなたは笑っていられる！！？」

「二」

ガオオオオンツヅウドオオオオオオオオ、ズガガガッガガッ  
ガガ！！！

「お、気づいていたのか。せっかくだ、最後まで聞いていけ。ミネルヴァ。赤犬をこいつの前に」

「リヨウカイ、サカサ」

ギヤアアアアアアッ！！

ミネルヴァの同意とともに後ろの瓦礫から悲鳴と爆炎が舞い上がった。

「イチ」

さあ、食事を始めようか。

テロリスト視点からお送りします。

「ゴ、ヨン、サン」

日本語で何やら変声機を使った声に気が付いたときは多くの仲間と連絡が取れなくなっていた。そして、ターゲットである博士も笑っていた。調査資料によるとこんなにまで顔を歪めているところなど一度も確認されていない。まるで悪魔のように笑って…。

「二」

カウントは残り二つ。まるで私の命が尽きるのを数えるかのよう  
に。この圧倒的不利な状況でなぜ彼は笑っていられる。

ギアアアアアッ！

「イチ」

「さあ、食事の時間を始めようか」

これは夢なんだろう。しかし、炎の熱さは変わらない。

これは幻想なんだろう。しかし、振るえは止まらない。

これは現実なんだろうか。そうだ、そうでなくては右ひじから無  
くなっている。この痛みは感じられない。

この時初めて気づいた。私たちは触れてはいけないものに触れた  
んだと。

三メートルはあろう炎の魔狼が仲間の一人と私の腕を啜えて博士  
の前に現れた時、私は笑っていた。もう、終わりだと…。

それから私の四肢は炎の魔狼に焼かれ裂かれ食われていった。

まるでこの意識を最後まで残していくように。さい、ご、に。は  
き…え、て

・

・

・

.....  
.....  
.....  
.....

「なあ、お前。もしかしてこれで終わりと思っていたのか？」  
意識が戻る、赤に戻る。これは夢じゃない。現実には終わらない。  
終わらせてはくれない。

[illegible]

## サ力サ視点

「ま、こんなもんか」

赤犬をミネルヴァの中に戻し、手のひらサイズの水晶に戻す。  
 廃人と化している男をひっくり返して、その懷から結界を張って  
 いたリモコンを拝借、操作し、結界を解除する。すると結界内では  
 瓦礫と化していた空港が何事もなかったかのように元の平和な空港  
 へと変化していた。

「ソノニンゲンノ、ツミト、アナタノ、シコウ、ニヨツテ、ゲン  
カク、ツウニ、ヨル、カリヨクヲ、チヨウセイスル、アカイヌハ、  
イツミテ、モヒドイ、デスネ」

おおう、いきなり索敵と赤犬。ツルギのサポートのおかげでミネルヴァがバグリかけていた。ミネルヴァもう寝ていいぞ。

「ラ・ジャアアア」

ツルギも寝ているし、見たところ頭が悪いし運もないし顔も悪いし。  
…いつもの通りだ。

「…てめえ」

ツルギよ。気絶していながらもツツコミを欠かさないのはすごいな。

しかし、このままじゃ、こいつに普通の小学生はできそうにないな。…仕方ない。とりあえずいったんとんぼ返りでもして、こんな馬鹿な真似した奴らの頭でもつぶしてくか。

問題はツルギとヒライシをどうすべきか？目的地のアパートに郵送でもするか。

そんなことを考えていると、後ろの空港入り口から誰かやってきた。

「あれ、もしかしてサカサ君。…と、ツルギ君！」

「ん？あ、バニングスさん」

そこにはイギリスで知り合った世界屈指の大富豪バニングス氏と

「ツルギ？！なんであんたが日本にいのよっ、通行の邪魔よ！

！」

その娘、アリサ。そう、彼女たち親子はイギリス初となる月野剣を射撃したハンターである。

「誰がハンターよ！」

というか、見てとれるようにツルギは頭から血を流しているのに  
どけとは、この子も月野一族なんじゃないか。

回想にまで突っ込みを入れるとは。恐るべしバニングス。

序章 ハラゲロキャラ説明を兼ねているから序章が長いんだよね (後書き)

序章終わり

ツルギ・アリサ「長すぎる!」

たかB「しゃーねえべや、キャラ紹介と原作ブレイクの為にいろいろやったらこうなった」

サカサ「まあ、俺は構わないよ。主人公より目立てたから」

ツルギ「目立ちすぎ!そして、怖すぎ!作者ああ、これリリカルなのはの二次にしてもいいの。初心者なのに」

アリサ「原作あんまり知らないくせにっ」

たかB「何とかなるさ」

サカサ「ところで赤犬とかいう魔法、あの某力ナツチ海賊漫画の」

たかB「断じて否っ、オリジナル魔法です」

ミネルヴァ「ジャア、ドウィウマホウ?」

アリサ「どうせチート仕様でしょ。二次につきものの絶対必中とか」

たかB「そうでもないよ?まずサカサの最初に使った連泊の矢。あれはただの索敵用。半径五キロ以内の人間を敵・味方・どちらで

もない・絶対ブッコロ・最高のおもちやの五段階に分けられるよ。  
ちなみにこの弓矢は何でもいいから魔力を当てたりするとすぐ消えるし、当たってもダメージゼロ。ホーミング機能はついているけど頑張れば子供でも避けることが出来ますよ。スピードもそんなにないいしね」

サカサ「ふむふむ。つまり、視界が悪い夕方の空港で連泊の矢は見づらく、魔法使い対策がなされていなかったから、または魔法使いがいなかったからワンサイドマッチになった。」と

たかB「そそ」

アリサ「じゃあ、あの薄紫色の矢の跡は？」

ツルギ「赤犬は？」

たかB「順番にねー。まず、薄紫の矢なんだけどあれは『最高のおもちや』のペイントなんだ。ゲームで言うとモンスンのボスにペイントをつけた状態と思ってくれればオーケーです」

ミネルヴァ「ホカノ、イロダト、ドンナカンジ？」

赤：敵

青：味方

どちらでもない：黄色

絶対ブッコロ：黒

最高のおもちや（ツルギ）：薄紫色

たかB「こんな感じ。あれ…？」



サカサ「ん？（黒い笑顔）」

ツルギ「どうした？（注意：本人は気づいていない）」

アリサ「…次に行くわよ」

たかB「（コクコク）さて、赤犬なんだけどまずはこの公式を見てほしい」

赤犬に襲われた人の罪悪感×サカサ独断の法律÷（サカサの慈悲＋1）＝幻覚痛。

アリサ「なにこれ？」

ツルギ「なんかの公式？」

サカサ「なるほど。要は試せということか。ミネルヴァ、赤犬」

ミネルヴァ「アカイヌ、ジュンビ、カンリョウ」

たかB「どうせ、次でネタバレするんだし目標はアリサで」

アリサ「っ！あたし！ツルギじゃないの？」

ツルギ「…ああ、あれか」

アリサ「なによ！」

ツルギ・サカサ「銃撃」

ミネルヴァ「アリサ、ヒトゴロシ、ヨクナイ」

アリサ「あんた、自分の主人に言いなさいよ！」

たかB「一応、まだサカサもツルギも一人殺してないよ」

ツルギ「まだ。て、なんだ」

サカサ「俺もだ。というより殺さないぞ。ム力つくやつほど俺は殺さないぞ（楽しめないから）」

ミネルヴァ「アカイヌ、ハッシャ」

アリサ「きゃあああああつ」

たかB「おお、アカイヌがライオン並の大きさにアリサに向かっていく。幼女が猛獣に襲われる」

ツルギ「おいおい、やばくねえ」

サカサ「いや、あれは」

ぶにぶに。

アリサ「え？」

ミネルヴァ「ヌイグルミ？」

たかB「つまりこつこつと」

赤犬に襲われた人の罪悪感×サカサ独断の法律÷（サカサの慈悲＋1）＝幻覚痛。

（ツルギを撃った罪悪感＝ライオン）×（サカサから見た罪の重さ。まあチョップ二回でいいよツルギだし）÷（むしろ面白いものを見たから80点＋1）

＝ライオン×チョップ二回÷81で

ライオンのヌイグルミチョップ二回分。の幻覚ダメージを受ける。

たかB「サカサの慈悲が70以上だとどんなに強そうな魔物もヌイグルミになります。襲いかかってくる赤犬の大きさ＝罪悪感の大きさです」

ツルギ「…俺って」

アリサ「サカサ…あんた」

ミネルヴァ「ワタシハ、アリサ、ノザイアクカンガ、スゴイト、オモウ」

サカサ「ああ、俺も凄いと思う。ライオンは最高レベルだからな」

ツルギ「…え」

アリサ「どういうこと？」

たかB「えーと、たしかこれも五段階で上からライオン・鷹・赤犬（大）・赤犬（小）・ハムスターになっています。テロリストより罪の意識が高かったみたいですねアリサさん」

ツルギ「……………」

アリサ「なんでそんな目をするの！目幅の涙流すのっ」

ツルギ「結婚してください！」

アリサ「にゃ／＼／＼?!」

サカサ「おお、まさかの逆フラグ」

ミネルヴァ「マダ、ゲンサク、ヒロインガ、デテナイノニ」

たかB「一応本編とは関係ないので行けるところまでいっていいですよ」

アリサ「止めないのっ！このバカ主人公!？」

サカサ・たかB「面白そうだし」

ミネルヴァ「みたいし」

アリサ「ミネルヴァ、あんたまでっ、なんでカタコトじゃないのっ」

ツルギ「俺を幸せにしてね！」

アリサ「ふつう逆でしょおおおおお！」

ミネルヴァ「チナミニ、アカイヌ、ノイメージハ？」

たかB「狼。毛皮の部分が燃えている感じに思ってくれ」

次回 第一話 もう少し短くまとめよ

サカサ「これって、目標？」

たかB「はい」

## 第一話 もう少し短くまとめるよ（前書き）

たかBからの追加補足。

「避来矢のイメージは西洋の剣。ブロードソードといった方が想像しやすいかもしれませんが刀身は二倍近くの1・5メートル。幅が0・8メートルのかなり巨大な剣です。刀身から柄まで黒一色。モンハ〇の大剣をイメージして読んでくれれば幸いです」

## 第一話 もう少し短くまとめよ

「で、ツルギ君。君はここで本当にいいのかね？」

「はい、構わないです」

気を失った俺はバニングスさん親子の車で目的地であるアパートまで送ってもらった。時刻は午後十時前。サカサは空港で俺のことをこの人たちに任せて何やら出国手続きを行っているそうだ。こんな夜中に子供を一人にするなど考えられない。と思っていたバニングスさんだが、そこまでお世話になるわけにはいかない。後からサカサから安全（テロリストの殲滅、及び繋がりを絶つまで）確保ができるまで行動を共にしないのがベストだ。

「頭の怪我は言いわけ？」

「構わないで、アリサ」

思い出すだけでも恥ずかしいんだ。

「それにご飯はお風呂は着替えは、ていうかあんた学校に行くの、市役所に行った、お金はテレビはそれから」

彼女とはイギリスの山奥で知り合った。ちょうど熊狩りが解禁になった山で彼女たち親子に獣と間違われ、銃で撃たれてた時に知り合い、たまにサカサとアリサの親父さんの会合の間、子供たちである俺らは近くの公園で遊んでいた。そのせいもあってかアリサは俺に遠慮がない。

「ああ、大丈夫です。生活面はばっちりです。伊達にジャングルや氷山に登ってってませんから。心配してくれてありがとうございます」

日本での野宿なんて簡単ですよ。猛獣はいないし、いきなり銃を突きつけられることなんてないだろうし。…あるかも。

「心配なんかしてないわっ、ただ、あんたが夜中にお腹をすかせてコンビニに行ったところで、深夜の路上で野犬に襲われて、その野犬がお腹を壊さないか心配なだけよ」

心配はそっちかよ。

パニングス親子が帰るのを見送って、俺は改めて自分の寝泊りするマンションに入った。

しかし、一戸建てを借りるなんて小学生では大きく過ぎるんじゃない。周りは雑木林で周囲一キロ民家どころか何のお店もない林の中にポツンとある一戸建て。マイクロバス四台は止まれそうな駐車場。あまりに豪華すぎる…。そんな疑問もありながらため息をついた。部屋のカギを開けると家電。生活雑貨の詰まった段ボールが三箱ある。その中に黒い小さな金庫があった。が、それは隅に置いておくことにした。段ボールから取り出した布団を敷いて今日は早々に眠ることにした。

グーグーグーグー。「キュンキュンキュン」はっ、嫌な気配。

眠りに入ってまだそう立ってない頃、外から何かが大きく回転しているような音に目を覚ました。音がするのは玄関ドアの向こう側。すっごく開けたくないけど。

「…どちらさま。て、近い近いっホバリングが近い！」



「おー、ツルギ悪いけどこれのこと頼んだ。あと忘れもんだ。受け取れ」

迷彩色のヘリコプターがマンションの駐車場でホバリングしていた。どうやら、そこは駐車場ではなかったらしい。その乗り降り口にはサカサが一台のパソコンと避来矢を持ってなんか言っていた。

「これから「キュン」のどこ「キュン」行つて「キュン」をしてく「キュン」から。任せた。「キュン」テロリストは「ピー」を「ピー」で「ピー」したから大丈夫」

そう言葉を残すと「出してくれ」とサカサの言葉に従いヘリは上昇していく。サカサがパソコンと避来矢を放り投げると迷彩色のヘリコプターは深夜の空に消えていった。あと、会話の途中でホバリングの音じゃなくて放送禁止用語で規制が入ったのは気のせいだろうか。

従兄弟のとんちんかんな行動に目が一発で覚めた。ちくしょう、今度こそ寝てやるからな。パソコンとヒライシは明日だ明日。あのテロリストに明日は来るのか…。来ない方が幸せか。

そして深夜二時。にも関わらず俺は布団に入ってはいなかった。お腹が減ったのでコンビニに行くことにした。だって、丸一日まとも食ってないんだもん。そして、ふと思ひ出す。

顔を赤らめてそっぽを向くアリサはかわいらしく見えた。が、帰り際にあんなピンポイントなことを言われたからだろうか。弁当を買った俺は外に出たことを後悔していた。

「本当に遭遇したああああああああっ！」

なにこれ、フラグだったの？

二匹の大型犬に追われ、必死に民家が立ち並ぶ道路を疾走してい

た。深夜二時だから人っ子一人いない。

ギャルウウウ、グオウゴウガウゴウッ。

しかも追ってくる野犬があまりにも常識はずれな風貌、とにかくデカい。毛皮が分厚い。微妙に動いていないか、なんかこう炎みたいに。

????「こつちだ」

ん、人の声？

????「はやくっ」

人の声がした方向を見るとそこに喋る黄色いかまぼことプチトマトが落ちていた。

…なんで？

しかし、考えている暇はない。

かまぼこ?「早く。っ、きゅえっ」

全速力中で野犬から逃げ出しながら、俺はその黄色いかまぼこの真ん中を掴み、

かまぼこ?「ちょ、ちよっと」

百八十度ターンをしながら追ってきた二匹の野犬にぶん投げた。

かまぼこ?「う、うわああああっ!」

「すまん。かまぼこ。お前の犠牲は無駄にはしない」

どうやらプチトマトも一緒にくつついているようだし一人では死  
ないよ。よかったね、かまぼこ。

後にこれが引き金に白い死神と戦うなんて思ってもいなかった。

かまぼこ？が一匹の野犬当たると、当たらなかったもう一匹の野  
犬に噛まれた。その隙に逃げ出そうと再度全力疾走する。そして俺  
は見事逃げ切ることに家まで成功した。

そう家までは。

「はあ、やっとつい」

ドアノブを回し、足を踏み入れた瞬間だった。

「がっ」

背中に強い衝撃を受けて思わずそこに倒れこむ。背中に当たった  
物体は勢いそのままに部屋の中に入っていった。  
すぐに立ち上がると黄ばんだ牙がすぐ目の前に迫っていた。

「危なっ！」

思わず両手を使ってその牙をもつ口を閉じる。泥くさい匂いが鼻  
を突き刺す。そこでようやく自分の背中にあたったのが先ほどの野  
犬だと気付いた。もう一匹とは離れてしまったようで背中からは何  
も気配を感じない。

「おううつうりゃああああ、なめんなああああ！」

こう見えてもサバンナでジャッカルの群れと格闘したことがあるんだよ。負けたけど。レンジャーの人がいなかったら死んでたな俺。体を半回転ハンマー投げのようにして犬を再び、玄関の外にぶん投げる。投げられた犬を確認してから急いでドアを閉めて鍵、鎖をかける。

「えーと、あ、あつた」

散らかった段ボールの下に黒い剣。避来矢。を手に取る。そして、ドアに向かって剣を構える。こいつであの野犬をたたいてやるぜ。ドン、ドカンッ。ドアに野犬が体当たりしているのか、ドアにぶつかるたび亀裂が入る。

「てか、室内で避来矢は圧倒的に不利じゃ」

絶対に部屋のどこかにぶつかるし。と、考えていたら避来矢にわずかな振動が走る。

「問題零。遠慮無用。状況把握」

振動とともに頭の中から何とも拙い声がする。骨伝導？

「否定。我、所持、汝、主。許可、要請」

許可？何の？てか、誰？…まさかつ。

「肯定、我、黒ノ大剣。避来矢。主ノ剣、認可、要求。…了解？」

この声は避来矢！？なんかすごい堅苦しい感じの剣だな。というか機械の武士？騎士？凄い真面目そうなやつだ。

「主…」

不安そうな声を出すな。俺なんかでよければこれからよろしく、  
避来矢。

「了解！主、目標、撃破、優先？逃走？」

決まってるだろそんなこと。

ドン、バカン。

錠前が壊された。あと一撃で扉はこじ開けられるだろう。その前に  
避来矢に伝える。最初の命令。それは、

ズガアアアアン！

扉が壊されると同時に野犬が飛び込んでくるがそれに合わせて俺  
も野犬に向かって踏み込む。

グウルルオオオオオオオオオ！

「ぶつ飛ばすぞつ、避来矢！」

「了解！目標、無力化、最優先！」

野犬がドアを突き破って、玄関に足をつける前に避来矢を下から  
上に掬い上げるかのようにフルスイング。再び玄関の外に追い出し、

俺も外に出る。

ギャンツ。

野犬は悲鳴を上げて表にある駐車場に転がるが、すぐに起き上がり俺を睨みつけ、威嚇の声を上げる。威嚇するたんびに野犬の毛皮が一段と盛り上がっていく。そして、その姿を暗闇に溶け込ませる。野犬を一瞬にして見失うが、

「主、頭上！」

「おうっ」

避来矢が野犬の居場所を教えてくれる。その指示に合わせて避来矢を振るう。

「左側方」「はっ」「右後方、足元」「せいっ」「臀部」「で、え？」「尻」「うおおおっ、危なかったあ」「正面」「ぜえいやっ」

野犬の攻撃を避来矢の指示で回避しながら時折、避来矢の腹の部分で殴打する。が、このままだと、…避来矢。俺の考えていることが分かるなら次で決める。今度、俺の上半身を狙ってきたら、飛び込んでくる方向だけを教えてくれ。

「主！作戦、変更、推奨。別…」

悪いな避来矢。これ以上長引かせたら相手に逃げられる。野犬、猛獣は自分の攻撃が通らないと学習すると一目散に逃げる。ライオンやチーターが象の子供を襲わないように彼らの牙や爪が通らないから襲わない。もし、ここで野犬を逃がせば、他の人を襲う可能性



ゴガッ。

野犬は苦しんでさらに俺の脚に食い込んでくるが、それも一瞬だった。野犬は体をしばらく震わせるとクタリと体中の力が抜けたかのように意識を失った。

「目標、無力化、成功。次。選択。主。扉。修復。又ハ。リオストーン。回収命令。我。回収。希望」

「…ああ、回収たのむ」

いつの間にか首元に押し付けていた避来矢に野犬の毛皮がまとわりついている。野犬とは別に意思を持ち、避来矢に染み込むような動きが何とも不気味な光景だった。

ヴォン。

まるでパソコンが起動した音を響かせた避来矢は野犬の毛皮を吸い込んでいった。

「了解。回収、開始。……………番号、三十三。回収、完了。予備、熱量。使用。扉。修復。開始」

避来矢の声が鳴り響くたびに部屋の惨状が逆戻る。避来矢から放出された青白い光に包まれていく全ての物が癒されていく。

野犬なんていなかったという具合にその摩訶不思議な光景をみつめながら。

「…サカサ、俺に何をさせる気だよ」



俺は足の痛みも忘れながら、驚嘆のため息をついていた。

ちなみに、それからしばらく経つと、毛皮を吸い込まれたせいで二回りほど小さくなった野犬は目が覚めると大急ぎで俺の目の前から去って行った。

「…どういうわけだよ。これは？」

「主、現実。我自身。証明」

部屋に戻り、散らかった部屋の中で足の手当てをし終えた後にパソコンを起動した俺は呆然としていた。

避来矢とミネルヴァはオーバーツであること。これは事前に知っていたことだが、問題は作られた理由が判明。その理由が、

異世界からの災厄を防ぐための兵器。

更にアイコンの中には異世界の災厄が既にこの町のどこかにあるかもしれないということ。その災厄を利用してある国家があるかもしれない。その国家をつぶすためサカサは自分の部下を引き連れ奔走していること。

サカサとミネルヴァは一時的に封印は出来ても、その災厄を鎮めることも探知することもできない。しかし、避来矢なら封印・浄化することが出来ること。

これらの情報は避来矢に名前を付けたことにより避来矢のブラックボックスの一部が解放された情報だ。解放された情報の中に異世界の災厄。その災厄が凝縮された石。リオストーンの引き起こす怪現象が記されていた。

あの遺跡での崩落事故もこのパソコンに映し出された角ばった植物のような種で、あの金庫の中にはパソコンと同じ種が二つ入っていた。このリオストーンとやらが原因らしい。

サカサは遺跡でリオストーンを発見。普通に触ろうとすると電気を放電するのでダイナマイトで爆破して持ち帰ることにしたらしい。そのかけらをういてミネルヴァを修理した。ちなみにミネルヴァに使用しているリオストーンは粉々になっていたため避来矢でも浄化も封印もできない何とも不安定なものになった（ミネルヴァ談）。今のところはサカサがこれから毎日メンテナンスをしてリオストーンを抑えていくらしい。

他にも、サカサの部下たちが（世界中にいるらしい）アメリカで身長三メートルを超えるミノタウロス。フランスで五メートルを超える人魚の目撃、撃破したそうだ。この二つはサカサの作った現代兵器（ロケットランチャー及び違法改造したバッテリーを使った長距離レールガン）で仕留めた。そのとき回収した二つのリオストーンを使用し、一昨日にミネルヴァ。今日、避来矢を起動させることに成功したらしい。金庫のリオストーンはその時の物だ。

しかし、避来矢自体起動はしても使えない。パソコンの電源はつくけどメニューを開くことが出来ない状態に近かった。そこで白羽の矢にあたったのが俺というわけだ。

「…主」

避来矢は申し訳なさそうに声をかけてくる。その声に対して俺はため息交じりに答えた。

「はあ、まあ。やるしかないよな」

たった一つしかないアイコンをパソコンから消去し避来矢に向き直りながら、避来矢に金庫の中にあつたリオストーンを回収させる。

ちなみに番号は二十七と十三だった。

「驚愕。主。質問。何故。疑問、提示、行動、皆無？」

避来矢は俺の行動に疑問を持ったのか、即座に質問してくる。

「避来矢。俺はサカサに一年間とはいえ付き添った。あいつはいつだって破天荒で女好きなまけもの。それなのに人を楽しませて、いつも人のそばにいたけど。誰一人として心から信じたことがない。自分の部下ですら。そんな人間が俺を頼ってくるなら答えてやるのが人つてもんだろ」

俺は軽く笑い、パソコンの電源を落とし、眠りについた。明日は小学校に顔を出しに行く予定だ。早く寝ないと遅刻するかもしれない。

「おやすみ。避来矢」

「…主」

避来矢はまだ疑問に思っていたみたいだけどこれは避来矢への宿題って、ことで。

翌朝。目覚めると同時に避来矢に聞きたいことがあったことに気づいた。

「なあ、避来矢。なんで俺なんだ？別に俺じゃないとダメとかいう理由でもあるの？」

「肯定。理由。主。才能皆無」

「へ、どういこと?」

「我。使用条件。才能皆無ノ人間。他ノ才能。所持者。使用不可」

「家事や勉強とかスポーツの才能を持っていたらお前は使えない?」

「肯定」

えーと、わかりやすくいうと。

お前は何やっても上達しないし、なにやっても才能ない。何やつても失敗する。つまりバカなんだよお前（笑）まあ、そのおかげで避来矢が使える。 訳：サカサ

「て、ことか。避来矢?」

「……………」

「避来矢」

「…ファイト」

「うわああああああんっ」

避来矢が初めて普通にしゃべった言葉は慰めの言葉だった。

現在 リオストーン 回収数3 すべて浄化中  
避来矢 バリアジャケット展開不可 飛行不可 結界展開不可 認識  
阻害不可

攻撃手段 避来矢自体を用いた直接攻撃のみ

スキル 物理的修理装置 避来矢自身の自己修復も兼ねているため  
専門的なメンテナンスが不要となる。また、余ったエネルギーで他  
の物体を治すことが出来る。生命体には効果はない。

## 第一話 もう少し短くまとめるよ（後書き）

あとがき

たかB「…疲れた。今回も長かった。目標未達成」

アリサ「て、いきなりネガティブ発言しない！」

ツルギ「すこし間がある分切実なんだろう」

ミネルヴァ「シカタナイ、デス。ワレワレ、オリジナル、デバイスノ、モジヘンカン、ヒトクロウ、デスカラ」

サカサ「まあ、俺はしばらく出る予定がないから少しは楽になるんじゃないか」

ツルギ「避来矢は殆ど漢字ばかりだもんな。出番があるたんびに作者は大変なんじゃないか」

避来矢「肯定。作者、変換、下手。主同然。才能皆無」

たかB・ツルギ「うるせー！わかってんだよそんなこと！」

サカサ「そういえばようやく原作にかかわってきた感じだな」

アリサ「ツルギが投げたかまぼこって…」

サカサ「まあ、ある意味フラグだよな」

避来矢「想定。主。淫獣。対戦」

たかB「漢字で書くと大変だよな。早口で言うという意味合いが」

アリサ「それはそれでいいんじゃない才能ないから客寄せにもなるし」

ツルギ「さーせんした（棒読み）」

サカサ「そういえば赤犬について追加質問いいか？」

たかB「どうぞ」

サカサ「序章で放った赤犬。あれ、テロリスト全員を蹴散らしたよね」

ツルギ「でも、ミネルヴァは一般人もカウントしてたということ  
は一般人にも赤犬が？」

アリサ「連泊には色を付けていたからそれが目印なんじゃない」

避来矢「敵。味方。判別後。赤犬。行動。詳細求ム」

たかB「はいはい。たとえばこんな風にカウントしたでしょう」

テロリスト（以下：テ）    テ    一般人（以下：？）    テ    テ？  
テ。

アリサ「ふんふん」

ツルギ「赤犬は最後に最初のテロリストを食ったよね」

たかB「うん。ミネルヴァが言ってたけど ケツカラ、クラウドは後のほうからつぶすという意味。だから赤犬は」

テ ? テ テ ? テ テ。

たかB「こうなります。さらに連泊の矢は色が違う人から色が違う人に移ると自動的にその人たちを矢の軌道から外します。つまり」

テ    テ    テ    テ。  
?    ?    。

たかB「こんな感じになる」

ツルギ「でも普通なら最初の奴から赤犬にやられるはずじゃ」

避来矢「疑問提示。何故。後続、優先」

ミネルヴァ「サカサノ。シュミ」

たかB「ああ、先に答えられた。まあその通りです。赤犬は連泊の矢でつながれたところならどこからでも召喚できます。逆に連泊の矢で射ぬかないと赤犬は使えません（この前のあとがきで出た赤犬はその時だけの特別仕様です）」



ツルギ「…ああ、なるほどね」

アリサ「どういうこと？」

サカサ「持ち上げられるところまで持ち上げて、相手を突き落とす。その相手作る絶望の顔。俺はそれがたまらなく好きだ」

避来矢「…外道」

サカサ「ちがうぞ。そんな小さい奴らと同じにするな」

アリサ「鬼畜ね」

ミネルヴァ「ソレハ、ホメコトバ、デス」

サカサ「ついでだから言うがツルギ。お前の危機感知能力だが、あれ、ほとんどが俺関係だから」

ツルギ「は？」

サカサ「だって、そうだろ。そんなものもっていたら避来矢使えないじゃないか。今までの出来事のほとんどは俺が一時的に敵をまくためにお前を利用した奴だから」

アリサ「…なんといえいいのか」

避来矢「推薦。悪魔」

ツルギ「いくら従兄弟でも酷すぎやしないかつ！」

サカサ「何言ってんだ。そのおかげでどんな奴とあっても怯まない胆力が付いただろ」

ツルギ「トラウマともいうだろ！」

サカサ「メンゴ」

アリサ「軽っ」

たかB「もうそろそろいいかな」

ミネルヴァ ジカイ、ヨコク

サカサ「おお、あとがき短い」

たかB「疲れたんで」

ツルギ「良い夢見ろよ」

次回 第二話 しょっぱいケーキと傷だらけのかまぼこ

アリサ「ところで殆ど。って、ことは本当に感知したものもあるの？」

サカサ「ああ、あるぞ。とある外国人墓地で…（省略）…の心霊現象は本物。あれは本能に近いな。生き物だったら誰でも気づく。今も時々…」

アリサ・ツルギ「……え？」

避来矢「主、背後。疑似、生命？反応。有」

アリサ・ツルギ「ギャーーーー！」

## 第二話　しょっぱいケーキと傷だらけのかまぼこ（前書き）

原作ヒロイン登場。でも、すいません。かなり原作ブレイク狙って  
いるんで、しばらく活躍はなさそうです。

## 第二話　しょっぱいケーキと傷だらけのかまぼこ

「えーと、これでいいんだよね？」

市役所に行って住所登録を行う。この時はサカサから事前に渡されたUSBメモリを受付の人に渡したら、五分後市長がタクシーを飛ばしてやってきて、豪華な部屋に招待された。

以下、VIP対応の部屋での出来事をお送りします。

「はいっ、すべてこちらで用意します。あつ、転校手続きとかすべてこちらで、ええ、はい、何もお手間は取らせません。きみつ、はやくこの子、いや、この御方お菓子を。むろん最高級の物を。ああ、すみません。すぐにすぐに手配します。ですから、ですから……」

一泊間を置き、市長は震えながらおれの手を取り。

「…家族にはどうか手を出さないでください」

サカサ。お前は何やってんだよ。本気で世界征服できそうじゃないか。

(主。 学び舎。 確認。 現在地。 ヨリ、 距離。 1キロ)

避来矢と念話をしながら現在地と学校までの道のりを確認する。

おお、サンキュウ。 避来矢。 ナビ頼む。

俺は今背中にあの馬鹿でかい剣。 避来矢を背負っている。 が、周りの人間からは避来矢自体、見えていない。 何でも今朝方、リオス

トーンの一つの浄化が終わると、避来矢は機能を一つ解放する仕組みだった。そしてブラックボックスの一つを解放。その中にあった認識障害のプログラムを起動したらしい。というか、今の避来矢は俺にも見えないんだけど。目印に剣の柄の部分にとっても小さな鈴をつけている（パチンコ玉サイズ）。

別の機能も解放できるらしいがこの性能を他人にはばれるわけにはいかない。という避来矢の判断でまずは認識障害を選択した。

ちなみに残りのリオストーンはまだ浄化中。もうすぐ2つ目の浄化が終わり、防御のプログラム。俺のバリアジャケット（その人にあった防具）とやらを制作してくれるらしい。避来矢様バンザイ。だが、一つ困ったことがある。

（主。通路。通過。注意。後方。二名。接近中）

それは避来矢の図体のデカさ。普通の道路はもちろん狭い道なんかを通る際には電柱や人にぶつかりかねないこと。すれ違う際には大げさに道を開けなければならないのだ。おかげで周りから変な目で見られることもしばしば。三つ目のリオストーン浄化でサイズの縮小とかあればいいな。

（浄化、完了。主。バリアジャケット、作成、一時停止。機能、変更、可能。縮小拡大、機能。選択。即時対応可。ガ、選択後。バリアジャケット、作成。完了。明日。深夜。一時。変更後、更新、不可。了解？）

うっ、コンパクトにすることはすぐにできるが、バリアジャケットは明日になるのか。防具は欲しいのだが移動しにくい。移動を取るか、防具を取るか。むー、悩むな。

ごっ。（何かが避来矢にぶつかる音）

ぎゅるるるる。(ツルギがその場でコマのように回転する音)

交差点付近で考え事していると左後方からやってきたトラックに  
避来矢をぶつけられた。認識障害が効いているからだろう。トラッ  
クはぶつかったことに気づくことなく通過。俺はその場でコマのよ  
うに大回転。転倒。周りの人の視線が痛い。

ぴっぽー。ぴっぽー。

信号が青になったようだ。しかし、俺から見れば世界は回ってい  
た。前に歩くことは出来ない。そしてほかにやるべきことがある。  
それは。

「…今すぐ、更新して」

「…了解」

避来矢の機能をバリアジャケットから縮小拡大に変更することだ  
った。

「……×3サイド

「……あいつは何やってるの？」

「……どうしたの、アリサちゃん？」

???「あ、男の子が倒れているの」

アリサは目の前で突然大回転をしたツルギを呆れていた。今日の午後、昼休み時間に理科室でガス爆発（負傷者はゼロ）があり、急に工事が必要となった。修繕のため、生徒達は全員帰宅するように言われたのであった。そして、その帰り、友人である月村すずかと同じく友人である高町なのはの親が経営するケーキ店、翠屋によるところでツルギを発見した。

ツルギ「…て」

なのは「だ、大丈夫」

倒れていたツルギになのはが声をかけて、ツルギは顔を上げる。涎（胃液？）が出ていて格好悪かった。そんなツルギを見たすずかがハンカチを渡す。

すずか「怪我はない？」

ツルギ「うん、ただ。…周囲の目が痛い」

気にする余裕はあるんだ。

アリサ「あんた、こんなところで何やってるの」

「え、そりゃあ、トラックに。て、げえ、アリサッ」

私は関羽か。



「いや、どちらかといえば六大天魔王、織田信長」

「あんたの頭蓋骨でジュースでも飲もうかしら」

回想にツツコミを入れるな。

「すみませんでした。二つの意味で」

倒れていた姿勢から土下座にフォームチェンジしたツルギの所要時間は一秒にも満たない。それでいながら完璧に美しい土下座だった。

「わかればいいのよ。で、あんたは何でここにいるの？」

「え、それは…」

「アリサちゃん。知り合いなの？」

なのはがツルギと私を交互に見ながら少し慌てていた。栗色のツインテールも心なしかピコピコと動いていた。男の子に土下座をさせることにためらいがあるのだろう。そして、少し言いよどんでいるツルギは顔を上げて何か言いたげであったが、ここでは人目が付きすぎる。

「まあ、残りは翠屋で聞きましょう。ツルギの奢りで」

「賛成。ツルギ君甘いのは好き？」

さすがが手をたたいてツルギに聞いてくる。て、なんで顔を赤くしてんのあんたはっ。そんなに紺色のおさげが好きなの。

「俺これから用があるんだけど」

「あんたに意思決定の権利なんてないのよ」

「え、でも」

「頭蓋骨」

「あなたに一生ついていきます」

再び土下座のフォームに移行するツルギ。その姿に世間の目線など気にする余裕はなかった。  
わかればいいのよ

なのは視点

「へえー、お姉ちゃんとも知り合いなんだ」

「お兄ちゃんと会う前の忍さんで、海外にも行っていたんだ」

今、私たちはツルギ君も合わせて四人。季節限定のケーキをついていた。なんでもアリサちゃんはツルギ君のことを知っているようですぐに打ち解けたの。だけれど。

「まあ、俺はあの人に人の可能性を垣間見た」

その時のツルギ君はどこか遠い目をしていたの。

「なに格好つけているのよ。あんたは」

アリサちゃんは呆れ顔にツルギ君にフォークを向ける。アリサちゃん、行儀悪いよ。

「あんなに優しくされたんだ。仕方ないだろう。初めてだったんだぞ、体温が四十度超えるまで休むことも眠ること許されなかった俺にあの人は微熱状態の俺に休みなさい。と声をかけてくれたのは……人は、人はまだ捨てたもんじゃない、と」

その時、ツルギ君はマリアとかいう病気だったらしいの。なんだかツルギ君と打ち解けるほどに目の奥が熱くなってくるの。

ツルギ君は忍　しのぶ　さんに看病されたこともあったらしく、その時から忍さんにぞっこんだった。が、お兄ちゃんと忍さんの関係を話した時の落ち込みようはなかったの。まるで告白する前にふられたかのように。

「……あはは、でもすごいよね。ツルギ君もアリサちゃんのこと簡単に許しちゃうんだもの。初対面の人にそこまでおらかな人はいないと思うよ」

すずかちゃんもおおらかなの。でも、ツルギ君はおおらかというよりも淡泊というべきなのかな？

イギリスの山奥でアリサちゃん親子に銃で撃たれた。

致命傷は避けられたものかなりの恐怖と痛みがあつたはずなのに、運ばれた病院でツルギ君は謝るアリサちゃんたちを見て、言った言葉が。

「いいよ。許す。死ななかつたし、後遺症無いし。全治二週間ぐらいだったから」

アリサちゃんもその時は怒鳴られる覚悟で来たのに呆氣にとられていたの。私やずずかちゃんでも怒鳴ったり怒ったりしたかもしれない。いまでこそ親友だけれども初対面の子にそんなことをされたら…。

「うーん。そうはいつでもな。あの時のアリサは本当に心の底から謝っていた。別に取り返しのないことをしたわけでもないから、いいと思うんだけどな」

「まあ、あの時のあんたは本当に馬鹿だった。いえ、今でも馬鹿なのよね」

呆れ顔のアリサちゃんに、ツルギ君は半眼で睨んで愚痴を垂れる。

「一応被害者で、あなたは加害者なのですが…」

「否定できる？」

と、質問されたツルギ君は、

「できないぜ」

とてもさわやかな笑顔で返していた。あれ、おかしいな。食べてるケーキがなんかしょっぱいの。ずずかちゃんもツルギ君から目をそらしていたの。うん、しょっぱいケーキがあっても今はおかしくないの。

## ツルギ視点

「む、理科室が爆発か。…もう日本は平和に飽きたのか」

「そ、そんなことはないよ」

「それでツルギ君も同じ学校に来るの？」

「まあ、この流れじゃそうよね」

上から俺、すずか、なのは、アリサの順で翠屋を後にする。ケーキの支払い時に対応していた親父さんとひと悶着があったがどうか話をつけた。血まみれの諭吉。たしかに受け取りづらいよな。俺でも嫌だ。…サカサ、今度からクリーンなお金をお小遣いにしてくれ。物理的にも社会的にも。

（主、報告、問題、発生）

「にや？」

「へ？」

収縮拡大機能で1.5メートルはあった避来矢は五センチほどに小さくなっている。避来矢は今、胸ポケットに入れている。その避来矢から念話が入った。と、同時になのはがネコのように何かに反

応じた。どうした避来矢？そして、どうしたなのは？

（認識、阻害、使用、不可。機能、同時、使用、不可）

（え、つまり小さくなったのはいいけどお前は見えるようになったと）

（肯定。認識、阻害、使用、想定。…縮小拡大、使用、不可）

「ん、疎外。麩か？」

念話のやりとりをしていると隣にいたなのはが首をかしげる。が、お構いなしに避来矢は報告を続ける。

「どうしたの。なのはちゃん？」

「んー、なんか変な声が聞こえない？しよう。とか昨日とか」

（つまり、片方使えばもう片方は使えないわけか。厄介だな。じやあ、バリアジャケットの展開なんかしたら）

（想定。…十中八九、残存、機能、使用、不可）

「中学？ソテー？」

「なのは、大丈夫？ぼやぼやすぎて変な電波でも受信したの？」

（つ主、念話、傍受、可能性、大。帰宅後、再度、報告）

（ん、避来矢？傍受って、誰に？）

「ねえ、ツルギ君」

（おい、避来矢。どうしたんだ）

「ツルギ君ってば」

「うおう、どうした。えーと、高町？」

避来矢から念話が途切れたことに疑問に思っていたところでののが急に声をかけてきた。

「うん、なんか変な声がしない？ツルギ君にも似ているような声でしたんだけど」

「それは俺の声が変な声ってこと？」

ショックだぜ。確かに美声ではないが変な声だなんて、しかもこんなにもいい子な感じのなのはから言われると効果大だ。凹む。

（…主）

（わかつている。傍受だろ）

なのはが俺たちの念話を傍受したというわけか。

「ほら、また」

「何言ってるのなのは。ツルギが変なのは説明したでしょ」

「そっだよ、なのはちゃん。モスキート音じゃないんだから」

モスキート音。

蚊のだす羽音のことで大人には聞こえない微量な音。 談：サカサ

てか、すずかあああああ、おまえもかあああああつ。

「むー、本当なのに」

「大丈夫、私のうちが経営している病院行く？」

「恭也 きょうや さんに何かされた？」

「ついでに俺の声帯もよくしてくれない、月村」

むくれるのはは、本当に心配するすずか。からかうアリサ。呆れる俺に。腕を振って講義をする。原因である俺がいつものもなんだがこのままにしていようと思っていた時だった。

助けて

「にゃ！」

「おっ」

（…！）



助けて!!

「っ」

「ちょ、ちよつとなのは」

「なのはちゃん」

いきなり駆け出すのはを二人は追いかけた。俺もそれにならうが、どこかで来たことのある声だな。避来矢は三人娘に気づかれるかどうかの音量で報告を行う。

「主、広域、念話。又、避難、信号、及び、生体、反応、感知。生体、反応、微弱。…魔力、反応、消失」

わかった。とにかく助けを求めているのはそいつだな。避来矢、俺だけに聞こえるように声を小さくできるか。

「信頼度、九割。了解、主。音量、効果、最少」

三人娘の後を追い、交差点付近でうろろしているなのはに声をかける。

「どうした、なのは？この辺になんかあるのか？」

探し物はわかっているが、あえて質問する。リオストーンだった場合、三人娘をすぐにでも逃がせるようあたりへの警戒を緩めない

ようあたりを見回す。

「魔力、消失、座標、検索」

「誰かがよんだの。助けてって」

「え、本当？」

「本当なら早く探すわよ。手遅れになったら気分が悪すぎるわ」  
「すずか、アリサも周りを見渡す。避来矢も先ほどの声の主を探していた。」

「∴判明。主、正面、交差点、右折。30寸」

「ちょ、ツルギあんたどこに行くのよっ」

避来矢の声に従い、正面の交差点へ足を進める。アリサが何か言っていたけど気にしない。て、寸？

「約、1、メートル」

わかりやすくなった。ところで避来矢、もう少しわかりやすく喋れない？

「てか、次の角曲がったらすぐっす」

ごめん。俺が悪かった。なんか凄い軽い感じでいやだ。なんだろうナンパ男というか、チャラい？パネエッす。元に戻ってほしいっす。

「了解」

交差点を曲がるとすぐに落ちていたものに気づいた。普段路上にはないものがそこに落ちていたから。

「…サクラエビ入りのかまぼこ？」

「主、空腹？」

！（声にならない悲鳴）

まあ、もうそろそろ夕食の時間帯だから。で、かまぼこが動いた。

「…おまえか？」

かまぼこ？を拾い上げると、それには目と鼻と口と足と手と。ところどころに傷がついており、アクセサリーのようにプチトマトがついていた。どこかで見たような？

「わ、その子、イタチ？」

「怪我しているよ。早く病院に」

「で、でも」

アリサ、すずか、なのはがイタチに気づく。すずかはイタチを病院に連れて行きたがっていたが、なのはは声の主を見つけられないまま病院に行くのも気がかりなのだろう。イタチとその周辺をぐるぐると目を回しながら周辺を見渡していた。

「…主。動物、病院。西方向、三百メートル。…警告、未確認、魔力、反応、感知。南方向、一里先、沖合」

避来矢ナイス。そして、警告？…あの時の野犬かつ。

「…よし。声の主は俺が探すから三人はこいつを病院に連れて行ってくれ」

「え、でも」

なのはは未だに迷っているようだから後押しする。正直に言うならここに迫ってくるかもしれない野犬を相手するにはこの三人は邪魔でしかない。

「聞き違いかもしれないし、本当かもしれない。だけど、このまま…じゃなくて、イタチをまず何とかして。さいわい動物病院も近いようだし」

「あ、あう」

なのははにイタチを渡し、進路を南に取ろうとするとアリサが声の主探索（発見済み）に名乗りを上げる。

「つ、ツルギ。じゃ、じゃあ、私も残る。すずか、このへんならいつも行っている病院が近いわよね」

「いや、アリサも行ってくれ。俺とアリサは携帯電話番号を知っている仲だから連絡取りあえるだろ。もう遅いから」

「シャラップ！それならさすが、私の携帯もつて。代わりに私がずかの携帯使うから。ツルギ、あんただけに格好いい真似はさせない。というか、似合わない」

「…酷い」

なんだか展開が怪しくなってきたぞ。なんだか、アリサはついてくる気満々だ。ずかには携帯を交換するとなのはと共に動物病院へと向かう。

「二人とも、この近くにいてね。すぐに戻るから」

「お、おねがいなのー」

二人が角を曲がっていくのを見送ったアリサはふん。と鼻息ひとつ立てて俺に宣言する。

「さあ、イタチを見つけたのはあんなにけど、勝負はこれから。早く重傷者を捕獲してICU（緊急治療室）に引っ張っていくわよ」

地である負けず嫌いが出たのか、夕焼けに向かって指をさしている。なんか和むわ。と、和んでいたら避来矢からの報告が状況を一変させる。

「主。未確認、反応、付近、生体、弱小化。…結界！効果、範囲、一里！主、アリサ嬢、効果、範囲内！」

ちょ、結界は任意の人とモノしか通れない。特別な空間じゃなかったか。そんな空間にもし、アリサだけが入ったら…。やばいやばいやばい。嫌な考えしか思い浮かばない。

「アリサッ、手を！」

とにかく少しでもここから遠くにアリサを連れて行かなければならないのに。

「え？」

キンッ。

アリサは夕日で大きくなった陰に飲み込まれるように、海からやってきた灰色の結界に取り込まれた。

「な、な…」

結界は俺の目の前まで来たのに、まるで俺を避けるかのように効果範囲が足元で止まった。下手したら十センチもない超至近距離なのに。灰色の結界が薄まる。アリサの表情はまるで時間を停止したかのように止まっていた。そして、ゆっくり水に溶けるようにアリサと結界は俺の目の前でその色を消していった。

アリサを掴もうとした手は空を切っていた。

「あ、あ、ああ…」

「主！」

避来矢が俺に呼びかけるが俺には…。

「アリサアアアアッ！！」

ただ、アリサの名前を叫ぶことしかできなかった。

## 第二話　しょっぱいケーキと傷だらけのかまぼこ（後書き）

あとがき　避来矢チャラ男期編

避来矢「てか、いまの主じゃちょーヤヴァクね」

ツルギ「うちの避来矢がくれた！」

なのは「ツルギ君。避来矢君にご飯あげてる？」

すずか「お手入れたと思うよ。ちゃんと返り血拭いてあげないと錆びちゃうよ」

アリサ「て、避来矢は何食べて動いてんの？」

たかB「え、えーと？」

避来矢「考えてねえの？ヴァカなの？」

たかB「じゅ、ジュエルシード？」

ツルギ「すげー燃費が悪そうだし、暴走しそうだぞ」

なのは「しかも原作知識もっている人だったら何となく気づくだろうけども」

すずか「リオストーンが、もがもが」

たかB「ごめん、いまはちょっと黙ってもらえるかな」



アリサ「まあ、いいけど。じゃあ、次が重要。…私は…助かるの？」

たかB・ツルギ・なのは・すずか「………大丈夫だよっ！………きっと」

アリサ「何、この微妙な間は！作者！」

たかB「…次回予告」

アリサ「こらあつ、これまでで一番短いあとがきじゃない！逃げるな！」

なのは「そうは言っても私はまだ戦えないし」

ツルギ「作者も俺にどういう行動をとらせるか考えてないし」

かまぼこ？「僕も名前が出てないし」

すずか「あ、かまぼこ（仮定）君。よかったね、ここでは普通にしゃべれてよかったね」

避来矢「てか、いたの？かまぼこ（仮定）」

かまぼこ（仮定）「あの、僕はここじゃ語られてないけどフェレットだから。…せめてイタチって呼んで」

アリサ「かまぼこ（断定）はいいいから。作者、何とかしなさいっ。とつとつ、これを更新して私が活躍するネタを考えなさい」

かまぼこ（断定）「ちょっと待ってなんか僕の名前が凄いことになってるよ。疑問系から断定されてきているし」

ツルギ「冒頭でのアレはこれだったんだな。すまない、今晚のおかず」

今晚のおかず「うわあああああ、なんだかすごいことになっているよおおおおっ！！」

たかB「じゃ、今度こそ次回予告」

避来矢「ジカイ ナガイ、イチニチ」

たかB「何が長いだろうな？」

ツルギ「考えてないの！？」

### 第三話 長い一日（前書き）

バトルよりも残酷性が濃い話になっております。バトルの文章力は徐々についていきます。たぶん。避来矢の機能解放数ぐらいには…。この話には金髪娘が出るよ。

### 第三話 長い一日

アリサが結界内に閉じ込められてすぐに俺は八つ当たりで避来矢を地面に叩き付けて、思考を加速させていた。

「アリサッ、くそつ。どうする！ 考えろ、…サカサ。そうだ。あいつなら」

携帯電話を鳴らし、サカサが出てくるのを待つがコール音が十回流れてもサカサは出てきてくれない。

「…主」

「お願いだ、サカサ出てくれ」

願いが通じたかはわからない。ただ、電話だけはつながった。ただ、電話の相手がサカサではなく。

「ドウシマシタ。ツルギ？ トラブル？ ハッセイ？」

「ミネルヴァ！？」

あの水晶玉、どうやって携帯に出ているのかは不思議だがそんなことより…

「サカサ、イマ、シュウシンチュウ。ヤツカイナ、ヤツニ、カラマレテ、ヒロウコンパイ。ワタシガ、キコウ」

アリサを救うのが先決だ。ことの顛末をミネルヴァに相談すると。

「…シツモン、ガアル。ツルギ、ケツカイハ、ミエル？モシクハ、サワレル？」

「いや、見えないし。触ることもできない」

もし見えるのならアリサを探していた。触れることが出来たら避来矢を使って結界を破壊していた。

「…ヒライシ、イル？」

「あ、ああ、すぐ足もとに。すまない避来矢」

足元に転がっていた避来矢に八つ当たりしたことを謝りながら避来矢を拾い上げる。

「主、問題無。主ノ、胸中、二比較スレバ。…ミネルヴァ。策有？」

「ニンシキソガイ。ハ。ツカエル？」

「肯定」

「認識阻害？それなら最初に避来矢が獲得した機能だけど。それで何をすればいいんだミネルヴァ？」

「…アル、モノヲ、ソガイシテ、モラウ」

ミネルヴァが言い出した策はあまりにもぶっ飛んだ策だった。

## アリサ視点

「…もう、何なのこの空」

ツルギが何か声をかけると同時に何か灰色の壁がツルギと私の間に割って入ってきた。壁が動くわけでもないのに私にはそう感じ取れた。もう、一時間以上たっているというのに灰色の夕焼けは今もまだ目の前にある。

いや、一時間はきつと気のせいだ。何故ならずっと前から借りたこの携帯電話は先ほどからまだ二分しかたっていないのだから。それでも。

「…夢なら覚めてよ」

誰もいない空間。見慣れていた町はとても薄い紙を張り付けたかのように全体的に灰色がかった。赤いはずの夕焼けすらも灰色。人の声も車も風の音も何も聞こえない。すべてが停止したかのよう。なこの空間にいつまでいればいいのだろう。

「…う」

涙が出そうになった。まるでこの世界に一人だけだといわれている気がしたから。思わず上を向いて零すまいと堪えるが、その視線の先にあるのは灰色の空。涙があふれる。涙が一筋零れ落ちかけた瞬間。停止していた灰色の世界に動きがあった。それは轟音。海の方からだった。

「泣く…もんか」

海の方に行けば何かが分かる。たとえそうでなくてもいざとなれば泳いででも帰ってやる。帰って、なのはやすずかとまた翠屋のケーキを食べよう。仕方ないからツルギも誘おう。もちろん荷物持ち兼財布代わりに。今は楽しいことだけを考えよう。なのはには悪いけど声の主を見つけることは出来なかったことは謝ろう。ツルギが足を引っ張ったとでもいえば何とかなる。そう、考えながら動かす足は先程より少しだけ軽くなった。

## ツルギ視点

アリサが海に向かっていった。その五分後、アリサのいた場所。いや、空間に靄がかかる。その靄は無色ではあったが、写真の上にとても薄い膜が張られたかのようにじわじわとその空間を濁していった。しばらくして、今度は靄が現れた時とは逆にその靄が晴れていくと油絵のように人の輪郭と黒い棺桶のようなものにじみ出てきた。

「認識、阻害。効果、最大、維持。主、結界内、侵入、成功。以後、他機能、使用、不可。要注意」

「…ありがとうミネルヴァ。サポート本当にありがと、避来矢」

ミネルヴァが出した指示はいうには簡単だが改めて考えてみると無茶苦茶なことだった。

結界を認識阻害で騙す。

正確には結界の周波数に合わせた認識阻害電波のようなもので結界を透き通ってきた。

もともと避来矢はミネルヴァ同様オーバーツである。それを他人にばれないようにするにはまず知られないこと。人には見えないが機械越しに見たら見えてしまうこともある。だからこそ、ミネルヴァはそこに目を付けた。ミネルヴァ自身にも認識障害が備わっている。しかも、障害中は世界的に最新のカメラ（サカサが自作したのを除く）でも姿をとらえることが出来ない。その上、自分よりも出力の高い避来矢なら結界をだませると考えた。

…侵入した後の二つの問題を残して。

一つは認識レベルの最大の維持。これは結界を張った何かが少しでも異物を抱え込んだと探知してしまえば即追い出されるかもしれないからだ。

そしてもう一つは。全裸で結界内に突入することだった。

「なんで全裸？」

「仕方、無。障害、レベル。低下、原因、排除」

…わかっている説明してもらったから。障害している方から見つからないようにするには、できるだけ身軽になった方がいい。量が多ければ多いほど結界侵入は失敗しやすい。思わずターミターのポーズをとったのはご愛嬌だ。

「…結界内、衣類、装着。想定、…レベル、低下率、零」

なるほど、この結界内の服なら来ても問題ないのか。

アリサを探しながら服を拝借しよう。避来矢、アリサはどこにいる？

「検索。…海岸、方向。アリサ嬢。リオストーン、反応、地点、移動無。アリサ嬢カラ、リオストーンへ、接近中」



まじかつ、急ぐぞ。全裸でもあいつのもとに行くぞ。急いで追いつかないと。

「了解、前方、交差点、左折。残り、直線」

おし、待っているよ、アリサ。すぐにお前の所に行くからな。

「…全裸デ？」

それは言わないで避来矢。

アリサ視点

「…蟹？」

私は目の前の光景に思わずつぶやいた。轟音が鳴り響いたと思われるところに行ってみればそこは漁港近くのビーチだった。夏を目前としているとはいえ今の時期、こんなところに轟音が鳴り響いたり、人がいるのはおかしい。最近では花火もなければ祭りの予定もない。それなのに複数の男女をこの目で見つけた時は安心した。声をかけようと思ったがその光景があまりにも不気味だったので思わず電柱の陰に隠れる。

サイズとしては成人男性とほぼ同じくらいの背丈に全身赤色。だが、それに不釣り合いなほどの両腕。自分の胴体よりも太く自分の二倍はあろう両手。まるで下手な絵描きが書いたボディービルダー

だった。

私が何故蟹かとつぶやいたのは、この赤いボディービルダーは目の前にあったトラックタイヤを片手で両断した場面を見たからだ。それは蟹が自前のハサミでものを切断するかのようにいとも簡単にやっけてのけた。

「オオオオオオオオオオ」

蟹はタイヤを切ったことに満足したのか獣のように遠吠えをした。ちなみに蟹男（性別は分からないが）の前には若い男女と中年の男、そして若い男性が三人ほどいた。何やら蟹男の登場に呆気を取られているが、しばらくすると男性陣のほうから蟹男に声をかけてきた。

「は、はは、なんだそれ。マジックか？俺にも教えてくれよ。いきなり呼び出すかと思えば…」

「そうだぜ、どこで買ったんだその着ぐるみ？まるで特撮の怪人みた（ゴキン）だ…え」

蟹男が、目の前の男の腕をへし折った。何の躊躇いもなく。その大きな両手で彼らの腕、足を砕いていく。そこからは阿鼻叫喚の地獄絵図だった。

「え、ちょ、ちょ、ま、て。まってくれええええええ！」

「い、いや、死にたくないっ。だ、誰かああああ！」

「俺は関係ないっ、関係な、うああああああああっ！」

肉を先骨が碎ける音。耳に残る悲鳴。ああ、これは夢なんだ。そうじゃなきゃこんなことはありえない。

「ち、ふざけんなああああっ」

一人の男性が海岸に落ちていた岩で蟹の後頭部を思い切り殴るも、蟹男には何の反応はない。筋肉の壁があまりにも厚すぎて効いていない。

「かはあ」

蟹大きく息を吐きながら後ろを振り返る。岩で殴りつけた男の両腕を取る。ま、まさか。

「あ、あが、あがあああああ」

ばちんっ。

「けははは」

蟹は笑いながら男性の胴体と腕を持ち思い切り引き延ばした。

「あああああああああああああああああっつつつ！  
」

お願い。お願いだから。  
夢……………なら覚めて。

蟹男（仮）視点

あ、あは、あははははははは。

やっぱり本当だった。夢じゃない。あの石が僕に力をくれた。いや、もう、僕の物だ。先週、道端で手に入れた青い石が今の僕の体を作り上げたんだ。赤黒く鬼のようになったこの両腕。岩の攻撃にもびくともしない体。軽々と人を握りつぶせる握力。すべてが僕の体だった。

「…じよ、冗談じゃないぜ」

残った男は逃げ出そうとするが、甘い。この灰色の世界の王は僕だ。僕はこの世界の王なんだ。

逃がさない。この砂浜から逃がしはしない。

キンツ。

新しく、灰色の世界を張る。この世界は本当に最高だ。なんせ、自分の許可したものじゃない限りこの世界には入り込めないし、立ち入ることすらできない。しかも時間が引き延ばされているのか、ここでの一時間がむこうでは五分にも満たない浦島太郎のようだ。

「が、な、なんで先に進めないんだ」

逃げ出そうとした奴の前に見えない壁。正確には結界を張る。それ以上逃げられないように。もう、お前が進める道は僕に向かつていくだけなんだよ。

こんな素晴らしい石を二つも手に入れた。あの青い石の一つは体

の中にもう一つは首にひもでぶら下げている。この二つで強固な体と世界。両方手に入れた。この力を使いながら全世界すらも取れる。だが、その前に、

「な、な、勘弁してくれよ。マルダイ。も、もうバカにしないから。陰口をたたかないから、だ、だから」

がたがたと震える肩に一步一步近づいていく。圧倒的な力を両腕にぶら下げながら。

「…信用できるか。お前の考えは手に取るようにわかる。どうせ助かっても誰かに話したりするんだろ？まあ、信じられない話だしな。それでもお前は僕に逆らう。てか、ム力つくから、死んじゃえよ」

こいつはいつも職場で威張り散らしていたまじム力つく、お前の頼みなどだれが効くものか。

「や、やめ」

「死ね」

今まで僕のことを見下してきたやつ顔を泣き顔でぐちゃぐちゃにした後、今度は拳を振り下ろしてぐちゃぐちゃにする。ああ、楽しんだ。

そんなことを考えながら拳を振り下ろした瞬間だった。僕の灰色の世界が初めて悲鳴を上げた。

ガキィッ。

「認識、阻害、成功。主っ」

「いよっしゃっ！避来矢、リオストーンをぶんどれええええええええええっ！！」

目の前に急に現れた見たこともないクゾガキが巨大な黒い剣で僕を殴り飛ばした。それと同時に僕の世界は砕け散った。

## ツルギ視点

「主、結界、封鎖。通常、空間、強制、送還」

「え、まさか。ばれたのか？」

海岸沿いを走っていると避来矢から急な報告を受け、俺は近くにあった駄菓子屋の陰に隠れる。と、同時に結界が音もなく解除され、灰色の世界に夕焼けの赤が戻る。もし、ばれたのなら俺に攻撃が来るかもしれない。サカサから相手に近づく際には常に相手に見つからないように。と、言われてきているのでこの動作を取るのに躊躇いはなかった。全裸になるのは少しためらったけど。

「否定。可能性、零。…再度、結界、展開。有効、範囲。先程ノ、結界ノ、半分」

よくわからん。が、アリサはどうなんだ？

「アリサ嬢。結界外。サレド、結界付近。危険性中」

よし、結界外なら一安心。でも、俺の存在という危険度はかなり上がってますけど。全裸だよ全裸。今なら確実に補導される。どんな弁解をしても連れて行かれるのは確実だろう。今の俺はまさに丸腰「理由：全裸」。…避来矢、お前余裕だな。「銃刀法違反？」全然余裕だった。

「認識、阻害、使用？」

なんで？もう結界内じゃないのに。

「今、主、全裸。外観、全裸。阻害中、外観、着衣中」

えーと、つまり俺は今裸だけど認識阻害を使えば服をつけているように見られる？

「肯定」

「よし、じゃあそれで」

「阻害、開始」

避来矢の声とともに俺の体に黒い袴が羽織られる。おお、なんと便利な。

「主、実際、着衣、デハ無。効果、阻害ノミ。防御、能力、皆無。了解？」

「了解だ避来矢。…と、一応念のため」

駄菓子屋の前にぶら下がっていた「氷」と書かれたのれんを腰に巻いて行こう。障害が切れたら再び全裸、は避けたいからな。ふんどしのように腰に巻くとその上から再度袴が装着された（認識障害で）。

駄菓子屋を出てから十秒もたたないうちに電柱に寄り掛かったアリサを発見。と同時にアリサが崩れ落ちるように倒れた。

「アリサ！」

急いでアリサに近寄って頬をぺちぺちと軽くたたく。

「アリサ嬢、状態、確認。…異常無。気絶中」

「う…」

アリサは苦しそうに顔をゆがませるが、避来矢の言葉を信じてあたりを見渡した。

「本当だな、避来矢。それじゃあ…」

アリサには悪いが電柱に寄り掛かるようにアリサを座らせ、あたりを見渡す。そこで信じられないものを見た。

「な、ゴリラでも暴れたのか！」

「主、リオストーン、反応。負傷者、付近、発生。結界、反応、極めて縮小。サレド濃厚。生体、反応、二」

血まみれになった男女。中には両腕がぐちゃぐちゃになった人間



もいる。：サカサじゃないと治せない重度の怪我人もいた。みんな  
 気絶しているうえ致命傷になっているやつもいる。

春の時期に海岸、夕暮れ時であつてか、こんな惨状にもかかわらずまだ誰も気づいていなかった。

避来矢、忘れないように覚えていて。これが終わったら速攻でサカサに連絡をつける。あと、リオストーン回収急ぐぞ。

「了解。認識レベル。効果、最大。干渉、開始」

砂浜に降りて怪我人のほうへ走りながら避来矢に指示を出す。俺からの指示に従って避来矢が答えると、黒い袴が消え、避来矢が小刻みに震える。すると目の前に灰色のドームが見えた。直径は十メートルといったぐらいの小さなドーム。中には赤い大きな蟹？と一人の男。その巨大すぎる腕を今まさに振り下ろそうとしていた。

「主、蟹、首元、リオストーン。速攻、奪取、推薦！」

あの蟹がこの人たちをこのようにしたのなら急いでこれをぶんどらないと。避来矢の案に俺は賛成した。

「了解だ避来矢。突っ込むぞ！」

「了解！結界、干涉、突入」

走った勢いそのままに結界へ、そして蟹に向かって避来矢を振り下す。結界はもう俺には意味のないものだった。

「認識、阻害、成功。主つ」

「いよっしゃっ！避来矢、リオストーンをぶんどれえええええええええ

えええっ!!」

ガキッ。

避来矢で蟹をリオストーンごとぶん殴ると蟹は数歩下がって驚いた顔を取った。て、顔あつたんだ蟹。

「な、クソガキッ、どこから湧いて出てきやがった!？」

しかも喋った。よく見ると人間の腕が異常なまでに膨れ上がっていて、手が大きく、全身が赤い奇妙奇天烈な格好だった。

「はっ」

っっ。

相手が驚いている隙に相手の横に移動してもう一撃。今度は相手の膝の後ろを避来矢で殴るように振りぬく。

「があっ」

「せいっ」

ばしんっ。

バランスを崩したところで振りぬいた避来矢を持ち替えて、顔の部分を殴りつける。これで相手を倒す予定だったんだけど。避来矢が蟹の大きな手につかまる。

「なんだおまえはあああああああ!」

「え？ぬあああ」

ぶおんっ。

蟹の方向と共に避来矢ごと持ち上げられる。一応、俺、体重三十キロはあるんですけど。

「おおおっ」

どすんっ。

「がふっ」

凄い加速感と共に避来矢ごと仰向けに砂浜に叩き付けられる。下が砂浜とはいえこれは…。

「潰れる！」

ゴガンッ。

巨大すぎる腕と拳が目の前に迫ってくる。避来矢を盾にその拳を受け止めるがあまりにも衝撃が強すぎて、拳の勢いそのままに赤黒い腕と共に砂浜に埋まる。

「もう一撃っ」

やばいつ、これ以上はあまりにもきつすぎる。

ずれっ。

「ぐお」

「脱出っ、ごほ、がは。ゝああ、かはっ、きついつての」

砂を足でけり上げ、相手の顔にぶつける。そうやって相手が怯んだうちに逃げ出すことに成功したのはいいがあまりにもダメージが大きすぎる。何度咳き込んでも息が整わない。俺の隣で蟹に殴られかけた男は気絶している。そちらに注意がいかないようにできるだけ自分に注意を引く。なんてことはせず、無視して戦うのが一番だ。自分より各上かもしれない相手にそんなことをするのは無理だから蟹はまるで興奮剤を投与したゴリラと殴り合いをしているみたいだ。やったことあるのか？あるよ、実家で。ナイフ一本で。なんでもそのゴリラ何人もののハンターを殴り殺したらしい。勝てた？いや、逃げてばっかでしたよ。実家が竹林に囲まれた道場で完全監視のもと無理矢理戦わされた。最終的に両者疲労困憊による気絶という結果で幕を閉じた。

「主？報告？」

気にするな、避来矢。向こうの人に伝えただけだ。

「てめえ、なんだ。…なんだその恰好は？」

「あー、気にしないでください」

さすがに薄い布でできたふんどしは無いか。思いつきり変態だもんな。

ぴきっ、パキイイイイイン！

ガラスにひびが入るような音と共に灰色の結界が飴細工のように  
砕け散った。

「主、リオストーン、回収。番号、十二。結界、崩壊、確認」

「な、僕の世界が！」

「今」

避来矢の報告と同時に砕け散った結界を見て驚く蟹。その呆けた  
口に避来矢を叩き付ける。ただし…。

「避来矢、縮小！」

「了解。二寸サイズ、縮小」

なのは達といた時と同じサイズに避来矢を小さくして右手の中に  
収める。そして、相手に飛び移り、そのまま右手を相手の口に突っ  
込んだ。

「がつ」

俺の手が口に入った時にようやく蟹も俺に気が付いた。でも遅い。

「元に戻れ！」

「了解！」

ドガアアアアアン！

大きな鐘を突いたかのような轟音を響かせながら、蟹の口から避来矢が突き出る。どうやら固くなった筋肉は見た目通り金属のように固く貫くことは出来なかった。もしスローモーションで今の映像が放映されたとしたら蟹の口から避来矢をツルギが引き抜くといった人間ポンプならぬ蟹ポンプといった映像だろう。

「ご、ごばあああああ！」

避来矢が突き出た勢いを生かして蟹から距離を取る。それから一瞬遅れて蟹の口から大量の血が吐き出された。貫くことは出来なくてもかなりのダメージはあった。これで封印を。

「やったか!？」

「主、マダデス！」

蟹から距離を取り避来矢を構えていると蟹は海の方角に走って行った。

「がああああああ！」

海にざぶざぶとすごい勢いで潜っていく。で、このままじゃ逃げられる。

「逃がすか！」

「主！追撃、危険！撤退、推薦！」

蟹の後を追おうとした俺を避来矢が引き止める。その意見に反論しようとしたら。

「がああああああ」

「げっ」

ぶおん、ごがあっ。

蟹が海の中にあつた岩を俺に向かって投げつけた。思わずそれを避来矢で受け止めて難を逃れるがその隙に蟹は海の中へと消えて行ってしまった。

「…逃げられた。か」

「主。海中、戦闘、不利。無理、禁物。バリアジャケット、完成、以降、水中、戦闘。了解？」

助かったからか逃げられたからかは自分自身でもわからない。だけど、何とも言えない感覚にため息をついた俺に避来矢は注意してくる。

「…うん、そうだな。ごめん」

「主、認識、阻害、使用」

避来矢が認識阻害の機能で黒い袴を再び装着している映像を体にかける。

「すまん。今度から気を付ける」

「…サカサ、連絡」

「…そうだな」

本当にできた相棒だ。こいつに見合うようにもう少し自分自身を鍛えないとな。というか、俺にはそれしかできないから…。反復を繰り返して体に染み込ませる。それだけだ。

避来矢はその姿を認識阻害で消して、俺は近くを通りかかった車を呼び止め、救急車の手配。そして、携帯電話を借りて（結果侵入の際おいてきたため）サカサへの非常用のメールを送った。サカサが来てくれればこの人たちも何とか日常生活に戻るだろう。

俺はアリサの所に戻り、彼女を背負ってなのは達のいる動物病院へと向かった。無論、脱いだ服を回収し、着替えてからなのは達と合流した。途中でアリサが起きなかったのは不幸中の幸いだった。

あと、備考として

アリサはあの時の惨状をショックで忘れたいらしい。まあ、思い出すだけ気持ちの悪いことだし、だれも信用しないだろう。ただ、この日以来、アリサはボディービルダーが嫌いになったそう。

???視点

ツルギがなのは達と合流した同時刻。とあるビルの屋上に月の色と同じ髪をした少女と赤い狼がいた。



「……ここにお母さんが求めているものが……」

少女は一見、死神めいた衣装に白いマント。そして、死神の鎌のような機械を片手に一枚の写真を見つめていた。

「……フェイト、早速だけど反応があつたよ。どうやら海の方みたいだ。かなり弱まっているけど、無理は駄目だよ」

赤い狼は少女に寄り添うように話しかける。それは今から行う作業よりもここまで来た時の疲労を考えて少女に寄り添っていた。

フェイト「うん、ありがと。アルフ。行こうかバルディッシュ」

「イエッサー」

日が沈み、紺色に染まった空を取りのようにつくり飛び立ちながら、私はバルディッシュに指示を出す。アルフもこの世界に来たばかりの私を気遣ってくれている。だけど、私は一刻も早くこの青い石、ジュエルシードを手に入れなければならない。

アルフ「フェイトは封印だけでいいよ。こんなに弱っているなら私だけでも……」

「大丈夫。無茶はしない」

嘘だ。

管理局が動き出す前に何が何でもジュエルシード三十七個を全部集めなければならない。これだけ大量にばらまかれている上、今のうちにこの世界に来てから探索できるのなら早い方がいい。

「せめて、私に運ばせておくれよ。封印でミス。とかはごめんだからね」

「…うん、じゃあちょつとだけお願いアルフ。バルディッシュも休んでいて」

「スタンバイモード」

私はアルフの赤い背中に抱きつくように身を任せる。バルディッシュも小さくしてポケットにしまっておいた。これでこの子も私も少しだけ休んでいられる。

アルフが私を落とさないように優しく運んで十分足らずで反応のあった地点へと訪れると、そこには一人の男性が海から上がってきた様子がうかがえた。ひどくくたびれた格好に不信任を覚えながらアルフは結界を張る。

「管理局に感づかれないように隠密性の高い結界でいいかな？」

「うん、いいと思う。まだここに來たばかりだし、それにあの人もかなり弱っている」

アルフが結界を張ると男の人が急に笑い出した。

「気づかれた？」

私はバルディッシュを手に取りセットアップに取り掛かる。

「いや、それじゃないと思うよフェイト。だって、私たちは空にいるのにあいつはこっちを全然見ていない」

男の人はなにやら「ははは、まだ残っている。まだ使えるじゃないかっ」と笑いながら丘の上が上がっていく。そしてそのまま街中へ移動しようとしていた。

「とりあえず交渉は無理そうだね」

「うん。残念だけどあの人、ジュエルシードを取り込んだじゃっているから、大人しく封印されるのを待ってもらうか、ある程度のダメージを与えないと封印できない」

それにあの人の目。あの人の目は私の…。

「じゃあ、フェイトは少し待っていておくれ。私が一応掛け合ってみるから」

「バリアジャケットセットアップ」

「…フェイト」

私がバリアジャケットを着こんだことに悲しそうな眼をしてみるアルフ。

「大丈夫、アルフを信じてないわけじゃないよ。でも、もしものために援護くらいなら…いいよね？」

「…すぐ終わらせるからねっ」

「うん」

アルフは私の言葉に応じて、再び闘争本能むき出しの目になり、

男の人の前に降りたっていった。

### 蟹男（仮）視点

くそつ、くそくそくそくそくそくそくそ！

あのクソガキ、いきなり殴りつけてきた拳句にあんなふざけた攻撃をしゃがって、絶対にぶっ潰してやる。僕の大事な世界を作る石をかつぱらっただけでも飽き足らず、があああああああああつ、潰す、潰す潰す潰す潰すうううううううう！

あの変態クソガキをこの手で殴りつぶすまでこの怒りは収まらない。不意について必ず後悔させてやる。足を腕を、顔をぐちゃくちやになああつ。

苛立ち任せに砂浜を蹴飛ばすといふ最近聞いた音がこだました。

キンツ。

ガラスを弾く音と共に一瞬にして、町からこぼれる光が弱弱しい微弱なものへと変化する。人の喧騒も車の音も聞こえなくなった。

これは、僕の世界？

ははは、さすが僕じゃないか。選ばれた人間は違うということか。そうだろう、そうだろうな、あの石を二つも見つけた僕は神に選ばれたんだ。

「まだ、残っている。残っているじゃないか。このまま、あのクソガキを」

「悪いね、兄さん。ちよつといいかい。あんたが持っている石、大人しく渡してもらえるかい」

目の前にいきなり変な女が下りてきた。オレンジの髪に犬耳としっぽをつけたコスプレじみたバカそうな女だがスタイルだけはいい。

「はっ、何言つてんだ。あれは僕のだ。犬の姉さん。あれは僕のもので渡すつもりはないん」「そうかい」がはっ」

血の混じった唾を吐きながら犬女に苛立ちの目を向けた瞬間にはもうそいつは僕のみぞおちに拳をたたきこんでいた。

「じゃあ、奪うまでだ。恨んでくれても構わないよ。どうせ、すぐ忘れるだろうさ」

この女も、あのクソガキも、どこまで、どこまで僕をなめるつもりだ。

「ふざけんなあ ああああああ あああ ああつー！」

僕の中の石が強く輝くのが感じられる。ああ、どういつもこいつも不意打ちでいい気に乗るんじゃないやねええええええええええ！

「……ち、まだ変化できるのかい！」

犬女は身をひねってその場から逃げ出そうとしたがそうはいかない。

「にがすかあ ああああああつ」

「なっ、なんて力だ。くう」

石が強く光ることを体で感じながら犬女の腕を掴む。先程のダメージで腕の巨大化までとはいかなくても身体の強化はまだできる。強化した左腕で犬女の腕を掴む。

そう、僕が今まで欲しがっていた。頑強な体。僕が最初に石を拾った時、ちょうど会社の屑どもといさかいを起こしてむしゃくしゃしていた。あいつらをぐちゃぐちゃに潰せるほどの体が欲しい。しかし、あいつらは多少体を鍛えていて今の自分では敵わない。今から体を鍛える。なんてことはせずにあいつらの不幸だけを祈っていた。しかし、それをかなえたこの石。体の中にすでに入り込んで渡すことは不可能だが、渡す気など微塵にもない。やっと手に入れたこの体。それを奪おうなど命を取られた方がましだ。

「潰れるバカ女！」

「があっ」

ゴキッ。

今持てる全力の力で女の手首を握りつぶす。骨が碎けた音だろうか。いい気味だ。だが、右拳を固く握りしめ今度は顔面をつぶす。

「これで終わりだとおも「サンダーブレード！」があ」

ズドンッ！

な、ま、また。不意打ち。今度は幼女の声。

「な、フェイトッ！」

しかも、今度は犬女の頭上からまるで雷が落ちてきたかと思うほどの光が襲いかかってきて僕を白い光へと誘う。この光の衝撃で体が痺れる。

犬女は僕がしびれている間にバックステップで距離を置いたこの光景は、マズイ。早く逃げなくてはまた…。

「バルディツシュ！サンダーブレードフルパワーッ！！」

そう思った時にはもう遅かった。犬女と僕の間金髪の少女が空から舞い降りて死神の鎌を突きつけて叫んだ。

「イエッサー、サンダーブレードフルパワー！」

ズガガガガガアアアアンツ！！！！

鎌が少女に答えるかのように僕の目の前を金色の光で飲み込んでいった。

アルフ視点

「…ジュエルシード、ナンバー？。封印」

フェイトがジュエルシードを封印したと同時にフェイトが倒れた。やっぱり無理していたんだ。

「フェイト！」

「…ごめん、アルフ。でもアルフが危ないと思ったらしい」

「ついじゃないっ、魔力も回復していないのにあんな真似するなんて！」

男に外された手首の骨を無理矢理つなぎながら私はフェイトの元に走った。心配させないように笑っているその顔には明らかに魔力負荷による疲労がみてとれた。

「うん、ごめん」

「私は謝ってほしいんじゃないっ、フェイトお願いだから…フェイト？」

「…スース」

フェイトは…眠ってしまったようだ。

ごめんよ、フェイト。私がしっかりしていればこんなことには…。使い魔でありながら主を助けきれない自分に悔しさを感じながら私はフェイトを背負った。すぐにフェイトが休める場所へ移動しよう。そんなことを考えていると。

「…あー、深刻そうなところ悪いんだけどさ」

目の前に見たこともない男の子が巨大な剣を持って私たちの前に立っていた。しかもその位置は私の張った結界のギリギリ外の部分だった。まるで待っていたかのように。…まさかっ、もう管理局が！



「わー、待って待って怪しい奴だけど。信用できないかもしれないけれど。話を聞いてっ」

フェイトを背負っている以上蹴り飛ばして気絶させるのが一番だろうけど管理局の人間相手にうまく立ち回れるかどうかっ。

「わかった。武器を捨てます。なんなら上着も脱ぎますから話を聞いてっ」

巨大な剣を私たちのほうに投げると、男の子は両手を上にあげて抵抗の意思がないことを示すがまだ信用できない。

「……………」

怪しいそぶりだが敵意は感じないし、管理局にこんな子供がいるとも聞いていない。だからといって油断するわけには…。

「…し、下も脱ぎます…から…」

「いや、そこまでしなくてもいいよ」

なんだか馬鹿らしくなった。

「…あんだ、何の用だい？」

警戒を緩めそうになったがこいつを信じるにはまだ情報が足りないすぎる。

「えーとな、簡単に言うぞ。その子病気かなんかだろ？こんなと

ところでウロウロするより、うちに来ないか？と誘いに「何だって！  
、わあっ、お姉さん。顔が近い、近いです！」

今、病気とか言わなかったか。そんなもしフェイトが…。

「おいつ、あんたの家はどこだ！」

私は襟首を掴んでこいつの目を見る。嘘は言っていないがすごく動揺している。かといって何か陥れようとしているわけでもなさそうだ。

「む、むここのあたりを二キロほど行ったところですよ」

「よしっ、すぐ行くぞ。案内しな！」

まあ、少しでも怪しいところを見せたらガブリといかせてもらうけどな。

「はっ、はい」

どもりながらも返事をする、こいつは剣を拾って私たちの前を突っ走って行った。あの小さな体でフェイト並みに走れることに驚きながらその後を追う。

あんな大きな剣を持って、結界のことを知っていて、おそらく結界の中で起こったことも知っているはずなのに。怪しい奴なのに。

「…あんた、なんで私らを助けようと思った？」

ふと、自分でもどうしてそれに答えたかはわからない。その意味が知りたくて声をかけた。

「…その子と同じ理由かな？」

あたしの背中で寝ているフェイトを見て答えた。

「同じ？」

やっぱり結界で起こったことを知っている。それでもこいつは敵じゃない。少なくとも敵にはならない。直感だがそう思った。そして、理由を聞いてそれは正しいことだと確信した。

「なんとなく、助けたくなった。助けられそうだから助けた。…じゃ駄目ですか？」

困り顔で頬を書きながら答えるその顔に嘘くさは微塵にも感じなかった。だから、

「あんた、名前は？」

「俺？俺はツルギ。月野ツルギです」

これが私とフェイトが初めて仲間だと思える人間との出会いだった。



フェイト「そんな。はい、いいえ。ただだなんてかわいそうすぎるよ」

アルフ「作者（の脳）が、バルディツシュが？」

たかB「リヨウホウ、イエス」

ツルギ「言っちゃった!？」

避来矢「今回、質問。……後付？」

たかB「ナンノコトヤラ？」

フェイト「その、あとがきという名の言い訳というか……」

アルフ「まあ、ちやちやっというこつか」

ツルギ「おう。じゃあ、質問いきます。認識障害で結界突入は無理があつたんじゃないのか？」

たかB「あい、説明します。結界とはいっても所詮は魔力の塊でできた壁だからね。避来矢ならどうとでも侵入できます。以上」

フェイト「も、もう少し詳しく」

たかB「了解。さっきも言ったが結界は魔力でできている。ここまではいい？」

アルフ「まあ、それはそうだね」

ツルギ「それはわかるけど、普通、困いや策なんか超えるときはどうしてもその道を遮っているものに必ず触れるだろう」

避来矢「同意。追加、想定。有刺鉄線、赤外線。反応、必至。結界、相違点有？」

フェイト「そうだね。物理的センサーと魔力でできた相違点で、何かあるの？」

たかB「んじゃ、相違点について話すけど。簡単に言うと最終的判断は人が判断している。物理的センサーは機械やそれそのものが外敵もしくは侵入してきたものに対して迎撃対応する。しかし、結界は人が操っているからね。つまり、結界を通す。人が感知する。その人が結界から追い出す。という手順」

ツルギ・アルフ「だから？」

フェイト「…なるほど」

たかB「フェイトはわかったみたいだけど。さらに簡単に言うとスイカお断りの人に、この写真はメロンです。と渡されたものだが、実はうまくペイントされたスイカだった。ということ。受け取った側にしてはそれは受け取った時点でメロンであってスイカではないと、考えてしまうし、確かめる手段は写真に写った実物触って確かめるしかない。つまり、受け取る側の人（結界）はメロンにペイント（認識阻害）されたスイカ（ツルギ）を招き入れたということ」

避来矢「騙ス。…認識、阻害？」

アルフ「なんか、無茶苦茶な気が…」

ツルギ「まてい、じゃあ俺は？全裸になった意味あるの？」

たかB「ほぼないよ」

ツルギ「ないの」

フェイト「でも、私たちは侵入するのに苦労するよ」

避来矢「我、フェイト嬢、アルフ嬢。相違点、有？」

たかB「避来矢はチート仕様です。内容は秘密です。でも今のところ機能は一つずつしか使えません。使わせませんっ」

アルフ「また、ぶっちゃけたね」

ツルギ「あのさ、二回目の結界突入の時なんだけど、どうして俺は奇襲が成功できたの？たしか追い出されるはずじゃ」

たかB「結界に突入。感知。追い出す。という手順で追い出される。ツルギが攻撃を加えた時、は感知の段階。追い出す前に避来矢が回収。結界が崩壊。というわけ」

フェイト「あ、あの最後に質問。…いいですか？」

たかB「どうぞ」

フェイト「このあとがきに來れる人の選別って？」

たかB「十文字以上喋った人が入ってこれます。あと、新ニユー  
カマーキャラを優先に四名ほど。今回、ミネルヴァとアリサがいな  
いのはそのため」

ツルギ「次回予告」

たかB「未定!!」

作者を除く全員「」「」「こらああああああつ!!」「」「」



第四話 天然少女とヘタレ少年。(前書き)

これからしばらくはコメディーに入りますよ。

#### 第四話 天然少女とヘタレ少年。

「破傷風による高熱だと思う。あと貧血。煮干しや海藻は食べれるか？」

「あ、はい大丈夫です」

私、フェイトは使い魔のアルフ（犬モード）と共に目の前の男の子の部屋で看病してもらっていた。アルフ曰く「問題なさそうだから」とのこと。あの警戒心の高いアルフをどうやって納得させたのかはわからないけど、私はされるがまま彼の出てきたおかゆを食べている。私も何となくだがこの人を信じてもいいと思っているのかもしれない。

バルディッシュ・避来矢「……………」

「ツルギ、このカニ缶食べてもいいかい？」

「えーと、アルフさんは蟹食べても大丈夫なんですか？」

「なんでそんなこと聞くのさ？」

「いや、だってさっきまでドックフードをモリモリ食べていたから。犬や猫はカニやエビを食うと中毒になるとか……」

「あたしは使い魔だって。そりゃ、さっきは脅しのつもりでそんな格好もしたけどさ」

「ああ、またしても。…どうして俺が好きになる人はみんなこう

なんだ（ボソツ）」

「メンテナンス。コンプリート。システム、オールグリーン。サンキュー、ヒライシ」

「修理、完了。バルディッシュ、情報、提供。可能？」

「何やってんだい、バルディッシュ。まだ、こいつらを信用していいわけじゃ」

「あ、アルフさん。リンゴありましたけど食べますか？」

「食べる」

アルフ、もしかしてご飯で釣られた？

バルディッシュも大きな黒い剣の上で青白い光に包まれていた。どうやらあの光はメンテナンスと修理を兼ね備えているようだ。

「まあ、おかゆを食ったらこの薬を飲んで、コーセーブッシツ？だったかな。こいつには俺も散々お世話になっているから多分効くと思う。ただ、眠くなるからおかゆを食べながらでいいから話せるだけ話してもらえるか？」

「あ、はい」

ツルギと呼ばれる男の子から水の入ったコップと小さなカプセルを受け取る。彼に敵意はもちろん裏があるようには見えない。何より、こんな不思議な空間にいられることがとても嬉しかった。どれくらいぶりだろう。こんなに優しい空間は。

「んじゃ、俺から。アルフさんには話したとは思っけど名前はツルギ。…ああ、構わずおかゆを食ってってくれ。俺は従兄弟からリオストーン。君等のいうジュエルシードをあゝの避来矢に封印・浄化をするのが目的でこの町に来ている。で、ジュエルシード反応があったから、封印をしようと思って海の方に再度来てみれば君らがいて、代わりに封印していた。その光景を見ていたらいきなり君が倒れて、見た感じだと俺でも手当が出来そうだからここに運んだ。オーケー？」

「ムグムグ。…はい、オーケーです」

「私はその間にツルギからジュエルシードを一個ぶんどったよ」

「へー、て、アルフ！」

「わわ、落ち着いてくれよフェイト、もちろん同意の上でだよ」

「そうだぞ。えーとフェイトさんでいいか？一応信じてもらうために俺もそれなりの誠意は見せるさ。ここに来る途中でアルフさんに一個ジュエルシード（浄化済み）を渡したぞ」

「フェイトでいいです。それよりツルギはどうして助けてくれたの？」

「助けられそうだから」

「それだけ？」

「それだけ。ところでフェイトは何のためにリオストーンじゃなくてジュエルシードを集めている？」

「……すみません。あなたのことを疑うわけではないのですけど」

「…わかった。話してくれたらもう一個ジュエルシード。さらに納得のいく理由だったらもう一個あげる」

その言葉に私は耳を疑う。彼はまだジュエルシードを少なくとも二つは持っていること。そして、その二つを私に譲る気でもあるということに。

「いいんじゃないかい？フェイト、私はツルギが管理局とは無関係だと思っしさ」

「…アルフ」

「それに私たちがこのままジュエルシードを集めていたら大変なことになっていたかもよ。ねえ、バルディッシュ」

「え？」

「プットアウト」

バルディッシュからジュエルシードが二つ出てきた。一つは写真通り青い石。そしてもう一つは白い石だった。

「なに、これ？」

私は二つのジュエルシードを手にとってみる。青い方は未だに力が中で渦巻くように動いているのが分かるのに対して、白のジュエルシードはとても穏やかな気配を感じさせていた。

「フェイト嬢。御粥、食事、優先。主。説明、及び、情報、提供？」

「そうだな。避来矢。説明を頼む」

それからツルギと避来矢はいろいろと話した。

私とバルディッシュが行っていたジュエルシード回収。あれではまたジュエルシードが暴走することがあること。避来矢の浄化機能でようやく機能を完全停止することが出来たということ。避来矢曰くあの状態はエンジンがかかったままの車と同じでいつバッテリーが上がってもおかしくない上にちよつとしたことで急発進することがある。可能性としては少ないけれどもゼロではない。浄化して白のスタンバイ状態にまで持っていけない限り完全には安全といえない。現に手に持っているとなるとわかる。青より白のほうがとても安心できた。

「…というわけだ。もう、俺が説明することはないと思うんだが」

「…本当に管理局の人ではないんですね？」

「少なくとも入った覚えはない。よな、避来矢？」

「同意」

「…わかりました。お話します」

「んじゃ、避来矢。もう一個」

「了解」

「あんた、どこでこんなに手に入れたんだい？」

「郵送されていたんだ」

「…バカにしている？」

「アルフ嬢、事実。我、主、以外、追加、一組、封印、可能」

「えーと、避来矢の話す言葉は難しいね」

「すみません。一応説明したと思うけど今、外国を飛び回っている従兄弟が送ってきたんです。サカサとミネルヴァというんですけど。あっちも管理局ではないと思います」

「どうして？」

「あいつは人に使われるのが心底嫌いなんだ。使おうものなら」

「なら？」

「この世に生まれてきたことを後悔させられるね（断言）」

「…どんな奴なんだい」

「弁護士、医者、考古学者、調理師、世捨て人、尋問官」

「それから獄卒鬼で遊び人で女好きでイケメンで、重火器やハツキングが得意で文武両道なやつかな」

「本当にどんな人なんですか？」

「それは俺も知りたい。ただ、敵に回したら一番後悔する人間だろう。…フェイトも気をつけるよ」

「う、うん」

あまりの真剣な顔に私は思わず頷いた。…サカサさん。怖い人なのかな？

避来矢からもう一つのジュエルシードを受け取りバルディッシュに渡す。そして、ふと思った。暴走の恐れがあるのなら今のうちに避来矢に頼むべきなのではないかと。

「あの…このジュエルシードも浄化してもらえますか？」

私は青いジュエルシードをツルギに渡す。その行動にツルギは首をひねって尋ねた。

「…？構わないけどいいのか。そのまま持ち逃げするかもよ？」

「構いません。ツルギは返してくれますから」

何か苦い顔をしながらツルギは頬を掻いていた。どうしたんだろう？

「まあ、逃げても無駄だし。あたしから逃げられない。それは自覚してんだろう？そ・れ・に、あんたの匂いはばっちり覚えたからね」

「ま、まあね」



「それにあたしもあんたを信じているからね」

「…うつ」

ツルギはプレッシャーを感じているのか、お腹のあたりを手で押さえながらうつむいてしまった。まるで顔を合わせることを怖がっているかのように。

「だ、大丈夫だよ。べ、別に怖いことをしようなんて思っていないから」

「…主」

避来矢も自分のご主人様を心配して声をかけてきている。

「そ、それじゃあ、私がジュエルシードを集めている理由はね。お母さんのためなんだ」

「お、お母さんですか？」

「うん」

それから私はいろいろと話した。ジュエルシードのことをしつて襲撃したこと、それがどうしても必要であること。そして、いつの間にか私はお母さんが普段私に対してどんなことをしているのかを話していた。

「私はお母さんに笑ってほしいんだ」

「す、すまん」

「いいよ、気にしないで」

「…主」

ツルギは涙を眼に浮かべていた。私の身の上について話して同情したのかな？

「…でも」

私は一度言葉を切って、ツルギにできるだけ優しい笑顔に向けた。

「ありがとう。こんな私のために泣いてくれて」

するとツルギは全身をプルプルと震わせながら大粒の涙をこぼしながら私の顔を見る。そして、

「す」

「す？」

「すみませんでしたあああああああああつ！！」

何故か土下座を行った。

ツルギ視点

フェイトからジュエルシード（浄化前）を受け取って俺は焦っていた。何故なら、こっそり避来矢に頼んでできるだけ友好的な雰囲気認識阻害で作り出すようにお願いしたからだ。現にアルフさんの懐柔に成功。そして、その主人であるフェイトを懐柔しようとしていた。しかし、これって、詐欺……だよな。

そんなことを考えている最中にフェイトからの信頼しきった行動に良心を痛めていた。

「構いません。ツルギは返してくれますから」

フェイトの攻撃。どかつ、「ぎゃあ」、良心に二十二のダメージ。残りライフ148/170

なんだ？今の不可思議なモノログは？と良心を痛めている俺にさらなる攻撃。

「それにあたしもあんたを信じているからね」

アルフは追撃した。がすつ、「ぐう」、十八のダメージ。

「だ、大丈夫だよ。べ、別に怖いことをしようなんて思っていないから」

フェイトは擁護した。どごん、「おっふう。お、俺は君をだましているのに、な、なんて優しいんだ」、効果は抜群だ、四十三のダメージ。

「……主」（序盤、同情、作戦、水泡）

わかつていゝさ、避来矢。そうだともこの子は俺たちの敵になりうるかもしれないのに、こゝこんなことで負けてたまるか。

「私はお母さんに笑ってほしいんだ」

フェイトは身の上を聞かせた。グウツサツアアア。「ぐうううううおおおおおおあああああつ！」痛恨の一撃、六十八のダメージ。

「…主」（挽回、心、変貌、鬼）

わかつていゝ。わかつていゝんだ避来矢！心を鬼にしないとこのままじゃやられる。わかつていゝんだ。こゝこれで会話は終われば、

「ありがとう。こんな私のために泣いてくれて」

フェイトは極上の微笑みを放った。ペツカアアアアアア。「…ひ、光が見えるよ」急所に命中、九百九十九のダメージ。良心は死んだ。そして、

「すみませんでしたあああああああああああつ！！」

俺はフェイトに屈服した。

翌朝。

「…い、行ってきます」

「おう、行って来い。帰ったらO・S・I・O・K・I再開な」

「…はい」

アルフ（呼び捨てでいいと言われたので）に見送られながら本日初の登校日。転校してアリサ達の通う学校へと向かう。

あの後、俺は全部ぶっちゃけた。アルフに殴られた。フェイトにはバルディッシュで感電させられた。避来矢には呆れられた。ごめんよ、こんな主人で。でも、友好的に話せる場を作れたかったこと、ジエルシードのこと、管理局とは関係ないことは本当のことだと信じてもらうまで必死に説得（自己弁護ともいう）を行い、フェイト達に全面協力の元、ついさっきようやく解放された。

フェイトは暴れて疲れたのか今は布団でお休み中。アルフは看病。俺はシャワーだけを浴びて登校。一応、避来矢は小さくして鞆のアクセサリーにしている。これでいつでもバルディッシュ通じて会話することが出来る。携帯いらずだ。

「うう、何がなんでこうなった？」

青空に浮かぶ太陽をみて俺は涙した。

余談ではあるが、なのはがフェレットから受け取った宝石でツルギを追いかけていた野犬のうちの一匹を昨晚仕留めたそうだが、フェイトとアルフはツルギをボコっていたので気づかなかったそうです。

#### 第四話 天然少女とヘタレ少年。（後書き）

あとが「バスタアアアアアアアッ！なのー！」なのー、なのー、なのー。（反響している）

たかB・ツルギ「ぎゃああああああああっ！」

ちゅどおおおおおおおおん！

今回のあとがきは雑に扱われたのはさんによる砲撃により作者が致命傷を負ったためお休みさせていただきます。

避来矢「次回、予告」

アルフ「避来矢、あんたの主人も一緒に吹き飛んだんだけど」

避来矢「次回、予告」

フェイト「しかも、非殺傷じゃないんだし。少しは心配したほうが」

避来矢「次回、予告」

アルフ「ああ、もう諦めているんだね」

フェイト「じゃ、じゃあ、次回、転校初日・午前。テイクオフ。でいいのかな、避来矢？」

第五話 転校初日・午前。（前書き）

たかB「投稿してからずっと編集。という、ことが続く。何かおかしいなと思ったたら教えてください。できる限り早く治しますので」  
お願いします。

## 第五話 転校初日・午前。

事件は現場で起きている。じゃあ、じゃあ裁判はというと。  
私立聖祥付属小学校三年A組。時間にして午後五時。ここで起きている。

「判決死刑。で、何か言い残すことは」

裁判官 アリサ・バニングス

被告 月野ツルギ

被害者 月村すずか

第一発見者 高町なのは

「滑って転んで月村の衣服を縦に破きました。でも、事故なんです。無実です。上訴します」

「却下します。そんなことが通ると思ってんの！」

カツ。

暗い教室の中で机を一つはさんで白熱電球の光をツルギの顔に付  
きつけるアリサ。アリサさん。それでは裁判官というよりも尋問か  
「ああっ」何でもないです。

「なのはの話じゃねえ。こうなっているのよ！」

高町なのはは語る。（目元に黒い線が入っている）

私、見たの。遠くからだったからわからないけど、あれは確か



にツルギ君だったの。すずかちゃんと何か話していると、すずかちゃんかツルギ君の鞆から何かとったかのようなしぐさを見た、次の瞬間 -

なのはは震えながら言葉を紡ぎだした。

ツルギ君がすずかちゃんを廊下の角の向こうに押しやった瞬間に、何かを引き裂くような音がして、私がそこに見に行ったときには

「多くの、え、え、エッチな本の上に服を破かれたすずか、の上に、息を荒くしたアンタがいたっていうじゃない？」

「事実です。が、事情があるのです」

「どんな事情よ！」

「どうしても知られたくない物を月村さんが触れようとした。否、触れたのでそれを取り返そうとしたら滑って転んで以下略です」

「知られたくない物っていうのは……」

「俺にとって大事なものです」

「あのエッチな本のことかああああああ！」

白熱電球をツルギの頬に押し付けながらアリサはぐりぐりとツルギに問い詰める。

「あつ、熱いって、アリサ。もう刑を執行しているの?!」

「うるさいうるさいうるさああああいっ!」

パリン。

あまりにも強くやりすぎたせいか、白熱電球は割れてしまつがアリサは気にしていない。気づいていない。

「いたばばばばばば」

「ツルギのバカアアアアア!」

「…主。我、謝罪。生還、希望」(小声)

割れた電球を押し付けられて感電しているツルギと涙目のアリサ。そして、その二人を近くで静観している避来矢はツルギの生還だけを祈っていた。

「本日、休憩時、想定外、事象、勃発。主、被害者。サカサ、主犯。主、同様、すずか嬢、本日、災難」

避来矢は思い出す。事件の真相を。

今から三時間ほど前。

ツルギ視点

「…というわけでしたらくの間ここでお世話になります」

職員室で学校長及びこれからお世話になる四年B組の渋谷先生に頭を下げる。特技は料理。奥さんと二人の娘さん持ち。見た目は気のいいメガネのオッチャンである。

市長（サカサの情報操作。本当に何やったんだ？）が保護者代行を務めながら職員室に案内された。担任及びほかの先生方は極めて普通なのだが、その後ろで。

がたがたがたがたがたがたがたがたがたがたが。

零下十度の下を裸で歩いている人のように震えている校長と教頭、そして理事長の学園トップスリーがいた。三人とも結構な年齢を言った人たちなのに震えに震えまくっていた。ちなみに摂氏四十度でもあそこまで掻かないであろう汗（冷や汗？）を流していた。

「よろろよろりょろろろるおしおおうと」

「…は？」

「よろぴつ」

「ぴ？」

「よろしく頼みますっ！ですからっ」

…もしや。

「『家族（自分）には手を出さないでください！』」

サカサ、お前本気で何やってんのーっ！大の大人が土下座をして

まで俺をバックアップするほどの何を握っているの?! 逆に怖いよ。こんな脅迫がらみのバックアップ。しかもどういうわけか頂点かそれに準ずる人たちにのみ効果を及ぼすだけで他の先生方には及んでいない。あまりにもプライベートすぎて他人に相談できないほどの代物なのか、身内に被害が出るほどの。怖いすぎるっ、あいつの情報網!

「…じゃあ、行こうか?」

「し、渋谷君。そ、粗相のないように」

「そ、そうだぞ。体罰は許されるがそれ以外は出来るだけもみ消すように」

「彼を無事に卒業（もしくは転校）させたら特別給与を与えるかな」

体罰は許されるのか! 反抗するぞ。いざとなったら胸ポケットに入れている避来矢で…。

「…主」（音量最少バージョン）

冗談だ。避来矢。認識阻害を使ってから…。

「完全、犯罪?!」

……………冗談だ。

「…主?」

二割ほど。

「主、熟考、推薦。倫理、要、勉強」

仕方ないだろ。身内が身内だけに敵対する輩には容赦なく拳がふれるんだから。逆にふらないとなめられることだってあるんだ。……女の子や自分より弱い人（悪人を除く）は別ですよ。忍さんに言われたからね。避来矢とそんなやりとりをしながら俺は教室に入る。それから滞りなく挨拶を行い、転校生恒例の質問攻めにあう。

「得意なものは何ですか？」「持久走です」「好きな食べ物は何？」「いなむるち（沖縄の豚汁）」「好きなタイプは？」「綺麗なおねいさん」「……年上好き？」「どちらかといえば年上、でも髪がきれいな人も好きです」「どうして転校してきたの？」「平お、じゃなくて従兄弟の手伝いできました」「今までどこにいたの？」「……海外。でもエイゴデキマセン。あそこでは従兄弟が通訳しました」などなど。

そんなことをしていると、渋谷先生が段ボール箱二つを持ち込んできた。それぞれに男子用女子用と書いてあった。

「それじゃあ、これをみんなに配ってくれるかな？月野君」

「なんすかこれ？」

「君の保護者がみんなに配るようにと。たぶん、差し入れじゃないかな。本来はいけないんだけど特別にね。あと、手紙も預かっているから、ついでに渡しておくね」

周りのクラスメートがわつと騒がしくなるのを肌で感じながら、

先生から封筒を受けとり段ボール箱を片手で開けていく。封筒の中には三枚の封筒が入っていた。まず一枚目を読みながら女子用と書かれた段ボールの開封行う。

剣へ

お前は今、日本とはいえ俺の課した任務にあたっていることだろう。小学生に怪物と国家。どちらを担当させようかと思つたら、フアンタジー小説なら怪物だな。と、思いました。ので、引き続き怪物退治及び回収・浄化頑張ってくれ

いや、思いましたじゃねえよ。まだ、相手にしたのは野犬と蟹男と狼お姉さんと電気な鎌を持った女の子…十分フアンタジーだな。と、手紙の二枚目を見ながら段ボールの中身を取り出す。

「えーと、じゃあ。つまらない物ですが…でいいのかな？みんなに喜んでもらえると光栄です」

さて、そんなお前に小学校での思い出作りの手伝いをしてやるために面白いものを用意したからクラスのみんなに配るといい。きつといい思い出になると思う。まず、女子には

白のブラジャーとパンツ（少女用）

そして、時は動き出す。

時間にして0・3秒の間があつた。

俺はそれを目で確認した後、急いで段ボールに詰め戻し、その段

ボールを持って避来矢のナビの元、焼却炉のある裏庭へと向かう。そして、焼却炉に段ボールを丸ごとつっこみ火をつけた。

「まったく、あいつは何を考えているんだ」

そう言いながら焼却炉から戻ってくるとクラスの皆は苦笑いを浮かべていた。これは聞かない方がいい。満場一致で暗黙の了解だった。

「すみません。何かの手違いがあつたみたいで使えない物が入っていたみたいです。では、続いて男子には」

クラスの皆に謝りながら、男子用と書かれた段ボールを開ける。ちなみに手紙の続きはこう書かれていた。

男子には

ピンクのブラジャー。青と白の縞パンツ（少女用）

再び、時は動き出す。

時間にして0・1秒の間があつた。

俺は以下略。

「あいつは本気で何考えてんだあああああああああ！」

従兄弟の俺を破滅させたいのか。ちなみに手紙の封筒にはこう書

かれていた。

手紙一杯に、三文字が、でかでかと、こう、書かれていた。

## 馬鹿め

「ぶっ飛ばしてやる！今度会ったら絶対にぶっ飛ばしてやるうう  
うううううー！」

魂の咆哮を教室で上げ終わると、事情をくんでくれたクラスの皆から励まされた。俺の転校初日の朝は明けていった。

なのはサイド

「にゃっ」

「ひゃっ」

「なにっ。この声は…ツルギ？」

授業を受けていた私たちは聞き覚えのある叫び声に身をすくませた。隣では私同様に肩をすくませたすずかちゃんと首をひねっているアリサちゃんがいた。

「ツルギ君、もうこの学校に来たんだ。でも今の叫び声は一体？」

「うん、大声を上げるような子じゃない…よね、アリサちゃん」



「…うん、特殊な場合を除いてね」

私たちは小声で話し合う。幸い、先生や他の皆もツルギ君の雄叫びに驚いて気づいていない。

「特殊って、どんなことなの？」

「二つあるわ。一つは自分の身に何か危機的な状況に陥った時。例えば熊とか、ね」

「それは悲鳴なんじゃ…」

私もそう思うの。しかし、すずかちゃんの問いかけにアリサちゃんには首を振って言葉をつなげる。

「ううん。あの時は「熊鍋じゃあああああ！」で、叫びながらサカサと一緒にナイフ一本で狩りを行っていたわ。三日間、何も食べてなかったらしくて。…私、びっくりして猟銃を暴発させちゃった。」

「あー、あの時の話の真相はそれだったんだ」

「じゃあ、もう一つは？」

私たちはアリサちゃんの顔を窺っていると、アリサちゃんはぽつりと呟いた。

「いたずら。しかもたちの悪い悪戯よ。サカサには、私も一緒によくいじられていたからわかるわ。何かとんでもない悪戯に巻き込

まれているときに放つ咆哮ね。これは」

「サカサ？もしかしてあの月野逆さん？関係した会社は盛り上がるか倒産する。ううん、社会的にだけではなく、物理的にも崩壊するのが多くて、陰のある重役や役員が一族郎党行方不明になるあのサカサさん？」

だれなの？そのサカサさんとかいう人？怪獣？はっ、もしやジュエルシード！？ユーノ君っ、…は、さすがにないか。たった数日でそんな大それたこと…

「ええ、そうよ。彼曰く、物理的になら三時間もあればどんな会社も粉々にできる。とか言っていたわね」

（ユーノ君！ジュエルシード所持者かもしれないよ！大変だよ、怪獣だよ、怪獣に変身しているよっ！レイジングハートを急いで持ってきて）

（…え、なのは！ほ、本当、ジュエルシードをこの世界で扱える人間なんて信じられないよ！）

私は急いで昨日引き取ったフレット。ユーノ君に念話を行う。レイジングハートはユーノ君から受け取った小さな赤い宝石。これはデバイスで、簡単に言う魔法のステッキなの。

これは一大事なの。なにせ、会社どころか関係者にまで手を出す極悪非道の人なの。

「まあ、サカサとツルギのおかげで私たち親子は助かったんだけどね」

「あ、もしかしてあの誘拐事件。非公開で解決したのは」

「ええ、サカサがスナイパーライフルで援護射撃を行いながら、ツルギがスタン機能搭載（サカサ特製）の警棒で誘拐グループを叩きのめして、私を助けてくれたの」

（……ごめんユーノ君。なんだかよくわからない人らしいの？いい人かも？）

（え、もう来ちゃったよ。今、屋上なんだけど）

（ちょっと待ってて、もう少し詳しくなったら連絡するから）

「えーと、どういう人なの？」

私は混乱してきたので尋ねる？サカサさん。どんな人なの？

「えーと、確かマジシャンでミュージシャンで商社マンでスナイパーでイタコで霊感が強くて、あとなんだっけ？ハンター？」

本当に訳が分からないのー。その人、本当に一人？グループ名じゃないの？何人かで分担しなきゃそんなにできるはずがないのー。最後は疑問系だし。

「とにかく、味方にしても厄介だけど、絶対に敵に回してはいけない人ね。敵対しようものなら、物理的にも社会的にも消える。って、本人が言っていたけど冗談には聞こえなかったわ」

「……………」

すずかちゃん。無言にならないで。なんだかとっても真実味があつて怖くなるの。アリサちゃんの絶対の部分はかなり力が入っていたし。

「まあ、次の休み時間にもツルギを捕まえて話そうじゃない」

「そ、そうだね。ツルギ君、どのクラスなのかな？」

（とりあえず、ユーノ君。ツルギ君を探してくれないかな。次の休み時間でお話したいから）

（…っ！…う、うんわかったよ！なのは！必ず見つけておくよ！）

（ユーノ君、何をそんなに怯えているの？）

（…いや、その。何故か体に悪寒が走って…）

やけに力が入っているユーノ君。風邪なのかな？

## 第五話 転校初日・午前。（後書き）

あとが

アリサ「あとが？」

ぴろりろりん。

すずか「あ、何かメールが来ているよ。なにになに？」

頑張っ てあなた様 書けるように します ので 今しばらく ご容赦  
ください。 たかBBBBBBBBBB…（このあとBがずっと続い  
ている為省略）…

なのは「仕方がない作者なの」

アリサ「…作者（書いている途中で力尽きたのね）」

すずか「…今回は魔法はなかったね（この間のあとがき。まだダ  
メージが消えてないんだ）」

今晚のおかず。だったもの「ユーノです。イタチです。食べ物で  
はありませんっ、正しくはフェレットです、もう一度言います、食  
べ物ではありません！」

なのは「次回は活躍しそうな予感。やっとりリカルなのはの二次  
らしくなってきたの。これだから駄作者は…。今回もなんだか出番  
が少ないし…」

レイジングハート「スタンバイレディ…」

すずか「ちょ、なのはちゃん。なにデバイス起動させているの？  
！」

なのは「ちょーーーーーっと、作者さんのいるところにお話  
に行くだけだよ」

アリサ「…止めるわ、全力で止めてみせる！なのは、まだそれは  
早すぎるわよっ！」

なのは「あ、アリサちゃん、返してっ。私のごうもムムーツ」

なのはの口及び四肢に光の輪っか（バインド）が装着されました。

ユーノ「ごめんっ、なのは！でも、まだローマ字じゃないんだ。  
漢字が使われている状態を維持したいんだ！」

アリサ「ナイスバインド、ユーノ！すずか、レイジングハートを  
あとがきの外にぶん投げて！」

すずか「わかった。えーい！ユーノ君！」

レイジングハート「ジャイロシュート?!」

キラーン（レイジングハートは星になりました）。

ユーノ「了解！結界展開！」

キンツ。（結界を展開しました）

すずか「これで一安心」

なのは「みんなひどいのー」

アリサ「仕方ないでしょ、あんた。ここはまだ無印なのよ」

なのは「ぶー。…仕方がないの。でも、やっぱり納得いかないのー」

すずか「まあ、今回ののは確かに」

ユーノ「アリサがというよりサカサが最後を持って行っちゃったよね。本当に何者？」

なのは「最後までどこか最初からいたのっ。姿かたち表していないのに、作者は身内びいきなのー！」

ユーノ「まあ、彼は魔力と身体能力以外はチート仕様らしいから。シリラス・コメディー両方いけるらしいし」

アリサ「まあ、手紙一通であの出来事だものね。まさに才能の無駄遣い」

なのは「今度は私が絶対目立つのーっ！次回予告！転校初日・昼休み！テイクオフなのー！」

すずか「作者さん。本気で頑張ってください」

ユーノ「でないと次は本気で危ないから」

アリサ「次は止められる自身がないわ」



第六話 巨大な天使と魔法少女+。(前書き)

???「作者さん、私に嘘の次回予告させたので減点十ナノ」

たかB「すみません！でも、…後悔はしていない！」

???「ほう？」

たかB「すみませんすみませんすみませんすいま」

???「あとがきに続くの」

## 第六話 巨大な天使と魔法少女＋。

「…っ、疲れた」

ようやく昼休みという休憩時間に入った。俺は机に突っ伏し頭から湯気を出していた。

疲労困憊の原因はサカサの悪戯で半分。そして残りの半分勉強によるものだった。考えてみれば幼稚園の時に武芸一色に教育を施され、ここ一年はサカサの研究の手伝い及びハチャメチャな生活に付き合っていたせいか勉強をする時間なんてなかった。おかげでノートに日本語と数字をただ書き写しただけでも脳みそはオーバーヒート寸前。食欲もわかない。野菜ジュースだけで事足りそうなくらいに俺は疲れていた。

「…大体、九九ってなんだ？二桁の掛け算？テロリストの持つ機関銃の弾ぐらいにあんな数字、お目にかかることなんてあるのか？」

「主。反復。我、音量、効果、最少、教鞭。2×1、2。2×2…」

ぎやあつ、避来矢。後に、後にしてくれ。今にも脳みそが焼け付きそうなくらいに熱いんだ。お願「否、主、教養、不足。4×3」  
うわあああん。

「ツルギくん。ちょっといいかな？可愛い彼女が来ているよ？」

そんなけつたいな人いたかな？避来矢が呪詛のような九九を唱えていると、女子クラスメートから声がかかった。顔を上げて指さす方を見るとそこにはアリサがいた。白を基調にした我が校の制服。

特にアリサの長い金髪は清楚な制服とロングスカートにあって確にかわいらしい。っ、！なにっ、なんかものすごい気配を感じたんだが。まるで狙っていたウサギを横取りされたライオンに睨まれた妙な感覚は（実体験）。思わずミニ避来矢を右手で取って、周りに注意を向けるとクラス男子が睨んでいた。

「ち、違うぞっ、確かにアリサは可愛いが彼女ではないぞ。そりゃ、恋人だったらエブリデイいやっほ。だけど、そういうのではないぞ！」

「そ、そうよ、そういうのではないわ。ツルギと私は奴隷とその主人よ！」

疲労を押し殺しながらクラスの皆に弁明するとアリサもそれに続いて追加弁明を行う。…奴隷か。言いて妙だ。確かに俺はアリサに逆らえないんだよな。…せめて友人とかだったらよかったのに。

「えー、顔も赤いし、怪しいなあ。あ、わかった。友達以上恋人未満って、やつでしょ。いいなあ、そのいじらしさが何とも」

「違うわよっ、友達未満恋人未満よ！」

「…アリサ。それではただの知人。もしくは他人だ」

俺はせめて友人でいたかった。

「う、うるさいっ、とにかく中庭に行くわよ」

「はいはい、了解しました。ご主人様」

「ごゆっくりー」

女子から興味の対象として、男子からは殺意の対象として、俺は避来矢をポケットに突っ込んで教室を後にした。…帰るのが怖いんだが…。

なのは視点

「おい。昨日ぶりだな、高町。月村」

「やほー、昨日ぶりだねツルギ君。失恋の痛みはもういいの？」

「す、すずかちゃん。それは言い過ぎ」

その言葉を聞いたツルギ君はその場に崩れ落ちかけていた。片膝までついて涙目になっていた。

「うう、もう勘弁してくれよ。月村。病院で声を聴き間違えただけなのに…」

「それは駄目」

「うん、それは私も同感なの。女の子をほかの人と聞き間違えるなんて最低なの」

ツルギ君はフェレット。ユーノ君が運び込まれた病院で合流した

ときにすずかちゃんの声を聴き間違えて忍さんと勘違いしてしまい、  
「あれ、忍さん？」と言葉を滑らせていたの。

「うう、だからお詫びもかねてジュースを奢るから、月村も高町も勘弁して」

ツルギ君の右手にはビニール袋が一つ。中にはオレンジジュース、いちごミルク、ウーロン茶、牛乳、野菜ジュース。の五つの飲み物が入っていた。

「うーん。まだ少し足りないかな。ツルギ君」

「まだ何か奢れと」

「そういうことじゃないわよ。馬鹿ね。ツルギ」

「そうなのツルギ君」

「どうしてっ」

アリサちゃんは未だに涙目なツルギ君の様子にため息をつきながら私たちのいるベンチに腰を下ろし、お弁当箱を広げた。私たち三人もそれにならいお弁当を広げる。席順としてはアリサちゃんの隣にツルギ君。四角テーブルを挟んでツルギ君の向かいが私でその隣がすずかちゃんの構図だ。お弁当をみんなで食べ始めてからすぐにツルギ君にお弁当がないことに気づく。

「て、ツルギ。あんたお弁当は？」

「んな器用な物俺が作れるわけないだろ。できるのはカレーか、

おかゆとかぐらいだ。それに今は食欲ないし、野菜ジュースとじーかつぶで十分だよ」

「くくぶふう」「く」

私たち三人はツルギ君からもらった飲み物を噴出した。

「…なあ、高町。海外暮らしのせいで間違っているかもしれないが人に向かつて飲み物を吹きかけるのは良くないことだと思うのだが？赤い物を吹きかけていいのはレスラー<sup>いちこミルク</sup>だけだぞ」

ツルギ君の所為なのっ。なに、じ、じーかつぶ。て、牛乳と書いているよね、それ。

「つ、ツルギ君。これはなんて書いてある？」

顔に吹き付けられたオレンジジュースをハンカチでふき取りながら、すずかちゃんは野菜ジュースと書かれたパックを指さす。

「ん？やさいじゅーす。だろ？」

「じゃあ、あれは？」

同様にアリサちゃんはすずかちゃんの持っていたウーロン茶の缶を指さす。

「うーろんちゃ」

「じゃあ、それは何て書いているかわかる？」

最後に私がツルギ君がまだ開けていない牛乳パック250mlサ  
イズを指さす。

「じーかつぷ」

「「「なんでっ?!」「」」」

私たち三人は全員でツツコミを入れる。

「あれ、えいちかつぷ。だったか?」

そういう問題じゃないのっ。

「…そういうこと誰から習ったの」

「サカサ。あ、ここは日本だからいーかつぷ。が正解か?」

サカサさん。ますます訳の分からない人なの。

「違うわよ。牛乳よ、ぎゅうにゅう。なんで今までその読み方に  
不思議に思わなかったの! あんた自分で勉強したことあるの!」

「自慢にならないが、勉学を自分からしたことなど一切無い」

「本当に自慢にならないよ」

ツルギ君。もしかしくなくても…馬鹿? しかも影響したのがサカサ  
さんの影響が強いみたいなの。こゝこれは酷いの、ツルギ君。可哀  
相なの。

「…なあ、高町。なんで俺を涙目で見る？」

それからツルギ君の知識を確認しながらお昼時間を過ごし、ツルギ君のことでもわかったことが一つ。ツルギ君は一般常識はあるが、教養というか、小学二年生レベルの国語や算数がやっとなんか残念な脳みそだということが分かったの。

「まあ、あんたがもう十歳で一歳年上だったなんてね。なんか納得いかないんだけど」

「俺もだ。いつの間にか四年もたっていたとは」

ツルギ君はすごく遠い目をしていて。今は昼時なのに夕暮れに映った哀愁を漂わせた横顔を見せていた。サカサさんもそうだけど、ツルギ君も相当変なの。

「それじゃあ、放課後。翠屋に集合ね、ケーキを食べながら宿題をするわよ」

「「おー」」

アリサちゃんの提案に私たち二人は手を上げて答えるが、

「おー、がんばれ」

「ツルギ、あんたも来るのよ！」

「あー。今日は無理。先客というか用事（ジュエルシード探索）があるから…。午後からは学校を抜けてそっちに向かわないといけないし」



「どんな用事よ！」

アリサちゃんがさらに詰め寄りツルギ君に襲いかかろうとしたが、アリサちゃんはツルギ君の一言で大人しくなる。

「サカサ関係な」

「がんばるのよ」

対応が早！まだ言い切っていないよ。そして、アリサちゃん白い目をしてながら親指を立てる。心なしが全身真っ白の気がするのは気のせい…とは言えないほど機械的だったの。

「今度の日曜あたりにちゃんと時間を作るから。その時にしてくれ」

「いきてかえってくるのよ」

「…アリサ、俺、今関係している用事を済ませたら一般日本小学生並の生活を送るんだ」

死亡フラグ！ツルギ君、そんなことを言ったら叶わなくなっちゃうの。

「うん。わたしまっているから」

アリサちゃん、そんなことを言ったら帰ってこれなくなっちゃうのーっ、それは追い打ちフラグだよ。心なしがセリフが全部平仮名だし。

「んじゃ、俺は職員室で校長先生（サカサに脅迫された人）に説明してくるから。…また、明日…な」

なんで最後の方、間があつたの？

ツルギ君は私たちに背を向けてこちらを振り返らずに手を振って行った。

…このままいかせたら駄目なのっ、確実に死亡フラグを連発している。今の状態じゃツルギ君とはお葬式で会っちゃうの。

「ツルg」

（なのは！ジュエルシードが出た！この学校にいるよ！結界を張るからそこから動かないで、すぐ行くから！）

妙に色あせた背中を呼び止めようとしたとき。ユーノ君から念話を受ける。ちょ、ちよつと待ってユーノk

キンツ。

ガラスを弾いたかのような綺麗な音が響くと緑色の光が学校全体を包み込む。…ああ、もうツルギ君は角を曲がったところで見えなくなったということとは結界外ということ。とりあえずこのジュエルシード騒動を終わらせてすぐに追いつくの。

「ごめんね、なのは！今回ばかりは急いで解決。というより結界を張らないとかなりの被害が出るんだ！」

後ろから声が聞こえたと思ったらそこには宙に浮いたフェレット

ユーノ君がいた。ユーノ君の下には結界と同じ色の円盤に似た魔方陣があり、レイジングハートがあった。

「わかったの、ところでジュエルシードはどこに？」

ずんつ。ずんつ。

地響きが鳴り響く。このパターンはとても嫌な予感がするの。後ろを振り向きたくない、けど、…現実を見ないと。

私はゆっくりと後ろを振り向くとそこには十メートルはありそうな彫像。布を体に巻いただけの男性彫刻が歩いていた。

「にやああああああ、やっぱいいいいいいいい！」

「そんなのんきなこと言っている場合じゃないよつ、なのは。思わず結界を張ったけどこんなに大きなものが暴れたら学校が壊れるだけじゃない。結界も壊れたらそれこそ最悪だよ。皆が瓦礫の下敷きなんてことになったら…」

っ！そんなこと、絶対にダメ。やるよレイジングハート！

「オーライ、スタンバイレディ」

ユーノ君からレイジングハートを受け取り私は準備に取り掛かる。まだ、二回目だけど私しかできないというのならやるしかない。

「セットアップ！」

桜色の光が私を包み込む。次の瞬間には着ている制服にとっても似ている服。バリアジャケットを身に羽織ってレイジングハートの中

心に黄金色の金属が現れる。次に白を軸にした杖。それらがすべて空中で接続されて完全なレイジングハートが形成される。

「必ず止めるよ！ユーノ君、レイジングハート！」

「わかっているよ！なのは！」

「ミッション、スタート。アクセル！」

私とユーノ君は巨人の顔の位置まで空へ飛び、彼と対峙する。

「アリサちゃんやすずかちゃん。そしてツルギ君がいるこの学校は必ず守るの！」

この時、二人と一機は知らなかった。彼女たちが巨人と対峙している校舎の裏側でもう一組がバリアジャケットを換装していることに。

## 第六話 巨大な天使と魔法少女+。（後書き）

あとがき 採点結果編

なのは「……………」

たかB「い、いかなものでしょう?」

なのは「…レイジングハート」

レイジングハート「セットアップ」

レイジングハートが戦闘形態になりました。なのはを中心に五つの桜色の光球が出現。

たかB「ひい」

ツルギ「やばいつ、避来矢!」

避来矢「了解。バリアジャケット、顕現」

避来矢から黒い光を放出。その黒い光がツルギを包み込む。

なのは「アクセルシュート悪競周徒」

ツルギ「なんて!？」

レイジングハート「アクセルシュート、ファイヤ」

ずどどどどつ。ががんつ。たかBに光球が当たり続ける。光球一つにつき五回当たると光球は消滅した。そのうちの二・三発がツルギにヒット。

なのは「…四十点。まあ、次は私が大暴れなの。許してあげるの。この調子で増やしていくのー」

ここ（あとがき）は本編のなのはとはまったく関係ありません。

ツルギ「…許して、あれ？」

避来矢「…主。下手、発言、作者、同様、変貌、半死体」

ツルギ「お、おう。なのは、次回予告をよろしく頼む」

なのは「あ、ごめんね。ツルギ君。それは次のお話でd」

レイジングハート「…ジャパニーズデーモン？」

ツルギ「…え、なのは？どうした？これは次回出す俺のバリアジャケットなんだけど」

なのは「にゃああああああ、お化けえええええええ！」

なのはがツルギのバリアジャケットを見た瞬間にあとがきの外に走り去っていった。

避来矢「…主。次回予告」

ツルギ「…あ、ああ。次回、魔法少女と鬼武者の会合。テイクオ

フ

避来矢「…主？」

ツルギ「…お化け…。は、き、傷ついてなんかいないんだからねっ」

避来矢「主。…キモい」

## 第七話 魔法少女と鬼武者の会合（前書き）

たかB「読んでみて！これが俺の全力全開！！」  
第二次スパロボZの続編が待ち遠しい…。  
と、いうわけであとがきに細工しました。



## 第七話 魔法少女と鬼武者の会合

「主！緊急、事態、ジュエルシード、反応！距離、30メートル！」

避来矢からの警告を受けてポケットから取り出し、元の大きさに戻す。と、同時に認識障害をかけて自分と避来矢の姿を見えなくする。一般人に知られることを避けることと巻き込むのを避けるため特にアリサとかアリサとかアリサとか……。あいつ、俺がこんなことをしていると聞いたら絶対首を突っ込むだろうな。

ちなみに認識障害はフェイトとアルフから忠告を受けたものである。

管理局から発見を逃れるため。

それは元々ジュエルシードを初めとする異世界に散らばる各世界ですでに滅びた文明の遺産や兵器を管理・封印を行う国際警察のよくなものであり、文字通り世界を股にかけ、平穩を守る兵隊である。そして、フェイト達はそこを襲撃し、ジュエルシードを奪おうとしたテロリスト。ジュエルシードはその時、ここ海鳴市を中心に散らばった。……なんか引つかかる？と、その時は思い過ごした。それは今でもわからない。

それでも俺はフェイトに協力することにした。二つの約束をして。そのうちの一つは誰も殺さないこと。これだけは譲れなかった。一応フェイトもアルフも人は殺してはいない。そして殺させないためにも非殺傷モードをバルディッシュに設定してもらった。その代わり、俺はジュエルシードの浄化と譲渡。サカサにも悪いと思ったので二個だけ俺が預かり、残りはバルディッシュにある。今、現在持っているのは、浄化中のジュエルシード二個。これは蟹男の持っていたジュエルシードである。

さて、残りの一個の約束は…恥ずかしいから内緒だ。それを聞いた瞬間にフェイトも顔を赤くしてバルディッシュを振り回していた。その横でアルフがにやにやと笑っていたが無視した。とりあえず、全てがうまくいったら。という条件で守ってくれるようだ。

「…あー、思い出したら顔が熱い」

「主、結界、反応。展開。干涉？」

俺は先程曲がった角を曲がると同時に風景が一変した。目に映る風景全体に薄い緑色の光かかっていた。すで結界内にいる。もしくは、結界とその外との間にいるかのようだった。これは一度、避来矢で蟹の張った結界侵入時の際に見た風景に似ているからそう判断した。避来矢が俺の指示を待っている。て、ことはまた脱がないと…  
いかないのか…。

「主、脱衣、必要、無。眼前、結界。前回、結界、劣化版」

どういうことだ避来矢？脱がなくていいの？どうして？

「主、我、機能、連続、使用。機能、自体、少々、性能、向上。前回、結界、ジュエルシード、仕様、侵入時、要全裸。今回、ジュエルシード、未使用。結界、突入、可能」

お前にある機能を何度も使つとそれは少しずつ強くなる。前はジュエルシードによる強化された結界で侵入は困難だったけど、今回は使用されていない劣化版だからそのままでもいける。ということか。

「肯定」

じゃあ、突入、急ごう。一般人がいたら大変だし。

ヴォン。

機械的な音と同時に結界内へと侵入。風景から緑色が抜ける。代わりに校舎全体を覆うドームのような緑の壁が見えた。

「侵入、成功」

あと避来矢、聞きたいことがあるんだが、突入した後、バリアジヤケットを作っても結界内から追い出されない？もしくは気づかない？

「…前半、質問、回答、可能。後半、質問、不可。探知、可能性大」

「…追い出される？」

「索敵・想定。…可能性、零」

結界から追い出されることはないけど気づかれる。気づかれるけどジャケットは作れるのか。…とりあえず、阻害しながら相手にできるだけ近づこう。近づいたらジャケット装備して気づかれる前に不意打ち。…できる避来矢？

「可能。主、ジャケット、形式、想定、要求」

イメージは前々からできているよ、避来矢。

イメージは日本伝統の黒の鎧甲冑。兜の部分は大鹿の角がある。頑丈にして頑強。竜神の加護受け、雨のように降り注ぐ矢は矢自体が避けていく。剛の者が振るう刀や金砕棒 鬼の持つ金槌のような物 も弾き返す。竜神の鎧、避来矢。

「どうだ避来矢。お前の名前の親でもある鎧は」

「…感無量」

あ、あと、兜の部分に鬼の面をつけてくれ。一応、俺たち、反警察みたいなことをしているみたいだから、悪役っぽく。あと認識障害も使えないとなると顔を隠していた方がいいし。

「了解」

ずん。

地面を揺るがす地震に俺は思わず転びそうになるのをこらえるが目の前に現れた物体に目を丸くして、考えを改めた。

「避来矢…。認識障害、出力全開」

「…了解。認識障害、最大、効果」

さすがは相棒。よくわかっている。目の前に映った物体は美術館に飾られていそうな彫像だった。ただ、その像は軽く見ても五メートルオーバーの巨大なものだったからだ。

ああ、ジュエルシード二回戦は最初から不意打ちによる全力全開。スタミナなんて考えず一気に決めないといけないな。悪いけど問答

無用遠慮無しだ。…これは悪役の対応だよな。まあ、仕方ないか。

ユーノ視点。

「止まってください。どうして学校でこんな真似をするんですか！？」

なのはが巨大な男性の彫刻にレイジングハートの先を向けて静止を促す。なのは、そんなこととして相手が答える可能性なんて、と、思っていたら彫刻の口がゆっくりと動いた。その際、動いた分だけ彫刻の口の周りにひびが入る。

「夜の眷属、打ち滅ぼす。少女、汝、神の従者か？」

「すみません。私、宗教とかには入っていないんです。夜の眷属って、なんですか？」

「異教徒。…いや、汝には後に教えを。今は、眷属を滅ぼす」

ぐおん。

彫像の目に赤い光が灯る。そしてその光は校舎に当たりまるで何かを探すかのように照らしていく。

「な、結界に強制干渉！まずい、このままじゃ、なのはっ、あの目を攻撃して！」

「えっ、ユーノ君？」

なのはが戸惑っている間に僕の張った結界に干渉が始まる。そして、干渉の起こったその場所に見慣れた一人の少女の姿が見えた。

「…発見。眷属よ、滅びろ！」

彫刻がなのはよりも大きな拳を振り上げる。そして、赤い光に照らされた場所には……。

「すずかちゃん!？」

なのはが声を上げると同時に赤い光に照らされたすずかも振り返る。

「え？　なのはちゃん？」

彼女がそう言葉を発したときにはもう、巨大すぎる石の拳は振り下ろされていた。

「だ、だめえええええええええ！！」

「ディバインバスター」

ドッ  
ゴオオオオオオオオオ  
ンッ！！

なのはがレイジングハートを用いて桜色の光線を石の拳に向かって放たれる。が、二つの不幸に見舞われる。一つは放ったのが遅すぎたことによりその光線は拳ではなく肘の部分に直撃したこと。そ

してもう一つは、なのはの持つ魔力が強すぎて肘の部分が完全に破壊されたこと。この二つにより石の拳は彫刻から切り離されるものの勢いそのままに石の拳がすずかを覆い隠した。結果、

ズッガアアアアアアアアアアン！！

すずかのいたところに巨大な石の拳が落ち、高々と砂埃が舞い上がった。

「あ、あ、あ、い、いや、いやあああ」

なのはの目の前ですずかは巨大な石の拳につぶされ…、っ、！この反応は、いつから？いや、そんなことよりなのが涙をこぼしながらふらふらと地面に落ちていく。

「すずかちゃん、すずかちゃんああん」

「我に刃向い、眷属に涙を流すか。…汝、異教徒なり！」

「なのは！逃げてっ、まだ、あいつが！」

彫刻が残った腕を用いてなのはめがけて拳を振り上げる。くそっ、間に合えっ！

「バインド！」

ガキッ。

もはや混乱どころか精神が決壊寸前まで追い詰められたなのはに彫刻の動きを把握できていなかった。まだ、小学生で目の前で友

人を亡くした少女にこの窮地を回避することは不可能だった。僕は彫刻の腕全体に拘束用の魔法バインドを唱える。光の輪が彫刻の拳を絡め捕りその動きを防ごうとするがその重量は見た目通り重い。そして何より彫刻の強度にも問題があった。

ビキキッ。

その重量とは裏腹にこの彫像はもろい。先程のなのはの砲撃で気づくべきだった。これじゃ、バインドが破壊される前に腕自体が砕けてしまう。

バゴオッ。

砕けた彫像の拳はまるで先程の悪夢を再現するかのようになのはへと襲いかかる。

「オートプロテクション」

キンッ。

なのはがレイジングハートの作り出した自動防御壁に包まれる。その赤い防御壁はなのはが命じて作り出す障壁よりも強度はない。しかし、何もないよりはましだった。

ゴッ、バアアアアアンッ！

レイジングハートの作り出した障壁は石の拳を一瞬だけ止めると、拳と共に砕け散った。しかし、その衝撃でなのはは地面へと叩き落される。



「あああああああああつ！」

「なのは！」

「眷属共々滅せよ！」

彫像は残った足を用いてなのはを押しつぶそうとする。僕はなのはの前に立ち、障壁を張る。レイジングハートももう一度障壁を張るが、今度は彫刻全体の重量が襲いかかる、二つの障壁は悲鳴を上げ、今にも砕けそうになる。

「なのはっ、早く逃げ」

僕がなのはに声をかけたその時だった。

「少女、撤退、要請。我、援護！投擲、開始！」

ブオンッ。

立ち込めた砂煙の中から巨大な瓦礫が飛び出し、彫像の顔に当たり、巨人の体勢を崩す。と、同時に一つの人影が砂煙の中から飛び出してきた。全身黒ずくめの騎士甲冑にも似た鎧をまとい、悪魔の仮面をつけており、飛び出した勢いのまま彫像へと殴りかかる。

「目標乙、攻撃、開始！」

機械的な叫び声と共に悪魔の仮面をつけた人が五メートル以上はある彫像の脚を殴り飛ばす。彫像の脚は全体的にひび割れをおこし背中からグラウンドへと倒れた。

ずずん。

「う、あ、ええ？」

「伝言！御学友、無事。身体、機能、異常、無」

悪魔甲冑は立ちこんだ砂煙の端を指さすとそこには大きなクレイターのすぐそばで頭から血を出している状態で気を失っていた。

「す、ずずかちゃ、け、怪我を」

「問題無。付着、血液。我、返り血」

「ちょ、ちよつと君は一体？」

いきなり現れた彼？となのはのやりとりに僕は慌てて間に入る。

「沢庵、言語、発声？！」  
たくあん

「僕はユーノ、フェレットだよ！……て、僕らどこかで会ってない？」

「……記憶無」

と、そんなことをしていると。

「……日本の悪魔、否、ナイトゴースト。か？眷属はいろんなものを引き連れているのだな。汝は使い魔か？」

ズズズと彫像が砕かれたはずの腕がいつの間にか修復していた。

そして、それを用いてその巨体を起き上がらせていた。

「否定。我、主ノ剣。我、主ノ鎧」

悪魔甲冑は僕となのはの前に立ち、拳を彫像に向ける。

「我。汝、碎クモノ」

「愚かな。丈高き天使、サンダルフォンの拳に沈むことで救いになればよいのだがな」

「上等！我、竜ノ鎧、避来矢。参ル！」

その威風堂々たる悪魔甲冑に僕は心をゆすぶられた。それは同様に崩れかけたなのはの心すらも動かしていた。

ツルギ視点。

どうやら上手くいったようだ。

鬼の面を持つ、黒の鎧。避来矢。

これを身にまとってなのはと沢庵？の前に出る。避来矢本体である巨大な剣の形は存在しない。避来矢はその姿をすべて鎧へと変貌させた。同時に避来矢の鎧の情報が頭に流れ込んでくる。

大剣は黒い光となって俺の全身を覆い、俺のイメージ通りの鎧へと変貌した。そして、目の前にいる巨大な彫像すらも殴り飛ばせる力を手に入れた。が、これにはいくつもの問題がある。

19500/20000

鬼の面の裏側に映るこの数字。これはいわば避来矢の鎧形態を維持するエネルギー量。つまり、制限時間のカウントダウン。これが0になると避来矢の鎧は解除される。

避来矢の鎧はSFで言うところのパワースーツ。しかもかなり燃費が悪いのか何もしなくても十秒ごとに100減少し、ダッシュに100、先程の投擲に100、彫像を殴った時に200も使用している。

「おおお！」

「防御！」

そして、俺は口をふさがれる。なのはに檄を飛ばしたくても喋ることが出来ないので避来矢に俺の意思を読んでもらい、なのはに伝える役目を担ってもらっている。

迫りくる彫像の攻撃を受け止める。後ろにはなのはと沢庵がいる。見ず知らずの他人ならいざ知らず、知り合い。しかもアリサの友人となれば話は別だ。俺はあいつが泣く顔を見たくはない。

ガガンッ。

強い衝撃を受けるとともに今度は数字が300減る。しかも彫刻の攻撃は俺を押し通して後ろにいるなのは達をも潰そうとしていた。

「…出力、上昇！」

「異教徒、異教徒、異教徒おおおおおおおおおっ」

「…自重量、増幅。出力、再上昇」

まずい。今ので七割を切った。今も数字はすごい勢いで減り続ける。このままじゃ二分も持たない。避来矢、こいつを投げ飛ばす。とりあえずグラウンドにぶん投げる。

（了解！）

「腕力部、出力、上昇！腰部、脚部、他、間接、部位、出力、上昇！」

拳を受け止めながら俺は腰を落とす。そして、真下から真上にあげる動作を行うと同時に避来矢の数字の減少も一段と早くなるが構ってはいられない。それのおかげで彫像を持ち上げることが出来た。

（主、残存、熱量。五割強！）

わかった、避来矢！グラウンドに投げ飛ばしたら全速全開でこいつを再生できないくらいにまで粉々にするぞ。

「目標乙、投擲！」

グオオオオンっ。

避来矢は自分の何十倍もある彫像をグラウンドに投げ飛ばした。その際とても大きな風切音と共に彫像は宙へと舞い上がりグラウンドのある方向へと投げ飛ばされた。それを追ってさらに追撃を加えるためにその後を追うが俺はそこで絶望を肌にした。

バサア。

あの巨大な彫像の背中に翼が生え、宙へと浮かぶ。どうやら天使は名ばかりではないようだ。…まずい。圧倒的に不利だ。超強化に施された避来矢でも不利すぎる。まず、避来矢の鎧には遠距離武器がない。そしてなにより、

避来矢は空を飛べない。

そこからは天使による一方的な攻撃に俺と避来矢は防戦一方となった、

なのは視点。

私は目の前のすずかちゃんの姿に絶望に近い衝撃を受けた。少し前にお父さんが大けがをしたときにも似た喪失感。その姿を無事だと言われてもすぐには立ち直れなかった。

私は何もできないの？魔力を扱えるとしても、使い方を間違えた。あの時、砲撃ではなく障壁にしておけばすずかちゃんを危険な目に合わせることなかった。あの黒い鎧の人がいなければすずかちゃん、ひいてはユーノ君や自分自身すらも守れない。こんな私は…。

「なのはっ、しっかりして！」

「…ユーノ君」

ユーノ君が目の前にいる。そして、そのすぐそばにすずかちゃん  
がいた。

「あの人があの巨人と戦っている間に早く逃げるんだ！」

「…え？じゃあ、あの人は」

「僕が残って援護する。君はすずかと一緒にこの結界から逃げて！」

「そんな危険だよ、ユーノ君！私も…」

「なのは！」

ユーノ君が私に怒鳴った。今まで聞いたことのないほどの声に私は身をすくませた。

「ごめん。勝手に巻き込んで勝手に君をのけ者にして。でも今のままじゃ駄目なんだ。今の君は力はあるても心がぐらついている。そんな状況であの人を援護しても…」

「ユー…ノ君」

「レイジングハート。なのは達を任せたよ」

ユーノ君は鎧の人を追ってグラウンド方向に走っていく。そうだ、今の私は何の役にも立たない。下手したらみんなを巻き込みかねない。

「…マスター」

「レイジングハート。私はどうしたらいいのかな？」

レイジングハートはしばらく黙っていた。ここは引くべきだと言いたいのを我慢しているんだろう。私に気を使って。レイジングハートもあの人もユーノ君もみんな優しいから私に逃げろという。でも、私は、私には力がある。皆を守る力があるのに本当に逃げていいの？

「ははははは、どうした異教徒ども。その悪魔は空を飛べないようだな！ 竜の鎧と言いつつ割には名前負けしておるわ！」

「…回避。戦闘、続行。沢庵、撤退、推奨！」

「ユーノだよ、なんで君も僕を食べ物だと思うの？！…く、エナジーボルト！」

巨人とユーノ君、そして鎧の人はまだ戦っている。ユーノ君は空を飛べるし、魔法弾を撃てるけど、多少の亀裂を作るのみで決定打を与えきれない。そして、鎧の人は空を飛べない上に飛び道具がない。時折、グラウンドにあるサッカーゴールを投げては巨人にぶつけて、足や腕を破壊してもしばらくすると新しい腕や足が生えてくる。

対して、巨人は自分の腕や足をちぎっては投げつけてくる。背中にある翼がある限り巨人は地面に降りない。あの二人が力尽きるまで。

ユーノ君じゃあの翼は折れない。鎧の人じゃ攻撃が届かない。それじゃあ、私は？

「…私は」

できる。私ならあの翼を打ち落とすことが出来る。でも、今度は



あの鎧の人やユーノ君をすずかちゃんみたいに巻き込んだら…。

「…マスター。レッツ、トライ」

「レイジングハート！でも…」

「アイ、ビリーブ、ユー。ビコース、ユー、アー、マイマスター」

レイジングハート。私を信じてくれるの？

「オフコース」

私は、飛べるのかな？

「ユー、キャン、フライ」

今度は、今度こそは…。

「イエス」

「…ごめんね。すずかちゃん。少しだけ待っていて。私、飛んでくるよ」

もう、迷わない。今度こそ、守るんだ皆を。

「いこう！レイジングハート！！」

「オーライ、マイマスター！」

ツルギ視点。

52000 / 20000

もう残り時間一分を、いや、攻撃を合わせるともう二十秒も持たない。しかし、投げる物はもうグラウンドには残っていない。沢庵も攻撃を加えてくれるが、浅いひびを入れるだけで有効だにならない。たまに光の壁で攻撃を防いだりする。が、その壁は一時しのぎだ。巨人が再び腕を引きちぎり投げつけてくるまでの時間稼ぎであり二発目までは耐えきれてな…、まてよ？あの光の壁。縦じゃなくて横に展開できないだろうか。

「緊急回避！」

47000 / 20000

何度もちぎっては飛んでくる巨人の腕や足を避けるともう、数字が底をつく勢いで減っていく。

もう迷っている暇はない！避来矢、あの沢庵に俺のイメージを伝えてくれ。

（主？…っ、了解！）

「ユーノ、障壁、作成！」

避来矢はユーノに声をかける。そしてユーノがこちらを振り向いたときに巨人、体育館に外付けされている階段、そして自分自身を指さす。

「え…、わかった！いくよ、障壁を連続展開」

沢庵は数瞬でこちらの意図を読み取ったようだ。俺の一メートル先に緑色の半径50センチの障壁がいくつも展開される。それは巨人の元に届く階段のように。

やるぞ、避来矢！

（了解！）

「平衡感覚、脚力、上昇！」

これが、俺とお前の全速！

「全開！」

ドンツ。

地面を砕きながら、避来矢が残った最後のエネルギーを振り絞り今日一番の加速を見せる。踏み出した足に対して沢庵が作り出した障壁は一秒も持たずとして消滅するがそれだけあれば十分だった、一気に緑の階段を駆け上がる。が、巨人までの距離はあと十メートルの所で巨人へと続く障壁が奥から薄くなり消えていった。

何やってんだ沢庵！と、目を向けると沢庵が石の羽に弾き飛ばされているのが見えた。まさか、羽まで飛ばしていたのか！くそつ、ここからじゃ飛び蹴りしても届かない。せめてあと少しだけ巨人が高度を下げないと…。

巨人は笑っていた。俺に注意を向けているように見せかけて沢庵を狙っていた。…くそつ、負けたか。せめて、なのはとすずかだけでも逃げてくれれば…。

「デイバインバスタアアアアアアアアア！」

ズドオオオオオオッ！！

俺が悲観的な考えをした瞬間、巨人の頭上から桜色の光線が巨人の羽と左足を砕いた。錐もみしながら落ちていく巨人と俺が見たものは震えながらもレイジングハートを持つなのはの姿。…まったく、本当に年下の女の子なのかを疑う。度胸がありすぎだ。しかも弾き飛ばされた巨人は攻撃するには絶好のポイントに落ちてくる。こんなおいしい場面を作られたら男として止まるわけにはいかない。否、もう止まらない。止められない。

ダンッ。

ヒーローなら必殺技を叫ぶんだろうがあいにくそんな名前はない。だから、渾身の一撃を両足に込めて飛ぶ。一撃粉碎の思いを持って、巨人の顔面に蹴りを放つ。

「砕ケロオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

ごっ。ガガガガッガガガッガガガッガガアアアアッ！！

顔面に蹴りが入り、一瞬の抵抗を感じたが、飛び出した勢いそのままに俺は巨人の顔から右足にかけて巨人を一刀、いや一蹴両断した。

その間、巨人の心臓の位置にジュエルシールド埋まっているの見たがその時にはすでに俺は蹴りの勢いそのままに校舎に突っ込んでいった。

「ジュエルシードッ、封印！」

なのはがジュエルシードをレイジングハートに収納するのを見届けると俺は着地のことを考えていなかったため、校舎内の廊下をものすごい勢いで突っ込んできた方向とは逆方向の壁をぶち抜き背の高い木の枝に引っかかるまで、ゴロゴロと転がって行った。これはなんとも締まらない戦いの終焉だった。

なのは視点

「…封印、完了」

私は地面に降りながらジュエルシードを封印すると同時に緊張が解けたのかレイジングハートを落とした。正直、もう立てない。レイジングハートも疲れたのか元の小さな宝石に戻っていた。そしてユーノ君が張っていた結界も数秒遅れて崩壊し、私たちは通常空間に移行した。

「…ユーノ君！」

結界が崩壊したということは…。

（大丈夫だよ。なのは。ちょっと緊張の糸が切れたただけだから。そっだ、あの人は？）

茂みから顔を出したユーノ君を見て私は安心した。よかった。そっだ鎧の人。あの人にもお礼を言わないと…。

（…駄目だ。まるで認識障害を使ったかのように魔力反応が消えた。どこにもあの人の魔力の残滓が見当たらない）

そっか。今度会ったらちゃんとお礼を言わないと…。と、考えていたらユーノ君が念話で怒ってきたの。

（なのは！なんで逃げなかったの！）

（ユーノ君にもそれは言えるの、どうして一緒に逃げなかったの！）

私がすぐに切り返してきたことにユーノ君は呆気を取られながらも答える。

（そ、それは僕には責任があるし、見ず知らずとはいえ助けくれた人を放っておくわけには…）

「私も同じだよ」

私はユーノ君を茂みから抱き上げながらユーノ君いしか聞こえないくらいの声で答える。

「ユーノ君のいう通りにあの巨人に攻撃していれば、すずかちゃん は結界に入ってこなかった。砲撃じゃなくてシールドにすればあんな目には合わなかった。これは私の責任だよ。そして、私だつてあの人に助けられた。…ね、ユーノ君と同じだよ」

（なのは…）

「私、強くなるからみんなを守るくらいに、…あ」

大変なことに気づいたの。すずかちゃんのことほったらかしだったの。

「きゃあああああああ、す、す、すずか！どうしたの、その頭の怪我！保健室、救急車あああああ！つ、ツルギ近くにいたら早くもど、て、なんであんたも頭から血をながしてんのおおお！」

中庭の方からアリサちゃんの声が聞こえた。私は急いでみんなの所に戻る。そういえばツルギ君死亡フラグのことちゃんと注意しなくちゃ。というか、怪我したんだ。あんな短い時間で…。転んだのかな？

「早くみんなの所に戻ろうか？ユーノ君」

（そうだね、なのは）

ちなみに、すずかちゃんの頭の怪我はあの鎧の人のいう通り、その人の返り血だったらしく、水ですぐ洗い落としたの。すずかちゃんが何故か「もったいない」と呟いた。ツルギ君はその後、滑って転んで頭を勢いよく木にぶつけたらしいの。証拠に近くの木にはものすごい量の血痕が…。どんな転び方をしたんだろうね。

## 第七話 魔法少女と鬼武者の会合（後書き）

あとがき

ツルギ「熱血！」

どっごおおおお。とツルギの背中から赤い何かが噴き出る。

なのは「熱血！」

どっごおおおお。となのはからも以下略。

たかB「え？二人ともなんか一瞬赤い炎が見えたんだけど…」

ユーノ「激励！」

なのはの体に緑の炎が一瞬灯る。

避来矢「迅速！」

ツルギの足元から青い渦巻が立ち上る。

レイジングハート「感応×2」

ピコーン。とツルギとなのはに何故かロックオンのマークが入る。

たかB「もしもし？」

作者は後ずさりを始めた。



なのは・ツルギ「よくやった《の》作者、《原作・二次》主人公らしく大暴れできて満足だ《なの》!!!」

「たかB「そ、そうか。頑張った甲斐があったのだが何故二人ともこっちに狙いを定める？」」

作者は冷や汗を流しながらかなり二人から遠ざかる。

ツルギ「お礼として受け取ってくれ」

なのは「私たちの」

だつ。

作者は 迅速・気合 を使用してあとかきの外へと向かう。ツルギは作者に間合いを詰める。なのははレイジングハートで狙いを定める。

なのは・ツルギ「全力全開！！」

たかB「いらんわ、ぼけえええええええええ！」

この二人は不満があつたわけではなく嬉しかったのですが、嬉しすぎて体の疼きを止めることがなく、今回出た天使両断キックとディバインバスターで表したかつたそうです。

避来矢「次回、予こ《ばきいいいい、どつこおおおん、ぎ  
やあああああ《く》」

ユーノ「すずか、脱がせました。て、はっ?!」

五話の冒頭へ続くお話です。七話のすずかにどうして頭に血がついていたかを説明するお話である。

ユーノ「いや、冷し中華はじめました。みたいな最低のタイトルでしょ、これ!」

第八話　すずか、脱がせました。（前書き）

十八禁ではないぞ

## 第八話　　すずか、脱がせました。

すずか視点。

私は何となくだが、ツルギ君が関係していることを自分の体で感じ取った。

一緒に運ばれた保健室で私たちは手当てを受けていた。正確に言うとツルギ君だけが手当てを受けて私は体操着に着替えるだけなんだけど…。

「すずか、どこも痛くない？本当に絵の具なの、傷がないとはいえ本当の本当？嘘だったら酷いからね」

「だ、大丈夫だよ。アリサちゃん。ユーノ君が学校に入ってきてベランダの上にあった絵の具をひっくり返したただけなんだから…」

「きゅー…」

「…ならいいけど」

目の前でユーノ君。私たちが昨日助けたフレットが申し訳なさそうにうなだれていた。体にはあちこち絵の具がこびりついていたので私の無傷が確認され次第、アリサちゃんに。

「ほったらかしにしていたのも悪いけどユーノ、あんたもお仕置きだからね。たつぷり、ぎつとり洗ってやるから」

「キューー！」

「あ、あはは、ユーノ君。御愁傷様」

「きゅ、キュー！」

と、連行されていった。なのはちゃんに助けを求めるユーノ君。しかし、なのはちゃんは諦めてね。という顔でアリサちゃんの後を追いかけていった。とてものかな雰囲気だ。

だけど…私の気持ちは晴れていない。私が血の匂いを間違えるはずがない。嫌われるかもしれない、怖がられるかもしれない自分の血筋。…私は吸血鬼だから。

「うー、あー、血いい。頭がくらくらするうつつうつつ」

そんなことを考えていたら、白いカーテンの向こうでベッドに寝かされたツルギ君と保険の先生の会話が聞こえた。

「我慢なさいっ、男の子でしょ。というか転校初日でどうやってたら頭にそんな傷が出来るの？ 闇討ちでも食らったの？」

「ちよつとおいしそうな鳩がいたからとって絞めて今晚のおかずにと。木に登ったら手を滑らせて木から落ちたら妙なところに突き出た枝に頭をぶつけて幹をこするように…」

「聞いているこつちが痛くなるから！ はー、もう。タクシーを呼んであげるからそれまで輸血しときなさい。O型だったかしら？」

「うい。すみません」

「まったく」

保健の先生が輸血パック（常備している学校は稀。というか、あの？）で輸血をされるツルギ君を眺めていた。匂いが言っているあの血はツルギ君の物だと。でも、どうやったら私にかけられるの？それ以前にどうして私は気絶をしていたんだろう？と、考えているとツルギ君が少し警戒しながら私に話しかけてきた。

「な、なあ。月む、じゃなくて、すずか…でいいか？」

「う、うん。何かな？」

「すずかはその…、何だ。何か見なかったか？気絶する前に…」

「？」

「いや…、貧血ならちゃんとレバーとか内臓系統の肉を食えよ。きついかもしれないが好き嫌いしていると今日みたいになるから気をつけるよ」

「あ、うん。頑張るよ」

「ツルギ君。君はお肉をちゃんとお金を出したものを食べなさい。都会の鳩はきつと不味いですよ」

「えっ、だめなの！？」

「駄目です」

…ツルギ君のこと。今度お姉ちゃんに聞いてみようかな？

すずかの思惑とは裏腹にツルギは罪悪感に駆られていた。何故な

ら今から十分ほど前。ちょうど、さすがにショックで忘れた巨人の石事件。に潰される前の出来事を思い出していた。

### ツルギ視点（十分前）

認識障害で姿を消してから数秒もたたないうちに俺は中庭に顔を出す、一瞬で混乱した。

高町なのはが空を飛んでいる。それだけじゃない、なんか細長い物が喋っている。そして、巨人が喋った　！！

しかもなのはの質問に答えている。その上、石の体の所為か喋るたびに頬の周りにひび割れが、口内炎で済むレベルではない。皮膚科の先生、いや、この場合は石工か？なんて考えていたら巨人の目から赤いビームが照射された。俺はそれを避ける。サカサが少し前に作った赤外線光線銃（のちにバズーカ型のコタツと判明した。しかし、火力はサンマが一分で美味しく上手に焼きあがる。俺はサカサに騙されて上手に焼かれた）に似ている光だった。冗談ではない、またこんがり焼かれてたまるか。

「え？なのはちゃん？」

変なことを考えていたら、赤い光の中からさすがに現れた。と同時に巨人が腕を振りかぶる。

「主！」

「まじかつ、くそ！避来矢！」

ここでいくつか注意点がある。

まず、ツルギは正直に言うと天然に近いバカである。そのため、

正解：すずかの盾になるぞ、避来矢、俺にジャケットを！

というセリフを、間違えて。

「すずかを俺の盾にするぞ、避来矢、ジャケットを！」《間違い》

と叫んでしまった。

そんな主とは正反対に避来矢は高性能であるため、ツルギに装着させるバリアジャケットをすずかに装着させた。もちろん避来矢を扱えるのはツルギであるためジャケットは数秒で解除された。が、拳の直撃と同時に展開された鎧はその短い間に彼女を守るという大役を果たした。

ズガアアアアン。

避来矢（鎧状態）をまとったすずかはその衝撃と轟音でその場の記憶と意識を失い、弾き飛ばされた。そして兜にあった大鹿に似せた角の部分がツルギの額に突き刺さったところ鎧は解除され、ツルギに抱きかかえられる。

ぶしゃああああ。額から血が噴き出す。その血はすずかにシャワーのように降り注ぐ。

「わ、わ、やばい避来矢、避来矢今度こそ俺にジャケットを」

すずかを抱きかかえている以上、彼女を自分の血で染め上げてしまふ。足元にあった避来矢（大剣状態）に改めてお願いし、黒の鎧



を纏い、石の拳の残骸を巨人にぶつけて失意のなのは追い越し巨人を殴りつけに行った。まあ、あとは見ての通りというわけだ。（七話参照）

そして、巨人との戦いの後、結界の崩壊を確認したとき、木の枝に引っかかった俺は同時に鎧が解除された。鎧が解除された俺は地面にたたき落とされる前に枝に引っかかり幹に顔をぶつけて…、まあ今に至る。

「しつかり寝てなさいよ。ほら、月村さんも帰らないと狼に食べられますよ」

「わんわん」

「あ、私、ツルギ君に聞き…、いえ、帰ります」

…すずか？

まさか、覚えている？だとしたらまずいな。…どうしたらいいか？サカサに相談するか。しかし、サカサともあれから相談できていない。何かあったのか。…無事であってくれ、サカサの相手をしている皆さん、死なないで。っと、そうだ、念話、念話。アルフとフェイトに連絡を入れないと。保健室を出てから男子トイレの個室に入り避来矢を取り出す。

（避来矢、バルディッシュに繋いで）

（了解。秘匿信号、発信。…バルディッシュ、応答、求ム）

（…ツルギ？なにこれ、魔力もなく、物凄く静かだよまるですぐそばで話しているみたい）

（フェイトか？ちょっと相談がある。…管理局がらみだ）

俺の言葉にフェイトが息をのむ声がした。フェイト、俺も驚いるんだよ。

（…っ、傍受の恐れは？）

……………あ。

（…ツルギ）

フェイトの声が一気に零度を切る。すみません。忘れてまし

（フェイト嬢。質問、回答。可能性、極小）

（…どうして？）

避来矢、なんで？自分でやっというてなんだけど。

（バルディツシュ、我。修理時、同調。我、バルディツシュ、同機、存在。認識、障害、ジャミング、最高域）

（つまり、バルディツシュを修理したときに避来矢はバルディツシュの周波に合わせて、同機体状態になった。しかもジャミングが最高レベルだから心配ないと？）

フェイト。よくわかったな。ちょっと理解に俺は困ったのに。つまり超高性能な系電話ということか。

（…でも）

（フェイト嬢、バルディッシュ、連絡前、念話、信号、感知？）

（………わかった。アルフに確認したけど、一番近くにいるアルフもわからなかったみたいだし、一応信じる。だけどツルギ、今度から気を付けてね）

（大変申し訳ございませんでした！絶品と評された翠屋のシュークリーム買っていくから許してください！）

俺は今日会ったこと。アリサと同じ学校にいることジュエルシードを取り逃したことからなのはのことにについてすべては伝えろフェイトはしばらくの沈黙から質問をしてきた。

（…ツルギ、いいの？本当に私に協力して？今ならアルフも気づかない…、その知り合いと敵対することも）

（フェイト。俺は気にしていない。ばれなきゃ大丈夫だ）

（でも、管理局、異世界と敵対するんだよ。文字通り世界を敵に回すんだよ）

（お母さんのこともあるのにこっちの心配なんてするな。まったくそのいじらしさ・優しさに惚れるぞ？それに俺は見ず知らずの世界よりフェイトを選ぶよ）

間

（………IUFRY&'C\$R&RE\$O&'F)U'G" 'T)  
F&(D&(CVXD%GHL!~!)

(…フェイト?)

バグった?

(な案ああな孔奈々七ああアナ七何でもないよっ!)

(…あと、すずかを襲ってきたやつが気になるから今日は遅くなる)

(わ、わかったよ、何かあったらこっちから連絡を入れるかりや!)

りや?

(とにかく、連絡終わり!)

念話があちらから切られた。まあ、あれだけ元気なら今夜からでもフェイトもジュエルシード探索も可能だろう。と、考えていたら頭上から大量の水が降ってきた。…まさか、水道管が破裂?下水を頭から…。

ガンガン。

「おいっ、出てこいよ転校生。」

「…ん、誰かと思えば、クラスメート?か?」

トイレの個室から出ると数人の男子生徒がにやにやした顔で俺が出てくるのを待ち構えていた。そのうちの一人は制服の袖と裾が濡

れている。近くにはバケツ。そしてホースに繋がれ水が出しっぱなしにされている。…つまり、あれか。

「あー、確認するがこれはいじめ？という奴か？」

とりあえず確認。人数は四人。全員が同じような顔をしていて目的は同じように感じられる。

「わかってんじゃん。転校したばかりの奴が可愛くばああっ」

奥から二番目の男子生徒が笑うかのように発言した。いや、しよ  
うとしたがツルギはそれをすべて聞く前にその口を黙らせた。

「はいっ、確認終了」

当たり前。と聞き終えた後に一気に相手の間合いに踏み込み、鳩尾  
に鉄拳を入れる。

「じゃあ、ぼこる。全員」

一応、才能なくても学習はするんですよ。英語が喋れなくても外国では何度もサカサと一緒に秘密組織を相手に壊滅させた。いくら百パーセントの援護があるとはいえ十歳に満たない俺を前線に出すなよ。まあ、それは置いといて。

相手の目的は表情を見ればわかる。初対面で相手に舐められると後々面倒だからここで徹底的に潰す。

それにいじめイクナイ。よね、忍さん。

ツルギは確かに才能はない。しかし、それは達人やその手の人たちからの目線であり、一般人やド素人の目から見たらそれはわから

ない。それでいながら戦いの関しての環境・経験値だけではどの部隊よりも豊富である。簡単に言うと三流以上二流以下の実力の持ち主である。

一流の達人からしてみればツルギの戦い方はむらがあるし、次に倒す輩の順番。まずは一番弱い奴から潰して数を減らし最後に対象を取るのが常套手段。だが、ツルギは手前でもなければ、一番奥でもない。発言した奴にとびかかり、その後に残った三人を物理・精神的に潰した。

「じゃあ、今度こんな真似したら本格的に潰すからな」

「……オス、すいませんでしたっ」「……」

トイレでよかった。だつてすぐに血とか流せるんだから俺は手を拭きながらトイレを後にした。

「ツルギ君、あの、一応君に伝えた方がいいかと思うんだが……」

「どうしたんですか渋谷先生？」

トイレでO・S I・O・K Iを終えた後、校長室に向かう途中で担任に呼び止められた。すると宿直室に案内された。そこには大きな段ボールが二つ。まだあったのか？

「いや、君の保護者から教員にと、先程宅配便で来たやつがあるんだが、どうしよう?」

捨ててください。と、すぐには言えない。つい先ほどジュエルシード事件に関係しているかもしれない。なのはに持ってたが。もしかしたらこの中身はジュエルシードかもしれない。…仕方ない。

「あの、これを持ち帰ってもいいですか？」

「ああ、構わないが」

とりあえず、家まで持っていくか。うう、なんであんな町はずれに拠点なんかしくんだよ。まあ、事情が事情だしフェイトたちもいるから好都合なんだが…。これも下着だったらバルディッシュで干切りにされかねん。あ、焼却炉の前で確認するか。あそこなら人目に付かないし、よし、そうしよう。

「あ、ツルギ君。よかったまだ学校にいたんだ」

先生から段ボールを受け取り、焼却炉へ向かおうとしたら、すずからしき声に呼び止められた。だって、段ボール二箱もあるんだぜ。前が見えん。段ボールの上に置いた鞆、正確には避来矢<sup>ミツ</sup>に誘導してもらっている身としては声でしか判断がつかん。

「んー、すずか…か？」

「凄い量だね。手伝おうか？」

「とうかどうやって俺だと判断したんだ？段ボールで上半身隠れているのに」

「えーと、感かな？（血の匂いでなんて言えないし）」

「まあ、女の子にこれを持たせるわけには…。重いし（社会的な意味で）」

「それじゃあ、鞆だけでも」

さすがが段ボールの上にある俺の鞆をとろうしたときに避来矢から念話で叫ばれる。

（主！すずか嬢、接触、厳禁。我、主、以外、人物、接触。縮小、機能、強制、解除！）

そういえば、鎧を纏った時もすぐに解除されたっけ、て、解除はやばい。下手したら元の大きさに戻った避来矢に貫かれる。あの時の蟹男みたいに。

「ちょ、すずか、ストップだ！」

しかし、すずかはすでに鞆に手をかけていた。そして運悪く避来矢に触れた。更に腰を少し低くした俺は慌てて引き止めようとした。それは段ボールを上に取り投げる形になる。以下、次のような現象が起こる。

放り投げられた段ボールと共に回転しながら鞆と共に放り投げられる避来矢。元の大きさに戻りながら段ボールを引き裂く。ついでに紙一重ですずかの制服に切れ目を入れる。

元の大きさに戻っていきながら避来矢は廊下に突き刺さる。ちなみに避来矢の刀身>すずかの身長。

すずかの顎に避来矢の柄がアッパーカットのように直撃。すずか気絶。

散らばる段ボールの中身。中は大量のエロ本。その上に崩れ落ち



るすずか。後を追うように元の大きさに戻った避来矢がすずかの方に倒れこむ。

ツルギ慌てて避来矢に飛びつき避来矢の縮小を行う。すずかを巻き込みながら倒れこむ。その時、すずかの制服も掴む。切れ目の入った制服が破れる。

アリサとは別にすずかを探していたのはが合流。エロ本を下に、服の破けたすずか、それに覆いかぶさるツルギを目撃。

そして、五話の冒頭に至る。

「ツルギのバカアアアアア、電圧アップウウウウウウ！」

「あががががががが」

もちろん、避来矢やジュエルシード事件のことを言えるわけもない。電気ショックを浴び続けた俺はそのまま意識を失った。

すずかは避来矢のことは覚えていなかった。制服が不良品だったと誤魔化した（避来矢協力）が、しかし、服を破いたことの報復として翌日。忍さん（自分の姉）の好きなところを十個、屋上で、声高らかに、告白するように言われた。とんだ羞恥プレイだ！

## 第八話　すずか、脱がせました。（後書き）

あとがき

すずか「ツルギ君！」

ツルギ「はいっ、今回は誠にすみませんでした！」

避来矢「謝罪。すずか嬢、最大級、謝罪」

ツルギは土下座を行う。

避来矢は主のそばで刀身をバターののように曲げて謝る。（本編ではそんなこと器用な真似できません）

たかB。その横で黒焦げで転がっている。

たかB「……………」

フェイト「返事がない。まるで屍…の真似をしているよう」

たかB「（ビクッ）」

フェイト「前回、なのはが中心出てきたら。今度は私が雑に扱われるし」

フェイト、バルディッシュは最大レベルで雷を纏わらせる。

すずか「…フェイトちゃん。かわりに脱がされる？」

フェイト「それはちょっと…」

ツルギ「次回予告！」

避来矢「降臨。八咫鳥！」

ついさっき、たかBが攻撃されたのを見て逃げるのに必死な主人公。とその剣。

すずか「あ、ツルギ君。まだ、終わってないよ」

フェイト「そうだよ、さあ。O・H A・N A・S Iしようか」

ツルギ「あーーーーー」

たかBより追伸。今までのお話で訂正箇所の発見が多くて、今回の更新遅れてしまいました。これからは一月に一・二話のペースで書きますので、拙い作者ではありますがお付き合い下さい。

## 第九話 降臨、八咫鳥（前書き）

はつきり言おう。これは無修正だ。  
できたてはやはやだ。

見直してません。

誤字脱字ありまくりかも？

それでも読んで、おねがいします。

## 第九話 降臨、八咫鳥

（こちら、フェイト。異常無し。アルフに交代してジュエルシード搜索に戻るよ）

こちらの世界で言うと日にちが変わった深夜。私、フェイトはある女の子を遠くから監視している。管理局と関係していると思われる高町なのはではなく、紺色のおさげの女の子。月村すずかという少女だ。

（こちら、ツルギ。ありがとうなフェイト。悪いな、こっちは寝ているのに）

（別に、かまわない。…でも、あの子が本当に関係しているの？）

朝から夕方にかけてツルギが、夕方から深夜零時までが私。そしてそこから明け方に関してはアルフにあの子の監視を担当してもらっており、各自交代までは自由時間兼休養兼ジュエルシード探索にあてている。

ツルギから連絡を受け、彼女を見張る。ツルギが学校に帰ってきたから、彼女を監視していたが何の変化も見られない。むしろ、こちらの監視に感づいているかもしれない。時折彼女がこちらに振り返るのだ。まだ、ばれてはいないと思うけれど…。

（まあ、その今日のジュエルシードの事件。あれはすずかを狙っていた。確実に安全が確認できるまではすずかを監視したほうがいい。それに今までのジュエルシードと違って、今回はその原動力となった生き物がいないんだ。だとしたら）

(…誰かが意図的にジュエルシードを使い、あの子を狙った)

(それに忍さんを泣かせたくはないしね)

(…ツルギ。忍って誰?)

初めて聞く名前だけど?

(すずかの姉ちゃんでも美人で…(略)…な人だ)

…イラッ。

(……………ふーん)

私の苛立ちにツルギは感じることはなく(念話だから仕方がない)  
、ツルギの声に明るさが一段と足されたが、すぐに声のトーンが落ちる。

(それで、……凄い美形の恋人がいるんだ)

(…そっか)

ツルギはそれから愚痴を漏らしながら念話を切った。今の様子だとツルギは完全に忍という人を諦めているようだ。うんうん、そうだよね。ツルギは…。

「楽しそうだね、フェイト」

「アルフ？」

私と交代するためにやってきたアルフは何故か悲しさと嬉しさを混ぜたかのような複雑な顔をしていた。深夜、街灯に照らされた緋色の髪を揺らしながら。

「ねえ、フエイト。このまま逃げてもいいじゃないかい？私は……何でもない。監視、交代するよ」

「……………」

アルフ。…ごめんね。心配かけて、そうだ私はお母さんのためにモジュールシードを…。

「フエイト！ツルギ！あの子が動いた！」

心の中で謝りかけたその時、事態は一変した。

月村すずか。彼女が魔力も使わずに三メートルはある屋敷の窓から飛び降り郊外へと向かった。雲に隠れた満月を背中に異様な雰囲気纏わせて夜空を駆け抜けていた。

すずか視点。

のどが渴く。嫌なのに、私は外へと赴く。私はまだパートナーがいない吸血鬼だから。

目の前にはお酒の入った女性。水商売、キャバクラというお酒を男の人と飲むお仕事だと私は判断している。彼女はこれから自宅に

でも帰るのか赤い顔をして暗い夜道を歩いている。紅潮した肌、透ける血管、香水の中から少しだけ香る汗のにおい。そこまで判断すると限界だった。

「ふーん、ふふー…あ」

鼻歌を歌っていた女性の首筋に一撃を加えて昏倒させる。そしてその首筋に私の牙をつきたてようとしたその時、固く重い物が私の頭を襲った。

がっ。

女性から弾き飛ばされてからようやく私の頭を襲った物を確認した。それはそれは人一人を張り付けにできそうな十字架だった。

「はっはっはっ、やはり、本性を現しましたね。夜の眷属。昼間は邪魔が入りましたが今度はそうはいきません」

「…っ」

頭に強い衝撃を受けて意識も朦朧として体も動かない。頭からはかなりの出血を伴っていた。自分の血でほとんど視界が奪われた中、振りかざされた銀色に光る槍。そして、その槍を包み込む金の光輪だった

「仲間が来ないうちに死んでもらいますかね。祝福されたハルベルト。バチカンで清められたこの槍であなたを滅してあ」

「サンダーレイジ！」



ズドオオオオオオン！

聞いたことのない女の子の声が鳴り響くと同時に金の閃光と共に私は意識を失った。

フェイト視点

「サnderレイジ！」

バインド効果のある魔法で槍を持ったフードの人間を攻撃した。金の光輪が槍をとらえ締まると同時に光輪を中心に雷が十字に走る。

ズドオオオオオオン！

「…フェイト、やりすぎじゃ」

アルフが辺りに結界を張りながら私に声をかける。

「う、でも、急だったし、女の子にあんなことする人だよ」

一応非殺傷だよ。大丈夫、よくて無傷、悪くても半身不随だから。

「…やれやれ、ヴァンパイア、桃色の砲撃者、デーモンナイト。と続いて、狼女と死神まで来られましたか。この国は随分と種族が豊富ですね」

立ち込める土煙の中で槍が怪しげな光を放ちながら進み寄ってくる。

「嘘だろ、直撃のはずだよ!」

驚くアルフに私は再度、魔力をバルディッシュに込める。

「ええ、当たりました。しかしね、私の持つこのハルベルトは特別仕様なので…」

「ジュエルシールドライブ。アキレウス・アーマー」

槍からデバイスにも似た声が鳴り響き、青白い光にフードの人が包まれる。これはジュエルシールドを意図的に使っている!?

「ええい、バルディッシュ、パワー最大!サンダーレイジ!」

先ほど打ち込んだ魔法よりもかなり威力を上乗せしているサンダーレイジを放つ。

ガガガガッガガッガアアアン!!

辺り一体を飲み込むほどの雷の奔流が近くにあった街灯や車、自動販売機などを丸焼きにしていく。

「…結界内でよかった。すずか、とかいう子も巻き込んだじゃうから」

「…いんや、フェイト。マダみたいだ、よ!」

ガキィッ!

「その通りですよ。狼女さん」

立ち込める黒煙を突き破って、青白いプレートアーマーが私に向かって槍をつきだしてきた。が、それを割って入ったアルフが魔力で強化した両手で受け止める。

「そんな、ジュエルシードの鎧!？」

「ジュエルシード。と呼ばれておられるんですね。私は賢者の石と呼んでいるのですが」

「どうでもいいさっ、こんな鎧。ぶっ壊してジュエルシードをいただくよ!」

「残念ですが、鎧だけではありません!」

「パワーアックス、モード」

アルフが受け止めた槍に急激な変化が見られる。槍の片刃が膨張し半月状態になると、残りの片刃は巨大なトンカチの形へと変貌した。その巨大さは約一メートル。アルフは掴み取るように押さええていたためそのような手を弾かれてしまい無防備となる。

「アルフ!」

「ザンバーモード」

ガキイイイッ。

「速いつ、だが!」

私はすぐさまバルディッシュを鎌の形から雷の大剣へと変化させ、巨大な斧を下から上に払いのけた。が、その代償は大きかった。相手は払いのけられた反動を生かして体を一回転。ハンマーの部分で私とアルフをまとめて殴り飛ばした。

ゴツ。

思い一撃を受け、私とアルフはコンクリートの塀を突き破って民家の中まで突っ込む。

「があ」

「くっ」

咳き込みながら体勢を立て直すと向こうからの追撃が待っていた。

「く、バルディッシュ」

「ディフェンサー」

ガギイ。

魔力で作り上げた障壁を展開。それから数瞬後に私たちを殴り飛ばした鉄槌が振り下される。

「潰れる潰れる潰れる潰れる」

ビキキイ。



「バルディツ…」

弾き飛ばされた勢いで私はバルディツシュを手放していた。そして、

「がはっ」

押さえつけるかのように胸元に甲冑の脚が襲いかかる。私の後ろにはアルフがいたからコンクリートの痛みはない。でも、目の前には巨大なハンマーの陰。

そして、影を確認すると同時に聞こえたツルギの声。避来矢で結界に突入した？それともアルフが気を失ったからここにいるの？…どちらでもいいか。

「フエイト！」

スローモーションのようにツルギがこちらに向かってくる。手には避来矢と甲冑の人がずずかを殴り飛ばした巨大な十字架。

そして、今、十字架の方を投げていた。

でも、それはあまりにも遅すぎる。小石やボールなら私へ振り下されるハンマーに届いたかもしれないが、十字架はあまりに重すぎる上に遅すぎる。

「死・ね」

お母さん、ごめんなさい。お手伝い、何もできなくて。アルフ、ごめんね。ずっと泣かせて、ずっと付き合わせて、わがまま言っ

ツルギ、ごめん。約束破って。私、少しもツルギに…。

ゴガアアア。

私は潰される。と、覚悟した時、横殴りの白い物体が見えた。それは決して間に合わないと思われた白い十字架だった。考えられないほど物凄い勢いで十字架は甲冑に当たり砕け散る。その勢いは巨大なハンマーと甲冑の人を弾き飛ばすほどだった。

「避来矢！鎧に換装！」

「了解、主！」

黒い光が避来矢とツルギを包み込むと、悪魔の面をつけた先程とは違うプレートアーマーが現れた。青白い甲冑は角張ったフォルムに対し、ツルギの鎧は丸みを帯びていた。

「全速」

ツルギは体制をやや倒し、前傾姿勢となる。

「全開っ」

一步。駆け出すとツルギの足元にあったコンクリートは砕け散っていた。

「天使いっ」

避来矢の声にツルギの声が混じっているのではないかと錯覚させるほど力強く響く。

「両断！」

私とバルディッシュに勝るとも劣らない加速度を見せた黒い鎧は大地を砕きながら飛ぶ。

「蹴リイイイイイイ！！」

そして、私の前で青が黒に弾き飛ばされた。

ガッガアアアアン！

金属音が鳴り響きながら青の甲冑の人が遠くまで弾き飛ばされると、ツルギが念話を送ってきた。

（ごめん、フェイト、アルフ。遅れた！）

「アルフ嬢、右腕、負傷。危険度、中。フェイト嬢、胸部、圧迫、骨格、亀裂、発生、可能性。危険度、小、ナイシ、中。主、同等、撤退、推薦」

「つ、かほ、な、何をしたの？」

私は咳き込みながらツルギに何をしたのかを聞いた。どうすればあんな重い物を高速で投げ飛ばせるのかを知りたかった。

（天使両断キックだ）

「そつちじゃなくて！か、かふ」

そつちの攻撃方法じゃなくて、投法手段だよ。



「フェイト嬢、ツツコミ、厳禁。呼吸器、系統、炎症、有。念話、推薦」

（どうやってあんな重い物を投げたのっ、て、聞いてんの！しかも、ずっと念話だし）

（えつとな、夕方辺りによやくジュエルシード一個、浄化できてな。その遠距離の奴にも攻撃できる機能はないか。それがこれ。避来矢、鎧解除。同時に八咫鳥形態）

「了解。形式、八咫鳥。警告、対抗者、飛道具、所持、可能性、大。早急、決着、推薦。風向き、良好」

避来矢どういうこと？相手に飛道具使いがいたらまずいの？風向き？

次の瞬間、黒の鎧はなくなり、避来矢本体が現れ、ツルギはその場に仁王立ちになる。そして、先程は暗がりによく見えなかったが、ツルギの一メートル先にはツルギと同じくらいの大きさの透明なシヤボン玉が浮いていた。その奥に遠くに飛ばされたはずの青白い甲冑の人が立ち上がるうとしていた。

（ツ、ツルギ！）

（大丈夫。だと、思うよ。フェイト）

ツルギはシヤボン玉を前にして、前屈をするかのように体を折り、一掴みの瓦礫を拾う。そして、それをおもむろに軽くシヤボン玉に投げつけた。

「また、きさま、っ」

ヒヤゴツ、ガンツ。

瓦礫がシャボン玉に触れた瞬間にはもう瓦礫は青白い甲冑の人の右腕に当たり、ハンマーを落としながら崩れ落ちる。

「…え？」

私は胸が苦しいのを忘れて言葉を発した。

「つまりな、この元k「加速球」…こほん。加速球は見ての通り、無差別に触れたものを見える位置まで超高速で飛ばす代物らしい。代わりに俺は足を動かせないんだがな」

ああ、だから前屈したのかって、動けない！？

（ツルギ、それじゃあ）

「それだけじゃない。反対側から来た物も超高速にするから、相手が石ころでも投げてきたらこっちの頭が消し飛ぶ」

（思いっきり諸刃の剣だ。じゃあ、避来矢が警告していたのはそのこと！？）

「そうだけど、こちら側が休みなくどんなに軽い物でもいいから攻撃を加えればっ」

ズガガガガガガガガ。

「ゲアアアアアアアアアア！」

ツルギは小石や砂利を掻き取り、シャボン玉に投げつける。すると散弾を受けたかのように青白い甲冑に被弾し、ひびが生まれていく。ついでにあの重そうなハンマーもその勢いに巻き込まれ排水路へと落ちて行った。

（でも、相手がダメージ無視して攻撃してきたら）

「…される前に攻撃すればいいんだろ？ツルギ？」

「その通り、アルフ、大正解」

いつの間にか立ち上がっていたアルフが瓦礫を片手に答えた。

「これが、あたしの分」

ボガン。

アルフが人の頭ぐらいいはありそうな瓦礫を剛速球で投げつける。ちなみに普通の人間にはまず見えない速度で。それは避来矢で加速され、まるで榴弾のように青白い甲冑の膝で炸裂し、再び立ち上がるうとした甲冑は三度崩れ落ちる。

「これが、ツルギが遅れた分」

アルフが近くにあった電柱を殴り倒し、電柱に設置された装置を投げつける。と、上体をおこした甲冑は高速スライダーのように上空へとまい上がり避歩道橋にはりつけにされる。

ズドオオオオオンッ！

「ガハアッ」

甲冑の人は歩道橋にぶつかった衝撃で咳き込む。が、アルフの攻撃、いや、怒りは収まっていない。

「そして、これがああ」

ツルギは一度、加速球を消すと張り付けられた甲冑に対峙するように姿勢を直し、加速球を作り出す。そして、アルフが倒した電柱自体の真ん中に抜き手で突き刺し下手投げと言われる投法で電柱を投げつけた。

「フェイトの分だああああああああっ！！」

加速した電柱は甲冑にあたると、その先端を徐々に砕きながらも天高く舞い上がっていく。そして、甲冑の中心。命中した箇所を初め、蟻の巣のように亀裂が様々な箇所へといきわたる。電柱が完全に砕け散ると甲冑は見るも無残な亀裂だらけになっていた。その上、五百メートルはある上空に放り投げられた者に重力に逆らうすべは持っていなかった。

???視点。

「…わ、私は司祭なっただぞ！賢者の石、賢者の石！私に異を討伐する力をくれたんじゃないのか賢者の石iiiiiiiiiii！」

男は少し前までは彫刻家として一世を風靡していた。が、この町に来てジュエルシードを拾ったことで大きく男の生活は一変する。

この町に来て、青い石を三つ拾い、その力におぼれた。そして、曲がった正義感で協会に寄付すべき巨大天使の像。天使像サンダルフォンで独自の情報で知った吸血鬼の存在。月村すずかの暗殺を狙うものは・ユーノ・ツルギによって、撃退。自ら赴いた結果、こうなった。

ジュエルシードに関わる前には司祭の手伝いを行い町の奉仕活動にも参加していた彼はその力で司祭を襲い、病院送りにした後で自分がその位置にふさわしいと思いだし今回の暗殺を企てた。

「わ、私は神に選ば」

ガッシャアアアアアアアアンツ！

男の言葉は続かない。地面に勢いよく叩き付けられ、砕かれた鎧はステンドグラスのように煌びやかな光を発しながらジュエルシードの形へと変化していった。

ツルギ視点。

「ジュエルシード。封印。番号、三。…主、既存、ジュエルシード、一個、浄化、終了。機能、選択」

避来矢がジュエルシード封印を行うとタイミングよく、浄化の一つが終わったらしい。まあ、この状況なら…。腕を折ったかのように見えるアルフに、息苦しそうなフェイト。そして、結界の外に置いてきたすずか。考えられることは次第に絞られる。

「回復魔法みたいのはあるか？あるならそれで。すぐ使うから」

「了解、主。形式、八咫の鏡。機能、解放。使用、方法、伝達」

避来矢から声が響くと、避来矢本体が消えると同時に、八咫鳥の時と似たような丸い一抱えの鏡、厚さ十センチ程度。表は傷一つない鏡。裏には二匹の蛇がお互いのしっぽに食いついている絵が彫られている。

それを両手で抱えながらフェイトとアルフのそばによる。

「フェイト、アルフ。二人とも治すから、じつとしてくれよ」

「ツルギ？」

使用条件がちよつと変だから無駄打ちできない。なんで、使うと腹が異様に減るの？

後に知るが、俺の体にある栄養素や体力、気力を使って相手を治すんだと。つまり、相手の足りないところは俺の根性で補う。ということね。

ひよひよ。

そんな効果音が聞こえてきそうにゆったりとした白い光が鏡から放たれ二人を包み込むと同時に。

ぐうううううううう。

「…っ」

「「…ぷ」」



「…し、……がはこ…て…」

「…た、…ルぎ…る…」

何人かが私の前で話している。誰？お姉ちゃん？

目の前にいる人影は意識がはつきりとしなからわからない。そして、意識がはつきりするころには人影は三つから一つになっていた。

「…お、気が付いたかすずか。いかんぞ。女の子がこんな時間にこんなところを歩いていたら。変質者に襲われるぞ」

そうだった、私は頭に、頭に？怪我が…ない？

くきゅうつうつうつ。

「…う、四人分はきついか」

ツルギ君はお腹を押さえながらふらつく。

「…ツルギ君？」

「ほれ、立てるか？」

ツルギ君が差し出す右手。そしてそこには当然、腕があり、血管がある。私は血を吸いに夜の、夜の街に…



「う、あ、かはあ」

「すずか?! くそ、すぐに家に運んでやるから、がんばれっ」

私が気を失うまでに行っていたことを思い出すとすぐに体は血を求めた。そして、私に肩を貸して運ばうとするツルギ君の首筋。そこには赤い血が巡る管が透けて見えて。

「たしか、近くに前に行った動物病院があつたか、その人にたす、け?」

ぞふ。

「す、すずか?」

私は食らいついていた。獣のように標的の首筋に牙を立てて、そこに流れる血を求めて。

ツルギ君が啞然としている顔に罪悪感を少しも感じずに。

ごくつ。ごくつ。

ただただ自分の喉を血で潤した。

## 第九話 降臨、八咫鳥（後書き）

あとがき 戦闘解説編。

たかB「さあ、今回出てきましたジュエルシードでできた鎧。何故、フェイトの魔法が効かずにツルギの攻撃や、投石が来たかという。単に魔法防御が高く物理防御が弱かったから。以上。質問がある人は」

フェイト「はい、質問です」

たかB「却下します！」

アルフ「おいこら」

たかB「はい、わかりました。下に表を書くんでそれ参考に」

デイベインバスター

物理攻撃力（以下AT）2000

魔法攻撃力（以下MAT）7000

天使両断キック

AT7500

MAT0

サンダーブレード

AT300

MAT3000

サンダーレイジ

AT1000

MAT5000

八咫鳥（投げる物の固さ・重さによって変化。今回は電柱）

AT10000

MAT0

たかB「で、今回のジュエルシードの鎧。Jアーマーとも呼ばうか。それは」

物理防御力（以下DF）3000

魔法防御力（以下 MDF）6500

避来矢（鎧形態）

DF5000→15000

MDF10000→20000

なのは・フェイトのバリアジャケット

DF4500

MDF6000

ツルギ「避来矢防御力高っ!？」

たかB「まあ、時間制限あるし、飛べないし、攻撃当たればその分使用時間も減るし、魔法攻撃力がないからなあ」

フェイト「あれ、八咫鳥も消費エネルギーに含むの?」

たかB「含みません。ぶっちゃけ鎧形態以外の機能でエネルギー

が消費されることはありません。あと、数時間おけばエネルギーは完全回復。ただし、八咫の鏡はツルギのスタミナが尽きたら使えません」

アルフ「チートだねえ。でも、ハイリスクハイリターン。相手が銃を持っていたりしたらアウト。しかも鎧を纏っていない分無防備かつ回避は不可能に近いし…」

ツルギ「用途が広くて、使い勝手が難しいな」

たかB「なんか久しぶりにこのコーナーをやったような…。あとがきらしいあとがきだな」

フェイト「はいっ、それでは次回予告」

アルフ「歓迎会、キックオフ」

ツルギ「ああ、やっと平和なお話なのかな」

たかB「それはどうだろう?」

## 第十話 歓迎会キックオフ（前書き）

回りまわって、今回はアリサのターン！

すずかに吸血されたからといって、

まだ、すずかのターンではない。

すいません、ツンデレは書きやすいんで…。

すずかは二話ぐらい後には書きますのでご容赦を。

## 第十話 歓迎会キックオフ

モサモサ。

「ツルギ、ほら、それぐらいのシュート決めなさいよっ」

「ツルギ君、ファイト」

「でも、人に向かってシュートは駄目だからねー」

「きゅー」

モサモサ。

すずかに血を吸われた翌日。何故か、俺は海鳴市のあるグラウンドでアリサ・すずか・なのは・ユーノ、…名前は覚えてたぞ。の声援を受けて、サッカーをやっていた。…アフロな頭で。

モサモサ。

「く、何だあのアフロ、技術はないのにすげー速いぞ」

「昨日、転校してきたらしいぞ。しかも女連れだ」

「くそ、見せつけやがって」

「絶対潰す。ボールを持っていなくてもスライディングで、顔を」

モサモサ。

それはただのハイキックじゃないかモサ？…いかん語尾までアフロ化してきた。アフロの原因は我が家の雷様<sup>フェイト</sup>である。

昨晚、すずかに血を吸われる。八咫の鏡を使った後の疲労及び吸血による軽い貧血で気を失う。すずかのことはフェイトやアルフには話していない。

吸血前にフェイトとアルフが落ちた青甲冑のハンマーを探しに行く。結局、ハンマーは見つからなかった。

すずか、フェイト達が戻ってくる前に俺を近くの公衆電話ボックスの中に入れてその場を立ち去る。その時の俺は記憶を失っていたが、避来矢から事情を知る。

フェイト・アルフが気絶している俺を発見。急いで俺を担いで家に運ぶ。俺、二人の看病の元、早朝に目が覚める。

朝。俺、学校に行こうとするがフェイトに止められる。抗議する。フェイトもそれに対して抗議する。お互いヒートアップ。何とか言いくるめた。やさぐれるフェイト。

サンダーレイジ。

頭、アフロ化。

昼休み。すずかが昨日のことに關して覚えていないかをどことなく質問してくるが、避来矢の認識障害で何とかごまかす。すずかをジュエルシード關係に巻き込みたくないこととお互いに秘密にしているほうが、知らない方がいいこともあると思ったから。ちなみに、忍さんのいいところ宣言プレイは実行された。

放課後、アリサにサッカー観戦へと拉致られる。一応確認のためあと数日はすずかのそばにいた方がいいと考えてはいたが出場は考えていなかった。

サッカー前半終了間際、なのはたちの応援する翠FCの選手の一人が負傷により退場。交代の選手がいないのでこのまま中止かと思われた時、アリサに首を掴まれ、監督である土郎さん（なのはの父ちゃん）の元に持っていかれる。俺、出場。

そして、翠FCは勝利を収めた。…俺はずっとボールをキープして逃げ回るといふ指示を受けたのでそれを実行。攻めず守らずの体勢を維持しながら時々、ロングシュート打っていた。一本も入らなかったけどね。

「まったく、出場するなんて考えてなかったモサ」

「ぶふ、ツルギ君。その喋り方やめて」

「きゅきゅー」

そして、なのはの実家である翠屋で祝勝会兼俺の歓迎会。

いつの間に翠FCに入ってたんだ俺？

一応、時間が空いたら出るとだけ、伝えました。

なのはが座っている小さなテーブルセットとその上にいるユーノを挟んで愚痴を垂れている俺。ちなみに臨時参戦ということもあつてかお店の外にある席でのんびりとケーキと紅茶をいただいていた。

「いや、しかしツルギ君。君は武術でもしているのかね？明らかに相手の動きに対しての反応をしている」

「土郎さん。ツルギはしていた。ですよ。けど、才能がないからサカサと一緒に海外を旅していたんですよ」

紅茶のお代わりを持ってやってきた土郎さん。土郎さんの質問を俺の代わりに答えるアリサ。

いや、別に才能がないと言われるのには慣れたけどね。…本当なんだからね。

それにしても本当になのはの親父なのか？兄貴の間違いじゃ…？否、なのはの兄貴はあの忍さんの…忍さんの…。



「…ツルギ君。どうしたのかね？私となのはの顔を見比べて、涙を流し始めて」

「…気にしないでください」

うつ、この二人を見比べて兄貴の顔を想像したらすげーイケメンだった。ちくしょー！

まだ引きずってんな、俺。

涙を流している俺の頭にすずかが手を置いて撫でてくる。

「はいはい、泣かない泣かない」

「…すずか。その優しさが今はつらい」

姉妹だからとても似ているんだよ。

涙が、涙が止まらねええええええつ。

「…馬鹿ね」

そんな俺を見て、アリサはため息交じりにケーキをついばんでいた。

アリサ視点。

「本当に馬鹿なんだから！」

あれから、なのはの母、桃子さん。姉、美由希さん。を見て、一

喜一憂するツルギは周りから見れば愉快に見えたかもしれないが私から見れば神経を逆なでさせるものでしかなかった。…あいつはやっぱり年上が好きなんだろうか。初めて会った時、転校してくる時は同じ年かと思っていたのに一歳年上で、しかも年上好きとなると…。

「べつにどうでもいけどねっ」

午後八時。私は塾のある予備校の外で執事の鮫島が車を持っている。もうすぐ来るはずなのだが、どうやら渋滞にはまって動けないでいるらしい。まったく最近面白くな…。

「おりよ、アリサ？」

「ツ、ツルギ?! なんであんたがここにいるのよ」

「それはちよっと、前までストーキングをおうっ」

グワシッ。

私は驚きながらも突然声をかけてきたツルギの顔にアイアンクロ  
ーを行う。

私のこの手が真っ赤に燃える。この手で潰せと輝き叫ぶ。ひい  
い殺、

「誰の？」

「盛大に間違えた! えーと、その。そう、黒いストッキングを見て、それが怒っていて、はあはあ言って、逃げて、自己弁護していただけたよ」

「ちょっと頭を冷やそうか」

アリサ・バーニングフィンガー！

めきよ。

「ぐぎゃああああっ」

ツルギにフィンガーを行って、三分後。  
ツルギ、事情説明中。

「つまり、あんたはランニングをしていたら道に迷った。それで黒いストッキングをつけた女の人に声をかけたのはいいけどランニングで疲れていて息を切らせながら道を尋ねたら変態だと見破られて自己弁護しながらここまで逃げてきたわけね」

「そうでございます。お奉行様。一つ訂正させてください。俺は変態じゃない」

「肯定しなさい」

「できるか、ここで認めたら…」

土下座をしながら顔を上げて口答えをしてくるツルギに対して、私は携帯を取り出しながら言う。

「えーと、動画投稿コーナー。自分の母親と同世代の人を見て、きれいなお姉さんっ」と言いながら大げさにはしゃいでいた可哀相な男の子。投こ」

「変態でいいです」

再び、額を地面につけるツルギ。そして、私は追い打ちをかけるツルギのついている嘘に。ツルギがランニングごときで息を切らせることなどないことに。

「で、正直に言いなさい。ランニング以外は本当でしょうけど、あんたはこんな時間まで何をやっていたの？」

「えーと、黙秘させてください」

「ねえ、ツルギ、立ちなさい。……正直に言っ、骨にひびが入るのと、正直に言っ、内臓にダメージがあるの。嘘を貫き通して。どっちがいい」

「今の空白、何?!俺、これからどうなるのっ」

「なんで私があんたを立たせたかわかる？」

嘘貫くつもりなんだ もー、ツルギのくせに生意気だ。私は左腕を直角に曲げて腰を落とす。

どんなものでも打ち貫く。リボルディング…。

「もういいだろっ、放っておいてくれよ、マネージャーッ!」

「だ、駄目だよ。先生だって治療とリハビリをすれば大会には間に合っつて…」

塾の隣にある整骨院から男の子、後を追うように女の子が出てき

た。その後ろからその保護者らしき母親が二人出てきた。あの男の子は確か怪我をしてツルギと交代した子よね。

「良いんだよ。どうせ、どうせ才能のかけらもない俺なんて」

「っ」

「いても意味がないんだ！」

ツルギ、あんたに言ったわけじゃないのよ。だから、涙目はやめなさい。て、え、なに？なんで私の肩を掴んでるの？ちよ、そんな真剣な顔しないで…。顔が…。

「っ、ツルギ？」

「…アリサ。逃げるぞ！」

ツルギが私を抱えてその場から全力で逃げ出す。て、なんで…。

「私は捕らわれた猪かつ」

「こんな軽くてぶにぶにした猪がいるかつ」

私はツルギの肩に背負われていた。

「大体、逃げるって。えええええええええっ！?!」

私の前には先程まで整骨院だったところにいつの間にか巨大な木が鎮座いや、これは成長していた。しかも目に取りれるように異常成長している。

めぎゃぎゃぎゃぎゃ。

そして今や塾だった予備校も飲み込むほど大きくなっていく。これって…。

「サカサの生物兵器!？」

「……あいつならやりかねんな」

「…違うの?」

「…あー、うん、あいつが関係していないこともないが。まあ、そんなところ」

「全力で逃げなさい!」

「イエス、マイレディ!」

結局、ツルギが何でこんなところにいたのかは聞けなかったけど、今度はちゃんと話してもらうつからね。

ツルギ視点。

「主。ジュエルシード、反応。反応、増大!効果、範囲、0・5、キロ」

すずかの監視をフェイトと交代して一時間ほどコンビニで弁当を

買い食いをし帰ろうとしたらアリサに合い、フィンガーを食らい、避来矢の認識阻害。もう万能誤魔化し機と化した機能を使おうとしたら避来矢からジュエルシードの反応の連絡。しかも、すぐ俺の真後ろで、だ。

願いを曲げて叶えるジュエルシード。

そして、すぐ後ろでそれが発動した。目の前にはアリサ。となれば、一目散に逃げるのが妥当だろう。アリサをこの場から一刻も早く遠ざける必要がある。

（避来矢。念話を最大出力。なのはでもフェイトでもいいからこの事態を伝えてくれ。さすがに、多くの一般人までフォローは出来ない）

「了解」

アリサを抱えながら人ごみを走っていく。こんなところでジャングルで猛獣襲われた時の経験が役に立つとは思いつかなかった。逃げの一手でしたけど。なにか？

（…探索、終了。桃色、破壊、光線、少女。応答、求ム）

（…にや、私、破壊光線じゃないよ。て、誰ですか？）

どうやら高町なのはが一番近かったらしい。…桃色破壊光線少女。なのはは否定するけれども、避来矢。お前が正しいと俺は思うよ。

「…主、対応、求ム」

…そうだな。フェイトに協力しているから、俺の名前で出るのはまずいい…。悪いけど避来矢、代弁兼代役頼む。

「了解、主」

「ちょ、ツルギ、あんたどこ触ってんのっ」

避来矢に代役を頼んでいると肩に担いだアリサが暴れだした。何事？

「足だが？」

アリサの脚はとてもぷにぷにしています。「できることならずつと触っていたいね。肌触りもいいし」

「……………変態」

「運んでもらっているのに、なんでそんなことを言うのっ」

「声に出てるわよ。…ずつと触りたいとか」

アリサはとても小さな声で顔を真っ赤にしながらあさつての方向へと顔をそむける。

まずい、本音がこぼれていたのか。思わず顔が赤くなるのを感じた。

いかん、俺は年上が好き。俺は年上が好き。しかし、アリサの脚は気持ちいいな。否、いや、これは正直に言うぞ。「上物の布団のように気持ちがいいぞ」俺は年上が好き。俺は年上アリサの脚が好き。「アリサの脚が気持ちいい上が好き」。深、こきゅううつうつ。落ちつけ俺っ。声高らかに自分を見つめなおすためにも叫ぶのだ。

「俺はアリサの脚が好き！」



ん？俺は今、なんと叫んだ？

・

・  
・

.....

..... 変態か、俺はああああああああっ

！！

「..... ツルギ」

「はいっ」

アリサの体温が上がっているのが分かる。プルプルと声が震えている上にスカートから出ている足は赤一色。

「後で...覚えていなさい」

「...はい」

これが、死亡フラグって、やつですか。

なのはがユーノを引き連れてやってくるまで俺とアリサはともに無言だった。アリサが何を考えていたかは知る由もないが俺はただ心の中でひたすら十字を切りながら南無阿弥陀仏と唱えていた。

## 第十話 歓迎会キックオフ（後書き）

あとがき

でれれれーん。

目の前に体中を真っ赤に染めたアリサが現れた。

コマンド

土下座する。

謝る。

アイテム。翠屋のシュークリーム×5（買収成功確率30パーセント）

逃げる。

ツルギ「逃げる。を、選択！」

ツルギは逃げ出した。

たかB「という、感じで少しラブコメを書いてみました」

アリサ「…私はこれからどうなるのかしらね？」

避来矢「…デレル？」

アリサ「ないわよっ！」

たかB「ははは、戦う。というコマンドがないね」

アリサ「あつてたまるか！てか、あつたとしてもどんな方法で戦うのよ」

避来矢「戦闘例。抱擁。告白」

アリサ「……にや」

避来矢「誘拐、拉致、監禁、拷問。……放送禁止用語」

アリサ「何されるのよっ！」

たかB「……だよ。」

アリサ「本当になにつ？！……やっぱり答えないでっ」

避来矢「主。全、ヒロイン、フラグ、乱立？」

たかB「いんや、桃色破壊光線少女。高町なのは。この子は違う人とフラグを建てる予定」

アリサ「どーせ、ユーノ辺りじゃないの」

たかB「いんや、避来矢」

アリサ・避来矢「……は？」

たかB「おお、避来矢が平仮名单品を喋った。というわけで次回予告。正体、ばれた？テイクオフ！」

避来矢「……作者」

アリサ「…あの」

たかB「次回もアリサのターン！の、予定」

## 遅すぎる人物紹介（前書き）

ツルギよりサカサの方が詳しく書いてます。

さらに避来矢も自分の主より詳しく書いています。

…存在感が少ない主人公ですみません。

## 遅すぎる人物紹介

主人公：月野剣 つきのつるぎ 作中ではツルギと呼ばれる

年齢10歳（なのは・フェイトより1歳年上）

ルックスは良くて中の中。悪ければ下の中。どこにでもいそうな小学生だが精神年齢は少しだけ大人びている。…頭は悪いが。

身体能力B+。スタミナだけはA A

S S Sが最上で、S S、S、A、B、C、D、Eが最弱・最下層です。一般人レベルはC Dです

魔力無し。リンカーコア無し。

レアスキル無し。

黒の大剣。避来矢の主でジュエルシード集めを日本で行う。

ジュエルシードを浄化できる避来矢の唯一の主である。

これまでの経歴

0～5歳時

父・母の3人暮らしだったが、5歳の時、母方の祖母に誘拐同然に引き取られ、拳法・薙刀・剣術といった武術を叩きこまれる。

5～9歳時

武術を叩きこまれながらも何一つ才能を見いだせず、ただただ日課になったシゴキを受けていたら従兄弟のサカサの手伝いをするように言われ、サカサについていく。

9～10歳時

世界各地でいろんな実験・発掘をしながらテロリストやマフィアとの抗争に巻き込まれるサカサのとばっちりを受けながらも月村忍

と南米で世話になったり、アリサ・バニングス親子とイギリスで2度ほど出会い、交流を持つ。

現在

サカサにいわれ、日本でジュエルシード集めを行う。

詳細。

身体能力は10歳にしては高いが武術一色の人や才能のある人には負ける。

頭脳面もサカサの教育の所為か所々がおかしい。ちなみに「牛乳」とかいて「じーかつぷ」と呼んだりすることもある。少し残念な人。

武術の才能や魔力やリンカーコアを持たず、さらには特別な血統でもないため、経験だけで培ってきた身体能力。才能がないからこそ扱うことのできる黒い大剣。避来矢。その避来矢の能力 \* 第10話現在 に頼りながらジュエルシード集めを行う。

性格は非常にのんびりとしているが戦闘時には性格が熱血漢になり、少しだけ頭がよくなる。

今までの暮らしぶりで周りが大人だらけであつたせいか恋愛対象が年上にいきやすく、優しいお姉さんや、きれいな髪の女性に目がない。と、本人は言うが最近、脚フェチ疑惑が持ち上がっている。

避来矢。 ヒライシ。と読む

性格：中性的とも取れる頑固な一面も取れるが主であるツルギの意志を誰よりも守りたいと思っている。厳しくもありながら甘いところもある。

長さ1.5メートルの大剣がベース。見た目通りの固さと見た目

を逸脱するほどの軽さ。そのため今現在ではデバイスではなくオ・パーツとして扱われる。

才能がない人間　にしか扱えないプロテクトがかかっていたため発見から半年以上もサカサの元で保管されていた大剣。それまでサカサが作り上げた組織の人たちが何度も実験したが、使用条件や素材などその存在意義の殆どが見当つかない状態が続いていた。度重なる実験でサカサがミネルヴァ（デバイス）を起動させることに成功した時に、避来矢本体のプロテクトが明らかになり、ツルギへと渡される。

原作ブレイク要素の一つ。　ジュエルシード浄化　を行うことが出来る。その上、浄化するたびに自分の中にある機能を一つずつ解放していき、ツルギを支える。

能力。

ジュエルシード封印・浄化：避来矢本体がジュエルシード本体に触れるだけで封印が出来る。浄化したジュエルシードは願いを曲げずに願いを叶えることが出来る。もちろん原作通り、限度はあるが。ただし、浄化には一日近くかかる。

物質修理：壊れたものを治すことが出来る。デバイスも治せるが生物には効かない。これは避来矢が最初から持っていた機能。

以下、浄化により解放された機能である。

認識阻害：人間はもちろん。機械や魔力で作られた結界すらも誤魔化し通す力を持つ。

拡大縮小：ツルギの意思を吸んでどんな大きさにも変化できる。重量も変化する。10メートル以上に変化することもできるがツル



ギは縮小機能しか使ったことがない。

鎧形態：刀身を分子レベルで一度分解。そのあと使用者の体に合わせて、再構成し日本古来の鎧となる。パワー、スピード、防御能力に特化させたバリアジャケットで、作中にはないが海中でも地上にいるかのように戦える。ただし、ツルギは喋れなくなる上に、飛行能力や遠距離武器はない。避来矢の中にある鎧を維持するエネルギーが尽きると強制解除される。エネルギーは半日ほどで回復する。

八咫鳥やたがらす：ツルギの目の前に大きな黒いシャボン玉を作り出す。それに物を投げ入れると投げ入れた方向に向かって、物が勢いよく射出される加速玉。使用条件としてツルギは両足を動かせない。八咫鳥とはカラスにも似た三本足の精霊。動かせない両足と避来矢を常に持つていないといけないため、遠目から見ると3本足のように見えるからこの名前が付いた。

八咫の鏡：鎧と同じように刀身を大きな鏡へと変化させる。ツルギのスタミナと体の中にある成分を抽出し白い光と変えて相手を治療することが出来る。これは自分にあてて怪我や骨折などにも使えるが、使いすぎると栄養失調になる恐れもある。あと、使用後はどうしても空腹になる。

解放された機能はツルギ以外が触れると解除される。解除には数秒から一瞬までのタイムラグがあるがこれは個人差がある。

月野逆つきのさかた

作中ではサカサと書かれている

21歳。ツルギの従兄弟。

ルックスはモデルに見間違うほどすらりと伸びた長身に茶髪のロングヘア。泳ぐ時も寝る時も、いつもサングラスをつけているが、それは自分の持つスキルを少しでも抑える為でもある。知識と習得した技術。ただし、戦闘技術は除く。のすべてがトップクラス。というか地球でサカサより上があるの？と思うぐらいに高レベル。性格はどSが裸足で逃げ出すほどのSであり、悪戯好き。味方に回すといじられる。が、敵に回すと物理的・社会的にも抹消されることが多い。

身体能力 B

潜在魔力 B<sup>+</sup>。リンカーコア有り。

レアスキル：千樹一葉。

裸眼で物体を見ることにより、見ただけでその物体のありとあらゆる情報を把握し、扱うことが出来る。人間に使うと性格や特徴、身体機能から心理まで読むことが出来る。また、何らかの痕跡を見ただけでその人柄が特定できる。しかし、サカサ本人としてはネタバレのようでつまらない。とのことで度のきついサングラスを使用している。

とある遺跡で避来矢・ミネルヴァ・ジュエルシード。という三つのオーパーツを発見。ジュエルシードを暴走させかけたため、仕方なく爆破したがその際、ミネルヴァを起動させることとなる。数か月にも及ぶ実験の成果でミネルヴァの主となり、避来矢をツルギに授けることになる。

詳細

過去に月野の家系と口論になるが、様々な発見や発明で得た巨万の富の半分を実家に渡す代わりに武術のみだった月野の家系から唯一禁止とされていた現代兵器を扱うことが許された天才。その天才であるがゆえに世界中から支援をしてくれ、指示してくれ、自分の

所に来てくれ。と、オファーを受けるが全てを断り自分がやりたいようにやる。というスタイルを貫く。そして、15の時、自分だけの組織を作り上げる。その知識と技術を我がものにしようとする、いわゆる悪役たちに狙われるが持ち前の頭脳で返り討ちにしていく。

#### 現在

海外に散らばったであろうジュエルシードの回収と解析を行いながら、世界中で暴れている。

#### ミネルヴァ。

性格：やや子供っぽい。が、避来矢相手となると兄貴風を吹かすこともしばしば。話す言葉が全てカタカナ。最初は流暢にしゃべるが起動時間が長引くと途切れ途切れになる。

とある遺跡でサカサに発掘され、中途半端に起動。この時点ではサカサを主として認めてはいない。様々な実験のおかげで正常起動を迎え、サカサを自分の主とする。ジュエルシード封印は出来るが避来矢のように浄化は出来ない。出来ることが少ないため、ミッドチルダで扱われているデバイスの旧型と思われる。すぐに疲弊するため毎日サカサがメンテナンスする必要がある。

#### 機能

ジュエルシード封印：そのまんま

バリアジャケット展開：左腕のみに展開。手の甲には小さなボウガンがついており、三色のビー玉のような物もついている。

連泊の矢 れんぱくのや ：白い光の糸を飛ばす。速度はゆっくり

りではないものの頑張ればだれでも避けられる。どんな人、物にもぶつかり接続もできるが、魔力を軽くあてられるだけですぐに切れる。

赤犬 アカイヌ : サカサ独自の法律、相手の罪悪感の程度で、精神ダメージを与える。ただし、事前に連泊の矢を相手に接続しているときのみに使える。詳しくは序章で。これを使うとジャケットについている赤いビー玉が白く染まる。

青蛇 アオヘビ : 特殊な機械を使わなくても、あらゆる情報機器に接続し、その中にある情報を読み取ることができ、その上、コンピュータウイルスや自爆コードなども送ることが出来る。それはたとえ壊れたパソコンやメモリーチップからでも可能。しかし、赤犬同様連泊の矢で予め接続しておく必要がある。これを使用すると青いビー玉が白く染まる。

黒船 クロフネ : まだ秘密  
使うと黒いビー玉が白くなる。

誰でも使える仕様だがサカサもミネルヴァも誰かに本人たち以外に使われるのはごめんと思っているので、誰かに使われることはおそくない。

## 遅すぎる人物紹介（後書き）

サカサは現在、別の小説で大暴れしています。

いずれはこの小説に合流してきます。が、作者の一番のお気に入り。とりあえず、本編の更新はもうしばらく先になると思います。

…なるべく早く更新しますので気長に待っていてください。

## 第十一話 正体。ばれた？（前書き）

急激な温度変化に体調を崩し、更新遅れました。  
皆さんも気を付けましょう。

主人公の葛藤を描いたお話。

次回はできるだけ早く更新します。

## 第十一話 正体。ばれた？

避来矢からの念話を行って数分後。

「…これは…」

「…そんな」

とあるビルに降りたったなのはとユーノは目の前の光景に愕然としていた。

巨大な樹木が町を覆う光景。

ジャングルの下から町が生えてきたのか、それともその逆かと思わせるぐらいに荒れ果てていた。夜の街に煌々と照らされる光には炎が混ざっていた。

「人が…ジュエルシードを使ったからこうなったの？」

「…そうは考えたくないけど。…暴走した…。違う、今はそんなことをしている場合じゃない。早くジュエルシードを封印しないと」

（…なのは嬢。沢あ、訂正、ユーノ。応答、要求）

呆然とした状態の二人に念話が入る。無論、ツルギの代弁を任された避来矢である。

突然の念話に慌てふためくのは。

「は、えと、その」

「君は一体誰だい？あと、また間違いかけたでしょ」

（謝罪。事態、深刻。ジュエルシード。汝、目線、右方向。距離、五キロ圏内。封印、要求。…封印。即ち、人命救急。直結。最優先）

人命。封印。直結。この三つの文字が呆けていたなのはの瞳に光を照らす。

なのはは右方向にレイジングハートの矛先を向け魔力を込める。

「…わかりました。やろう、レイジングハート」

「オーライ。マスター。エリアサーチ」

「まって、なのは。ジュエルシード封印には距離がありすぎるよ。ある程度近づかないと…」

なのはが何かを行おうとしたが、ユーノはそれを慌てて止めに入る。

だが、

なのはは止まらない。その瞳には強い決意の色があった。そして、それに呼応するかのようにレイジングハートにも強い光が灯る。

オオオオオオオオオオオオオオオオオオ。

桜色の光と魔力の咆哮が天を貫いた。

「できるよ。そうでしょ、レイジングハート！」



「イエス。マイマスター」

「…なのは」

ユーノは眼前の光景に驚愕していた。

三日月状だったレイジングハートの矛先は一度分解され、U字の形へと変貌する。それは杖というよりは槍に近い物。そして、それは槍ではなく砲身。

（…ジュエルシード。拠点。情報、譲渡）

「データ、ロード。…マスター」

念話と同時にレイジングハートを通して、ジュエルシードがあると思われる地点。その詳しい道順が脳裏に浮かびあがった。

なんなんだ、この声の主は。

なのはの魔力の才能にも驚かされてばかりだが、こんなにも静か  
でまるでそばで話しているのにそこにはいない。それでいて地図を  
見ているかのように正確な情報を見せてもらっている。空気のように  
そこにいるのが当たり前。だけど感じ取ることができない。まるで、  
幽霊のようだ。

「お願い、私の想いに答えてレイジングハート！」

「ロングレンジモード。スタンバイ、レディ」

桜色の光がレイジングハートの先端に集まり収縮と膨張を繰り返  
えりながら輝きを増していく。そして、なのははその矛先を声の主

が提示してくれた場所に狙いを定める。

「ジュエルシードッ！封印！」

ズウオオオオオオオオオオ。

桜色の光が矛先から放たれた。それは人一人飲み込むほど太くまるで流星のように放たれた一撃だった。

ツルギ視点。

それはアリサを鯨島という執事さんに引き渡して再び整骨院のある場所へ向かっていた時だった。

ズウオオオオオオオオオオ。

なのはが放った光線が整骨院を丸ごと包み込み、ジュエルシードが転送される光景を見ていた。…かなりの近距離で。てか、爆風に巻き込まれた。

「……っむー」

「…主。無事？」

そう見えるならお前の目は節穴だ、避来矢。…あー、無いか。剣だし。

まあ、地面に落ちていた空き缶の一つが鼻に勢いよくぶつかっただけだから。あー、鼻血が出る。鉄の匂いがつーんとする。

「ジュエルシード、反応消失」

どうやらなのは封印に成功したらしい。

さーて、家に帰ってフェイトとアルフにどう説明したものか？

…全然、思いつかない。

とりあえず、帰るか。

「主っ、上方、落下物。到達、予測、二秒！」

上？なんかあるのか？と、上を見ると異常成長を遂げた樹木によって所々が半壊した建物の破片が、目の前。正確には俺のすぐ真上でぐらついていた。

これはいかん。

どおんっ。

早速忠告通りその場から離れると、避来矢のいう通りに瓦礫が落ちてきた。

その瓦礫が落ちてくるのを皮切りに周りでは大人たちが四方八方に逃げ出していた。

異常現象が収まったのに騒ぎは加速していた。当然だ町の一部とはいえ、巨大な樹木が生えてきてめちゃくちゃにした。その上、その姿かたちが跡形もなくなればテロの恐れだつてある。

わあああああああつ。

きやあああああああつ。

さて、こんな時に力のない子供がとるべき方法は、安全なところで見つしておくべきなのだが、こんな都会。ビルや背の高い建物

の中で安全な場所と言われてもわからない。

冷静に考えれば。

そして、俺は力を、避来矢。力を持ってしまった。目の前では瓦礫につぶされかけている人。パニックで何人もの人間が将棋倒しのように倒れている。

俺はといえば爆心地の近くにいたおかげで誰にも潰されるわけもなく避来矢の助言とサカサとの経験のおかげで冷静に対応でき、瓦礫につぶされることもない。

冷静に…。

「主。…迂闊、浅慮。世間体、我、主。行動、規制」

迂闊に避来矢は使えない。

避来矢の鎧に関しても。八咫の鏡に関しても使えない。

少なくとも今の時代には過ぎた力。それを使えば目の前にいる人々を救える。でも、それを行うとして、その後はどうなる。

おそらく畏怖の目で見られる。もしくは避来矢を欲する人が出てくる。そして、俺を狙ってくる人間。そして俺の周りを丹念に調べ上げ俺の行動を監視し、そして、それを得ようとする奴らが出てくる。

力を。避来矢の持つ力を欲する人間に俺はどう立ち向かう。

「…主」

避来矢がなければ俺は何もできない。

サカサの手伝いも。フェイトの手伝いも。

俺自身、何も持たないただの人間。いや、何の取り柄もない人間から避来矢を取り上げたら何もできない。それだけで済むならいい。しかし、それを発端にフェイトの持つ魔法の力を欲する人にどう立ち向かう。

きっと、いや、魔法に関して詳しくは知らないが、必ず人はそれを欲する。

守れるのか？俺に？

サカサのようにどんな逆境にも勝てる知識や技術は持っていない。フェイトやアルフのように一般人の情報をごまかせるわけでもない。いや、認識阻害を使えば出来はするがそれを行うと鎧も八咫の鏡も使えない。

避来矢の能力は一つずつしか使えない。

鎧を使い、落ちてくる瓦礫を弾き、人が潰れないように誘導する。しかし、それでは避来矢の存在を大勢に知らしめることになる。そうなれば、いずれはフェイトの方。魔法に関心が行きフェイトも俺も行動に不備が出る。下手すれば、捕まり実験される可能性もある。

鏡を用いて、瀕死の人たちを救う。しかし、それは鎧以上に注目を浴びる。どこかの研究機関に捕まり、一生モルモットにされかねない。

それじゃあ、どうする？

救える命を見捨てる？自分の行動を守るために？

「俺は……」

誰か、助けてくれ。金なら払う！お母さん、お母さん。邪魔だ、どけえ。おい、押すんじゃないねえ。駄目だ瓦礫がつ。だれか、誰か助けて、血が、血が止まらないんです。

目の前の人たちを見捨てられるのか？

「俺は」

「…主」

助けきれぬのに。救えるのに。自分が助かりたいがために。行動を束縛されないために。赤の他人なのに。

自由を捨てられるのか？

自分の大好きな人たちにまで迷惑や拘束や脅迫の危険に合わせてまでのことか？

「主。無能力。才能無。故、我が主」

「…避来矢」

避来矢が俺に現実を突きつける。そう、俺は無力だ。だから避来矢の主なんだ。

「主。考慮、思案。正解。我無主、無力、無能。…サレド、我有主、不可能、無」  
あるじ われなしあるじ われあり

「避来矢？」

急に何を？不可能はない？

「主。我無、無力。サレド、我有主、有力。不可能無。…我、主ノ剣。我、主、共ニ。運命共同体。一蓮托生。我、所望。何人、我等、無関心。可能性、零ニ近シ。サレド、零ニ非ズ」  
なんびと

…はは、そうだな。出来るんだよ。俺には目の前にいる人を救うことが。たとえ一人でも救えるのなら。誰にもばれずに救う可能性がないわけでもない。

「…ごめん避来矢。そして、ありがとう」

俺は建物の陰に隠れて、更に認識障害をかけて建物の奥へと向かう。

そして、認識障害を解くと同時に避来矢を剣から鎧に換装。パニックに陥っている町へと再び足を向けた。

???視点。

「…恭弥」

「大丈夫だ。忍。きつと、すぐに落ち着く」

「うん」

私、月村忍は恋人の恭弥と共に、明日大学の講義に必要な資料を集めに街に繰り出していた。まあ、それを口実にデートをしていたわけだが、とあるホテルで食事をとっていたら恭弥のすぐ後ろのテーブルが窓を突き破ってきた木の枝に吹き飛ばされ、ホテルの中はかなりのパニック状態へと陥っていた。

それからしばらくすると桜色の光が町を照らした。その光が収まると同時に木の枝は消えていた。あれは夢なのかと思っていたら夢ではないことを認識する。

目の前の惨状に。樹木に吹き飛ばされたレストランに、怪我をし

た人。

ホテルの窓の外から見える砕けた道路に、崩れかけたビルの壁。

「早く逃げ出したいが、この人込みでは…」

「…うん、殴り飛ばすわけにもいかない。かといって身動きが取れるわけでもない」

ホテルのエレベーターや階段は滞在していた人たちで混雑している。

私たちがいるのは十階建てのホテルにある三階にあるレストラン。レストランの出入り口には私たちのようなお客さんどころかコックの人たちまで逃げ出している最中で、とてもじゃないがその人ごみに入ることもはばかれていた。

「おとーさん、おかーさん。うわあああああん」

そんな時、一人の男の子が人ごみの中から泣きながら出てきた。どうやら親とはぐれたらしい。だが、出てきたところがいけなかった。そこは先程樹木が突き破ってできた巨大な穴が開いている場所だった。

「危ないっ」

「くそっ」

私と恭弥は同時に走り出していたが、間に合う距離ではなかった。尚且つ、発見したのが人ごみの中である上に、男の子がいる場所。穴のある場所は私たちも避けるようにしていたせいかなり距離が開いていた。そして、悪いことはまだ続く。



ドン。

厨房で爆発が起こった。すぐにスプリンクラーが作動して厨房から吹き上がっていた火は消えたが、その振動でレストランの床にあったひび割れが大きくなる。そして、男の子のいた床も同じようにひびが生じ、砕けた。

「…え？」

男の子が砕けた床と共に落下していった。

それはまるでゆっくりと再生されるビデオのように、私と恭弥の目の前で男の子は落ちて行った。

「忍、見るな！」

恭弥が私の目をふさぐ。男の子が落ちていく顔を見せたくはなかったのだろう。それでも私は見た。見てしまった。落ちていく男の子の顔を。

「ごが、どおん。」

瓦礫が落下した音にさらにパニックに陥る声があった。が、辺りは静まり返っていた。まるで耳をふさいだかのように。そして、沈黙を破る声が響いた。

「青年。男児、保護、要求」

それはまるで変声機で声を変えているかのように聞こえた声。恭弥の手をずらしてみるとそこには瓦礫と共に落ちたはずの男の子。

そしてそれを抱えた黒い日本甲冑だった。

「え、な。た、盾無？」  
たてなし

「否、我。避来矢。我、要求。男児、保護。我、関係、非検索・非干涉」

盾無とは日本の猛将として知られた武田信玄の家宝の一つである鎧。避来矢の鎧形態はツルギのイメージをもとにしていたため少しばかり似ているものがあつた。

「……………」

トッ。

しばらくの間、というよりも時間にして数瞬の間に、動く黒甲冑は恭弥に落ちた男の子を引き渡すと再び床に出来た穴へ飛び降りていった。

「な！？待て！」

恭弥は黒甲冑を追おうとするが男の子を抱えているため穴から飛び降りることは出来ない。私も恭弥の傍によって黒甲冑の後を眼で追うとそこに映った光景に目を疑った。

「な、なんなんだ！？あの鎧は？」

「町を破壊？…違う、町の人たちを助けている？」

巨大な穴により視野が広がったレストランから見たのは黒い影

が崩れかけた瓦礫をことごとく砕いている光景。

地面に落ちた瓦礫。それを砕き、下敷きになった人たちが出てきた。

ひっくり返った自動車を再度ころがし、中にいる人引きずり出す。建物から崩れてきた破片をことごとく弾き飛ばす。折れた電柱ある程度の長さにもで砕いて排水路に突き刺して道路と歩行路を区別していた。

その動作はまさに迅速。

あまりの速さに助け出された人たちはどうやって助かったのかわからないままその場から逃げ出す。それぐらいあの黒甲冑は素早かった。

「…恭弥」

「…忍。とにかく、このホテルから出よう。何をするかはそれからだ」

「うん」

恭弥の目もあの甲冑の動きを追っていた。

それは驚愕と同時に喜んでるようにも見えた。恐らくあの甲冑と戦いたい。と考えているんだろう。

しかし、任された男の子がいる手前、そんなことは出来ない。なにより、今は緊急事態だ。まずそれを脱しなければならぬ。

それからしばらくして、私たちはようやく人ごみが少なくなった階段を下りて行った。

…少し気になったんだがあの鎧。私を見ていた？…まさかね。

ツルギ視点。

7800 / 20000

10000 / 100000

鬼の面の下にある数字は先程の瓦礫を受け止めた時にとうとう半分を切った。

最初の数字は救助に関する活動制限。その次はこの場から撤退する為のエネルギー残量。

避来矢からの提案の内容。それは、あらかじめ、救助と撤退への制限を決め、それを必ず守ること。

鎧形態で顔を分らない。その上で避来矢が喋るので自分自身に嫌疑がかかることはない。その上、避来矢自体の索敵により防犯力メラに映らないコースを走り、可能な限り迅速に動くことにより人目に付かないようにしている。

しかし、これは常にトップギアに入れている状態を維持しているため、多く見積もっても瓦礫をどける作業は後二回。程度によればあと一回が限度。

「最優先。人命救助。生命維持、困難。危険度、最大。感知。主」

わかつている。これが最後。これが今の避来矢。いや、俺の限界。目の前には瀕死とまではいかなくても手当てを必要とした人たちが何人もいる。ここで欲が出る。鎧を解除して鏡で癒そう。と、いう欲望が。

「主っ！」

…ごめん。それは出来ないよな。そうすれば絶対にばれる。それ

だけは避けなければならない。さあ、最後の救助者は。  
この時まで俺は現状を舐めていたと思い知らされた。

目の前で、五メートルはありそうな瓦礫が崩れ落ちるのが見えた。

その真下には車いすの少女と二十代の女性。おそらく、少女の付添いの女性がいた。

俺はその光景を見た瞬間に避来矢に指示を出す。

避来矢！！

「全速全開！」

避来矢も俺の意思を汲みとり、出力を全開にする。

最初の一步で地面はその時に発生した衝撃波で揺れ、二歩でそのアスファルトは砕け散り、三步目以降はまるで巨大な削岩機が抉り取ったかのような傷を残していった。

車いすの少女のすぐそばまで一気に駆け寄る。その時に生じた風圧で周辺には砂埃が巻き上がり人々の視界をふさいだ。

落ちてくる瓦礫と少女の距離は二メートルもなかった。だから、飛び蹴りではなく迎え撃つかのように右足を軸に左足を斧のように振り上げる。

「天使両断蹴リイ！！」

ドオオオオオオンッ！

踵と瓦礫が触れた瞬間。巨大な瓦礫にひびが入り、運悪く真つ二つに砕けた。

この時、鬼の面の下の数字は、

1 2 0 0 / 2 0 0 0 0

1 0 0 0 0 / 1 0 0 0 0

そして、俺のすぐそばにいた車いすの少女への被害は多少の小石が当たった程度。

二つに砕けた瓦礫のうちの一つはその自重で車いすの少女の傍に落ちた。そして、蹴り上げられたもう一つの瓦礫がその隣にいた女性に直撃しかけていた。

もう、この瓦礫を崩すことなどできない。かといってダッシュで救い出すこともできない。片足が上がっている以上両手で受け止めても今の出力じゃ支えきれない。

それでも、

それでも俺は…。

俺は目の前にいる人を助けたいんだ！

「…仕方無。…逃走制限出力、活動制限出力、同調」

避来矢の諦めたかのような声が響くと同時に鎧全体から力が溢れ出した。そして、

1 1 2 0 0 / 3 0 0 0 0

二つに分けられていた制限が一つに統合されていた。避来矢、本当にごめんな、こんな我儘な主で。

ズズンッ。

「腕力、腰部、他、間接部位、出力最大！」

9 2 0 0 / 3 0 0 0 0

片足を蹴り上げた状態で両手で受け止めるといった無理な体勢で瓦礫を受け止めたせいかこの一瞬で2 0 0 0 も減ったがその一瞬で両足を地面につけ固定することができた。

「女史、早急、撤退、要求！」

8 2 0 0 / 3 0 0 0 0

「え、何？」

避来矢が女性に早く逃げるように声をかけて促すが女性の方は巻き起こったほこりで目を傷め、瓦礫が砕かれた轟音であたふたと辺りをウロウロとしていた。その姿にもう一度、声をかけようとしたら、

「とつととしゃがめっ、このバカ女あつ！こつちは時間がねえんだ！ー！」

「は、はいい」

… 避来矢がキレた。

6 3 0 0 / 3 0 0 0 0

「主、瓦礫、粉碎、作業、推薦」

はいつ、それでよろしいです。避来矢さん。

主の威厳？知らない知らない。だって、避来矢めっちゃ怖かったもん。

避来矢はそんな俺の意思を読んだのか再びいつもの通りに喋り始めた。

「…我、反省。以後。我、自身、言葉、注意」

ベキ、ベキベキベキベキ。

バンッ！

女性がその場にしゃがんだのを確認すると同時にサバ織の要領で全身に力を込めて瓦礫全体にひび割れが生じさせ粉微塵に砕いた。

2300 / 30000

「主！」

わかっている全力でこの場から逃げる。

「速力、最大」

纏っている鎧全体から先程の力強さはもう伝わっては来ない。本当に稼働限界がまじかなのが分かる。幸いなことに裏路地につながる道を見つける。同時に人目のないところで鎧を解除。このまま認識障害を使用して家まで走って帰るはずだった。

…そう、だったのだ。

鎧を解除して認識障害を使おうとした瞬間に横殴りの一撃が俺の



意識の殆どを刈り取った。残った意識を使って避来矢を小さくし、ズボンのポケットに入れたまでは良かったが、殴り飛ばされた先にあるガードレールにぶつかると同時に俺は気を失った。

この騒動で俺の正体がばれないことがないようにと祈りながら。

そして、俺の意識を刈り取った謎の襲撃者は俺を車に乗せ、とある屋敷に運んで行った。どうやら俺のことを知っているらしい。その間、避来矢はフェイトとアルフに念話で俺の現状を伝えていた。

「明日、以内、帰宅。心配無」と、

いや、俺ら拉致られたんだよ、避来矢。

## 第十一話 正体。ばれた？（後書き）

あとがき 避来矢反抗期パート？（嘘）

ツルギ「俺が悪かった、避来矢iiiiiiiiiii！」

避来矢「主、過度、動揺。鎮静。深呼吸」

???「嘘。と書かれとるしな」

たかB「はいはい。まだここは無印なんで御退去願えますか」

???「いやー。うちは本編では一言もしゃべれてないんや、  
ここらで花咲かずしていつ咲かせと」

ツルギ「それより俺、もう少し避来矢に優しくしようと思うんだ」

たかB「真面目な奴ほどキレたら怖いしな」

???「そんなことてなんやつ、うちかてリリカルヒロインの  
予定なんやでっ」

たかB「俺の予定は未定。そして、未定は予定だ！」

ツルギ「格好良く言い切った！でも、それって…」

???「行き当たりばったり。と、いうことやないか？」

避来矢「肯定」

たかB「一応、このあとがきの後のお話考えとるもん。ずっと考えていたお話だもん。更新だつて一週間以内に…」

???「出来たらええな」

避来矢「可能性。微」

たかB「微。て、妙にリアルな…」

ツルギ「まあ、考えているならいいか。ほんじゃ、はや、じゃなくって???さん。次回予告」

???「まかせてーな。次回。衝撃、ネコ屋敷でトリオは見た！  
(嘘)て、うちこれだけかいなっ」

避来矢「…(嘘)?」

たかB「???さん。それじゃあ、次回のまえがきの時にも出る？本編ではしばらく出なくなるし」

???「もちろん、出るで。ところでこのカンペの裏になんか書かれとるんやけど…」

たかB「次回もお楽しみに」

## 第十二話 粉碎初恋物語（ブローケンハートストーリー）（前書き）

まえがき

「???」様々な困難を乗り越えながら、憧れのあの人に会えた主人公

サカサ「しかし、彼女にはすでに最愛の人が見つかっていた」

「???」しかも見ているだけでお腹いっぱいどころか胸やけを起すほどのどろっどろっのぬっぶぬっぶやった」

サカサ「そんな可哀相なお話が今日、幕を開ける」

「???」・サカサ「リリカルなのか？無を有する剣。始まります」

「

## 第十二話

ブローケンハートストーリー  
粉碎初恋物語

ツルギ「あの（嘘）って、そういうことかあああああああ  
!?!」

「???」・サカサ「始まります」

ツルギ「がウザいよ！なんで海外にいる筈のサカサまでいるの  
!?!」

特別出演です。BY作者

## 第十二話 粉碎初恋物語（ブローケンハートストーリー）

### 第十二話 ブローケンハートストーリー 粉碎初恋物語

「…はっ」

なんかとても嫌な夢を見たような。

何故かは知らないが従兄弟とエセ関西弁で狸みたいな性格の女の子にいじられまくったいやな夢。えーと、確か俺は…。

夜中の街中でジュエルシードが起動。

アリサを遠くに避難させる。

再度ジュエルシードを封印しようとしながらなのはに応援を要請。なのはがジュエルシード封印。俺、向かった意味無し。

ジュエルシードで町がボロボロ。これからのことについて葛藤していた俺はウロウロ。

避来矢の助言により町で人助け。

時間切れそうになった俺は裏道に入る。

裏道から一般道路に出ようとしながら認識障害を使おうとしたら。

ツルギ君ぶっ飛んだああああああ！（キャ 翼風）

あれ？そこから記憶が…。

てか、頭の中でアナウンスした奴は誰だ？

「あ、よかったツルギ君。目が覚めたんだね」

頭の横から声が聞こえたので顔をそちらに向けるとさすがにこちらの顔を窺っていた。

なんですかがいるの？

そして、何気に避来矢が元のサイズで隣に立てられていた。てえ、  
避来矢！？

「…な、なんで」

「私がいるのか？それともこの大きな剣のこと？」

すずかが俺の言葉を継いできた。その言葉にコクコクと頷きながら  
避来矢を手にとろうとしたが…。

「\* < ' J & a m p ; \$ % # < E U % U 、 < ゃ 、 ! ! ! ? ? ! ! ? 」

両足に物凄い痛みが走った。それはもう、悶絶する痛みという奴  
だ。

思わず布団をどけてみると入院患者のような白い服を羽織っている  
自分の姿。その服の下からもわかるように足にはギブスがはめら  
れていた。

「駄目だよ。両足の骨がきれいに折れているんだから」

「お、おういえ？」「(ど、どうして?)」

「怒らないで聞いてくれる？」

ツルギが目覚める十時間前。  
すずか視点。

キツキキイイイイイッ！ドゴンッ！

ツルギ君ぶつとんだあああああつ。（ヤプ翼風）

（だから誰さ？BYツルギ）

（回想につっこまないでね。BYすずか）

「きゃあああつ、お姉ちゃん！？どうしたのっ？」

「ど、どうしたの？ノエルさん？」

「…ひ、人をはねてしまいました。」

「ど、どどどうしよう？埋める、溶かす、バラバラにして海に巻く？」

私の所で働くメイド姉妹。水色のロングヘアをリボンでかわいく飾った妹のファリン、髪をアップにした姉のクール系メイドのノエルさん。

…この二人には助けるという概念はないようだ。

「お嬢様、長い間お世話になりました。妹を。ファリンをどうかよろしく願います」

「それよりも助けようよ！」

という私の一声に。

・  
・  
・

「……………ああ！」

十秒ほどの間を開けて二人はようやくそのことに気づいた。それから急いで車にツルギ君を乗せて屋敷に向かった。本当はお姉ちゃんたちを迎えに行つたのだがツルギ君を運んでいる間にメールで、アリサちゃんの車で帰ります。という連絡を受けたので一安心しながらもツルギ君を私の屋敷に運んだ。

それからツルギ君を手当てしようとしたら両足が風船のように膨れ上がっていた。月村家お抱えの医療スタッフを呼び、メスで衣服を切り裂き、足の治療にあたった。どうやら骨折と筋肉断裂で内部出血を起こしていたらしい。

治療後、今いる客間のベットで休ませた。

「……というわけなの。ちなみにこの剣はツルギ君の切り裂いた衣服の中から零れ落ちたアクセサリを拾ったら急に大きくなったんだ」

「そ、そうなのか。と、ところで何でそこに黒い剣があるのかな？パピイッ！？」

ツルギ君は頬を掻きながら大剣に手を伸ばそうとしたが再び激痛を感じたのかベットの上でのたうちまわっていた。

「……ねえ、ツルギ君。わざと言っているでしょ？本当はこれが何なのか知っているでしょ？教えてくれないかな？」

「なななななんあなんあなんななななんあんなん」



焦っているのか、噛みまわったツルギ君。

「すううううううう、はああああああ」

あ、深呼吸して息を整えている。

「にやふによこきよきやひゃ」

噛んだ。思いつきり。

「…ぷ」

ぽふつ。

ああ、笑ってないよ。ツルギ君。ほら、がんばってもう一回。だから布団から出てきて。

その励ましが届いたかどうかは定かではないがツルギ君が布団から顔を出してきた。口元では何度も練習しながら私の顔を見てその口から出た言葉は、

「にゃんの…」

にゃんの、にゃんの、にゃんの、にゃんの、にゃんの…………。

「ぷふう！」

また噛んでいた。そして、私はこらえきれなくて思わず嘔き出した。

だって、静かな部屋だったからか、何度も反響したからその効果

は反響した分効果大だった。…ご、ごめんねツルギ君。でも、これは無理、無理なの……。

ツルギ視点。

辱められた。自分に…。

なんなの、このセルフ羞恥プレイ？俺って？否、断じて否つ。俺はどちらかと言えばSだ！畜生、いきなり革新ついてきおってかにこの小娘。出だしからつまずいちゃまったじゃねえか！はうあつ、ま、また足がアアアアアア！

「あ、あえう。あえあああああ」

「ほらほら。言わないと、また足をつんつんしちゃうよ」

つんつん。

こんのどS少女おおおおお！人の血を吸うだけではなく足すらもいたぶる気か。

「い、いひゃ、いひゃひゃい。いひゅひょんは」

「むー、何で教えてくれないの」

「しゃ、サカサ、キャンけいなんですつ。だから言えねえ！」

「……それって、この間の夜見たいに？」

！？

すずか。まさか感づいている？

「それとも私が学校で気絶していたことにも関係している？」

「…えーと」

いつの間にか足へのつんつんは収まっていた。代わりにすずかがこちらを真剣な目で見つめてきた。そして、おもむろに避来矢を手にとってベットからさらに遠ざけた。

「ツルギ君。本当は覚えているよね？あの夜のこと。どうしてアリサちゃんやなのはちゃんみたいに…どうして覚えているのに普通に接してくれるの私は…」

「…だからどうした。俺は馬鹿だけど、それだけのことで付き合いを変えるほどの馬鹿じゃない」

「……………」

すずかの目には戸惑いと恐怖。今にも零れ落ちそうな涙が瞳に集まっていた。

「……………俺に関することだけだ。俺が協力している組織。敵対している組織。メンバー。構成は教えられない。俺が教えきれるのは俺自身のこと。その剣のこと。それ以外は教えられない。それでもいいか？」

すずかは静かに頭を下げた。顔は上げない。こぼれている涙を見せたくはないのだろう。

「一応、剣を返してもらえるか。あと、このことはわかっているだろうけど他言無用。知ってしまったら死ぬまで誰にも言わないこと。守れる?」

「…(こくん)」

小さく頭を動かしたすずかを見て、俺は避来矢を受け取り、避来矢と念話を行う。

(避来矢。これから話すことは誰にも気づかれることがないように認識障害を使ってくれ)

(…主)

(お前が言いたいののはわかる。サカサやフェイトのことはもちろん言わない。でも、すずかが関係している事件もある。そして、気がかりも残っている。俺とフェイト、アルフだけじゃあ守れないこともある。本人にも警戒してもらった方がいい)

(……了解。障害開始)

(あと、フォローの方も頼む)

(主。…フェイト嬢・アルフ嬢、仕置き、確定)

(なんで?!)

それから、三十分ほどかけてすずかにこれまでのことを話した。学校ですずかが気絶したのは、すずかを夜中に襲ってきた悪者に

よるもので、そいつはやつつけた。もちろん、やつつけたのはなのはだし、フェイトやアルフのことも言えるわけがないので、そこは誤魔化したりもした。

そして、血を吸われた夜の日のことになる。

「あの時は驚いたぞ。いきなりだもんな」

「……………」

できるだけ明るく言ったつもりなだけでさすがの方はそこが一番気になっていたんだろう。現に体を一度びくりと動かして震えていた。

まあ、怖いんだろうけど。俺はどんな境遇にも負けない破天荒サカサにあっているからなあ。だからこそ、俺は…。

「だから吸うなら吸うで事前に言ってくれ。あの時は体調がすぐれなかったんだ。その翌日とか前日に言ってくれば死なない程度にくれてやるから」

「…え？」

「まあ、さすがに毎日というわけにはいかんし、俺にも予定があるから。出来るだけそちらに合わせるようにはするし」

「……」

「俺はサカサの手伝いをしていたからこついうのには慣れている。だから、これくらいのことは何でもない。」

「…でも、私は普通の女の子じゃ、人間じゃ」

すずかの言葉を俺は遮る。悪いけどそれ以上は言わせない。

「だからどうした。すずかがそうだと、世界がそうだと決めても、認めない。俺は馬鹿だからな」

たとえそうだとしても覆す。俺は天才だからな

サカサの言葉なら、最後の所はこうなる。ここは俺流にアレンジした。

道案内の世話になった礼として、貧困な砂漠地帯で水田を作ろうとしたサカサは地元の人に無理だと言われたことを笑って返した。

だからどうした？俺は天才だぜ

そして、一晩中。サカサと二人で何もない砂漠のど真ん中で穴掘り作業をしたら、見事に水脈を探り当てた。今ではその街は物理的にも経済的にも潤っている。

水脈を探り当てたサカサに感謝した人たちに見せたサカサのドヤ顔は本当に意地悪な顔をしながらも誇らしげで、とても格好いいものだった。

「……………」

「だからな、すずかも。…あれ？」

まあ、さすがにドヤ顔で笑って返すことは出来ないけど、すずかに俺については気にするな。と、言いたかったんだが、すずかの大きな目からは大粒の涙がボロボロとお！？

「俺じゃやっぱりサカサみたいには無理か!？」

「…違う。違うの。…嬉しくて」

慌てふためく俺にすずかは笑いながら泣く。器用だな。

「じゃあなんで泣く? 嬉しくて泣くのは死にそうなことから生き延びた時に流す涙だぞ。少なくとも俺はそうなんだが…」

ロシアの猛吹雪の中、食料をすべて失って二日目に見た光景を。町の光が見えた時。あの時の光を俺は忘れない。

あれは思い出すだけでも涙があふれる。

「…うん。やっぱりツルギ君は馬鹿だね」

「うん、自覚はしている。でも人に言われるとカチンとくるよ」

「ごめんごめん。じゃあ、これからもよろしくね」

「よろしく、すずか」

俺はすずかと握手を交わす。涙をぬぐった手は少し冷たかったけど、涙を流したすずかの顔はその反対に晴れ晴れとしていた。

とりあえず安全が確認できるまでSPの導入をしてもらうことで身の回りの安全。定期的に俺とメールのやりとりをすることで自衛してもらったことを約束した。

それから三十分後にアリサが、遅れてなのはが訪問してきた。

その間に俺は避来矢を八咫の鏡に変化させて体の治療。骨折だけではなく体中にみみず腫れも起こしていたらしい。

…鎮痛剤が効いてなかったら俺ショック死していたんじゃないか?

なのは視点。

「おおーん、おおーん」

林の向こう側からツルギ君のむせび泣く声が響いていた。

「…見苦しいわね」

「まあ、仕方ないとおもふの」

「さすがにあれだけ見せつけちゃったらね」

十分前、私とお兄ちゃんがすずかちゃんの家招待され、ノエルさんに案内されながらお屋敷にある庭でお茶会をしている四人と合流。

忍さんと話していたツルギ君、アリサちゃん、すずかちゃん。そこに私たち二人がそこへ行くと…。  
ぶわっ。

ツルギ君がいきなり涙を流したの。どうしたの？！

「…勝てねエ」

「あ、あははは」

小声で何かを呟いたツルギ君。私じゃなくてお兄ちゃんを見て泣き出した？

すずかちゃんはそんなツルギ君を見て苦笑いを浮かべていた。



「恭弥。よく来たわね」

「すまない、少し遅れた」

ぶわわ。

先ほどよりも心なしか流す涙の出力が上がったかのような…。

「…わかっていた。分かっていた。だって、あの土郎さんと息子で高町の兄貴だから」

「じゃあ、その涙を止めなさい」

うつむきながら何かぶつぶつと呟き、その呟きにアリサちゃんのため息交じりにノエルさんが入れてくれた紅茶を飲む。

「恭弥様が来てくれたおかげで忍お嬢様も嬉しそうですね」

「うぐっ」

どばー。

ファリンさんがそんなツルギ君に気づいていないのか言葉をこぼすツルギ君が呻いた。

ちよ、泣いて出るような音じゃないよね。今の。

「それじゃあ、私たちは中で勉強しているからみんなは楽しんで行つてね」

「う、うん、わかったよお姉ちゃん」

「じゃあ、行きましょうか恭弥」

「あ、ああ」

お兄ちゃんはツルギ君の様子に気づいたのか苦笑いを浮かべていた。気づいていないのはフアリンさんと忍さんぐらいだろうなあ。二人が屋敷の中に入っていくところで、ノエルさんがうつむいているツルギ君の頭をがしっと掴んで顔を持ち上げさせる。そして、ツルギ君の視点をお兄ちゃんと忍さんの間、手をつないでいるところに固定する。

「お嬢様方、ご覧ください。あれが恋人つなぎというものです」

「ちょ、それは」

「ごっばあああああああ。」

まるで壊れた水道のようにツルギ君の目から大量の涙が流れていた。…脱水症状で死んじゃうじゃないかな。

DASH！

思わず英語になっちゃうほどのスピードでツルギ君はお屋敷内にある林の中に駆け込んだ。まあ、何となく気持ちは察するけど…。

「…ノエル。どうしてあんなことを？」

「私のしでかしたことを不問にしてくれたお礼にと思ったのです  
が…」

「えー？」

あれがお礼なら私はいい。

「ツルギ様ご本人も認められるほどの事。それなのにいつまでも引きずっているのはよろしくないと思いましたので」

「まあ、その方がすっきりしていいわよ」

アリサちゃんはノエルさんを支持する。そ、そういうものなのかな？

「まあ、御嬢様達にはその方がよろしいでしょうし」

「ふっ。」

あれ、お嬢様方じゃなくて御嬢様達って言わなかった。アリサちゃんとはずかちゃんは紅茶でむせているけど何かあったの？

それから三十分ほどでツルギ君は林から出てくると机の上にあったクッキーと紅茶をわけ食いついた。普段なら行儀が悪いといふべきなんだけど泣きながら食べているツルギ君に注意することは出来なかった。・・・というより私には出来ないよ。

## 第十二話 粉碎初恋物語（ブローケンハートストーリー）（後書き）

あ、ぎゃああああああああああああ。

たかB H P O / 5 3

ツルギ「俺は、お前が、死ぬまで、お前を、殴るうつつつつうつつ」

サカサ「やめるんだ、ツルギ。見ろこいつのHPはもうゼロだ」

といいながらも作者の背後で身動きが取れないように作者に羽交い絞めを行うサカサ。

???「おーおー、やつとるなあ」

ツルギ「畜生っ、俺に何か恨みでもあるのか作者！」

サカサ「ある」

???「あるんかい」

サカサ「二次創作だけじゃなく、だいたい美少女の出てくる主人公は何かともてるんだ。だから、せめて一太刀というわけでツルギを年上好きにした。そうだ」

ツルギ「じゃあ、なにか?! するためのこの話か!?!」

サカサ「らしいぞ」

「???」十話以上もの伏線か。て、ものすごく長い伏線やな！  
ある意味驚異的や！」

サカサ「H A H A H A。まあいいじゃないか、その妹に興味を持たれたことだし」

ツルギ「それでも俺は嫌だった。てか、あのメイドさん酷いことしよる」

「???」ツルギ君、うちと言葉遣いが似てきとるよ」

サカサ「あの人とは気が合いそうだ」

「???」うちもや」

ツルギ「助けてー！ここにドSコンビがいるよー！」

「???」そういえば結局一週間以内更新は出来ひんかったなあ」

サカサ「『俺が悪いんじゃない。会社が悪いんだ。…急に補勤を入れるから』って、作者も言っていたな」

「???」某反抗期シスコン洗脳プリンスかい！」

ツルギ「最後の方で弱気になったがな」

サカサ「まあ、ここらでお開きといこうか。次回予告」

「???」了解や、次回 空を飛べて魔法使いは一人前。テイクオフや！」

第十三話 空を飛べて魔法使いは一人前。(前書き)

理由合って

コメデイ続きの

十三話

サイドストーリー

シリアスだから

この前書きは

広告も兼ねています。

リリカルなのか？黄金の瞳。バジリスク。

もうそろそろでこの小説に合流かも…。

### 第十三話 空を飛べて魔法使いは一人前。

ピーン。

「むっ」

「どうしたんだい、フェイト？」

月村邸の林の中でアルフは主人であるフェイトが何かに反応した様子に気が付いた。

「いや、何となくムツときただけ」

「…そうかい。ふ、ふああああ」

「…アルフ。眠かったら家に帰って休んでもいいんだよ」

「んー、そうする。あ、でもフェイトッ」

あくびを噛み殺しながら林の中から出ようとしたが、何かに気づいたアルフはフェイトに振り向いて少しだけ力を込めた目で言う。

「なに？」

「フェイトもすぐ休むんだよ。昨日から全然寝てないんだから」

「…ん、ツルギを連れて帰ったらそうする」

「っ」

フェイトの言葉にアルフは目を丸くしたがすぐにキラキラとした目で喜色満面といった具合で普段は隠していた尻尾を振った。

「アルフ？」

「ううん、何でもないよ。うん。なんでもない」

アルフは嬉しかった。今までフェイトは自分が何度言っても疲労で倒れる寸前まで休もうとしなかった。それなのに、「ツルギを連れて帰ったらそうする」。それがうれしかった。  
ツルギも時々無理をするからフェイトにもそれが影響したのかもしれない。

「じゃ、じゃあ先に帰るからね」

「？ アルフ、何かいいことあった？」

あったよ。

しかし、アルフはそう言わずにツルギ。いや、自分たちの家に尻尾を振りながら帰っていた。その足取りは今までにないくらいにとっても軽やかなものであった。

それから三時間後。  
キンツ。

「っ、ジュエルシードの反応。出るよ、バルディッシュ」

大きな木の枝の上でしばらく微睡んでいたら魔力の波動を感知し



たフェイトはバルディッシュを手に取り、結界を張ったのち、バリ  
アジャケットを展開する。

「イエッサー。ゲットセット」

黒の衣服からレオタードにも似た、スピード重視のバリアジャケ  
ットを身にまとい、黒のマントをはためかせながら木の枝から飛び  
立とうとすると、不意にすぐ足もとから声をかけられた。

「ふえ、フェイト?! お、お前、何やってんだ!？」

「えっ、っ、ツルギ?!」

ジャケット展開前まで周りには何の反応が無かったからかツルギ  
は避来矢の認識障害を使っていたのだろう。現にツルギの右手には  
元の大剣サイズになった避来矢が握られていた。

「な、何って、ジュエルシードを…」

声をかけられて驚きながらも説明を行おうとするフェイトに対し  
てツルギは顔を赤くしながら声を張り上げる。

「そうではない。羞恥心を持ってというのだ!」

「?」

フェイトは思い当たる節が見当たらないので首をかしげる。ツル  
ギはそんな様子にかまわず顔をそらしながら続ける。

「み、見えてしまったではないか」

（何が見えたのか。と、考えている）？

（ツルギがいるところと自分の位置関係を思い返している）??

（先程自分が何をやったのかを思い出している）????

（思い当った）！？

「……………（顔を真っ赤にしながらバルディッシュに最大レベルの雷を纏わらせる）」

「……………（顔を真っ青にしながら避来矢を鎧に換装する）」

二秒後。

もし、結界が張られていなかったら、今年最大の雷が海鳴市に落ちたと気象庁に記録されただろう。

今から二分ほど時間を巻き戻して、  
月村邸、中庭。

「っ」

（っ）

「！」

「ばりばりばりばりばりばり」

中庭でお茶会をしていたのは。

そんな中、ジュエルシード反応に気づいた一人と一匹と一本の剣に

緊張が走った。

ちなみにツルギはそんなことには気づかずクッキーのやけ食いをしていた。

断じて、八咫の鏡の使用における副作用（空腹）だけに非ず。

（…なのは）

（うん、ユーノ君。これは）

ジュエルシード。反応。

「ぐっぐっぐっぐっぐっぐっ」汚いっ「ごぶっ」

・・・主。

避来矢は前回の傍受の件もあるので念話はせずに自身でそう思った。

なのはの持ってきた手提げカバンから出てきたユーノは猫から追いかけられながらも異変に気づき、二人とも不自然じゃないようにどうこの場を離れるか思案をしていた。

それに気づかない、のどに詰まったクッキーを流そうと紅茶を一気飲みしていた失恋者は金髪お嬢様からアッパーカットという躰を受けていた。

なのはとユーノはそれにかまっている暇はなかった。避来矢はそんな主に呆れていた。

（そうだ、なのは。僕の後を追いかけて）

（え？ああ、うん。わかった）

「きゅー」

「あ、ま、まってユーノ君。もう、私ちょっとユーノ君を捕まえてくるね」

「あ、私も手伝おうか？」

「大丈夫だよ。すずかちゃんはそこでゆっくりしていて」

ユーノはお茶会をしているこの場所から逃げ出すかのように飛び出して、なのははその後を追う。

一方で、

「うー、うー」

いい角度で決まったアッパーを受けたツルギは鼻を押さえながらその場に崩れ落ちる。ツルギはリバーズ。及び、鼻に逆流しかけた紅茶塞き止めようと鼻と口を押えて地面に倒れながら呻いていた。

「くすっ」

ノエルさんがそんなツルギを見て笑っている。

「ふふ、ツルギ君は楽しいね」

そんな姉につられて、ファリンさんも笑っている。

「大怪我したから運ばれたって、聞いたけどそれだけ元気なら心配ないわね」

ふん。と鼻息ひとつ立てて、膝上に乗っかってきた猫の頭をなでるアリサは笑っている。

「もう、アリサちゃん笑ったら悪いよ」

すずかもこの状況が面白いのか笑ってる。

周りのみんなも笑ってる。

お日様も笑ってるぅー、るーるるるるるるるるるぅー、今日もいい天気いいー。

（だから誰だ?!）

「…主。ジュエルシード反応」

「へ、まじ?!」

避来矢の報告を受けたツルギはナレーションに対しての疑問を感じながらも顔を上げてすぐさま立とうとした。ら、

「ん、縞々？」

「／／／つ／／／」

顔を上げた先に、わずかに開いた両足の隙間に青と白のストライプの入ったパンツが見えた。

そして、その持ち主は普段は着ないミニスカートを抑える。

「…ツルギ。あんたね」

「三十六計！」

ツルギはなのはの後を追うように林の中に逃げ込む。

アリサもそれを追おうとするが膝に乗っかってきた猫を払い落とすこともできずにただ顔を赤くして拳を握ることしかできずにいた。

「…あー、もうっ、こんな事だったらミニスカートなんてはくんじゃないかった」

「そういえば、アリサちゃん。今日は珍しくミニスカートだね」

「べ、べつに今日だけよ、今日だけだから。…足が好きとか言ってたからとかそういうのじゃないし」

アリサは後半の部分は口の中でごにごよと言っていたが、ずずかは何となくそれを察知していた。

「ツルギ君ってさあ。…脚フェチ？」

「なんで知ってるの?! あっ」

にやり。と聞こえそうな笑顔のすずかにアリサは焦り始めた。

「…へー、やっぱりそうなんだ」

「違うからね、すずか! あんたが考えていることは間違っているからね!」

「へー、そうなんだ」

すずかは意地悪な顔をやめて、少しだけ興味なさそうな顔に戻った。

「そう、そうだから、変に誤解しないでねっ」

「じゃあ、私にもまだ…」

「そうだから、…え？」

「なーんでもない。ところでさ、サカサさんという人にもちよつと興味あるんだけど…」

お嬢様二人のお茶会はまだまだ続きそうだ。

フェイト視点。

「うっ、もう鎧展開は無理だな」

ツルギは避来矢の認識阻害を使い、避来矢の鎧を纏っているという幻を使っていた。その幻というのも実際それに触らないとわからないほど現実感を思わせていた。けど、それはどうでもいい。

「当然だよ！ツルギがあんなにエッチだったなんて…」

…うっ、なんでよりもよって真下にいるのさ。

思い出すだけで顔に火が付いたかのように熱かった。バリアジャケットを纏う際どうしても着ているものは分解され、体のラインは光に包まれているとはいえボディーラインが目立つ。それに対して、

ツルギの避来矢は、ツルギが大きな風船に飲み込まれたかと思っていると、風船が縮み人の輪郭を現してきたかと思いきやその時は既に鎧を纏っている。うう、なんかずるい。

ツルギはフェイトからの教育的指導（サンダーレイジ連発）を受け、避来矢の鎧を展開するエネルギーは残りわずかとなり、先程強制解除された。なのはもいるはずだから、念のために鎧を纏っていると知らせる認識障害を使っていた。

「…うう、見られた。それなのにツルギのバリアジャケットはズルい。不公平だ」

「だから、悪かったって」

「…フェイト嬢。主、裸身、希望？」

「違うからね！」

「っ！」

「ツルギもそんな対応しないで、その恰好でその対応されても気持ち悪い。というか、怖いよっ」

鬼の面をした鎧武者が自分の体を抱きしめている絵を想像してみよう。

・・・うむ、キモ怖い。

「もっつ、大体、昨日はどうして帰って来なか」

「やおおおおおおん。



「「！」」

空気を震わせる鳴き声。そこに思わず顔を向けるとそこには。

「…猫？」

「あの猫が大きくなりたいたと思ったからジュエルシードが発動したのかな？」

「たぶん、そうじゃないかな？て、あれは」

ツルギが何かを見つける。あれは…高町なのは。私たち以外にジュエルシードを集めているもう一組の魔術師。

彼女たちも大きくなった猫を見て啞然としていた。

「さて、どうやって高町たちより早くジュエルシードを奪取するか？」

「猫へ攻撃してもたぶん邪魔するだろうしね…。目視できない上空から一番強い魔法で攻撃とかは？」

「ごめん、俺と避来矢は空飛べないんだ。それは無理」

「…あれだけ、避来矢を使いこなしているのに？」

「謝罪。我、力量、不足」

「まあ、詳しくは家に帰ったらな。高町は結構強い攻撃方法も持っているし、相手にすると痛い目に合うだろうし」

ツルギから教えてもらった限り、あの子は優しいからきつと猫を守ろうとするだろうし。避来矢の送ってきた情報だと物凄い魔力砲撃をぶつ放す。出来るなら相手にしない方がいい。

そう考えていると避来矢から一つ案を上げられた。

「主、提案。認識阻害、仕様。作戦、伝達。提示、了解？」

「どんな作戦？」

避来矢の提示した作戦は簡単に言つと。

ツルギが認識阻害で高町なのは気づかれないように接近。

一度、高町なのはとレイジングハートを避来矢の刀身で殴る。これは認識阻害を彼女たちにかける為でもあり、できることならその一撃で意識を奪うという算段でもある。

その後にジュエルシード封印という形になる。

「女の子を殴るのは抵抗があるが…」

「ツルギが出来ないなら私が」

「いや、俺がやるよ。フェイトが失敗するとは思えないけど俺なら失敗しても大丈夫だろ。高町に気づかれてもきつと戸惑う。そこに追撃を加えればいい。それでも駄目なら認識阻害を使って姿形を消して再三の不意打ちをうてばいい」

「・・・」

「どうした？フェイト」

「ツルギって、バカじゃなかったつけ？は、まさか、預けている  
ジュエルシード使って願いを叶えた？！」

少しでもいいから頭を良くしてください。とか。

だ、駄目だよツルギ、そんなことしたらフランクスシフトで雷  
撃だよ？！

「ちがわい。従兄弟が、サカサが仲のいい人間の家に侵入したり  
不意打ちをつく際にはそうしろと何度も体。…いや、心にトラウマ  
として残っているんだ。イタリアでマフィアの皆さんにお世話にな  
った時に、敵対組織の家に潜入させられた時にそう仕込まれたんだ」

「よ、よかったああ」

本当に安心したよ。だって、ツルギだもん。何するかわからない  
し。

「…はあ。じゃあ、行ってくるな」

ため息交じりにツルギは高町なのはのいるほうに歩いて行った。  
一度、彼女を追い越して正面に回り込んだ。どうやら正面から頭を  
叩くつもりらしい。それでも駄目なら鳩尾に一撃という算段なのだ  
ろう。

ちなみに何でツルギの姿が見えるのかというと避来矢がバルディ  
ッシュとシンクロしてその姿を私とバルディッシュに見えるように  
してくれているらしい。

そんなことを考えていると、高町なのはが赤い宝石、デバイスら



私はツルギの手から離れ、高町なのはの頭上近くに打ち上げられた避来矢。それを高速移動しながらキャッチして、彼女の目の前に降り立つ。

「…え？」

目の前の女の子は突然のことに驚いている。何が起ったのかわからないという顔をしていた。まったくツルギはスケベなんだから私だけならともかく。じゃ、ないっ！とにかく。

「君は何を考えているの！？誰が見ているかわからないのに、こんなところでジャケットを展開しようとして！」

「ご、ごめんなさい？！」

「その使い魔も、この子のパートナーならちゃんと周りに気を配る！」

「え、あの、僕は使い魔じゃ」

「じゃないと、私みたいな魔導師じゃなく、一般人にもばれるかもしれないでしょ！困るでしょ！それでもいいの！」

「す、すみません！」

まくしたてる私に二人はすぐさま頭を下げる。本当に緊張感がないんだから。

「私があの子のジュエルシードを封印するから君たちはもう帰って！」

「え、ええ？！あの、私たちもジュエルシードを」

「そ、そうです！あれは危険なもので…」

「いいから帰れー！」

シュンッ。

寝不足もあつたが、ツルギがのぞきの前科持ちと未遂だったこともありこの時の私はどうかしていた。

私は転送魔法を使って二人を適などどこかに転送した。本来、結界内で転送魔法を使っても結界内から出ることは出来ないけど私自身が張った物なのでその辺は大丈夫。

「え、ちょっと…」

「ま、待つて…」

私は二人を転送させた後、巨大な猫からジュエルシードを摘出するために可哀相だとも思ったがある程度魔法で攻撃してジュエルシードを獲得した。

その日の夕方。

ツルギの家。正確には居間に置かれたちゃぶ台の向こう側で腕組みをしているツルギの目の前。アルフはその横で何事かと私とツルギを忙しく見ていた。

「…何か言うことはあるか？」

「ごめんなさい」

冷静になった私はツルギが初めて会った時にした土下座というものをしていた。

避来矢がなくて怪我の治療も行うこともできず、体の所々に魔法による打撲を残しながらも、何とかここまでタクシーを使って帰ってきた。

私が転送したあの子そう遠くないところに転送されていて、私が弾き飛ばしたツルギを発見。月村邸に連れて行った。

そのあと、ツルギは月村家の皆さんを言いくるめるのは大変だったとか。

「今日の晩御飯はサカサが作ったレトルトながらも本職の人真っ青のフランス料理フルコースだったが……。フェイトは抜きな」

「えー」

「ごめんよ、フェイト。フェイトの分まで私が食べるから」

アルフ、それはフォローになってないよ。

ご飯にもありつけたけれど、ツルギが私を見る目が怖かったです。今日のことはおあいこということで。手を打ってもらいました。

第十三話 空を飛べて魔法使いは一人前。（後書き）

あとがき

たかB「本来、なのはだったが、フェイトにやられる役をツルギにやってもらいました」

フェイト「さ、災難だったね、ツルギ」

ツルギ「ほう、実行犯自身がそれを言うか？」

フェイト「ごめんなさい！」

なのは「だ、駄目だよ、ツルギ君。その振りがぶった避来矢君おろして！私の貞操を含めて、フェイトちゃんは私を守ろうとして」

フェイト「…なのは」

ツルギ「むう、そこまでいうのなら」

なのは「ほう、大丈夫。フェイトちゃん」

フェイト「ありがとう。なのは。今度、同じようなことがあったら、次は私がなのはを守ってあげるね」

ツルギ「それは、つまり今度はなのはが俺に砲撃をかますということか」

なのは「…フェイトちゃん」



フェイト「…なのは」

たかB「まだA「sじゃないよ、お二人さん」

ツルギ「しかも否定はしないんだな。なのは」

なのは「にや。で、できるだけしないようにするよ」

フェイト「しないと言わないんだね」

たかB「このままではお後が悪いようなので次回予告」

なのは「次回 激闘？ジュエルシード争奪戦！」

フェイト「？が気になるね」

ツルギ「前々回のこともあるからな」

#### 第十四話 激闘？ジュエルシード争奪戦！前編（前書き）

どうだ、短期間更新。

見直し？

もちろんしてませんよ。

嘘です、しましたよ。

それでも誤字脱字があるかもしれない。

気づいた方、教えてくれるとうれしいです。

あと感想も。

## 第十四話 激闘？ジュエルシード争奪戦！前編

「温泉？」

『うん、昨日から大型連休に入っているでしょ。明日、明後日を利用して山の中にある宿でゆっくりしようと思うんだ』

朝食の後片付けをしていたら携帯電話が鳴り、それを取るとずかが出てきた。

三人娘達は明後日、温泉に行くとのこと。

俺はジュエルシード探し。あつちのはのんびり、ここはぐったり。これが格差社会という奴ですか？

『それでね、ツルギ君もどうか。一緒に温泉入らない？』

「すずかよ、昨日説明しただろ。俺は俺で大事な用があ」

『…お姉ちゃんやノエルも来るよ？』

「詳しくきこ…用があるから無理だ」

『湯上りのお姉ちゃんのふともも。ノエルの赤みを帯びたくるぶし。ファリンの汗ばんだ肌』

「是非とも同行…じゃなくて、行けないから」

『アリサちゃんやなのはちゃんも来るけど…。背中流してあげようか？』

「なかなか魅力的だが今日、明日予定が入っている。すまん、無理だな」

『…（なんで本音と前提がこぼれないのかな？）頭蓋骨』

「こ、こ、こここわくなんきやないんかられ」

本当なんだからね。

なんか怒ってませんか信長様？じゃなくてすずか様？

『むー、今日もなの？もしかして女の子がらみ？なーんて』

「ノーコメントで」

昼からフェイトとの戦闘訓練を予定している。夜はガッツリとサカサの魔の手、じゃなくて息のかかったお寿司の店、なんと回転していない所。

オウ、グレイトリッチ！

その店では、サカサの名前を出せば月に一回だけ、無料で食べられる。…あいつは何処にでも勢力を伸ばすな。フェイトとアルフもせっかく日本に来たのだから日本食代表を長年務めている寿司を堪能してもらおう。

『…絶対連れて行くから』

「へ？」

すずか様？なにやら声色が低くなっていますか？

『どこも洗わないで待っていて』

「いや、だから、行けないから」

さすがに不潔ではないか？

温泉に行くからとはいっても前日に風呂ぐらいは入るだろう？

『拉致でも誘拐でも犯罪まがいなことでもしてでも連れて行くからね！』

拉致も誘拐も犯罪だよ、さすが。

それから三十分後。アリサからも温泉のお誘いがあり、先程の会話に似たことを繰り返した。

さらに一時間後。高町なのはからも連絡があった。彼女の場合、頭蓋骨の部分が、お話になっていた。

………… あれ？おかしいな？一番平和的だったのに。思い返しただけなのに。一番戦慄したのは何故だ？

「ツルギ、早く訓練開始するよ」

「おう、今行く」

ちなみに朝食をとっている最中にフェイトから空を飛べないのは魔術師として半人前以下。というありがたいお言葉をもらって、避来矢の新しい機能 黒斗雲 を解放した。

この機能は飛行と跳躍。簡単に言えばワープだな。その実用訓練でもある。

「ほいじゃ、二人とも結界を張るよ」

「ん、それじゃ始めようか」

「ゲットセット」

フェイトはバリアジャケットを予め展開していただけたのでバルディッシュを戦闘形態にセットしなおすだけだ。

「頼むぜ避来矢。拙い主様のサポートよろしく」

「了解。黒斗雲、起動」

対する俺は避来矢が鎧形態に換装するように黒い光が俺を包み込んだ。

そして、黒い光が五秒ほど俺を包み込む。そして、その光が拡散されるとその無骨で巨大な刀身は無くなり、俺の体は黒い袴で身を包んでいた。

「新しいバリアジャケット？ 鎧？」

「半分肯定。半分否定」

袴の上からでフェイトやアルフには分からないが肘と膝にはまるで金属板のような硬い感触がある。そして袴から飛び出している両手。足首から先には銀色の金属でできた籠手と足袋。

これは最低限度の格闘装備ともいえる。つまり、

「……フェイトと同じ機動力重視かつ空中格闘用のバリアジャケットか」

「肯定。飛行能力・転移能力特化型バリアジャケット。代償、現状、防御能力。鎧形態、一割未満」

「えっ、そんなに下がるの?!」

今の今まで避来矢の防御能力に頼ってきた俺にとって衝撃の事実だった。

「追加要項。鎧形態、黒斗雲、熱量共有。多用、厳禁」

「しかも使用エネルギーは別々じゃない!」

「…なんというか、ツルギらしいと言えらしいというか」

「ツルギ。大丈夫だよ慣れればいいことだし。じゃあ、やるよ」

ダメ出しの真実を突きつけられた俺は驚きを抑えることができずにいた。その姿を見たアルフは苦笑いをし、フェイトはそれが当然と言わんばかりにバルディッシュを振りかざす。

「ちょ、フェイト。まだ心の準備が…」

ズドオオオオオン。

昼間から雷と斬撃。更には夕方にはアルフと徒手空拳。と、ツルギは久々に命の危険がない?トレーニングに充実した日々だった。

???視点。

「…あの子は一体何をしているの」

とある暗い空間で、一人の女性が青白い光の球に映し出されたフェイトとアルフ。そして、ツルギの姿を見て唸っていた。まるで親の仇。…いや、自分の子供の仇を見るかのように。

それはフェイトが楽しそうにしていることに、アルフが年頃の娘のように、ツルギがそんな二人と一緒に笑っていることに。

女性はいら立ちを隠しきれなかった。いや、もともとその空間には彼女一人だけなので隠す必要などない。

そんな中、彼女の怒りを少しだけ薄める存在があった。

「…あの魔剣。もしかしたら、ロストロギア？いえ、それよりもあのお人形。これはお仕置きが必要ね」

これ以上は見えていられないと言わんばかりに光の球を消す。その空間唯一の光が最後に移したもの。それは憤怒に染まった顔だった。

フェイト視点。

「…は？実家に帰る？」

「うん。とはいっても報告だけだからすぐ戻るよ。それでお願いがあるんだけど…。避来矢を少しの間、私に預けてくれないかな？母さんが避来矢について調べたいことがあるんだって」

「避来矢を？」

「フェイト嬢、先日、事情説明、忘却？我、主以外、接触、即座、機能停止」



ツルギの連れて行ってくれたお店で綺麗なお寿司を食べて家に帰って来ると母さんから連絡があった。

アルフは家に帰って来るなり歯を磨いて素体である狼状態になりすぐに眠った。それを見送った後で、私はお風呂上りに避来矢の横でパソコンをいじっているツルギの背中にも声をかけた。

ツルギ以外の人間が避来矢に触れると、避来矢は電源を落としたテレビやラジオのようにうんともすんともいわなくなる。ツルギと一緒に触っていれば別だが、そうでないとただの剣になってしまう。以前、ツルギを吹っ飛ばした時、私が弾き飛ばされた避来矢をキヤッチすると同時にツルギは私の作り出した結界から追い出された。どうやら避来矢のサポートなしでは結界の中にもいられないようだ。

「うん。それは分かっているんだ。だから避来矢には直接触れないように持っていていこうと思うんだけど…駄目かな？」

「…うーん。サカサともあの時のメール以来、何の連絡もない。というか連絡が取れないから何とも言えんな」

やっぱりそう簡単にはいかないか。私だってバルディッシュを調べたいから見たこともない人に貸して。なんて言われてもそう簡単には貸せないし。

「ま、フェイトの母ちゃんならいいか」

「うん、そうだね。そう簡単には…え？」

「主?!」

…今、なんて？

「いや、別にそのまま持ち逃げなんてことはしないだろう？それにフエイトの母ちゃんだぞ。信用できる」

「疑問提示！信用、要素、何処！？」

「そ、そうだよツルギ、どこにそんなものが！」

慌てだす避来矢と私を見て、ツルギはまるで何を言っているんだ。という顔をしていた。

「え？フエイトの母ちゃんなんだろう？疑う要素あるのか？」

「……………」

「……………」

その様子に避来矢も私も啞然としていた。ツルギは疑っていないかった。

ただ、私の母さんということだけで、信じてくれた。

「えーと、なんか間違ったこと言ったか？」

「…主」

「ふ、ふふ」

何か間違えただろうかと急に困りだしたツルギの顔はとてもおかしくて…。

とても……………嬉しかった。

「ふふふ。ありがとう。ツルギ」

私は嬉しすぎて顔の頬が緩まるのが分かった。こんなに心が満たされたのはいつ以来だろう。これ以上ツルギの前にいたら顔がとろけるかもしれない。

「お、おう」

ツルギにお礼を言ってすぐに二階にある私とアルフが使っている部屋に駆け込む。そして、心も体もが満たされた状態のおかげで下の階で繰り広げられた会話に気づくことなく私は眠りについた。

一階居間。

「…やべえ、さっきのフェイト。すげえ可愛かった」

「…主いいい」

「そんな声を出すな避来矢。一応、サカサが帰ってきてもいいように浄化済みのジュエルシールド二個は俺が持っておくから」

「…主、過度、信頼、失態、原因」

「避来矢、お前はフェイトを信用していないのか？」

「…否」

「じゃあ、その母ちゃんも信じろよ」

「…善処」

「まあ、いきなりは無理だろうけどな。ゆっくりでいいさ。強要はしない。俺だっけいきなりは信用できないさ。でもさ、あのフェイトの母ちゃんだったら信用できるだろ。そういえば、ジュエルシードって俺ら、何個集めた？」

「…浄化済、六個。未浄化、一個。計七個」

「大体、一日一個のペースだな。なのは持って行かれたものもあつたな」

「肯定。二個、なのは嬢、所持」

「じゃあ、フェイトが持っていくのはジュエルシード五個とお前か。…なんか手土産でも持たせるか？」

「寿司？」

「痛むだろ。うーん。翠屋のケーキとかがベストなんだよな。アリサに連絡してみるか」

こうして、フェイトの帰郷前夜は更けていった。

なのは視点。

私、高町なのはは人生初の勧誘をしていた。

勧誘する人はツルギ君。勧誘先は山の中にある温泉。  
その目的はツルギ君の首に提げているもの。

「え、いや、でも俺着替えも何もないし」

「そのへんは旅館で用意するから大丈夫だよ」

「そうそう、だから一緒に行こうよ。ね、ユーノ君もそう言っているし」

「きゅーきゅー」

「いや、でも、そこまでお世話になるわけには…」

昨晚、アリサちゃん経由でツルギ君が翠屋のケーキを所望してきたのを聞いて、私はお父さんとお母さんに頼んでケーキを用意してもらった。

温泉旅行当日の早朝。ユーノ君と一緒に開店前の翠屋でアルバイトの皆さんにツルギ君に渡すようにと、伝えようとしたらツルギ君が開店前にやってきた。

首に白いジュエルシードの入った小瓶をぶら下げて。

「それに開店前に来てケーキを頂いただけだけでもおこがましいような気が…」

「そんなことないよ！ね、お父さん、お母さん！」

「しかし、出発はあと一時間後だしな。アリサちゃんたちも、そろそろやって来るぞ？」

「アリサも来るんですか！？それじゃあ、なお悪いな。待たせて、あいつの機嫌を損ねたら温泉じゃなくて血の池に浸っちゃうよ！」

「すずかちゃん達を待たせるわけにもいかないし…」

「ちよ、ちよつと待つてなの。今、連絡をするから！」

携帯電話を取り出し、二人に連絡を取る。お願い二人とも早く出てー！

ユーノ君はユーノ君でツルギ君を繋ぎ止めるために必死にツルギ君のズボンを引っ張っていた。

その様子にツルギ君は困った顔をして「すいません。ちよつと」と言い、席を離れて携帯電話を使い誰かと話している。今のうちにいいいいい。

『もしもし、なのは？どうしたの、まだ集合時間じゃないでしょ？ま、まあ一応今からそっちに向かう予定だから…』

「アリサちゃん、お願い、もう少し遅れてやってきて！」

『は？何を言っているのなのは？』

「アリサちゃんが遅れてきてくれればツルギ君を温泉に引きずり込めるの！」

『…どういうこと？』

「かくかくしかじか」

『四角いムーブ。ね。分かったわ。ちゃんと引き止めていなさい』

よ、なのは。ツルギには聞きたいこととやりたいことがあったから』

「了解なの、それじゃあ三十分ぐらい後に」

アリサちゃんとの交信を終えて今度はすずかちゃんに連絡を行う。私がそんなことをしている間に、ツルギ君は緋色の長い髪をしたお姉さんにケーキとジュエルシードの入った小瓶を渡していた。ユーノ君はそれに気づいて私の脚をペチペチと叩いたが私は気が付かないまますずかちゃんとの交渉を行っていた。そして、

「いい湯だなあああああああ、ビバノンノ」

「ツルギ君、君は本当に小学生なのかと疑う時があるよ」

「しょおがあくせいいいいでえすよおおお」

「…無駄に拳が入った声だねえ（おっさんくさいなあ）」

「なのはー、いつまでもそこにいると変態さんになっちゃうよ」

男湯というのれんの目の前で、ユーノ君からジュエルシードは緋色のお姉さんが持つていったという連絡を受けてがっくりとしている私にお姉ちゃんから声をかけられた。

念のため、ユーノ君も男湯に入って他にもジュエルシードがないかどうかを調べたけど見つからなかったらしい。

私の熱の入った勧誘にお母さんとお姉ちゃんは何か勘違いしたのかこの温泉に着くまでずっとからかわれた。むー、ツルギ君あとでお話なの！

ぞくつ。

「ん、どうしたのかねツルギ君？」

「いや、今なんか、殺気。いや、殺意を感じたんで」

「は？」

ツルギは辺りを見渡したが何もないことに安堵して再びお湯の中に身を沈めた。



第十四話 激闘？ジュエルシード争奪戦！前編（後書き）

あとがき

たかB「さて、突然だがここで問題です」

主人公 - 避来矢<sup>ツルギ</sup>」

たかB「さて、この〃の先には何が入る？」

なのは「無能」

ユーノ「不幸な人」

アリサ「ごく潰し」

すずか「モルモット」

アルフ「ご飯をくれる人」

フェイト「え、えーと。あ、脚フェチ？」

ツルギ「皆なんか嫌いだ！」

たかB「この小説を読んでもくれた人からの答えも待っています」

避来矢「次回 激闘？ジュエルシード争奪戦！後編」

たかB「え、前編後編に分けるつもりはなかったただろ？仕方なく

分けただろう？H A H A H A、その通りです。なんか温泉話を書こうとしたらこうなった。後悔はしていない」

なのは「そんな、ついやってしまった。反省してますみたいな言い方でしめるの？」

たかB「駄目ですか！………そうですか」

## 第十五話 激闘？ジュエルシード争奪戦！後編（前書き）

重大発表。

主人公が主人公らしくなります。

デバイスが普通にしゃべります。

なんでかって？

作者<sup>おれ</sup>がいろいろと限界だからです。

…文章力とか。

## 第十五話 激闘？ジュエルシード争奪戦！後編

午後十一時。

温泉を堪能して、卓球大会。意外なことにのんびりとした性格の  
すずかが優勝した。その後再度、全員で温泉につかることに。

俺が男湯から出ると女湯からアリサとユーノが一緒に出てきた。  
何故かユーノは出汁を取られた煮干しのように細くなっていた。ア  
リサ曰く隅々まで洗ったとか。ユーノは何か大切なものを無くした  
と言わんばかりに白くなっていた。脱色もされたのか？

その後、豪華な食事もらい満足満腹で布団に入り眠るだけ。の  
はずだった。

子供である俺たちは本来、寝ている時間帯。にもかかわらず、浴  
衣ではなく普段着に着替えた高町なのはに呼び出されていた。一応  
俺も普段着。

まあ、夕食後に旅館の外に来るように言われた。正直、眠い。

「…で、話って何？高町なのは」

「むー。なのはだよ」

俺の言葉に少しむくれた顔をしてなのはは、可愛く怒った。

「ん？ああ、すまん。同じご飯食べたから確かに名前前で呼ばない  
とな。で、改めてどうした、なのは？」

「うん、あのね。その、その白い石を、私に譲ってくれないかな  
？」

…なのは俺のことを知らないからそんなことを言えるんだろう。  
だが、俺はなのはのこと知っている。彼女は色違いとはいえ欲している、このジュエルシードを。

「…嫌だ。これはサカサ。科学者の従兄弟に渡さないといけない代物でな。これが無くなるとサカサの手で俺の命が無くなる」

「にやはははは。もう、そんな冗談を…」

「……………」

「冗談」

「……………」

「…にゃあ」

「……………」

「…本当なの？」

「（コクン）」

悲しいけど、これが現実なんだよ。

すでに預かっていたジュエルシードも一個アルフに渡してもうないし、正直これまで手放したら、俺は命を手放す。これはまさに俺の生命線。  
ライフライン

「あ、あのね、詳しくは言えないけど、それは危ない物なの。だ

から特定の場所に保管しておかないといけないの。それで」

「…まあ、俺が持っているこれも昨日までは安全な避来矢とくろに収められていたんだが、今日。まあ、明日までは俺が自分で持つておくように言われてな…。悪いけど譲れない」

「っ。どうしても駄目、なんだね」

譲れない。の言葉に強い語気を込めていう。そちらの事情も分かるがこつちにも事情がある。

…フェイトもサカサも元気にしているといいけど。

まあ、どっちも元気だろう。フェイトは母ちゃんの家に行つたし、サカサは天国だろうが地獄だろうがどこでも遊びほうけるに違いない。

「逆に尋ねるけど。どうしてそんなに危険な物なのに。そうだと知っているのになのはこれを欲しがる？特定の場所って、どこだ？」

「え、えーと、それは。…ごめんなさい。言えません」

お互いに秘密。という状態を維持したいというのならこれ以上の成果は見られない。

なのはの事情は他人を巻き込みたくない。何となく俺と似ているかもしれない。が、俺は既に協力者というか関係者が少なくとも三人以上もいる。ここで喋ればそれこそ大変なことになる。正直、サカサ、フェイト、アルフの三人から折檻されたら俺は確実に死ぬ。

「じゃあ、俺もこれ以上は言えない。これも渡さない。危険な物なのに女の子に渡してられるか」

「そ、そんな」

「じゃあ、話せるのか？」

「あ、あつ」

「ごめんな。事情はあらかた知っている。恐らく、アリサやずか。家族のみんなを、他人を巻き込まないため。」

「俺からはアリサにこれはサカサ関係だからこれに似たようなものを見つけたら絶対に関わるな。と、伝えている。サカサの恐ろしさの片鱗を見ているアリサはこれをすぐに承諾。」

「ずかには、事前に話していることもあつてかすぐに了承してくれた。」

問題は恭弥さんや士郎さんといった高町ファミリー。」

「どういうわけか、サカサのことを少しだけ知っているようで、話の途中で敵意のようなものを当てられたが敵対することはない。と判断したのか、それとも俺のことを取るに足りないと考えたか、すぐに矛を収めてくれた。が、」

「あの、その、どうしても駄目？」

「なのははしつこくジュエルシードを欲しがった。」

「ダーメツ。士郎さんや恭弥さんにも言われているんだろ。堅気の人間はサカサにできるだけ関わるな。って、大体、人に喋らせるだけ喋らせて自分は教えないなんてどういうことだ。むしが良すぎる」

「にゃ、にゃあ」

「それにだ、なのは。こんなところを恭弥さんや土郎さんに見られたら怒られるぞ。子供がこんな夜中に外へで」

ズドオオオオオンッ！

そんななのはに追い打ちをかけようとした瞬間、なのはの背中。正しくはその背景となっていた夜空に緋色の流星が空から落ちてきた。

「な！」

「にゃあ！」

流星が落ちたのはそう遠いところではなく、おそらくここから二キロもない山の中。

そして、その流星の色に俺は見覚えがあった。あれはアルフが魔法を放つときに見える光。：嫌な予感しかしなかった。まるでアリサが結界に捕まった時と同じような気がした。

「くそ」

「え、ちょ、ツルギ君」

突然の轟音に驚くなのはを尻目に俺はなのはの横を走り去る。そのままの勢いで手入れのされてない林の中につつこんでいく。

避来矢も持っていない状態で危険地帯に行くようなものだが関係ない。

ただ、そこへ一秒でも早くいかねばならない。そんな気がした。



なのは視点。

「ちょ、ツルギ君」

ツルギ君からジュエルシードをどうにか譲ってくれないかと頼んでみたはいいもののまるで相手にされず、逆に私の方が追いつめられていたら突然、轟音が鳴り響いた。

その轟音が何なのかわからないまま振り向いたときにはツルギ君は森の中に走って行った。まるでそこに呼ばれているかのように。

（なのは！向こう側から魔力反応。…これは、この間の女の子だよ）

（え、あの時の赤い目をしたあの子？）

（うん。でも、ものすごく弱っている。まるで今にも消えそうな…。とにかく尋常じゃないよ。何かあったかも）

旅館の陰にいたユーノ君から念話を受けた私は、急いでツルギ君の後を追うためにポケットからレイジングハートを手に取り、ツルギ君の後を追おうとした。バリアジャケットを展開しようとしたらユーノ君から念話が入る。

（なのは。セッティングは待つて。一応、結界を張るから。と、その前に念のためにツルギと君が布団で寝ている幻を作っておくね）

（ほえ、どうして？）

（どうしてって、そりゃ、君たち二人が夜中にいなくなったら他の皆が探すでしょ。だから念のためにだよ）

「え、でも。…うん、わかった」

前に言われた。誰かが見ているのかもしれないと。あの時の女の子が言っていたことを思い出した。

一度旅館の方を振り向くとベランダにいたお父さんやノエルさんたちが何事かと窓の外を見ていた。

危なかった。あのままセットアップしていたらばれていたかも…。

（うん。だからもう少しだけ。…よし、人払いの結界展開。なのは）

「うん。レイジングハート。セーットアープ」

「スタンバイ、レディ。セットアップ」

「行くよ、レイジングハート」

「オーライマスター」

真っ暗な森の中で私は白いジャケットをはためかせながら空を飛んだ。

とある部屋での会話。

「くおー」「すぴー」

「う、この轟音で寝ているなんて…」

「この二人。…結構図太いわね」

轟音で目が覚めてた御嬢様達はその隣でのんきにいびきをついていた二人の姿に呆れていた。

ツルギ視点。

ようやく流星が落ちてきたと思われる場所にたどり着くと、落下地点を中心にできたクレーターの中に二つの人影が見えた。

それは体中に火傷の跡を見せたアルフとフェイト。その横に避来矢が地面に突き刺さっていた。

特にフェイトの方はダメージが深刻で白かった肌は火傷とあちこちに出来たみみず腫れでひどい状態にあった。致命傷を負っていない。いや、負わされていない状態でここに落ちてきたとみるべきだろう。

「フェイト！アルフ！」

たまらず俺はそこに駆け寄ると、それに気づいたアルフはフェイトを抱えながら押し付けるように俺に避来矢を渡す。

「ツルギ、早く治療をしてやっておくれよ！」

「わかってる。避来矢。八咫の鏡！」

「…機能復旧。…了解。八咫ノ鏡、発動」

避来矢の巨大な刀身を一抱えの巨大な鏡に変化させてフェイトを中心に白い光を照射する。だが、それでは足りないと思えるくらいにフェイトは体全体に怪我を負っていた。

「…何があつた。まさか管理局の人間とやりあつたのか？」

「違うんだ。あのクソババアが…」

クソババアで、誰だ？と聞こうとしたら。フェイトが体を震わせながら喋り始めた。

「…お母さんの悪口は言わないで。ただ不器用なだけだから」

「母さん？まさか、フェイト。お前、その怪我…」

「肯定。フェイト嬢、母君、…説教、受講」

「何が不器用さ。何が説教さ！あんなの拷問だよ！私が割って入らなかったら死んでいたかもしれないじゃないか！」

避来矢から念話にも似た映像を俺に見せた。それはフェイトがジエルシードを母親に渡した後の映像。光る鎖でフェイトを縛り上げ、悲鳴を上げて鞭で打ち続ける。その上、気絶したら、フェイトが前に見せてくれた雷の球を手の中で作り出しフェイトに投げつける。鞭を打つ。

その行為の途中で、アルフがツルギから受け取ったジエルシードをフェイトの母親に投げつける。それに一瞬気をそらしている間にアルフはフェイトの母親。プレシア・テストロッサの足元に置か

れた避来矢を拾い、フェイトと一緒に転移した。その行為に腹を立てたのかは分からないが、そんなアルフの背中にプレシアは雷の球を投げつけた。

アルフは気丈にもそのダメージを受けながらもここに転移してきた。

「…な、なんで。なんでここまで酷いことを！」

「…避来矢。ツルギには教えないでって言ったのに…」

八咫の鏡からこぼれた光はフェイトを完全に癒したが、体力や魔力までは回復できない。

避来矢が何をしたのか感づいたのかフェイトは弱々しく避来矢に言った。

「もう止めよう。このままどこか遠いところに逃げようよ、フェイト」

「そうだフェイト。お前、こんなに頑張っているのに、こんな仕打ちは間違っている！」

「…二人とも。ありがとう。でも、私がいなくなるとあの人は一人になるから…」

アルフは悲しみに。俺は怒りで打ち震えていた。

命がけで。そう、死んでもおかしくない状況があったのに、それでもフェイトはバルディッシュを手に取りジュエルシードを捕獲しに行った。

それなのに。フェイトは。

母親に頭を撫でられるわけもなく鞭で打たれ。  
感謝の言葉を受けるわけでもなく雷に焼かれ。  
激励の言葉を受けることもなく非難されて。  
それでも母親をかばう。味方であり続ける。

「私は、フェイトに笑ってほしいんだ。フェイトが酷い目に合うのが辛いんだ。フェイトが悲しくなると私も目と鼻の奥がツンてなるんだ」

アルフは泣きながらフェイトを抱きしめる。体力のないフェイトはされるがままだったが、そんな状態でもアルフの頭に手を置き慰める。

「…アルフは私と少しでもリンクしているからね。…御免ね。私、強くなるから。泣きたくならないくらい強くなるから」

「…っ！」「」

フェイトの慰めにアルフは流す涙を増やした。  
いつの間にか、フェイトの言葉に俺も泣いていた。

「…どうして、どうしてわかってくれないんだ！私はフェイトに幸せになってほしいんだ！」

「ごめん。あと少しだから。だから、アルフも頑張って」

「…わかったよ。でも、約束して。これが終わったらフェイトはフェイトの為に頑張るって」

そんな二人の会話を聞いているのが辛くなった俺に避来矢から俺

だけにしか聞こえないように最少の音量で話しかけてきた。

「…主。ジュエルシード反応」

「…どこだ？」

「西南西、三キロ、河原付近」

その報告を受けて俺は、フェイトに声をかける。

「フェイト。俺は別に泣いてもいいと思うぞ」

「…え？」

突然声をかけられて困っているフェイトを無視して俺は避来矢に黒斗雲を起動させる。

「思いっきり泣けないやつが、思いっきり笑えるとも思えないかな」

「…ツルギ？」

「今日はもう俺たちの家に帰って寝てろ」

俺は黒い袴を羽織り、ジュエルシードの反応があったところに転移する。

「…約束。…守れよ」

「目標座標、固定。転移開始」

俺はそう言い残して、フェイト達の前から消えた。

フェイトとの約束。ジュエルシード捕獲の協力に関する交換条件としてだしたもの。

一つは人を殺さない。

そして、もう一つは。

俺にとびっきりの笑顔を見せる。

人助けをしたサカサ。サカサが助けた人たちに「ありがとう」と、浴びる笑顔の洗礼はともうらやましかった。そんなサカサに憧れて、俺も誰かを助けて同じところに立ちたかった。本人には恥ずかしくて言えない。気まぐれによる人助け。それでも誰かを救っていたサカサに憧れて、フェイトにお願いした。

全部うまくいったらとびっきりの笑顔を見せてくれ

そうフェイトにお願いした後、すぐに顔が赤くなった。無論フェイトも。あの時はお互いに知り合って間もない。打ち解けていなかったから、恥ずかしいだけだった。

だけど今は違う。本気で見たくなった。フェイトの笑顔を。そのためなら俺は…。

なのは視点。

キーン。



夜の森の上を飛んでいたらすぐ近くでガラスを弾く音が頭に響いた。この音は。

「っ！ユーノ君、今の」

「これはジュエルシードの反応?!」

「ど、どうしよう。どっちに向かった方がいいかな?」

「…ジュエルシードからにしよう彼女の目的がジュエルシードなら彼女の方から向かってくるだろうし。何かあったとしても微弱になったとはいえこの世界の動物たちから逃げられる。それに落ちてきた魔力の持ち主もいる。そっちは…。あつ、今、転移した」

一つの気がかりは無くなった。残るは二つ。

「それじゃあ、ジュエルシードを先に封印してからツルギ君を探しに行こうか」

ツルギ君は白いジュエルシードを持っていたはず。それはレイジングハートで追えるから心配ないし、と考えていたらレイジングハートが異常を知らせてきた。

これよりデバイスたちの声を日本語に変換します。英語力のない作者ですいません。

「にゃ?なんか変な電波が?」

「マスター。彼の持つジュエルシードの反応。いえ、彼自身の反応もたつたいま、消失しました」

「…え？」

その言葉に私は思わず空で緊急停止した。

「並びに消失した地点から微弱ながらにあの 避来矢 と言っていた。鎧の反応を感じ」

「ちょ、それはどうということなの？ レイジングハート。それじゃあまるで」

「おそらく彼があのだ鎧の人なんでしょう」

「…なのは、慌てるのは分かる。でも、まずはジュエルシードからだよ。彼があのだ鎧の人ならなおさら安心だし、話なら後から聞くことだって出来る」

「そ、そうだよな」

ツルギ君も私と同じようにジュエルシードを集めていた？ でも、それならどうして話に来てくれなかったんだろう？ それ以前にツルギ君も魔術師？ もー訳が分からないことばかりだよ。ジュエルシードを封印したら絶対にツルギ君とはお話をするの！

「残念ながらその必要はありません」

え、なんで、レイジングハート？

「彼がたった今、転移。ジュエルシードの反応に接触すると同時に封印をしました」

「嘘っ!？」

「な、発動して間もないこんな短時間で!」

「更に避来矢の反応消失。緊急警報!空間歪曲を感知!…来ます!」

レイジングハートの報告に息をつく暇もなく目の前の風景に突如黒い雲が立ちこむ。

その雲から私は目をそらさずレイジングハートを胸の前に持つて警戒する。

私の方に乗っかっていたユーノ君も緑色の円盤を出現させて私の横に空に浮かぶ。

そして、一陣の風が吹くと同時に黒い雲がはれてその中から黒い袴を身に着け、両手両足に銀色の防具をつけたツルギ君が現れた。

「…よう、なのは。嫌になるくらいにいい月だな」

「つ、ツルギ君だよな?」

「俺以外の何に見えるんだよ」

いつもと同じ口調なのにツルギ君の声は少しか震えていた。涙を流したのか瞳も少しだけ赤い。

「き、君がああの中の人なのかい?」

「そうだよ。ユーノ。と、こんな会話をしている場合じゃなかった。今日は用件だけを伝えに来たんだ。…なのは、ユーノ。あの時、学校で手に入れたジュエルシードを俺に出来ないか？」

「な!？」

突然の要求に目を白黒とさせるユーノ君。というか、私も白黒させているんだけど。

「わ、訳が分からないよ、ツルギ君!詳しく話してよ!」

「…一旦、降りようか。空を飛び始めたのは昨日からなんだ。話はそれからだ」

ツルギ君は地面を指さした。そんな会話をしている間もずっと私から目をそらさない。そしてその眼は、なんだかとても悲しそうに見えた。

ツルギ視点。

発動したジュエルシードは思念体と呼ばれる大きな毛玉に目玉と長い触手のようなものがくつついたものだったが、到着すると同時に黒斗雲から鎧に換装。天使両断キックを炸裂させて即封印を行った。

相手側もいきなり目の前に現れた俺に驚いて動きを止めた。その隙についてのいわば不意打ちともいえるやり方で仕留めた。

「もう、戻れないな避来矢。後悔しているか？」

「否定。我、疑問、複数所持？疑問一、何故、主、何故、突貫、不実行？」

避来矢はフェイトの母ちゃんの所に突撃すると思っただろう。  
正解だけどそれはまだしない。

「何故？」

「必要なだけジュエルシードを集めて、叩き付けるんだよ。『あんなの娘はこんなにも立派だぞ！』てな。それと一緒にフェイトには悪いが一発ぶん殴らせてもらうさ」

「疑問二、サカサ、用件、放棄？」

「フェイトの母ちゃんが使い終わったジュエルシードをもらえばいい。元からそのつもりでフェイト達に渡していたし」

「疑問三、何故。……………」

避来矢は言葉を詰まらせる。何故、今更なのは達に正体をばらすのか？だろ。

「…肯定」

「お願いするのさ。あの時のジュエルシードを分けてくれてさ。もちろんフェイト達のことは言わないぞ。一応犯罪者だからな」

「…主、要求。認可、想定？」

「まさか。そこまで俺も馬鹿じゃない。これは宣戦布告も含んでいるぞ」

なのははおそらく頑固者だ。事情も話せない俺の要求を呑むはずがない。

ならば、もうジュエルシードの探索はしないようにと頼んでもアリサやずさか、家族の皆に危険があると知った以上止めようと思わないだろう。が、同時に義理堅い性格でもある。と考えている。あの時のジュエルシードを分けてくれるかもしれない。

「希望的観測。可能性、一割未満」

「0・1パーセントでもやるさ。可能性があるのなら。それも受け入れてくれない場合。その時から俺は…」

その後に紡ぎだした言葉に避来矢は納得したかは分らない。だけど、避来矢。俺の我儘に付き合ってくれ。

「…主。思慮不足。先行き、不明瞭。不利益的、思考」

よく言われる。サカサヤアリサ。最近ではフェイトにも馬鹿だつて言われているな。

「だけど、我はあなたのような主が大好きです」

避来矢。お前、言葉が…。

「あなたが今までいろいろなことを経験して成長していくように私も成長します。…だけど、いつまでもあなたがあなたであることを私は望みます。我が主」

…ありがとう、避来矢。

決意は固まった。いや、元から固まっていた。後は実行するのみ。

それから、しばらくもしないうちになのはの前に転移する。

目の前に転移して地面に降り立つと同時に黒斗雲を解除する。そんな俺になのはが空から降りてきながら質問をしてくる。

俺は答えられることだけを答えた。

避来矢の事。ジュエルシードを集めていること。その浄化を行えること。なのはが人に隠れてジュエルシードを集めていること。

だけど、サカサの事。フェイトとアルフの事だけは教えない。教えきれない。

なのはの方は意外と素直に話してくれた。ジュエルシードはユーノがそれを発掘したこと。その護送中に何者かの砲撃を受けたこと。そして、ユーノからレイジングハートを受け取り自ら進んでジュエルシードを捕獲しているということ。そして、すずかの森の中で出会ったフェイトの事。名前は知られていないようだけど何やっているんだフェイト。

それからしばらくして、本題へと移る。

「で、どうだ。なのは。俺にジュエルシードを譲ってくれないか？」

「…譲れないよ。いくらあの時助けてくれたのがツルギ君だったとしても」

「それにあれは危険なんです。使い方を間違えれば大惨事になります。あの時、暴走したジュエルシードが町をボロボロにしたことはあなたもご存じのはずです」

わかつているさ。それぐらい。現場に直接いたんだからさ。

浄化したジュエルシードは願いを曲げずに叶える。それは正しい心の持ち主が願ったらいいが、心が、性格がねじ曲がった奴に渡ればたちまち大参事の引き金になるだろう。フェイトの母親のようにジュエルシードを集めて何をするつもりかは俺もフェイトも知らない。だけれど、それでもフェイトには、あいつが笑うには必要なんだ。

「…どうしても駄目か？」

「せめて何に使うかを教えて。ツルギ君が何をしたいのかを」

「…笑顔」

「え？」

「ある女の子のとびっきりの笑顔が見たい。それだけだ」

俺の言葉になのは目を少しだけ大きくするが構わず俺は喋る。

「で、答えは？」

「…ごめんね、ツルギ君」

まあ、その答えは想定内だ。

だから俺は何度も固めた決意をなのはに伝える。

「構えろ。なのは。さすがに自分は知っているのに、何も知らない相手をぶちのめすのは俺の心情が許さない」



「待つて、ツルギ君。私はツルギ君と戦うために話しあつたんじゃないよ」

なのはは慌てた様子で俺に言い寄ろうとする。そんななのはを見て本当に申し訳なく思う。だけど、なのは。俺は…。

「俺はお前の敵だ！」

「主の 決意 を確認。現時点をもって、私にかけられたリミッターの一部を解除します。これにより、主。八咫の鏡を除く他の能力の同時使用が可能になりました。鎧の展開、黒斗雲の消費熱量は今までと変わりませんが、主のコンディション次第で一時間はフルで戦える熱量を有すようになりました」

避来矢から今までにないくらいの力強い言葉をかけられた。そして、不思議と避来矢を持つ右手から全身に力が溢れてくる。

「新たな鎧を展開します。御武運を。我が主」

黒い光が俺を包む。そして、光は一秒もしないうちに俺を鬼武者、いや一人の姫のための武者の鎧を身にまとった。

今までの鎧とは違い、背中の方に竜にも悪魔にも似た一對の銀の翼が生えた。

変化はそれだけじゃない。まず両肘から爪の先に至るまでの部分に血管を思わせるような銀色のラインが引かれた。さらに鎧の隙間からも白い光がこぼれている。そして、首から上の部分。兜の部分が無くなっていた。

鬼の仮面はもういらぬ。仮面越しにじやない、堂々とあの子の笑顔を見る為にも。

「マスター！」

「なのは！」

レイジングハートとユーノがなのはに杖を構えるようにせかすがなのはは未だに構えない。

「本当に戦わないといけぬの。ほかに道はないの」

体は震え、それでも俺を真つ直ぐに見据えているなのはに俺も言葉をかける。

「話すに話せず、耐えるしかない。大好きなのにその人から冷たくされて、それでもその人に尽くしたい。その人の笑った顔が見たい。でも、報われない、伝わらない」

「…それが笑顔を見たい子のこと？」

「……………」

「…話してはくれないんだね」

なのはが杖を構える。

「いいよ、ツルギ君が勝つたらあの時のジュエルシードをあげる。でも……」

なのはの足元にも魔方陣が描かれる。その魔方陣の光の強さはなのはの意志に比例しているようだ。そして、体の震えがいつの間にか止まっていた。真っ直ぐと俺を見据えた瞳の強さは魔法の光に負けないほどの強さを持っていた。

「だけど、私が勝つたらその子のことを教えてもらおう!」

「シューティングモード!セツトアップ!」

なのはも決意を固めたようだ。その言葉に迷いはない。だから、

「…準備はいいな」

「うん。いつでもいいよ。ユーノ君、手を出さないでね」

「なの、は?…わかった気を付けてね」

ユーノは一度、躊躇う素振りを見せたけど瞳に込められた強い意志に負けて俺たちから距離を取った。

「じゃあ、始めるか。俺と…」

俺は腰を低くして拳をなのはに向ける。

「私の…」

なのはが強い意思がこもった瞳と杖の先を俺に向ける。

「全力全開!真っ向勝負!!」

互いに譲れられない意思のぶつかり合いが幕を開けた。

## 第十五話 激闘？ジュエルシード争奪戦！後編（後書き）

あとがき

たかB「あ、あ、あああああああああああ

ツルギ「…ゾンビ？」

なのは「コメディにするつもりがいつの間にかシリアスになったから大変だったみたいだよ」

レイジングハート「しかも今までで一番長いかもしれないほどの長文」

避来矢「まあ、その影響の所為でか私たちも普通に日本語で喋れますけど」

たかB「うあ、うあああああああ

ツルギ「まあ、今日はゆっくり休め作者」

なのは「シリアスに行きすぎないように熱血入れてみたらなおシリアス感が増したんだよね」

避来矢「まあ、フォローしようとしたけど実はそれが蛇足になったなんていつものことですし…」

レイジングハート「ドンマイ作者」

ツルギ「えーと、作者もそろそろ限界なんで次回予告」

なのは「合流！！て、何が？」

サカサ「ツルギよおおお、俺は日本に帰ってきたあああああ  
あ」

ツルギ「ぎゃああああああ、その背中に背負ったバズーカを下  
ろせええええええええええ！」

ドオオオオオオオオオオッ。

なのは「えーと、金平糖に核弾頭を打ち込んだ人？が来るの？」

## 第十六話 合流！！（前書き）

早く、シリアス感を抜け出したいのに熱血成分が多いのか  
まだまだ二人の戦いは続きそうです。

そして、あいつがやってきた。

ストーリーブレイカー  
物語破壊者サカサ。

ついに日本に上陸！

## 第十六話 合流！！

「デイバイン」

「駄目！レイジングハート！」

「うらあああ！」

ブオンッ。

「アクセルムーブ」

「まだまだああああ！」

なのははレイジングハートの魔力チャージを強制キャンセルさせ、銀色の一線を回避する。続けざまに右下からの蹴り上げ、蹴り上げた勢いそのままに、まるで氷上を滑るバレリーナのように連続の蹴りが襲いかかる。

レイジングハートの矛先に桜色の球体が生じ、それを放とうする寸前に銀の手甲がなのはの顔を掠める。紙一重でかわしたもののその時間こえた風切音、それには躊躇いがなかった。

「レイジングハート、距離を取って！この距離じゃ」

「逃がさない！距離は絶対に取らせない！」

「プロテクション」

ゴッ、ガガガッガガガガガッガガガッガ！



ツルギは銀の手甲をなのはに向けて叩き付けようとするがレイジングハートの作り出した魔法障壁に阻まれる。その衝突によって手甲と障壁の間にオレンジ色の火花が辺りに散った。

ツルギはなのはに攻撃宣言をしてから、二メートル以上の距離を離れずに常に接近戦を挑んでいる。それはツルギが今現在、空中では格闘による近接攻撃しか持っていないことに由来していた。

「意地でも取らせてもらうよ！レイジングハート！」

「プロテクション。広域展開！」

「があっ」

オオオオオオオオオオッ。

レイジングハートから生じた障壁の後ろから更に強い光をはらんだ障壁が、ツルギの拳を受け止めている障壁を押しつけるようにツルギの方へと勢いよく広がる。

その勢いはツルギの体勢を崩しながら更にその障壁は膨張していく。それはなのはから生じた桜色の津波に押し流されているにも見えた。

「今！」

「バインド！」

ガチィ。

巨大な桜色の障壁はツルギを遠くへ押しやると四つの光の輪となつて形を変えてツルギの四肢を固定した。

「やるよ！レイジングハート！」

「オーライ、マスター！」

「さ、せ、る、かあああああ！」

ビキキッ。

ツルギもなのは次の一手を予想したのか全身に力を込めて力づくで四肢の光輪を破壊しようともがく。光輪に亀裂が入ったがなのはとレイジングハートの方が一手早い。

「ディバインバスター！」

「フルパワアアアアアアア！」

ドッゴオオオオオオオオオオ！！

レイジングハートの矛先から、その身丈の二倍以上はある桜色の光線がツルギに向かって放たれる。と、同時にツルギは光輪を破壊、顔の前で腕を交差し、なのはのディバインバスターを受ける。

「ウアアアアアアア！」

ズッオオオオオオン！！

ツルギがディバインバスターに飲み込まれると同時に大爆発が起

こり黒い煙が辺りに立ち込めた。

「す、少しやりすぎたかな？」

「……ッ、マスター！頭上に空間歪曲！」

「え？」

「これでええええええええええ！」

レイジングハートの声に従って上に視線を向けると、顔にすすをつけたツルギの顔があった。その顔の横には銀の拳がなのはに狙いをつけ、放たれる寸前だった。

ゴッガアアアアアア！

銀の拳がなのはに襲いかかろうとした際、レイジングハートは主の意思に反して勝手に動き自身を盾にする。

その際、手甲の起動を杖でそらすという大役を果たしたが、そらすという動作に生じた火花はレイジングハートの杖の表面を所々碎かれるという代償も生んでいた。

「レイジングハート！？」

「大丈夫です。マスター。すこし杖の部分を碎かれただけで、本体であるコア自体には何の問題はありません」

ズドオンッ。

なのははレイジングハートの状態に驚いている間に先程拳を叩き

付けた勢いのまま地面に落ちたツルギは再び空へと舞い上がる。

「…もう、何でこんなことになっちゃうのかなあ！」

空へと浮上していくツルギに杖を向けて迎撃態勢に入るなのは。それでも馬鹿<sup>ツルギ</sup>は馬鹿らしくただ、一直線になのはに向かって拳を振るう。

夜空に浮かんだ星々と月の光は未だに桜色の球と銀をはらんだ黒の一線を照らし続けていた。

???視点。

どうして、あなたは私のお願いをここまで無下にできるのかしらね！

ごめんなさい。お母さん

私にはどうしてもジュエルシードが必要なの！それなのにどうしてあなたは！

ごめんなさい

あなたは私の娘。だから、やれるわよね。今度こんな無様な真似をしたら

…はい。わかりました、母さん。私、がんばります

もうやめようよ。逃げようフェイト

…アルフ？

私はフェイトが酷い目に合うと悲しいんだ！

ごめんね。アルフ。私、もっと強くなるから

フェイトが悲しくなると私も目と鼻の奥がツンてなるんだ

私強くなるから、アルフが泣かないように、泣かないくらいに強く…

俺にとびっきりの笑顔を見せてくれよ

…ツルギ？

俺は、泣いてもいいと思うぞフェイト

…どうして？

思いっきり泣けないやつが、思いっきり笑えるとも思えないかな

…私は泣いてもいいの？アルフ？私は強くなくてもいいのかな？  
私は…

言い分けないでしょう！フェイト！

か、母さん

まだわかっていないようねえ。まったく、あなたの使い魔は言うこともロクに聞かないし、ジュエルシードもロクに集められない。その上、

…や、めて。

現地民の訳の分からない人間とも関わり合いをもって、それを皮切りにあなたは弱くなった

お願いです。アルフを…ツルギを…

だから、これはあなたの為。だから、邪魔なものは消さないとね

やめて、やめてください。アルフは、ツルギは、私の…

「…やめて、母さん！」

ベットの中で私はかけられた布団をはねのけながら起き上った。

「…ここは？」

私が辺りを見渡すとそこは私が地球に来てからいつも寝ていた部

屋だった。

「…サー、お目覚めですか？」

「…バルディッシュ。私は…」

私の枕元には金色のアクセサリ。バルディッシュが添えられていた。

「あなたがこの地球に來られて三時間がたっております。そして、一度はツルギと合流。避來矢の八咫の鏡を受けて怪我は完全に回復はしましたが、体力・魔力までは回復しきっておられません。アルフ様の轉移で我々はツルギの家にあります。なので、決して無理は起こさないようにお願いします」

バルディッシュからの報告で今自分の立ち位置を再確認した。

母さんの所へ報告。ジュエルシードと一緒に渡した避來矢の調査が終わるまで部屋で待たされた。

アルフは母さんの機嫌が悪いことに気づいて避來矢の調査中に逃げようとも言っていたが私はそれではツルギに悪いと言い、アルフを部屋から出した。

そして、

「っ」

「…サー」

「大丈夫だよ。バルディッシュ。これぐらいで」

泣いてもいいと思うぞ

あの時を思い出すと同時にツルギの言葉も脳裏をよぎる。  
バルディッシュに大丈夫だと言いながら、手に取る  
そこで気づいた。

金色のバルディッシュに映った自分の顔に涙が流れていることに。

「…泣いてない」

「…サー」

「私は、…泣いてないよ。」

私はバルディッシュを握りしめながらベットの上で丸くなりただ、  
鳴き声をこらえるかのように強く、自分の体を抱きしめた。

ツルギ視点。

「主。想定していたとはいえ、彼女の攻撃は予想以上です。ここにきて更に攻撃の威力、キレが上がっています」

「そうか、避来矢。ところで…。なのはに、宣戦布告したのはいいが、正直決め手がない。どうしたらいいかな？」

もう何度ものには近接戦闘を与えているものの、まるでダメー  
ジはない。

先ほど、レイジングハートに傷をつけてからは、なのはの体を包むように桜色の球体が常に張られている。全方位型の障壁。というよりバリアだ。あれの所為でなのは近くに転移しても弾かれる。魔



力砲撃。転移、格闘、バリアに弾かれる、砲撃。以後、繰り返し。

「まあ、弱点というか欠点は見つけたんだけどな…」

なのはの砲撃時にはあの厄介なバリアが一瞬消える。おそらく、密室でバズーカを至近距離でぶっ放すようなもの。自分にまで被害が及ばないようにと無意識のうちにやっているのだろう。

「っ、主！」

「バスター！」

「黒斗雲・転移！」

現在、山奥の湖付近。

俺は十回目となる転移で上空から放たれた桜色の砲撃から逃れると同時に、砲撃を放った直後のなのはの目の前に現れる。

「オラアッ！」

「フロント・プロテクション！」

バリアは砲撃の為に消えている。今しか攻撃は通らない。

そこに一秒も満たないうちに拳を叩きこもつとするがレイジングハートが自動的に桜色の障壁で邪魔をする。

ガガガガガッ。バチィッ。

実はこの攻撃も三回目。最初の攻撃こそ障壁は間に合わなかったが、なのはは本能的にそれを感じ。今では正面という普通では考え

られない所からの攻撃にも対処できるようになった。

その上、障壁に弾かれると同時に砲撃も放てるようになっていた。

「バスター！」

「またかつ！」

弾かれた瞬間に三メートルほど間を開けた短距離からの小規模砲撃。

これなら短時間。いや、ノータイムで撃てる上に自分への被害は少ない。

一撃目はレイジングハート補助で防ぎ。

二撃目で防御を自分の物として。再び、レイジングハートの補助で砲撃を付け足す。

三撃目でその二つを自分の物にした。

ドオオオオオオンッ。

爆風と爆炎から弾き飛ばされながら俺は目を回しながら避来矢の力を借りて空の上に立つ。

「主っ、無事！」

「…悔しいな。避来矢」

「…主？」

頭を振り、思慮を明確にする。戦いの経験値。空でこんな風に戦ったことはないが明らかに自分の方が上だと思う。それなのに…。

「アクセルシュート！」

なのは周辺にソフトボールくらいの光の球が四つほど生まれるとそれは弧を描きながら俺に向かって飛んでくる。

「おおおおっ」

ババババ。

俺に向かって飛んできた光の球を拳で、足で、叩き潰す。が、その隙になのはの砲撃が来る。

「バスター！」

「緊急転移！」

ドオオオンツ。

避来矢の補助で、先程自分がいた所から一メートルも離れていない所に転移し、砲撃をやり過ごす。

「…これが、…これが才能ってやつなのか！」

自分の横を通り過ぎていく桜色の光線を見て、俺は拳を固め直す。俺は自分自身の才能のなさに怒り、嘆いていた。

間違はなく高町なのはは空中に關しての戦闘は自分より上であると。そして、それは今、戦っている中でも成長している。

「…主」

才能のない人間が扱うことのできる魔剣。避来矢。ただ、経験だけなら同世代の人間の中では豊富な方だと思っている。

高町なのはもこの世界の人間なら空でこんな風に戦う機会はそうなかっただろう。それは今までの打ち合いで気づいた。だけど、今、彼女は俺を押し始めている。

ッルギ  
経験を押しつづす才能。なのは

「でも、あんな啖呵を張ったんだ。何が何でも勝つ。だから、  
…避来矢」

たとえ、どんなに無様でも…。  
たとえ、どんなに不器用でも…。

「俺に力を貸してくれ」

…心が、…体が足掻いているうちは絶対に諦めない！

「もとよりそのつもりです。我が主。ですが、このままでは…」

「ああ、じり貧だ。何か策はないか避来矢？」

お前に頼りつばなしで本当に情けないな、俺は。

「そんなことはありません我が主。…せめて、一度。一度だけでいいんです。なのは嬢に接触できれば…」

…接触なら何度もしているが？  
…弾き飛ばされているけど。

「すみません。言い方を変えます。私自身<sup>わたし</sup>が彼女の生身に接触すれば彼女の心を折ることが出来ます」

つまり、なのはの顔か手に俺が触れればいいわけか。

なのはのバリアジャケットを見る限り、生身。の部分はそれぐらいしか見当たらない。

「肯定。しかし、あれでは…」

なのはの周りに再びバリアが発生した。あれでは近寄れない。

バリアごと破壊できる可能性のある天使両断キック。あれは地面を蹴る力が加えなければ十分に発揮できない。空中では使用不可。

八咫鳥で物を投げつけて破壊しようにも多大なメリットがある。

ここは山の中で電柱のような硬い物はない。投げつけるとい動作のうちにデイベインバスターで迎撃及び相殺。下手したらそのまま貫通、八咫鳥の球体でバスターが加速・増強でもしたら目も当てられない。

近づけば、バリアを展開。遠ざかれば砲撃。…砲撃？

なのはが砲撃を撃つときにはバリアが消える。

砲撃を終えるとバリアは戻る。

…それなら？

「…避来矢。こんな作戦はどうよ？」

俺は頭の中で描いた作戦を避来矢に相談した。

「…主！？…また、無茶苦茶なことを考えてくれましたね」

もしかして呆れてる？ 避来矢？

「肯定。されど、それしかないようですね」

「じゃあ、やるか」

「これが駄目だったら意地でも逃げますからね」

「それは…」

なのはは相変わらず肩で息をしながらも強い目で俺を見据えている。逃がしてくれそうもないんだが…。というか、逃げるという選択肢、俺は考えていなかったんだけど。

「い・い・で・す・ね！」

「・・・はい」

まあ、ここまで付き合ってくれているんだ。それに…。

「失敗するとは考えてないからな」

「主の行動の前提に失敗の考慮はなかったはずでは？」

俺にそれがあると一歩も動けなくなるぜ。

「じゃあ、やるか。って、これは!？」

ジャキイツ。

「拘束用光輪！」

やばい早く破壊しないと全力の砲撃を受けてお陀仏だ。せっかくの作戦も果たせなくなる。

「デイベイイイイン…」

「おおおおおっ」

「出力を上昇。及び、効率的な光輪の破壊部分へ伝達！…破壊！主、跳びます！」

バキィッ。

光輪からの束縛を逃れ、同時に黒斗雲を発動。なのはが砲撃をする前に俺はなのはの頭上、十メートルほどの上空。逆立ちするよう体制で転移した。が、待っていましたと言わんばかりのなのはの顔がそこにはあった。

「バスタアアアアア！」

「くそお、避来矢iiiiiiiiiii！」

そうして、俺は拳を桜色の砲撃に向かって銀の拳を振るう。それでも俺の拳はなのはに届く、一歩手前で。

ドオオオオオッ！

桜色の光線に飲み込まれていった。

???視点。

真夜中の竹林に挟まれた道路で、白衣を着た男がコンビニ袋を片手に歌いながらのりくらりと歩いていた。

「はーるばる来たぜ、海鳴いいいい」

いやあ、リオストーンと名付けたが正式名称はジュエルシード。願いを叶える石とはなんともマジカルなオーパーツですこと。…まあ、存在自体は面白いが使う気にはなれんな。

「ちょ、もう夜も遅いんですから静かにした方が…」

「大丈夫だつて。一応、私有地だし、こんな夜道で人気がない竹林の道を歩いているのはその関係者。つまり、俺の部下か、ツルギ。ということになる」

「ツルギ?…ああ、前に言っていた、あなたの従兄弟ですね。ですが、他人に迷惑をかけることには変わりません。それに一般人も紛れ込んでいるかもしれないじゃないですか」

「大丈夫だ。一般人だとしてもせいぜいあおか」

「ストップ!それ以上は言わせません!」

はたから見ると男の独り言に見えるかもしれないが男の話し相手はちゃんとしているし、返事も返している。それは後ろからトコトコと歩いてくる黒猫。



この喋る黒猫は、ある一件で白衣の男と知り合い、人の持つ魔力で生きながらえることが出来るアルフと同じ使い魔である。

一度は消えかけてはいたが、白衣の男と主従関係になることを条件に契約を交わして生きている存在なのだが、普通に接するように言われた。何でも、堅苦しいのは好かない。とのこと。

「…ところでサカサ。本当にジュエルシードの浄化を出来るんですか？」

「知らん！俺がやるわけではない！だから、経過を見に行くのだ！」

えっへん。と胸を張る白衣の男。

名をサカサ。裏の世界を知る人なら知る人ぞ知る有名人であり、壊滅させた組織は山のようにある上、様々な方面の技術を習得したツルギの従兄弟。避来矢を発掘しツルギに渡した人で、性格はかなり俺様な男である。

「まあ、大丈夫だろ。部下から聞いた話じゃ、この町で何かの生物テロが合ったぐらいだし…。まあ、死人は出なかったけど怪我人は何人か出たぐらいだ」

「どこが大丈夫なんですか！ツルギが巻き込まれて怪我をしていたらどうするんですか！」

「とりあえず、…笑う」

「なんで?!」

そんなふざけたことを話しながら歩いていくと竹林の奥に一軒の

民家が見えてきた。

「おお、我が愛しの従兄弟<sup>おもちゃ</sup>。私は帰ってきたあああああ！」

サカサは何処からともなく白衣の下から折り畳み式のバズーカを取り出す。

「なんでおもちゃ?!なんでそこでバズーカを取り出す!?!」

「なんとなくだー」

詳しくは前回のあとがきをチェック

などとふざけていたら、竹やぶから何やら気配が…。フム。

「…面白いことになっている、な！」

目標を家から後ろにあつた竹やぶに向かって発射する。と、同時に竹やぶからオレンジ色の影が飛び出してきた。

ぼじゅっ。

ちなみにこのバズーカから発射された物の正体は暴徒鎮圧のために作った超粘着性の接着剤。ドロツとした白い粘液がオレンジ色の影を包み込んだ。

「でやああああ!うぺ。て、なんだこれえええええ!?!」

「ふむ、狼女のコスプレか?」

ハロウィンはまだのはずだが…。

と考えていたら、今度は家の方からも気配がしたので振り向こうとすると金に光る手錠が手足にいつの間にか装着されていた。

ガチィ。

「…動かないでください」

「おいおい、今度は死神コスか？」

声から察するにツルギと年齢がそう変わらないくらいの女の子だろう。そして、首筋に当てられた黒い金属に黄金の鎌。

…参ったな。これじゃあ、身動きは取れない。ここは…。

「…フェイト？あなた、フェイトなの？」

「…！…誰、ですか？私の名前をどうして」

「私です。リニスです」

俺の後ろからついてきた猫が淡い白い光を放つ。その光は猫を包み込んで人型になるとそこから美人というより可愛らしいといった印象のショートカットの二十代の女性が現れた。

「…リニス。お前の会いたかったフェイトって…」

その光景に後ろの女の子は悲鳴を上げることとはしなかった。が、少しばかりの動揺が鎌の動きから見て取れた。ちなみに俺はリニスの姿は見慣れている。というか、堪の「ストップですよ」…はい。

「…はい。それじゃ、そこにいるのはアルフ？」

「え、ええ？！な、なんでリニスがここに？て、か、体が動かないiiiiiiii！」

リニスが接着剤の中でもがき、訂正。固まり始めた接着剤で動けなくなった狼女に目を運び、再び俺の背後に目を向ける。

「…ほ、本当にリニスなの？」

サクッ。

「ちょ、ちょっと、今キレた。すこし鎌で俺の首の皮が切れた！」

「…フェイト。アルフ。少し見ない間に大きくなりましたね」

あのー、お二人さん。いい雰囲気の所悪いんだけど…。

「「これ、どうにかして！」」

身動きの取れない俺とアルフの声が沈みかけた月夜の晩に響いた。

## 第十六話 合流！！（後書き）

あとがき。次回予告はやらない。

サカサ「いきなりオチを言うのか？」

と、サカサが首をひねっている傍で。フェイトとリニスの抱擁し合っていた。

フェイト「リニス！」

リニス「フェイト！」

ザクツ。

サカサ「イツテエエエ！なに、まだあの時のままなの俺？！」

アルフ「もがーもがもが！」

バインド状態のサカサにバルディッシュが突き刺ささっていた。その横では固まった接着剤で身動きが取れないアルフ。何故か顔が赤い。

フェイト「今までどこいたのリニス？」

リニス「南国の方よ。フェイト。詳しくは二次小説。リリカルなのか？黄金の瞳。バジリスク。を見てね」

サカサ「何気に宣伝か？作者よ？」

ナンノコトヤラ？

アルフ「むふーむふー」

サカサ「の使い方間違っていないか？それと、アルフ。お前、ちゃんと呼吸できているか？」

アルフ「…む、ん」

サカサ「ふむ。出来てないんだな？おーい二人とも。そろそろアルフがやばいぞ。顔が青い。ついでに言うとな俺の首にもバルディッシュが刺さってそこから血が出ているんだが」

フェイト「…リニス」

リニス「…フェイト」

サカサ「やばい！気づいていない！…あ、意識が…」

たかB「まあ、あとがきにあるように次回予告はやりません。だってここにいる二人は二人だけの世界に。もう二人はアッチに行ってしまったので」

というか、もう一個の方を書き上げないと話が進まないからだろう？

夜空を背景に大きく映し出された笑顔のサカサ。

たかB「はい。まさしくその通りです。まあ、それを読まなくても楽しんでもらえるように次のお話は書きますよ」

なんで私もこの扱いなんだい？  
と、同じように映し出されるアルフ。

たかB「何となくです」

第十七話 たとえ火の中、水の中。砲撃の中！は、きつい！！（前書き）

ようやく更新できた。

間を開けてすみません。

もう一個のサイドストーリーを書き上げていたら遅れました。  
なに？これは広告かだと？

はい、そのとおりです。

できることなら、この小説ともども感想ください。

もう、苦情でも何でもいいです（泣）



第十七話 たとえ火の中、水の中。砲撃の中！は、きつい！！

すずか視点。

「でもすごい音だったね。おかげで目がさめちゃった」

「あの二人の図太さがうらやましいわね」

アリサちゃんはふすまを挟んだ部屋の方を見て呟いた。すると、部屋の扉からお姉ちゃんと恭弥さんが入ってきた。

「あ、二人ともまだ起きてる。早く寝なさい」

「そういうお姉ちゃんだって起きてるじゃない」

「まあね。それよりなのはちゃんとツルギ君は？」

「あの二人なら隣の部屋で寝てますよ。まったくうらやましい神経してるわ」

「何！？一緒に寝ているだと！こうしてはいられない」

アリサちゃんの答えに恭弥さんが慌ててふすまに手をかけようとしたらお姉ちゃんに止められた。

「落ち着きなさい、恭弥。今は深夜なのよ。それにツルギ君はなのはちゃんにへんなことはしないわ。あの子の好みはアリサちゃんやなのはちゃんみたいな元気な子より、そうねえ…すずかみたいに少しおとなしめの子じゃないかしら」

そ、そうなの！

わ、私みたいに大人しい子が…。

「な、何でそんなことが分かるんですか！」

「えー、だって初めてツルギ君と会った時、ツルギ君はとても体を消耗させていてね。その時につばやいた言葉が「ど、どうせ死ぬなら畳座敷の上でししおどしの音を聞きながらぬるい緑茶を飲みたかった」て、言っていたの。これはどう見ても純和風。しかも落ちて着いた空間を望んでいると見たわ」

な、なんて年よりくさい。はっ、それじゃあ私はみんなより…。

軽く落ち込んだ私にアリサちゃんが背中の手を当ててくる。

「あー、すずか。落ち込まないでね。例えそうだとしてもツルギはツルギが好きな人は…。何というか…」

「…あー、そうだったな」

「ん？なに恭弥、アリサちゃん。人の顔を見て？」

「「いえ、何でもないです」」

恭弥さんとアリサちゃんはお姉ちゃんを見て言葉を濁らせる。

まあ、ツルギ君はお姉ちゃんが好きだった。というべきなのかな？一応、諦めはしたみたいだけど、まだ好きでいる可能性もないわけじゃないし。

「それにしても二人はツルギ君のことをよく知っているようだが？」

「そうね。どうせあの轟音。一応ノエルやオジサマの話じゃ、ちよつとした土砂崩れが起きたみたいだけどここまでは影響がないみたいだし。皆が寝付くまで少しだけツルギ君のことを話しましょうか」

「…そうね。ツルギがどれだけ馬鹿でその従兄弟のサカサがどれだけやっかいかを今のうちにレクチャーしておくわ」

「前もっていうとツルギ君はとても馬鹿ね。いい子だけど。逆にサカサさんは凄い人よ」

「そうね、すごい馬鹿よ。あいつは。サカサは変人ね」

ツルギ君は馬鹿。サカサさんは凄い変人。  
いきなりすごい説明で始まった。

「私があつたのは南米にある、とある村の神殿でそこには宝が眠っていると言われていたんだけど、ツルギ君はサカサにいわれてそれを村の人に許可を貰わずに持ち出したんだけど…。それは全部、サカサさんの指示でツルギ君が捕まって鞭打ちの刑に処されている間にサカサさんはその宝が昔のお米の保存食だという解明してね。村人たちにその作り方を教えて最後には村の農耕文化を発展させて、また違う国に行ってしまったんだけど…」

サカサさん。従兄弟が鞭打ちを受けている横で研究で…。  
ツルギ君にもう少し優しく接しようかな？と考えていたらお姉ちゃん言葉は言葉を一度切って再度、言葉を紡ぐ。

「宝を盗まれた時の部族の皆が言ったの。『これで五度目だぞ。小僧。いい加減気付け小僧。わし等に確認を取れ。あのお前の連れはお前が捕まるたんびに横で笑っていたではないか』てね。サカサさんはツルギ君が捕まっている間に普通なら一か月はかかる神殿の調査やジャングルの生態を三日で調べあげたらしいわ。ようはその部族の足止めをツルギ君にさせたかったわけね」

五回も同じことを繰り返しているなら、いい加減疑おうよツルギ君。

「まあ、そんなわけで人を信じすぎて痛い目に合うのがツルギ君で、それを見て本来の目的を果たしながら爆笑するのがサカサさんね」

…サカサさん。本当に厄介な人みたい。

と、サカサさんのイメージが何となく固まってくると今度はアリサちゃんが話し始めた。

「じゃあ、今度は。まあ、サカサとツルギを擁護するみたいになるかもしれないけど私がイギリスで熊と間違えてツルギに猟銃発砲した後の話なんだけどね」

なのは視点。

ツルギ君の行動パターンは二つ。

ある程度離れていると突撃しながら近接戦闘。あまりにも遠距離になるとすぐ近くに転移してからの近接戦闘。

接近したら常に拳を振るう。

以上の事から遠距離攻撃出来ないという私とは真逆という戦闘スタイルだった。

バインドやバスターを使ったら必ずと言っていいほど私の近くに接近してくる。そして、その予測は的中した。

ツルギ君のデバイス？の避来矢はもの凄く頑丈でアクセルシュータは拳で叩き落されるがデバインバスターなら弾き飛ばすことが出来る。

レイジングハートも学校で見た鎧よりも空を飛んでいる今の状態は防御力が下がっている。たぶん、空を飛べるようになったから防御力を落ちたのではないかという見解。

そして、鎧ではなく黒い袴だった時は更に防御力はないと判断した。つまり、ツルギ君の防御力は。

兜付き鎧＞飛行機能付きの鎧＞袴

ということになる。

たぶん、兜付きになると私のデバインバスターじゃダメージはない。だけど、ツルギ君もそれだと攻撃できないから兜なしの鎧で今も戦っているんだろう。

常に遠距離からの攻撃だとツルギ君は避けたり転移して近接戦闘を行う、これでは私の攻撃は当たらない。それなら……。わざと罠を仕掛ける。

バインドした後はツルギ君にバスターを放つ。

でも近距離で止めて撃つと爆発の余波で私も危ない。その為、弱めのバスターとなり決定打にならない。

遠距離からだと強めのバスターが撃てるのだが、バインドを力任せに碎いてバスターが届く前に転移で回避される。

中距離だとそのどちらも中途半端になる。というか中威力のバスターを撃てるがツルギ君を吹き飛ばす程度でダメージは少ない上に

下手したら攻撃される恐れもある。

そこでバインドした後はバスターのチャージ時間を長くする。

ツルギ君は遠距離でバインドされそれを砕くと必ず私のすぐそばに転移してくる。それは正面だったり側面や足元だったりするが転移される直前にはレイジングハートがそれを探知してくれる。そこに長めにチャージしたバスターを打ち込めばツルギ君に大ダメージを与えることが出来る。

正直、あまりにも近すぎると私までダメージを負うがツルギ君の方がダメージは多いと判断したレイジングハートを信じて私はその機会を待つ。そして、

「ディバイイイイイン」

「くそお、避来矢いいい！」

「バスタアアアアアア！」

私の思った通りに事が運び、ツルギ君に強めのディバインバスターを至近距離で当てることに成功した。

すずか視点。

ツルギ君はサカサさんと共に誘拐グループの居所を強襲した。という所でアリサちゃんは言葉を一度切ってふすまの向こうを一度覗いた。

ツルギ君が起きていないかを確認するとソファアの上に座り直して言葉を紡ぐ。

「そこでサカサの立案した作戦は実にシンプルだったわ。正面からツルギを向かわせる。その剣を狙った誘拐犯をはるか後方からスナイパーライフルで狙撃する。もちろん、私とパパの援護もかねてね」

「単純すぎるでしょ！もう少し揺動とか、罠とか別の手段があったはずじゃ」

「そうだぞ！それにツルギ君自身そんなに強いわけでもないだろう！」

お姉ちゃんと恭弥さんは驚きのあまり声を荒げてしまう。隣でツルギ君たちが寝ていることに気づくと慌てて深呼吸して気分を落ち着かせる。

私も思わず声を荒げてしまいそうになるが口を押えて何とかこらえた。

「で、でもそんなこととしてよく無事だったね」

「無事じゃなかったわよ？私たち親子は無事だったけどツルギは左腕と背中に銃弾を受けて摘出に半日ほどの手術を受けてたもの」

アリサちゃんはため息をつきながら補足してくれる。

「っ！な、なんで…」

「だって、いくら援護射撃がるとは言ってもそれは致命傷から援護するだけだったんだもの。私たちを助けられないかもしれない、代わりにツルギ自身は絶対に無傷で済む援護射撃。」

私たちを絶対に無傷で助けられる。だけどツルギ自身は無傷では

済まない援護射撃。ツルギは迷わず、後者を選んだみたいだったし……」

アリサちゃんはやや顔を赤らめて話してくれる。

女の子としては嬉しいかもしれないけどそれは無事だったから。もし、ツルギ君に何かあつたら逆に悲しんでいたかもしれない。

「でもね、ツルギはサカサを……。ううん、ツルギは信じられるものがあればどんなところにだって突き進んでいくわ。それこそ、火の中、水の中。てね」

そこで再び呆れた顔になってふすまの向こうで寝ているツルギ君の方に顔を向けると再び溜息を吐く。

そして、今日一番の笑顔を見せた。

「あの時のツルギはサカサのことを本当に信じていた、心の底からね。だからこそ周りにどんなに怖い人や銃があっても真っ直ぐに私に手を伸ばして助けに来てくれた。……本当に馬鹿みたい。というか馬鹿でしょ」

意地悪な、それでいて嬉しそうな笑顔に私は少しだけアリサちゃんに嫉妬したのかもしれない。

なのは視点。

ドオオオオオオオ。

いつもより長めにチャージした分バスターは数秒間放出され続け、



その光の中で拳を突き出したツルギ君の姿は光の中に埋もれていった。…はずだった。

オオオオオオ。

桜色の景色に黒い影が見えた。その陰はどんどん色を濃くしていく。そして、

「捕ま、え、たああ！」

その黒い影から銀の手甲が突き出てくると私の顔を掴む。そして、桜色の光の中から一番防御力の低いボロボロの袴姿で全身を焼かれたツルギ君が飛び出してくる。

「やるぞ避来矢！」

「認識阻害、開始！」

信じられない！？ツルギ君は砲撃中の私のデイベインバスターの中から這い出てきた。

そこで初めて気づいた。ツルギ君は元からこの手段で私に攻撃を加えるつもりだったことに。

デイベインバスターを撃つ前だと強制キャンセルを行いプロテクションで弾かれる。

その直後も同様。それなら…。

デイベインバスターを撃っている最中ならプロテクションを使われることもない。しかも、射線上以外からの攻撃だとプロテクションを張られるかの所為も考慮して、デイベインバスターの真正面から突っ切るによりプロテクションは張られない。

「システムに強制介入?!?マ、マスター、エ、ラー発、生」

「れ、レイジングハート?!うう!」

右手に持つレイジングハートに魔力を込めようとしたが、何故か私は左手に魔力を集中していた。そして、いつの間にか、ツルギ君は右手で私の顔を、左手でレイジングハートを掴んでいた。

「バリアジャケット、強制解除!レイジングハート、強制、待機!試行!」

キーンッ。

私の身にまとっていた白のバリアジャケットは解除された。そして、待機状態になったレイジングハートはツルギ君の銀の手甲の中に納まった。

「え、そ、そんな…」

「避来矢の認識障害。上手くいったな」

「主、二度とこんな真似はしないでくださいね。いくら推進力が一番あるとはいえあのような砲撃に耐えながら突き進むという猪みたいな真似は。今回はうまくいったといえ」

ツルギ君は右手でがっちりと私の頭を掴みながら意地悪な表情を見せ、手甲から聞こえる声と合わせて私に言う。

「俺達<sup>われら</sup>の勝ちだ。なのは(嬢)」

ツルギ視点。

あれからなのはを地面に降ろすと、ふくれっ面になりながらもレイジングハートからジュエルシードを一個を取り出し、俺に渡してくれた。

「…むー」

「そんなに唸らないで、なのは」

フェイトの事情を知った後だからどうやら変なテンションになっていた。宣戦布告だけで済ませるつもりだったのに目の前にジュエルシードがあるとわかったら、いてもたってもいられなくなり勝負になっていた。

つい、いらいらしてやった。反省しています。といった感じか？

「…ずるいよ。強制解除だななんて」

「そういうな、避来矢が言うにはなのはの生身とレイジングハートに触れた状態じゃなきゃあんな荒業は使えなかったんだし」

避来矢のことを信賴して俺はなのはの砲撃の中に飛び込んだ。

避来矢の 黒斗雲 は防御力がない代わりに推進力。スピードと滞空制御が鎧形態の状態より秀でている。

その能力を信じて桜色光線の中に飛び込んでいった。

巨人に後ろと前からすりつぶされるような痛みが襲ってきたがそこは我慢して突撃を行った。結果として俺の無謀な行動と避来矢の

作戦が成功していたからいいものの失敗していたら逃げていたかもしれない。

ちなみに避来矢の作戦は。

避来矢の認識阻害は人から魔力、そして機械デバイスまで騙し通せる。

まず、レイジングハートに接触してなのはが行っていた強制キャンセルの応用で、強制待機状態にする。これは認識阻害。つまり、避来矢がマスターのなのはだと思わせて待機状態にするものである。しかし、それだけでは待機状態にはもっていけない。

なのはが直接魔力をレイジングハートに注いでいる間はなのはとの回線が残っている。だから、なのは自身にも認識阻害をかける必要があった。

なのはに認識阻害をかけて魔力による接続。ようは右手に持ったレイジングハートを左手に持っている認識させて魔力の注入を阻害。そして、回線が途切れた所で主導権を奪取。それを行ったうえでレイジングハートに強制待機を命じたということになる。

そして、待機させた場所が空中。いくら才能があり、頑固者のなのはとはいえ空を飛べなくなった以上、降参の道しか残されていない。

「もう一回、もう一回だよ！」

「だーめ。いい加減帰らないと明日というか今日が辛いよ。士郎さんや恭弥さんたちに悪いよ」

「うー、でもー」

「これ以上ごねるのならバラすよ。魔法少女だということ。アリサやすずかにも」

「そ、それは駄目！」

「じゃあ、諦めて。まあ、ジュエルシードをまた取り合うようになったら勝負するかもしれないから」

「うー」

再び唸りだすのは。ちなみに彼女は俺の背中におぶられている。いきなり空に放り出されたような状況に陥って腰が抜けた様子。そして、隣でトコトコと歩いてくるおこじ「フェレット」のユーノに声をかける。

「そうか、これはお前たちが発掘したのか。なんか似ているな、避来矢と」

「そうですね。それより僕はこのジュエルシードがとても気になる」

ユーノの前には白いジュエルシードが浮かんでいた。浄化したジュエルシードを見てみたいというので避来矢から取り出してユーノに渡すとユーノはそれをプカプカと魔法で浮かべるとじっと眺めていた。

「…確かに魔力は安定しているし穏やかになっている。でも、これをどこに隠していたんですか？夕食前に自販機の前で小銭を取り出そうとした時に偶然なのはが見つけましたが、僕が見に行ったらきには財布の中にはありませんでしたよね？」

「ん？ああ、それは胃の中」

「へ？胃の中って？」

「俺たちの世界では麻薬の持ち込みの際には胃液にも溶けない袋に薬を入れてそれを飲み込んで体の中に保存。俺の場合は半日も持たないから夕飯前に吐き出して、その時の胃液の苦みを消すために自販機でお茶を買った。そしたらそれを見られた。というわけだな」

「…この世界の人達はそんなことが出来るのなの？」

「出来ないよっ、というかツルギ君何でできるの？」

「…海外だな。サカサが美味しいピラフの店があるとか言って食わせてくれたんだけど。その中にとある組織の秘密金庫の鍵があつた。その組織が飯食っている途中で襲ってきた。それを撃退したらボディブローを食らった。それが始まりだった」

「……………」

「次はうまいピザ屋があるとか言って」

「…もういいから！」

俺が声をかすれさせながら説明しようとする二人は話を切り上げた。

…うっ、泣いてなんかないんだからね。

それから、ユーノと話合っているとこの浄化したジュエルシードを調べたいと言い出した。

「…じゃあ、もう一個のジュエルシードと交換なら…。あと、このことは誰にも言わない。俺達だけの秘密にすること」

「えーと、ユーノ君？」

「…仕方ないか。もうすぐ時空管理局の人達も来るだろうし。それまでに調べきれただけのことは調べたいし」

なのはがユーノにどうするのという視線を向けるとユーノはしぶしぶ頷いた。

「じゃあ、交換。なのは」

「うん。レイジングハート、もう一個出してくれる」

「プットアウト」

なのはのポケットが光りだすとそこからジュエルシールドが一つ飛び出てくる。それは俺のポケットの中にあるミニ避来矢に吸い込まれていった。

それから、夜が明ける前に何とか旅館にたどり着くとユーノ作り出した幻に合流。

忍さんやメイドさんたちより早く起きたのではれることはなかったが、昨晚の戦闘の疲れを温泉に入って取るうとしたらそのまま眠ってしまい、溺れかけた。

女湯では同様になのはが溺れかけた。

直前までユーノと念話していてなかったら、その異変に気づいたユーノが助けを呼ぶことなく小学生二人が被害者の湯けむり事件に発展しているところだった。

昼過ぎに温泉旅行を終えて、夕方の翠屋の前まで送ってもらった。

これで一件落着かと思っていたのだが…そうはいかなかった。

「あら、誰か来られましたよ、サカサ？」

「んー、おお、ツルギ。元気にしていたか？」

「…ツ、ツルギ?!こ、これはその」

「なあ、いつまでこれが続けるんだい？」

「…なにやってんだ、サカサ?何があつたんだ、アルフ、フェイト?」

家に帰ってきた俺が見たもの。それは…。

メイド服を着たアルフと同じくメイド服をつけた猫耳をつけたフェイト。

フェイトは猫耳装備のメイド服を着た状態を見られて恥ずかしいのか顔を赤くしてアルフの後ろに隠れた。反対にアルフは疲れた顔をしてサカサに文句を言っていた。

そして見慣れないショートカットのお姉さん（もちろんメイド服着用）が撮影の助手を務めながら、一階の居間で撮影会を行っていた。

俺はお土産に買ってきた温泉まんじゅうをその場に落として目の前の光景に呆然としていた。

本当に何があつた？



第十七話 たとえ火の中、水の中。砲撃の中！は、きつい！！（後書き）

ようやく戦闘パートを抜け切れたよ。

あとがき。

ツルギ「いきなり本音がこぼれたな。しかも、『あとがき』の前に」

たかB「…だって、やっとサカサの一件が片付いたと思ったたら前はなのはとガチンコバトル中だったし、ギャグは書きたくてもかけなかったし…」

なのは「…結局私が負けちゃった。まあ、あの流れで負けたら駄目すぎるもんね」

アリサ「…なんか久しぶりにここに来た気がするわ」

ツルギ「お帰り。アリサ。よくもまあ俺のことを馬鹿馬鹿と言ってくれたな（涙）」

アリサ「否定できる」

ツルギ「出来ると思っているのか！出来るわけないだろう！（大泣き）」

なのは「言い切った！まあ、今回はツルギ君とアリサちゃんの思っ出話も交えていたしね…。無印編、何話で終わることやら」

アリサ「下手すると30話以上」

たかB「考えたくもない！」

ツルギ「いや、考えろよ！」

アリサ「でも、このままだとなのはのアレ。魔法少女の必殺技の代名詞と言われるアレを受けるのはフェイトじゃなくてツルギになりそうね」

ツルギ「！？」

たかB「まあ、予定としては」

(グッ)

ツルギ「今、誰か握り拳を握らなかったか！？」

ソナナコトハナイヨー。

ツルギ「作ってるっ、絶対に喜んで握り拳を作っているよー！」

なのは「次回予告 KY対KY 前編！」

アリサ「あら？もう管理局執務官が来るの？でももう一つのKYって？」

ツルギ「(プイッ)」

何故かアリサと目を合わそうとしないツルギ。それを見たアリサ

はああ、あいつかと頷く。執務官さん。どうか死なないでね。とアリサは無言で十字を切った。

たかB「というわけで次回をお楽しみに」

第十八話 KY対KY 前編！（前書き）

久しぶりに

カいっぱいのコメディー！

## 第十八話 KY対KY 前編！

場所は夕暮れ時の公園。

そこには二人の少年と一人の少女がいた。

「…なのは、俺を騙したのか？」

「ち、違うよ、こんなことになるとは思わなくて…。ク、クロノ君。ツルギ君を離してあげて…」

体中に無数の焦げ跡を作りながらも、ツルギはなのはとトゲ付きロープにも似た黒装束の青年を睨みつける。

すでに避来矢の残存エネルギーは底をついたためベースである大剣の状態でロープの少年の手に握られていた。

「それは出来ない。彼の行ったことは全てが犯罪だという自覚があり、僕等管理局のことを君等から知らされていたにもかかわらず、敵対していたことから明白だ。何より不確定要素の高いこの武器も油断ならないからね」

時空管理局執務官クロノ・ハラウンがツルギに向かって杖を向ける。

「では、君が所属している組織やグループ。仲間の数と構成。そして…コードダブルオー。とはどのような物なのかを喋ってもらおうか？」

コードダブルオー。

それはサカサがジュエルシード探索の為に編み出した作戦術であ

る。

これを喋れば大幅にこちらが不利になるばかりか、それを利用して彼らに利用される恐れがある。

「…言えるかよ」

ツルギはクロノを睨みつけながら三日前に発動させた作戦コードダブルオーを決して言うまいと胸の中で誓った。

三日前。

ツルギ視点。

「つまり、少し前までフェイトとアルフに戦い方を教えていたお姉さんで、サカサに助けられた恩返しのために使い魔契約を結んだと？」

「はい。その節は大変な目に合わされ、お世話になりました」

お礼と皮肉を言われてしまった。すいません。うちの従兄弟<sup>サカサ</sup>が悪気や茶目っ気はあったと思いますが隕石が落ちてきたと思って諦めてください。

サカサがパソコンをいじっている背中をちらりと見た後に再び、リニスさんに視線を戻す。

「あの、ところで何でメイド服なんかをつけていたんですか？」

「ええ、実はサカサが言うには『こういう搜索は人海戦術が一番だが、しかし。ここには高町という名の裏に通じる人間がいる。表

向きにも裏向きのにも大げさなことは出来ない。しかし、その間。且つ、それを見た人たちは声をかけづらいう上に関わりたがらない作戦がある』とか仰ってましたが…。私には見当が付きません。ただ、コードネームはダブルオーだとか」

某機動戦士作品。リリカルなのか？に介入する！  
なわけあるかああああ！

てか、このツツコミ自体がなんだ？

などと頭の中でセルフツツコミを入れているとサカサがフェイトに何か言って台所に向かわせた。かちゃかちゃ。と、なにやら紅茶のセットケーキをお盆に乗せている様子が見えた。

ちなみにリニスさんは狼モードになったアルフの毛づくろいをしながらちやぶ台を挟んで俺と談話していた。…残念なことにメイド服は既に脱いで白の長袖シャツとロングスカートを付けていた。俺的にはアルフとリニスさんのメイド服姿をもっと見ていたかったのだが…。

「そう、それだよツルギ君！それが、その気持ちが今回の作戦に必要なのだよ！」

いや、俺は何も言っただけで、サカサ。あと意味も分からん。

ちなみに振り向いたサカサの顔には俺と同じ数だけ、青あざが数個できていた。

その理由。

帰宅後にこれまでの経過を話したら、

「一週間近くもこの町にいて、それだけのチャンスがありながらものに出来ず、こちらの素性をばらすとは馬鹿だろお前！このクズ！」

「うう、でもジュエルシードはフェイトの母ちゃんの所にあるのも合わせて九個はあるし」

プレシアの所に六個。うち一個は未浄化ジュエルシード。避来矢の中に三個の計九個。

しかし、サカサとしてはその浄化したジュエルシードが見たかったのでご立腹だった。

あれだけの事があつたのに生きてるだけでも儲け物のはずなのに怒られていると、

「まあ、俺は二個。あ、いや、今は一個だがな。わっはっはっは」

「おりゃああああ！」

からからと笑うサカサの顔が俺の拳で歪む。

先にゴングを鳴らしたのはそっちだ！

それから二十分ほど従兄弟喧嘩をしてリニスさんの自己紹介を交えながら今の状態という理由だ。

「それで、その内容とはなんなのですかサカサ？ 私たちは全然理解できないのですが」

「ふっ。先人は言った『考えるな、感じる』と。フェイトちゃん、カモン！」

それは先人なのか？ 明らかに未来の人が言ったような？ というかさつきからサカサの発言に危機感を覚えるのは何故だ？

「全然わからないんだけど。…なあ、ツルギ、リニス。本当に信



用できるのこいつ？」

「信用は出来ないけど、結果は残すから信頼はできる」

アルフの質問に俺とリニスさんの声が重なる。

「…意味が分からないよ」

うん、俺もよくわからないよアルフ。と答えようとしたらサカサが何やら力チューシャのような物を俺の頭に着ける。え？なにこれ？

「サカサ、なんのつも」

「お、お待たせしました。ご、ご主人さまや」

…はっ！俺は何処！？今は誰！？

サカサに頭に着けた物について質問しようとしたら目の前にいたとても可愛い物体が、得体のしれない何かを照射して俺の時間を止めた。その威力は絶大で混乱の効果も発揮していた。

「あ、あつうう。か、噛んじゃった。…て、なに！？い、いきなり抱きついて、ツルギ！？て、リニス！アルフまで！？」

サカサの指示で、一人だけ未だにメイド服のままのフェイト。E：猫耳（魅力＋3）。

顔を赤らめたフェイトを俺、リニスさん。いつの間にか人型に戻ったアルフが鼻血を出しながら三位一体のスクラムを組み、フェイトを抱きしめていた。

「…はっ！俺たちは（私たちは）一体何を？！」「」

気が付けば俺たち三人は皆、鼻血を出しながらもフェイトの頭を撫でていた。そこに理性でもなければ感情もない。ただ本能に従ってフェイトをみんなで可愛がっていた。

「ふっふっふ。それが日本が生み出した未知のエネルギー。萌え というものだ」

「ど、どういことですか？」

「そうだよ、サカサ！？あたし等に、いや、フェイトに何をしたい？」

「…何だ、この怒りや誇り、信念？いや、そのどれも違うのに体が勝手に動く。感じたことのない力が体、いや心の底から湧きあがってくる！？」

「あ、あつうう」

上からサカサ・リニスさん・アルフ・俺・フェイトの順番。

顔を赤くしたフェイトを見ただけで俺たち三人の中にある何かが膨れ上がった。

「諸君も感じ取っただろう。それが萌えであり、今回の作戦の要。感じただろうその胸に湧き上がる力。いや、感情を。…この作戦はそのエネルギーを己が主力として戦うAKI A戦士たちの力を借りるのさあああああああ！」

な、なんだってええええええええ！×4。

と、心の中で絶叫する俺達。

内、一名まだ頭を撫でられている。

コードダブルオー。

それは大(○)きな、お(○)友達作戦。の略である。

この日本には雨や風だけではなく、たとえ殴られようとも骨を折られ内臓を潰されようともその 萌え なる心を秘めた力で目的を達成するスーパー民族。

普段は一般市民として混じっているがそれに通じるものが、あればその戦闘能力は跳ね上げる。それを極めた者は、人を(人としての生活費を)捨て、獣を超えた(野生獣が目を覆いたくなるほどの)異様さを持ち、時に神として崇められる存在である。

そんな彼らの情報ワーク及びフットワークの高さは、思わず世界最高レベルの技術を収めたサカサでも唸らせる。

そんな彼らの協力を得て、ジュエルシード搜索を行おうという作戦である。

なお、この作戦に参加することが出来るのはサカサの厳選した上で行われるチャットを通じた面接を通過した紳士たる猛者たちだけ。

（ ）内の事について、サカサはあえて喋っていません。

「その為にもフェイトにメイド服をつけてもらったのだよ！」

ば、バカな。確かにそんな彼らの協力を得る事が出来れば、まさに鬼に金棒。サカサに核ミサイル発射スイッチだ。なんと心強い。だが、しかし…。

「そんな彼らが事情も話さない俺たちに協力をしてくれるのか？」

「するとも！ 奴等は確かに目的のためにならどんなことでもやるのける。だが、同時に紳士でもある！」

不安を滲ませた俺の言葉にサカサは力強く答える。

「ど、どこにそんな根拠が…」

「根拠だと？ ツルギ、それはお前もわかっている。いや、感じている筈だ。それを教えてやる！ フェイトよ、俺の教えた無条件降伏の必殺魔法を唱えるのだ！」

「え、えーと、その、あう。あの、あのね、ツルギ」

フェイトは顔を赤らめながら上目づかいで最強魔法を唱えた。

「お、お兄ちゃん。わ、私のお、お願いを聞いてくれたら、う、うれしいな」

・  
・  
・

ゴ  
バ  
ツ。  
。

「まっかせてえ え え え え え え え え え え え え え え  
え!」

と、うたふく。

これはツルギの悲鳴です。

「はっ、俺は一体？」

気が付けば次の日の朝になっていた。

何故か、昨日帰ってきたとき以降の記憶がない。

そして、何故か俺の昨日つけていた服は胸のあたりから何かが噴き出たような跡を残しながら赤黒い血で汚れていた。アルフとリニスさんも同様に服を汚していた。余波を受けたとか。はて？なんの余波だろう？

今日。というか、一日中フェイトが俺・アルフ・リニスさんの三人と目を合わせるたんびにびくついていた。何があったの？

ちなみに今日は連休最後の日。すずかからのメールを見て、サカにすずか襲撃の件を相談するとそこはリニスさんに向かわせるはずだったのだが、俺とアルフ同様に貧血だったのでサカサが直接月村家に行ってなんとかしてくるそつだ。

夕方ごろになって、月村家の自動セキュリティーレベルを最大にまで改造してきたらしい。一個中隊を引き連れていかないと突破できないレベルにしたらしい。ここは本当に法治国家日本なのか？

さて、貧血でダウンした三人を放置、というか三人から逃げ出すようにジュエルシード探しに言ったフエイトは夜まで頑張ったけど成果を上げられずにとぼとぼびくびく帰ってきた。

さて、明日は登校日だ。何故か学校が遠くに感じてしまう。

サカサにそれを話すと明日にはここを引っ越すそうです。俺が正体をばらしたので高町の人、いずれこちらの世界に来るだろう管理局対策の為、拠点を動かすとか。学校が終わったら直接そこに向かうことになった。

なんか、すいません。

ちなみに今日の夕飯はサカサが作ってくれたレバニラ炒めだった。

そんなバカみたいな一日を過ごしている間にも俺たちの敵。は言い過ぎか？

とにかくなのは達にも動きがあったことを俺たちは知らなかった。

なのは視点。

今日も日が落ちてから夕食を取った後にユーノ君と一緒に空からジュエルシードを探していると、目の前の空から青白い光が出てきた。

その光に驚いていると中から一人の男の子が現れた。

「時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ。君がユーノ・スクライアでいいか？」

光の中から出てきた男の子は私ではなく、まずユーノ君の方に目を向けて口を開いた。

「は、はい。僕の申し出に答えてくれてありがとうございます」

ユーノ君は少し慌てた口調で答えた。私も急いで自己紹介をした。

「た、高町なのはです」

「…ん、失礼だが君はここの世界の人間か？」

「は、はい。そうです」

「彼女は僕の協力に答えてくれた人です」

「…ふむ。詳しいことはアースラで聞こう。と、思ったが今日はもう遅いだろうから、彼女の方は明日の空いている時間にそちらからもう一度声をかけてくれ。ユーノ。君の方は今からでも来れるかい？」

「はい。出来るだけ早くこの事件を解決したいので僕の方は構いません。けど…」

ユーノ君は私の方をちらりと見て言葉を濁した。その様子を見てクロノ君は顎に手を当てて考える素振りを見ると、何か思い立ったのかユーノ君の心情を察した。

「…ああ、探索の方ならうちの局員が随時行っているからいざという時にも対応できる。なんなら、彼女を家まで送った後にでも連絡してくれ。僕はその間この周辺を探索しておくから」

「あ、ありがとうございます」

こうして私、高町なのはは管理局のクロノ君と出会い、その明日、アースラへと赴くこととなった。

そして、その日を境に本格的にジュエルシードと向き合っていく

ことになった。それはツルギ君の完全な敵になるということを意味していることを私はまだ知らなかった。



## 第十八話 KY対KY 前編！（後書き）

あとがき

ツルギ「あれ？KY要素がないんだが…」

サカサ「それは次回に露見するみたいだぞ」

フェイト「それにしても早い合流だね。まあ、そうでもしないとパワーバランスが…」

なのは「5対2はさすがに無理なのー！」

サカサ「そうだな遠距離砲撃が主体のなのはに補助のユーノだけで俺らを相手にするのはちょっときついし。ここでせめてクロノを足さないと原作ヒロイン陣やばいよな」

リニス「フェイトとツルギ近接戦闘型が2名。近代兵器の使い手、文字通りの砲撃  
カサ要員が1名。アルフとリニス補助が2名。あ、私は補助の方ですよ」

なのは「フルボッコなの！？」

ツルギ「あ、いや、一応。サカサはしばらくはサポート要員に回るらしいぞ。リニスはその補助をするから、実質3対3・・・かな？」

ユーノ「いや、彼のサポートはある意味前線より恐ろしいものを感じるんだけど…」

ユーノ「それにしてもダブルオーで、」

サカサ「なにかね？不服かね？」

リニス「恐ろしいですね日本」

ツルギ「あの撮影した写真で、もしかして…」

サカサ「無論アップした。ちなみにツルギに着けさせた頭のアレは小型マイクとカメラが付けたので、あの時の映像と音声もアップしている。安心しろ、いくら嚴重にプリントしない限り、保存しようと三日後には綺麗に消えているから」

リニス・ツルギ・なのは・ユーノ「……そんな！もったいない！……」

フェイト「みんな？！」

サカサ「じゃあ、この場を収めきれそうになくなったんで、次回予告といくか。次回KY対KY 中編！あ、一枚千円からな。十枚に一枚の割合で猫コスのフェイトがあるから」

リニス・ツルギ・なのは・ユーノ「……ダースでくれ！……」

フェイト「みんなの目が怖いよおおおおおおお！」

第十九話 KY対KY 中編！（前書き）

コメディーは一日で書けるのにどうしてシリアスは・・・。  
あ、KYたちが初顔合わせしますよ。  
バトルは次回になります。  
今回はシリアス？が多め。

第十九話 KY对KY 中編！

なのは視点。

「サカサが来ているですってええええええええええ！？」

私は右隣に座ったアリサちゃんの雄叫びにも似た声で、昨晩のことを考えていたら寝不足になった頭を一撃もとい一声ですつきりさせた。…でも耳が痛いのだ。

「あ、アリサちゃん声が、み、耳があああああ」

「まだ耳がキンキンしているの。」

屋上に設置されたテーブルにお弁当を並べてお昼休みを過ごしていた。今日は珍しくツルギ君もお弁当を持参していたのでそれについて尋ねたらサカサさんに作ってもらった。と答えを返したらアリサちゃんがかんだ。その時に飛び出たご飯粒が正面にいたツルギ君に被弾。そのご飯粒を隣にいたすずかちゃんがハンカチを取り出してふき取る。

「あ、ああ。温泉から帰って来るといつの間にか帰っていた。それで帰って来るなり悪態についてな。あまりにも理不尽だったからつい喧嘩した」

「……まだ、パパからは何も聞いていないということとは、まだどこかの企業にも知られていないということね」

サカサさんの襲来でここまで慌てるなんて。アリサちゃんも企業

とか言っているし、ツルギ君は喧嘩したとかいうし…。あ、そうだと放課後に管理局の方に顔を出すんだった。

一人じゃ不安だし。ツルギ君にも一緒に来てもらおうかな。でも、私の敵だとか言っただし、噂のサカサさんも来るかもしれないし…。

「あ、なんかごめんねアリサちゃん。私は知っているんだ」

「なんで！？なんですかは知っているの？」

「（本当はツルギ君に来てほしかったんだけどな）えーと、私の家にあるセキュリティシステムの改造をするとかでそれで」

「何？！ツルギ、全部正直に吐きなさい、何が。この海鳴で起きようとしているの？！あいつが防衛に関するのを口にしようものならここで戦争が起きるわよ！」

「「そんなに！？」」

「否定が出来んが、そこまで酷いことは起きない。…と思う」

私とすずかちゃんは思わずその言葉につっこみを入れたがツルギ君は首を捻りながら答えた。ツルギ君曰く、月村邸にお世話になったお礼に防衛レベルの向上と改良を行ったらしい。あの林の中に見ず知らずの人が忍び込んだら になると云った。

あの空白の部分は聞かない方がいいだろう。

「…あ、悪夢だね。もうこうなったらお茶会よ。美味しいお菓子と紅茶で気分を変えない限り私に爽やかな朝は来ない」

「俺の従兄弟がなんかすまないな。だが、俺ではどうにも出来ない

い。サカサは……。んん、まあいろいろとこの町でやることがあるからアリサやすずか達とは関わらないと思うから」

ツルギ君が一度私に目を向けた後に落ち込んでいるアリサちゃんに再び目を向ける。

「……やっぱりジュエルシードの事だね。と、私が考えながら昨日、ユーノ君が管理局に行く際にレイジングハートを渡した。そしたら、ジュエルシードについて話したいことがあるから。と、今日の午後五時に公園で待ち合わせる約束をした。」

「ツルギ、あんたはいつもサカサの味方が中立な立場から言うわね。あいつは確かにすごいけど性格は最悪じゃない」

「アリサちゃん、一応命の恩人なんだから」

「その時のお礼の分は出したわ。本人もそう言っていたし」

「……ああ、そうだな。『ツルギ以外のいい少女が手に入った』と  
おせう  
や  
か  
言  
っ  
て  
い  
た  
し  
な。アリサはこんな性格だから」

意地悪な顔で笑っているツルギ君。

「どんな性格よ!」

「打てば響く」

「納得」

「すずかあああつ、あんたまで!」

出来ることならツルギ君も一緒に来てくれないかな？一人だとなんか怖いし…。

ツルギ視点。

お昼休み終了まであと十分といったところで聖祥トリオは歯磨きをしに自分の教室へと戻って行ったが、なのはだけが屋上に戻ってきた。

「…時空管理局。ね」

「うん。出来れば一緒に来てほしいんだけど…。避来矢君も一緒に」

なんで避来矢を君づけで呼ぶのかは分からないが、なのはは一人で行くのは不安のようだ。一応、ユーノも一緒に行くから問題ないと思うがここの世界の住人としては一人だから、不安なのは仕方ない。女の子だしなあ。

三日前に立案したコードダブルオーのA（A I B Aの略）戦士たちの集結と同じ時間によりにもよって重なるとは…。避来矢、なのはに気づかれずにサカサに連絡は取れるか？

（……………）

あ、無言ということは不可か。

（…肯定。なのは嬢、基本能力値、想定。傍受、可能性、有）

ちなみに避来矢は戦闘時やそれに準ずるとき以外にはこの喋り方になる。何でもその方が楽しい。まあ、楽なら仕方ない。

「ふえ、避来矢君いるの？」

「肯定。なのは嬢。要求、返答。要、時間」

「え、えと？」

「すまないが、もう俺一人の意志で行動できなくなっているんだ。いきなり単身で敵地に乗り込むというのもちょっと…」

敵地。という言葉になのはは悲しそうな顔をした。

「まあ、敵だけどなのは事は友達とと思っている。そうだな…。放課後までには答えを出すから待っていてくれ」

今にも泣きそうな顔をしたのはに苦笑いをしつつ、屋上を後にした。

一応メールでサカサに指示を仰ぐことにした。  
メールを送って三秒後。

ピロリキン

「はやっ。なにこの着信音っ、キモ」

たぶん、サカサが勝手に変えたのだろう。

送られたメールの中にはサカサからの返答が入っていた。

今、大学病院でお前が言っていた町を破壊したジュエルシード



事件の怪我人の治療をしている。とりあえず、管理局に行つて話を聞いて来い。ただし、監禁されるかもしれないから常に避来矢は鎧状態。最低でもいつでも袴（黒斗雲）は使えるようにしておけ。あちらから出てきたものに手は出すな。こちらのことに關しては何も言つな。一応俺も行く。

追伸。

コードダブルオーはあいつ等だけがいれば事足りる。てか、お前は邪魔だからくんな

三秒以内にこれだけの文章を打ち込んで、最後に俺の精神を凹ませやがる従兄弟に怒りを覚えるのはなんでなんだろうね。

結局、俺は放課後なのはと一緒に公園へ向かうことにした。

アースラ艦内。

「ほえー、しかし、いつ見てもこの子のもつ潜在能力は凄いな。AAAクラス。クロノ君より魔力の質も量も大きいんじゃないかな」

栗色で少々くせつ毛の目立つ一〇代後半の女性は目の前に広がるいくつものモニターに高町なのはが映し出された映像に呆れ半分、関心半分といった具合に眺めていた。

今見ている映像はレイジングハートの持っているメモリを映し出している。

「はい、僕が言うのもなんですが彼女の持つ魔力とあの戦闘技術はかなりの物だと思います」

その後ろには様々な文献の本を持ったアリサやフェイトに比べる

と色素の薄い金髪。緑色の瞳を有した一見少女に見間違えるような容姿をした少年がいた。

「だが、いくら魔力が強いからと言ってその力に振り回されてばかりのようにもうかがえる。持っている魔力が凄いだけで勝てるのなら、あの少年にも彼女は勝てたはずだ」

そう言いながら少しだけムツとしたような表情で少年の後ろからクロノが女性の隣に立つとモニター画面をいじると黒い鎧を纏ったツルギを映し出した。

「でも、この子は凄いというよりおかしすぎるよ。だって魔力ゼロなんだよ。まったくと言っていいほど魔力のかけから見られない。それなのに空を飛び回って、なのはちゃんの魔力砲撃にも耐えきり、レイジングハートをハッキング。強制解除」

「そして、極めつけはロストロギアであるジュエルシードの浄化。そして、彼の持つ剣です。あんなに大きなデバイスは見たことがない。というよりあれはデバイスというよりも文字通り意志を持つ剣でした」

「もしかしたらこの剣もジュエルシードと同様にロストロギアなのかもしれないな」

「この子も来てくれるといいんだけどねえ。あ。あとの黒いマントの女の子の魔力測定もしたけど何分情報が少なすぎるから樂觀的に測ってみたんだけど」

「…エイミィ。これで樂觀的なのか？」

「なんかごめんね。でもモニターの通り彼女は少なく見てもAランク以上の魔術師。しかも、この映像の中にあの剣も映っている。ということでの二人は協力体制かそれに近い状況下にあると考えた方が妥当かな」

ツルギを魔力弾でぶっ飛ばした後、はじけ飛んだ避来矢を片手に持ったフェイトが映し出された。

「…厳しく見るとあの白い子より魔力があるかもしれないな」

「もしかしたらツルギが見たがっている女の子の笑顔ってこの子の?」

「…まあ、確かにこの子の笑顔は絵になると思うが」

「え、クロノ君の好みってあの白い子じゃなくて黒い子の方だったの!？」

「違う!まったく彼女はともかく彼は明らかに白い子に敵意、正確にはジュエルシードの収集に並々ならない決意がある」

「鎧の子はこの黒い子の為に?きゃー、だというなら凄いらぶロマンスよね!想う子の為に犯罪にも手を染めるだなんて、あいた」

妙なテンションになったエイミイの頭に鋭いクロノのチョップが入る。

「エイミイ!僕等、管理局である人間がそんなことを言っては駄目だろう!ああもう、話が脱線した」

「まあまあ、落ち着いて」

金髪の少年がクロノをなだめる。それに対して少し落ち着いたのかクロノは話を続ける。

「…まあ、君の言う通りだなユーノ。とにかく、彼の持っているジュエルシードをこちらに回収。もしくは提供してもらったためにも僕等は一度席を設けなければならない」

少年はその言葉に疑問を持った。

世界を滅ぼすかもしれない力を持ったジュエルシード。それをたとえ信じてもらったとしても彼はジュエルシードを譲ってはくれないだろう。そうでなくてはあのなのはの砲撃に飛び込むような真似はしない。

そんなことを考えながらユーノは手に持った本を眺めながらなのはがアースラに来るまでジュエルシードに関する資料を集めることに専念した。

クロノ視点。

「時空管理局執務官クロノ・ハラOWNだ。君がなのはやユーノが鎧の人であっているか？あと、出来ることなら武装は解除してほしいのだが…」

「すみません。それは出来ません。俺はあなたたちの何も知らない。もしかしたら見方かもしれない。けど敵なのかもしれない。それを判断するためにもここに来ました。俺からは何もしゃべりません。ただ、話を聞きに来た。それだけです」

「ムッ」

待ち合わせの時間に公園の方へ出向いてみるとそこには白い子と鎧の子。高町なのはと月野剣ツルギがいた。

人気のない時間帯だったのだが一応結界を張るとすぐにツルギという少年は鎧を纏った。

兜なしの鎧。オールラウンドでいつでも戦えるといった具合だろう。

なのはの方はその様子に少しだけおろおろとしていたが、話を続ける。

「随分、疑り深いな。君は…」

「従兄弟がそういうことに厳しかったんです。知らない人にはついていくな。」と

彼の投げやりな態度に腹を立てかけたがここはこらえてアースラまで連れて行くことにした。

「…まあ、いいだろう。ここに来てくれた。ということは少なくともこちらを信じてくれているということだろう?」

「……………」

バシユッ。

今度は兜付きの鎧へとバリアジャケットへと換装させた。

そして、口元に両手を持っていくとバツ印を作る。これ以上話すことはないという意思表示だろうか?

「つ、ツルギ君。あ、あのね。お話を聞くだけだから。それを解除しようよ」

「拒否。話、受講。目的。目的、以外、用件、無。我等、発言、不許可。我等、質問、答弁、不認可。我、代弁」

なのはがそんな対応をしたツルギに対して止めるように割って入ろうとするが彼は首を振りながらデバイス任せに対応していた。

つまり、本当に話を聞きに来ただけで、こちらの質問には答える気はないということか。

「ふざけるな！僕らは時空を管理し、守る為に君が集めている口ストロギアを回収しなければならぬ！君自身も理解しているのだろう。あのジュエルシードの威力をあれはとあるべき場所で厳重に保管しなければならない代物であって君のような子供が集めていいものじゃ」

ストップ。そこまでですよ、クロノ

その対応が頭にきて思わずS2Uを起動しかけた瞬間に空に巨大なモニターが現れるとそこには母さ…リンディ提督が現れた。

初対面でそのように高圧的だと出来る話も出来ないわ。あなたたち、ごめんなさいね

「……………」

シュンッ。

提督が彼に頭を下げる映像が映し出されると彼の方も鎧を解除した。

「…いえ、こちらこそ失礼な対応ですみません。その俺：馬鹿なんで変なことを口走るんじゃないかと思って避来矢に代弁を頼んだんです。どうもすいませんでした」

慌ててぺこぺこ頭を下げる彼は再び鎧を身に纏った。

「…すまないと思うのなら、その鎧を解除してくれないか？」

「不可」

ぴきつ。

「君をそのまま僕らの船に転送するところとしても攻撃的な空気に包まれるんだ。が増してくれないか」

クロノッ

いくら提督が言おうと僕はこの主張を崩すつもりはない。彼ほど不確定な力を持った人間が何をしてくるか…。

「……………」

バシユッ。

「…わかりました」

…どうやら、好戦的な性格ではないようだ。

彼はこちらの指示に従ってくれるようだ。さて、提督が僕を見る目が厳しくなってきた。

「…いや、こちらこそ無理を言っすまなかった。ではこれから君たちをアースラに転送する」

彼らの足元に転送用の魔方陣を展開して彼らと僕の転送を行った。

リンディ視点。

「…以上がロストログアに関する事件と危険性よ。理解してくれ  
たかしら」

「…はい」

「えーと、つまり、ロストログアとは昔の凄い時代が作り出した  
凄い機械やアイテムで使い方を間違えたら世界をぶっ壊すほどの被  
害を生み出す。あなたたちはそれを管理する警察みたいなもの。と、  
いうことですか？」

「まあ、そんなところかしらね」

クロノがなのはさんとツルギ君を連れてきた時には険悪な空気か  
と思っただけ思いのほか友好的にお話が進んだわね。

「それじゃあ、そちらの事を教えてくれないかしら？じゃあ、ま  
ずはなのはさんから」



「その前にいくつか質問があります。ジュエルシードは本当にそれだけの力はあるのですか？」

「…あなたが浄化した白いジュエルシードを調査したところ、その中に内包されているエネルギーを解放したら、あなたたちの住む町が軽く消し飛びますね。そして、その余波で周辺地域二十キロ圏内の建造物は破壊しつくされるでしょうね。浄化していない状態の物だと更に危険ね。威力は散漫として入るけど破壊される地域は二倍以上に膨れ上がる。下手すれば次元振動。いえ、次元断層が起こるわね」

あれはブラックホールのような物。生じたら最後辺りに存在する生き物や建物の全てが呑み込まれていく。飲み込まれたら重力に従って落ちていく。その空間内では魔法は使えない。ただただ落下していく無の空間で落下。その時の落下とに空気と生じる摩擦熱により焼け死んでしまう。

「……………俺達はこのをどうしても必要としている人がいる。その人が使い終えた後に回収してくれませんか？」

「それは無理ね。子供や訳の分からない人・事情のしれない人間にそんな危険な物を渡しておくわけにはいかないの」

「俺達の世界には原子力発電という大規模なエネルギーを発生させて電力に変換するという技術があります。そして、そちらの世界にある技術は遥かにここを超えているもの。それらを併せ持つてもこちらの世界で預かるということは出来ませんか？」

「悪いけど無理ね。残念だけどジュエルシードは現在。私達の使うデバイスの中に封印術式を組み込んで、さらに複雑な回路を用い

てやっと封印している。恐らく私たちの世界のなかで一番の技術をもつてしても同様の方法を取るしかない。もちろんそちらの方が頑丈だけどね」

君の持つ大剣がどうなのかは分からないけどね。

「…つまり、そちらは今すぐにはジュエルシードの保管場所は強化できない。維持するほかないということですか？簡単に言っていると俺達が保管していようと、あなた方が保管していようとあまり変わらないと？」

「失礼なことを言うのだな君は！君、一人で様々な脅威からジュエルシードを守りきれれると思っっているのか！」

…手厳しい質問ね。だけど、クロノ。落ち着きなさい。彼は先程から俺達と複数形の主語を使っているのよ？

それはつまり他の協力者がいるということ。たぶん、あの黒い女の子で間違いはないだろうけど。

「残念ながら、そちらの言う通りね」

「では、こちらとしてもジュエルシードは渡せません。何より、時空管理局という部隊を目にしたのは初めてですし、すぐには信用できません」

「なっ！君は！っ」

クロノが再びツルギ君に食って掛かろうとしたので、私は右手を挙げて静止させる。

「…うに？ ツルギ君？」

その剣幕に驚いたのか、なのはさんがツルギ君の顔と私の顔を見比べている。ただ、その顔は怖がっているというよりも不思議がついているという感じだ。

「すぐに理解しろというのも無理な話ですが、こちらはあなた方の世界や生活に害をなすつもりはない。とだけ、理解してください。…質問は以上ですか？」

「…はい。話の腰を折ってしまい、申し訳ございませんでした」

ふう、とてもなのはさんと同年なのかと思うぐらいに冷静だったわね。

一体どれだけの視線をくぐり抜けてきたのだろう。

この敵地であるアースラに。なのはさん…正確にはレイジングハートのメモリからよく出てくるサカサという人によっぽどの目に会わされたのだろうか？

…ふー。と私とツルギ君はお互いに深い息を吐く。さて、次はこの子たちの話ね。

「あ、はい。私はユーノ君との出会いなんですけど…」

それからしばらく、なのはさんの話は聞く。こちらで事前にユーノ君から聞いた通りね。

さて、本命のツルギ君とツルギ君の持つ黒い剣。避来矢君といったかしら。

「じゃあ、俺のむぐう」

ばしゅ。

「主。黙秘」

「あらら」

ツルギ君が喋ろうとしたら避来矢君があゝの鬼の仮面を自動装着した。

「…我等、検索。不干涉、要求。理由、我等、願望、所有」

どうやら自分の主が余計なことを喋ろうとしたから自動的に鎧を換装してみたいね。

主の意思を無視して、いえ、これは従事して起動したということかしらね。

「君、何のつもりだ！」

「…」

隣にいたクロノが怒鳴ると、ブンブンと両手を振って自分の行動を否定するツルギ君はなんだかおもしろかった。

まあ、それはさておき、落ち着きなさいクロノ。

「…そちらの情報は教えられない。ということかしらね」

「肯定」

…ふむ、なかなか難しいわね。

こちらが少しでも誘導尋問をかけたり、そのようなことをすると

主は気付いていなくてもデバイスが勝手に反応する。いろんな意味でいい相棒を持っているわね、この子は。

主であるツルギ君は未だに両手を上げて攻撃の意志はないことを示しているが、クロノは今にも噛みつきそうな気迫を見せている。だが、その様子からだとは怯えからくるものではない。あくまで攻撃意識がないだけのようにも見える。

「落ち着きなさい。クロノ」

「しかし！」

「二度は言いません」

「…わかりました」

全くこの子はすぐに頭に血が行くのも考え物ね。

逆に私と話している子の目の前の彼は全く逆の性格。

まるで意識と感情。本能と理性を別々に切り離している。まるで並列思考でもしているんじゃないかしら？少なくとも目の前の彼は明らかにデータとは異なる雰囲気醸し出している。

「理解、感謝」

「どういたしまして。でも、そちらは理解してくれたのかしら？」  
バシユ。

「…理解はした。が、そちらに有益な情報を与えるわけにはいかない。それにあれば我々の世界に落ちてきたものであり、それだけのエネルギーがあればこちらの世界でのエネルギー問題が全て解決

する。そして、自分の従兄弟はその構造とエネルギーの理論を少しばかり理解し始めている。かなり馬鹿げているかもしれないが…」

っ！

鎧を解除しながらツルギ君は真っ直ぐに答えてきた。

あのジュエルシードを理解できる人間がいるなんて嘘のような証言。しかし、彼の目や言動に嘘はないようにも見える。

「…それはどういふことかしら？いえ、その前に…あなたは誰？」

「…やっとその言葉が出たか」

にやりと口元を歪めるとツルギ君の姿は水に溶かした絵の具のようになり、その全体的に黒の服装のブレは、白く染まっていくと再び人の形へと変わっていった。

にやりと歪めた口元はツルギ君と似ていたが明らかにツルギ君ではない別人がそこに現れた。

彼は純白の白衣を着こみ、漆黒のサングラスをつけた長身の青年が私たちの前に現れながら私たちに挨拶をした。ただし、

「初めまして。リンディ・ハラOWN提督。クロノ執務官。高町なのは。俺の名前は月野逆。あいつの従兄弟だ」

黒い銃口を私となのはさんに突き付けながら。

「そして、さよならだ」

ガオンッ。

引き金を引いた。

第十九話 KY対KY 中編！（後書き）

あとがき。

サカサ「よし、密航成功」

リンディ「やっぱり、ツルギ君じゃなかったわね」

クロノ「…なんだか、僕はいい玩具のように扱われたんだが」

サカサ「いや、それはないな」

クロノ「そ、そうか？」

サカサ「お前はような。ではなく、俺の玩具だ！」

クロノ「確定なのか！？」

リンディ「まあ、打てば響く。ちょっとつづけばすぐに跳ね返るような子だからね」

エイミィ「まあ、それがKYくんだよ。クロノ存在意義なんだよ」

クロノ「エイミィまで？！じゃあ、待て、もう一つのKYで、何だ？！」

リンディ「それは次回の前書きで発表するわよ。でも、ロストロギアの自己説明とか私の見せ場が省略されるなんて…」

エイミー「仕方ないですよ。作者はグロイものとか、根性ものとか、恋愛ものとか、エグイもの、とか流血ものやら、コメディやバトルは好きだけど悲しい事件とかめんどくさい。もとい、書きたがらないし…」

リンディ「それもそうね。それじゃあ、次回予告」

クロノ「KY（空気読めない）対KY（詳細は次回前書きで）  
後編！で、何かクイズ形式みたいになっていないか？」

エイミー「次回をお楽しみに」



第二十話 KY対KY 後編！（前書き）

まえがき

第二十話は 空気読めないVS空気読まない 後編！

前者はクロノ。後者はサカサ。

今、魔法と化学が交差する。

…のか？

## 第二十話 KY対KY 後編！

なのは視点。

私、高町なのははいきなりの事に腰が抜けた。

いきなり目の前に現れたお兄さんが私とリンディさんに銃を発砲した。そして、その銃弾は。

ガキーン。ボフツ。

「…いきなり銃をぶつ放すなよ、サカサ」

目の前には銀と黒の鎧を纏ったツルギ君が私の前に現れて盾になつてくれることで私は被弾を免れた。

そして、リンディさんに向かっていた銃弾はリンディさんの目の前で止まっていた。

その銃弾の周辺には蜘蛛の巣のように黒いひびが出来ていた。まるで目の前に見えない壁があるかのように。

「貴様、何のつもりだ！それに誰だ！？その怪しい風体をし」

ガガガガガガガガンツ。

クロノ君が杖を向けて白衣の男性に向けると同時に白衣の男性はそれに答えることなく銃を乱射する。そして、その銃弾はリンディさんの時と同じようにその銃弾は空中で止まった。

「…何をするつもりか？そっちこそ、さっきからこそそと何をしている？すげー電磁波がビシビシと垂れ流しなんだが？…ツルギ

左肘」

「ん、左肘がどうした？」

ばきや。

「な?!」

ツルギ君が左ひじを見る為に腕を動かしたらツルギ君の左手に何かがぶつかった。

そして、ヒビだらけの空間から何かがボロボロと落ちてきた。

「……」

「見るからにカメラ。恐らくこちらのデータでも取っていたんだろっな」

白衣の男性は落ちてきた機械に顔を少しだけ向けると再び銃をリンディさんとクロノ君に向ける。

「俺の説明をもう一度するぜ、俺はそこにいる鎧を着た奴の従兄弟。サカサ。見ての通りの銃火器を使える学者で保護者だ。さて、リンディ提督殿。見るからにこれは観測機だな。そして、そこにいるお前等。出てこい。でないと撃つぜ」

え？そこにいるお前等？

どういふことなの。と、声を出そうとしたら再び銃の引き金にサカサさんが触れる瞬間にリンディさんが両手を上げる。

「……参ったわね。まさか、シーカーまで見抜いていたなんて。あ

あなたは魔術師なのかしら？…みんな出てきて」

と、何もなかった空間からクロノ君と同じような服装をした大人の人達が出てきた。その中に金髪の少年がいた。その子が私の方を見て駆け寄ろうとしていた。が、

「艦長！」

「なのは！」

「全員動くな！」

サカサさんの声で皆、口をつぐんで身じろぎ一つ出来なかった。黒い銃口からは未だに煙を上げたまま、黒い銃口を向けたままリンディさんクロノ君に銃口を向ける。

「…とりあえず。ツルギ」

サカサさんはくいつと左肩を少しだけ動かすとツルギ君はため息交じりに私の前から離れようとする。

「ま、待つて」

私はツルギ君を掴もうとするが少し遅かった。

ツルギ君はサカサさんの背中に手を当てると黒い雲が辺りに立ち込める。そして、

「…逃げるぞ！」

「おう！避来矢！」

「黒斗雲、起動！」

ヴォーン！

雲が吹き飛ぶと同時に二人の姿は無くなっていた。  
そうなると同時にリンディさんが叫ぶ。

「エイミィ！今すぐあの二人を追って！早く！」

『はい！もうやって…、え！？そんなどうしてこんな時に！？』

ヴーヴーヴー！

いきなり、船の中が赤く染まりあがる。

な、何！？いろんなことが起きすぎて訳が分からないの。

『ジュエルシールドが発言しました。しかも、これは街中です！このままじゃ…。え！？結界！？あの黒い子がいます！』

目の前に現れたモニターに映し出された映像にあの時の黒い女の子がいた。

エイミィさんの報告は落ち着くことなく雨のように続く。  
じゅ、ジュエルシールドって、黒い女の子？！街中で？

『しかも、それ以外に魔力反応が二つ。一つはAクラス。もう一つはBクラス！あわわわ、しかもさっきの二人が合流！』

「…やはり、彼らは同じ勢力だったみたいだね。くそつ、やっぱり彼等を無力化したほうが良かった。今度会ったら問答無用で」

クロノ君が悔しそうに言葉をこぼすと、リンディさんがそれを論ずる。

「落ち着きなさい、クロノ。今回は私達にも非があつた。彼等はこちらの話を聞くだけだった。それなのに彼等のデータを無断で取っているのよ?」

「当然です!見ず知らずの連中で危険性があゝあ」

「そう、見方を変えれば私たちも同じ。しかも姿を隠し、数人で囲んでいたらそれは逃げるわよね。さて、クロノ」

「え?あ、はい」

「今からジュエルシードの捕獲に向かつてもらえないかしら」

「わ、わかりました!」

リンディさんは目じりを抑えながらクロノ君に話しかける。と、この部屋から急いで出ようとする。それよりも私はユーノ君の姿を探したけれど、あのフェレットの姿が見当たらない。

え?ユーノ君?ど、どこ?

『さっきの白衣を着た男性がどこからともなく大型の質量兵器を使用!ジュエルシード発現体粉碎!黒い子が追い打ちに雷を照射!と、AAAクラス!な、なんなのこの人たち、管理局の一個小隊を上回る程の火力を有している!?』

モニターにはさっきの白衣の人が大砲のような金属の筒を肩に担

いでいてその筒からロケットが発射されると黒い子もそれに合わせ  
て黄色の砲撃を行う。

そして、白とオレンジの光の鎖で縛られたジュエルシードの発現  
体。

コンクリートで作られた地球儀のような形をした大きな球体の発  
現体が爆砕する。

「彼等は何がしたいんだ。一般人に被害がないように戦うと思  
いきや我々には協力しない。むしろ敵対している」

「それでいながら、こんなにも多種多様。白衣の人の質量兵器と、  
ツルギ君の鎧による物理攻撃。あの黒いこの魔力攻撃。そして補助  
魔法。たった五人なのに一気に封印段階にまで持っていくなんて」

『あの鎧の子が触れただけでジュエルシードが封印！』

「なっ！なんでこんな簡単に！？」

金髪の子が私に近づきながらモニターに向かって叫ぶ。

私も信じられないでいた。だって、レイジングハートでやっと封  
印できるはずなのに、ツルギ君は鎧から剣に変化させるとまるで丸  
飲みするかのようにジュエルシードを封印する。

次の瞬間にはすると五人はツルギ君の周りに集まるとまた転移す  
る。

それから数秒後にクロノ君がその現場に現れるがツルギ君たちが  
いないことが分かると悔しそうに杖で地面を叩いた。

「…追跡は？」

『すいません。あまりにも時間がなさすぎて、アンノウン二体の

魔力の波長パターンも取れませんでした』

「…そう。ありがとうエイミィ。あなたは悪くないわ。彼らが早すぎたのよ。クロノ、一応辺りを調査して何かわかるかもしれないから」

『…了解』

私は。いや、私たちは先程の光景をただただ見ているだけしかできなかった。

ジュエルシードが発動して五分もたっていないのに封印終了。彼等のチームワークはあまりにも凄すぎた。

「…あ、あのレイジングハートを私に返してくれませんか？私、もう一度ツルギ君に会って話を…」

「駄目よ。君も見ただろう彼らに単身で挑むなんて無謀が過ぎる」

レイジングハートの力を借りてツルギ君たちとお話をする。そして、なんでジュエルシードを集めるのかを知りたい。もしかしたら、喧嘩なんかせずにお互いに歩み寄れるかもしれない。

だけど、リンディさんは首を軽く振りながらそれを否定する。

「なら、二人でならどうですか」

「ユーノ君！？君まで！」

え？今、ユーノ君で、言わなかった？

私は近くにいた男の子に目を向ける。どう見てもあのフェレットのユーノ君には見えない。どう見ても人間の男の子だ。



「…そうね。出来ることならなのはさんとユーノ君には手伝ってもらいたい。けど、二人でも駄目よ。彼等はあまりのも強すぎる上にジユエルシードを狙っている以上あなたも攻撃対象になる。そんなことは出来ないわ。…と本来なら言いたいのですけれど条件次第では私たちも力になりましょう」

「艦長、それは！」

「あ、ありがとうございます！」

リンディさんの後ろに控えていた管理局の人達が慌て始める。

彼等は皆、なのは達を巻き込むのには反対なのだろう。それはリンディも同じだ。しかし、ツルギを初めサカサにフェイト。アルフにリニスとなるとこちら側の戦力では彼らに對抗できない。

自分の部下たちを信用していないわけではない。しかし、あまりにも彼等と対峙するにはこちらが不利なのだ。と、なれば即戦力になりうるなのは。補助のエキスパートのユーノの力は何が何でも必要になる。

「では、その条件としてまずは…」

ヴーヴーヴー！

リンディさんが条件を言おうとすると再び部屋の中が赤一色に染まった。

再び警報が鳴り響いた。しかも今度は前よりも音量が大きい。

「何があつたの！？」

『再びジュエルシードの発現を感知。しかも二か所同時に来ました！』

「なんですって?! 場所は!」

『先程の街からそう遠くない所です! 大きなグラウンドが見える。どこかの養育機関でしょうか。あ、さっきの白衣の人らしき魔力を微弱にですが感知』

「クロノ!」

「今、向かっています!」

「…なのは。これを」

金髪の男の子が私に何かを手渡した。それは赤く輝く…。

「レイジングハート!」

「お久しぶり。とはいってもそう時間は立ってはいないんですけどね。マイ、マスター」

その様子を見たリンディさんはため息交じりに私の方に目を向ける。

「…ふうー早速力を借りることになるなんてね。なのはさん、ユニ君行けますか?」

「はい!」

金髪の男の子がそう答えるけど私はずっと疑問に思っていたことを口に出す。

「あ、あのーさつきから気になってはいたんですけどユーノ君は何処にいますか？」

「何を言ってるのなのは？僕だよ僕」

•

•

•

•

えええええええええええ！

「ユーノ君で、フレットじゃないの!？」

「はいはい、そこまで二人には先程使った転送装置でもう一つのジュエルシードの場所へ向かってもらうから」

「は、はい。ほら、なのは、行くよ」

「ユーノ君が、ユーノ君がああああ」

今日はいろんなことがありすぎだよー。

転送装置にたどり着くまでに私はユーノ君とお話をしながらもう一つのジュエルシードのある所へと転送された。

ク口ノ視点。

僕がジュエルシード発現場所にたどり着くとそこには刃渡り一メートルはありそうな巨大な白い斧が空中をぐるぐると回転しながら

辺りにある建物をどんどん破壊していった。

これ以上破壊されると周囲にも被害が出るので結界を張る。

その結界の中には僕と白衣の男。そして、白くて大きな斧が残った。

「く、僕の結界が無かったら大惨事だったぞ！」

「それに関しては礼を言うぞ。黒・野原・オウンくん」

ガガンッ。

ドンッ。

彼が手にした黒い銃から銃弾を発射。それが斧に辺りはするものの斧は何事も無かったかのように僕らに襲いかかる。

「ちっ、固いな。やっぱりツルギかフェイトに残ってもらったべきだったか」

「君は一人でこの斧を仕留めるつもりだったのか！？く、シューター！いけえ！」

僕は杖に魔力を通して命令すると杖の先から五つの光弾が生成され、打ち出される。

だが、僕の攻撃も残念なことに弾かれてしまった。となれば、今の僕が撃てる高出力のブレイズキャノンを撃つしかない。だが、

ガガガガガン！

「おいおい。黒の腹男くん。こっちをちらちら見てないで、あの白い斧を攻撃しろよ。ミネルヴァ。装填」



ガガガガガッガガガガガガガガガガガガガガガガガ！

「おら！相手の動きは止めた、とつとと奴を仕留めろ！」

くつ、さつきから僕に意見ばかりして…。銃の乱射撃をしながらそんな余裕を見せるだなんて…。いいだろう。今だけは聞いてやる。だが、必ず捕まえてやるからな！

「捕まえきれぬのなら捕まえてみな。ここは地球でお前たちの法令は届かない場所だが…。むしろお前らの方が首を絞めるんじゃないか」

「ぐ、ぐぐぐ。ええい！ブレイズウウ」

いいように言われ放題の僕はその分の怒りを魔力にのせて魔法を解き放つ。

「キャノン！」

ドオオオンッ。

青白い閃光が斧を飲み込むとその陰は次第に小さくなり、閃光が消えた時にはジュエルシードの形へと変貌を遂げていた。

「…さて、ここから正念場か」

「…そうだな。今からでもこちらに投降するというのであれば弁護の機会が与えられるが、どうする？」

「…答えはこれだよ。腹魚くん」

「そうか。…仕方ないな」

サカサは僕に拳銃を突きつける。それに答えて僕も杖を彼に向ける。と、同時に他の局員たちが複数転送されてきた。

「クロノ執務官！御無事ですか！」

「ああ、問題ない。さて、ここは任せる。ジュエルシードの封印を頼む。あと、彼の捕縛も引き続き頼む」

「おいおい、俺とやりあうんじゃないのかよ？」

「時間が惜しくてね。他のジュエルシードも取りに行かないといけないんだ」

サカサが呆れたかのような表情で僕に声をかけるが僕は相手にしない。

管理局員。アースラに乗艦した戦闘要員たちがこの世界の人間に勝てると思ってもいない。大出力の銃火器があればともかく彼が局員に勝てる要素は微塵もない。

そのはずだった。

「ふーん。勤務熱心だねえ、だけどな。ミネルヴァ、黒船」

ヴォン。

「アイサー。RPG27式転送」

ズドオン！

彼の手から声が響くと彼の頭上に黒い球体が浮かび上がり、その球体から1メートルくらいの金属の筒が産み落とされると、彼は片腕その筒を受け止めその筒についていた引き金を引く。

その筒からは円柱型の金属が発射され、局員の張ったシールドに接触、爆砕すると局員の皆を吹き飛ばした。

「一応、避致死性グレネード。非殺傷という名目はあるが……。油断していると死ぬぜ」

「……上等だ。公務執行妨害で君を逮捕する」

並の局員じゃ歯が立たない。と言いたいわけか。なら、アースラの切り札と呼ばれた僕が相手になってやる。

「はっ、やっと俺に目を向けたか。お前をふつとばしたら、その技術。いただくぜ」

「散弾銃転送」

黒い球体から二丁の銃が産み落とされると、先程局員を吹き飛ばしたランチャーを捨ててそれを構えるサカサ。

「やれるものならやってみろおおおお！あと、僕はクロノ・ハラウンだああああ！」

「今さらかよ!？」

僕は彼に向かって杖を向け、光弾を撃ちながら彼に急襲をかけた。サカサも僕に向かって散弾銃の引き金を引く。



光弾と散弾。  
魔法と化学のぶつかり合いが始まった。

## 第二十話 KY対KY 後編！（後書き）

あとがき。

ツルギ「……………」

サカサ「…あー、ツルギ。そんな恨んだ目で俺を見るなよ。…興奮するだろ」

ツルギ「…」

サカサ「……………わかった。次回でお前にパス回すから」

ツルギ「…絶対だからな」

クロノ「やれやれ、主人公なのに従兄弟に持って行かれたのがそんなに悔しいのかな」

なのは「当然なのー！」

クロノ「わあ！な、なのは？！」

ツルギ「大体、サカサ贔屓しすぎだ。もう少し、俺に光を当てても」

なのは「私だって」

サカサ「しかたねえよ。大体三話続けてようやく俺とクロノの戦闘が始まったのにまだ、続ける気満々の作者だぜ」

クロノ「構成が滅茶苦茶だな。描写もそんなにうまくないのに」

…なんか書いてて悲しくなってしまうんですが

クロノ「まあ、あとがきの尺もこれぐらいにして、次回予告」

なのは「KY対KY 決着？」

ツルギ「また、【？】が出てきたな」

クロノ「無計画な作者だから仕方ないさ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7035v/>

---

リリカルなのか？無を有する剣

2011年11月23日12時56分発行